カオス レギオン 05

聖魔飛翔篇

冲方 丁

イラスト 結賀さとる

カオス レギオン 05
聖魔飛翔篇

「進むべき道を選べ――ノヴィア」
　ジークは、淡々と言い放った。
　波の音が、空の青さが、迷うノヴィアへと静かに語りかける。
　お前はどこへ向かうんだ――？
　彼女はある決断をする。
　ジークと別れて旅を続けることを。そして、レオニスに会うために、聖地へと向かうことを――。
　ある激突へ向けて、闇の中、静かに動き出すドラクロワ、それに対抗すべく血に染まりながら前に進むジーク。戦う魂たちが、ひとつの戦場（いくさば）に集う！
　伝説の円環（えんかん）がいまここに閉じられる。大人気ファンタジー書き下ろし長編！

もし……私の中に、葬られた真実があるなら、
それを抱いて、歩みます。
いつか暴れるなら……自分の手で、
その真実を受け止められるように。
今は、レオニスに会うことだけを考えます。
レオニスに会って、
和平を選んでもらえるように、
この身を尽くします
聖魔飛翔篇
カオスレギオン
CHAOS LEGION

「来い……最強の軍団（レギオン）よ。死を求める者全てを葬りに……来るがいい」
「我が身とこの王座の行く末こそ、聖地の未来であると知るがいい」
「俺が、ドラクロワを殺す」

アリスハートは小さな手でその頬を叩く。
「頑張ったね、トール」
いつしかトールのおもてにも微笑が浮かんだ。

カオス レギオン 05

聖魔飛翔篇

1075

冲方 丁

富士見ファンタジア文庫

136-7

口絵・本文イラスト　結賀さとる

目次

Prologue　永遠(えいえん)への道　7

第一章　旅立ちの日　16

第二章　道行きの朝　84

第三章　聖双生児(せいそうせいじ)　154

第四章　聖魔飛翔(せいまひしょう)　247

Epilogue　遥(はる)かな道　363

後書き　369

ノヴィア・エルダーシャ
ジークの従士。〈銀の乙女〉所属の聖女
「はい、頑張りますっ！」

アリスハート
ノヴィアと行動を共にする小妖精
「チビって言うなっ、この狼男っ！」

カオスレギオン
CHAOS LEGION
CHARACTER & HISTORY

ジーク・ヴァールハイト
黒印騎士団所属の葬士
「俺がお前を止める」

ヴィクトール・ドラクロワ
かつてのジークの友。反聖法庁として暗躍中
「知りたければ、追ってこい……ジーク」
レオニス・ジェルミナル
聖地シャイオンの新領主。車椅子に乗る
「僕らが、新しい怪物になればいい」
HISTORY
天界と堕界を分かつ大地、アルカーナ大陸。
ジークたちは、凶行を繰り返すかつての友・
ドラクロワを追っていた。
旅の途中、一行は聖地シャイオンにてレオニ
スと出会い、それぞれの道を歩み出す。
三人の男が握る大陸の未来。混沌＜カオス＞
の大地は新たな局面へ突入する……。
トール・ヴュラード
レオニスに仕える暗殺者
「父が死んでくれて、せいせいしました」

Prologue　永遠への道

男は、祭壇へと歩んでいった。
破壊し尽くされた聖堂――扉は壁ごと倒れ、崩れた天井の一角からは夜空が覗いている。篝火が焚かれた祭壇だけは一応の体裁を残すその聖堂の周囲に、何万という人間が密集し、固唾を呑んで、ゆっくりと階段を登る男の姿を注視していた。
異様な熱気をはらんだ静寂――硬質な長靴の音が、ひときわ高く響いた。
男が祭壇に立ち、群衆を振り返る。苛烈な意志をたたえる群青の瞳が、篝火に赤く燃えるようだ。冴えやかな白皙のおもて。長い銀髪が、暗がりに蒼く浮かぶ。長い放浪生活にもかかわらず瀟洒な貴族服にはしみ一つ無い。
青ざめたマントを翻し、透徹とした声音がその唇から発せられた。
「劫掠の儀を行う。聖堂長をここへ」
騎士の身なりをした男たちが、聖堂長を引っ立て、壇上に登った。

じたばたもがく聖堂長を、騎士たちがしっかりと逃げられないようつかんでいる。
「ドラクロワ……不遜のやから、暴慢なる叛逆者め！　わしをどうするつもりだ！」
聖堂長の声は、怒りと恐怖で、下手な演劇芝居のように震えている。聖堂長の豪華な法衣が、余計に芝居じみた情景を醸す。壇上にいる者たちを篝火が照らし、幻想的な光景となって、何万という観衆の目に、何か現実を超えた神話劇のように見せていた。
「ズルカの聖堂の長よ。私は剣をもって、そなたの聖堂に伝わる秘儀を奪う」
ドラクロワは言った。聖堂長は、何を今さらというように、相手を睨み付けている。
「その私を不遜と呼ぶならば、同じく剣をもって防ぐがいい」
騎士たちが聖堂長から手を離した。聖堂長は唖然となった。逃がそうというのではない。騎士の一人が、鞘に収められた剣を、聖堂長に差し向けたのだ。
観衆が息をのんだ。聖堂長はいましめを解かれたにもかかわらず棒立ちとなった。
「戦え――聖堂の長よ」
ドラクロワの声が、絶対的な支配の響きをもってその場にいる者の耳を打った。
「は……はは……。い……生け贄か……わしは」
青ざめ、脂汗を流しながらも、聖堂長は精一杯の皮肉を発した。聖堂を恨む一般民衆の前で、わざわざなぶり殺しにするつもりか。怒りと絶望が聖堂長をつき動かし、にわかに

剣の柄を握りしめ、騎士の手に鞘を残し――抜き放った。
「貴様がこの世に生まれたことこそ天の呪いぞっ！」
聖堂長の怒声とともに、剣は真っ直ぐドラクロワの胸に突き込まれた。
ドラクロワは避けもしない。刃が肉を裂き、骨を抉って背へと突き抜けた。
その光景に、観衆が呻いた。聖堂長も愕然となって目を皿のように見開き、ひっ――と、その口から、哀れな悲鳴が洩れた。
剣で貫かれたまま、ドラクロワはひどく優しく微笑っていた。
刃を血がつたわり聖堂長の手を濡らす。その紛れもない温かさが、聖堂長にこの全てが決して、民衆の残酷な欲望を満足させる芝居などではないことを悟らせた。
これは――それ以上のものを示す、神がかりの儀式なのだ。
「永遠の刻の彼方に……人は魂を解放され、不死を得る。私がその最初の一人だ」
ドラクロワは痛みを感じるそぶりさえ見せず、その言葉は既に聖堂長ではなく観衆に向けられたものになっている。観衆は畏怖と感動の眼差しをドラクロワに注ぎ、聖堂長は剣を握りしめたまま、かつてない絶望とともに自分が役目を終えたことを察した。
「た……助けてくれ……」
「聖法庁が振りかざすいかなる剣も、もはや我が身に通じはせぬ！　またいかなる楯も、

もはや我が力を防ぐこと叶わぬ！　我が民よ！　この聖蹟を心にとどめよ！」
観衆の心をつかむことを目的とした凄烈な宣告が、聖堂長の声と命を無に帰した。
「見よ、この私に剣を向ける者の末路を！」
青ざめたマントが翻り、ドラクロワの左手から漆黒の稲妻が迸った。耳をつんざくような雷鳴とともに、聖堂長の肉体は木っ端微塵に砕け、黒こげになった手足が四散した。
その無惨さを素早く正当化するように、騎士たちが音楽的な正しさで次々に抜剣し、
「覇者にして永遠への道行きたる、ヴィクトール・ドラクロワに栄光あれ！」
刃を掲げ、斉唱した。たちまち、海鳴りのごとき歓呼の声が起こった。ドラクロワがおのが胸から剣を引き抜き、祭壇の床に突き立てると、観衆の興奮は増しに増した。
その熱狂をドラクロワはひどく冷然と眺めている。いつも通り儀式が功を奏したことを確認する眼差しであり、民衆への共感などひとかけらとして持ってはいない目だ。
不死を演じてみせることで民衆から死の恐怖を取り去る。それは魅惑であり煽動であり支配であった。死を恐れなくなると人間はあっさり色々なものを投げ出す。驚くほど破壊にためらいがなくなる。憎しみも悪意も大っぴらに解放する。
今、声を上げる者たち全員が、死を恐れず戦う暴虐の兵と化した。そう確信する一方、
「……シーラ」

ひそかな呟きがドラクロワの口から零れ、歓呼の声に紛れて消えていた。
遠い眼差しで夜の闇を見上げた。いったいどこまで滅ぼせば届くのだろうと思った。
剣で貫かれた胸の傷が秘儀の力でまたたく間に治癒されるのを感じ、自分が何か違うものに変わってしまったことを悟らされる。人としての感情を失った何かに。
もう一度、巡り合いたい――ただそれだけのために、これほど遠くへ来てしまった。
彼女の形見である十字型の紋章も、今は失われた。いや、独りで旅立って行った。
良いではないか――
治癒された胸の奥から、ふいに、そういう声が響く。
たった一人の女の命を甦らせられるなら、世界など、滅んでも良いではないか――
そのとき、民衆の様子に今までにない変化が生じるのを、ドラクロワは感じた。
目を戻すと、振り上げられていた拳が次々に下がってゆく。歓呼の波が引き、代わりに、透き通るような歌声があらわになった。

　さあ参ろかな
　清き園に参ろかな
　刈り入れ済ませて参ろかな

かの人の導きがあるぞやな
いつもは泣く泣く渡るやな
今は救くる道であるぞやな

この血なまぐさい光景に、ひどくそぐわない、感傷的な韻律であった。
傍らの騎士に訊くと、どうやら、この地域に伝わる土俗の祈りだという。
「祈りを唱える者よ……祭壇に立つがいい」
ドラクロワが呼ぶと、群衆の間から若い娘が現れ、歌いながら歩み寄った。
憑かれたような恍惚とした表情を浮かべ、物怖じもせず祭壇を登り、ひざまずいた。
「娘よ。そなたが何者か、私に教えてくれ」
「名乗るほどの名もない、街の鍛冶頭の娘でございます、救世のお方……」
「私のために祈ってくれたのか」
「はい……そしてまた、この場にいる全ての者のために。この街に聖堂が出来る遥か以前から伝わる、私どもの歌で御座います。お耳汚しをお詫び申し上げます」
街の娘らしからぬ口舌であった。騎士がドラクロワに耳打ちしたところでは、鍛冶屋はこの地では聖なる職業なのだという。それを束ねる鍛冶頭は民に強い影響力を持つ。

ある種の貴族である。それが聖堂の横暴さに苦しめられていたわけだ。さぞ安く買い叩かれていたのだろう。聖堂長の屍を見る娘の目に、烈しい憎悪の光があった。

「良い歌だ」

ドラクロワは、騎士に指示し、一振りの槍を運ばせた。

それがどういう代物であるか、娘も民衆も、よく分かっているようだった。

「祈る者よ。このズルカの聖堂より奪いし最初の品を、そなたに与えよう。祈りのままに民を率いる一人となるがいい」

娘はうっとりとなって槍を受け取った。聖印を刻まれた武具——聖堂に伝わる秘儀を施した聖槍である。娘からすれば今まで民を苦しめていた聖堂の力の象徴だった。

それを娘が手にすることは、祭壇の前にひしめく何万という人間が、さらに容赦のない破壊への道を歩むことに等しい。またそれこそ、彼らの望むところでもあった。

「救世のお方よ……老若男女の区別なく、みな、あなた様の信徒として戦いましょう」

娘の熱のこもった声とともに、祈りの唱和が起こった。

　さあ参ろかな

　いつもは泣く泣く渡るやな

今は救くる道であるぞやな

不死を演じて見せただけで救世主扱いか——
口を揃えて歌う何万もの信徒をよそに、ドラクロワは再び夜空を見上げた。自分が本当に不死だとは、思っていない。ただ聖法庁から奪った最大の禁忌たる秘儀の書——外典イザーク書の力に守護されているだけだ。それなしではドラクロワの命も常人と変わらない。
「真に死を克服する、地上最初の人間は……お前以外にいない……シーラ」
ひそかに呟いたとき、初めて、民衆の祈りへの共感が湧いた。
無数の涙を踏み渡り、迎えに行くのだ。旅立ってしまった女を。ただ一つの道を辿るように。たとえ相手の想いが自分に向けられていなくとも——
死の超越という、空前絶後の救いを求め——行くのだ。
ドラクロワにとって、それは正しく祈りの歌であった。

第一章　旅立ちの日

1

大きな翼のような白い帆を張った船が、海港に入ってきた。
風も波も穏やかで、空も海も一面の青さに輝いている。いわゆる船日和である。
港中に帆柱が並び、カモメが賑やかに飛び交う景色は、どこだろうと自由気ままに旅立ってしまえるような、浮き浮きとした雰囲気に満ちている。
碇泊した船に、さっそく幾つも運舟が寄せられ、せっせと荷と船客を乗せてゆく。
そこへ、一人だけ、いやに疲労を帯びた顔で運舟に乗り込む者がいた。
燃えるような赤髪の男。研ぎ澄まされた美貌、鋭い眼差し。白外套に黒革の鎧、赤籠手と、いかにもな戦闘装束である。が――肩に担いだものが異様だった。
男の巨大な銀のシャベルに、運舟を接舷していた水夫たちが呆れたような顔になるのだ。
ふらつきはしないものの妙に腹に力の入らぬ様子で船首へ行くその男の背へ、

「ちょっとぉ、大丈夫(だいじょうぶ)ぅ？　そのままひっくり返って海に落ちたりしたら大笑いよぉ」

心配するのだか、からかうのだか分からぬ声が飛ぶ。小さな羽で宙(ちゅう)を舞(ま)う、掌(てのひら)ほどの妖精(ファー)だ。女性(じょせい)形の身にシルクのドレスをまとい、目も髪(かみ)も羽も、淡(あわ)い金の輝きを帯びている。

「狼男(おおかみおとこ)のあんな顔、初めて見たわぁ。あいつ本当は海が嫌(きら)いだったんだ、ノヴィアぁ」

妖精(ファー)が面白(おもしろ)そうに言う。少女が舟(ふね)に乗り込んで来て、たしなめるように返した。

「違(ちが)うわ、アリスハート。ジーク様は船が苦手なだけ。人によっては船に乗ると具合が悪くなるって水夫さんたちが仰(おっしゃ)ってたでしょう。そっとして差し上げるしかないのよ」

言いつつ心配そうに男の背を見やる。淡(あわ)く澄(す)んだ紫(むらさき)の目、旅暮(たびぐ)らしにも白さを失わぬ頬(ほお)、そして溌剌(はつらつ)と束ねた栗色(くりいろ)の髪。青い法衣(ほうい)の胸元(むなもと)を飾(かざ)る〈銀の乙女(おとめ)〉の紋章(もんしょう)と、その手に握(にぎ)る宝杖(バストー)が、少女――ノヴィアが、一人前の聖道女であることを示(しめ)している。

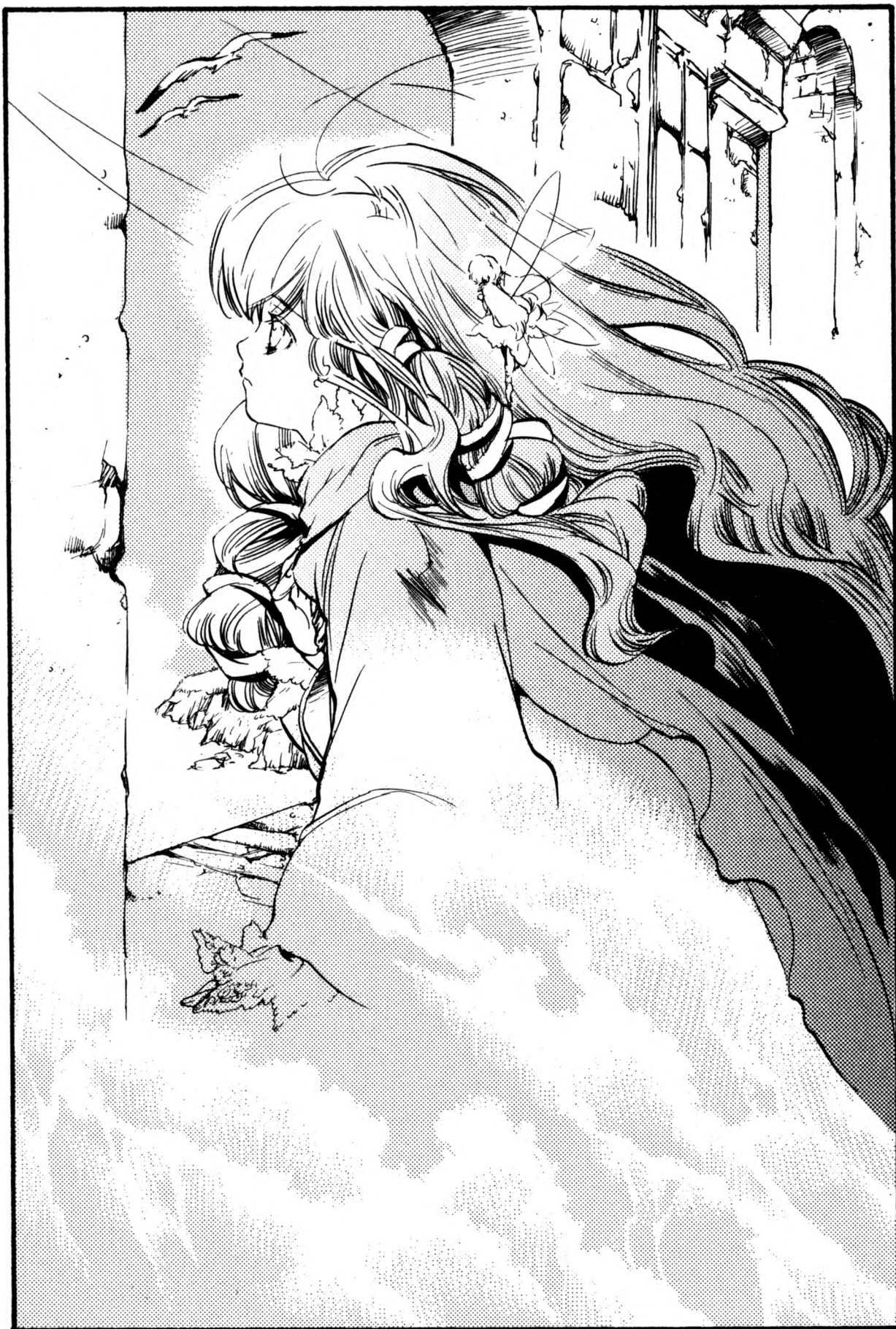
「本当にジーク様……お辛(つら)そう」

ノヴィアが申し訳(わけ)なさそうに言うが、こればかりは、仕方がなかった。

ジークは一人、舟の舳先(へさき)に立って陸地がそこにあることを確(たし)かめ、かすかに安堵(あんど)の吐息(といき)を零(こぼ)している。傍(かたわ)らに行って声をかけたいが、おそらくそれすら今のジークには苦痛(くつう)であろう。そのことがノヴィアには切々と察せられていた。

川船では顔色一つ変えなかったジークも、海に出ると途端に体調を崩した。
「海のせいだ。船を下りれば治る。心配ない」
ジークはそう言ってじっと苦痛をこらえてうずくまったものだ。
ノヴィアが不安になって水夫に相談したところ、河と違って海は波の揺れが激しく、そのため人によっては、船酔いというものにかかるのだと教えられた。
またジークの凄まじいまでの堕気の力は、大地を根源としている。海に出れば大地との遠さは河の比ではない。その身に帯びた堕気が大地という支えを失い、ジークの身にそれまでにない負荷をかける。
しかも、今でこそ快晴だが、実はつい数刻前まで大荒れの天候だったのだ。
船は揺れに揺れ、ジークの苦痛をいや増しに増した。こんなときに敵に襲われたら、ひとたまりもないのではないか。そんなノヴィアの不安をよそに、ジークはシャベルを——その中に収められた銀の剣の柄を握りしめ、最悪の状況下での戦いに備え続けた。
さすがにみっともなく吐くような姿は見せなかったが、ジークの蒼白の顔ときたら死病ではないかと何度もノヴィアをやきもきさせたものだ。持って生まれた体質の違いとはいえ、自分もアリスハートもけろりとしているのに、ジークだけ客室の隅にうずくまって無言で苦痛に耐えているのには申し訳ない思いだった。

だがようやく、その苦痛から、解放されるときがきた。
運舟が港に寄せられ、船客たちとともにジークもまた陸地に立った。実に三日ぶりの大地である。ジークが心底から安堵する気配を、ノヴィアはつくづくと感じ取っている。
ジークは、まだ顔を青ざめさせながらも、
「情報を手に入れてくる」
さっそく手はず通りに動く気らしい。任務に対する焦燥がそうさせているのだろうが、一方では、それ以上に、その足を通して大地の存在を実感したいのだ。
ノヴィアはそう思って、休んだ方が良いのではと忠言するのをあえて控えた。その代わり、ジークの補佐に徹した。
「はい。では私は、街を見ておきます」
これは観光するという意味ではない。ノヴィアが持つ視覚の力の一つ――全てを見通す万里眼で、街の様子を把握しておくということだ。また同時に、ドラクロワが各地に放った戦乱のための物資を追わねばならない。
ジークは感謝するように小さくうなずいた。
「聖堂への連絡も、私がしておきましょうか？」
「それは俺がやる。お前は〈銀の乙女〉の修道院で待っていろ」

情報を得たあと、しばらく一人で休みたいのだ。それがノヴィアには分かった。
「では、くまなく街を見ています」
「わーい、お買い物しようよぉ、ノヴィアぁ」
「少しだけよ、アリスハート。……では行ってらっしゃいませ、ジーク様」
ジークはまた一つうなずくと、雑踏へと消えていった。
ノヴィアは万里眼の力で、しばらくジークの背を見続けた。
その視線をジークは鋭く感じ取っているだろう。何か異変が起こっても自分が見ているということを伝えるための、〈見守る者〉の称号を持つノヴィアなりの挨拶だった。
アリスハートが焦れたようにわめく。港に集まる珍しい商品を眺めて楽しみたいのだ。
「ねー、のぞいてないで、行こうよぉ。あっちの方に市場があるよぉ」
「のぞきじゃないもん」
きっぱりと言って、ノヴィアもアリスハートとともに街へ向かった。
穏やかな潮の香りと熱気に包まれた市場を散策するうち、海が見晴らせる場所に出た。
ノヴィアはしばしそこに佇み、遠く海を眺めた。万里眼の力は使わず、ただ己の目で。
アリスハートがふわりとノヴィアの肩に舞い降り、無言で同じ方へ目を向けた。

二人とも、ある少女を思い出していた。海を見るためにジークの旅に同行し、死病に冒されながらもノヴィアを守るために最後まで戦ってくれた少女だ。

「キリ……」

その名がノヴィアの口をついて零れ、波間に消えた。

火をともす白い塔を離れてから、もうひと月近く経っていた。ドラクロワが各地に放った物資と増殖器の行方を追って、沿岸を船で移動し続けたのである。

この街からは陸路を取る予定だった。ここを去れば海の見納めになる。波の青さへ消えた友の亡骸をノヴィアが思い出すことも、日に日に少なくなるに違いなかった。

寂しいことだが、それは決して忘却を意味しない。死んだ少女の存在は——その優しさも強さも、今やノヴィアの中で血肉となって生きている。彼女に負けない自分でありたい。ノヴィアにとってそれは誓いであり誇りでもある思いだった。

「荒れたときは本当に怖いけど、でもやっぱり綺麗よねぇ……海って」

アリスハートがぽつんと言った。ノヴィアも全く同感だった。

「さ、行きましょう」

しいて悲しみを表に出さず、元気に言って海から目を離した。

そのときである。かすかな違和感があった。誰かがじっとこちらをうかがっているよう

な気配を感じたのだ。視線を介して聖性を発揮するノヴィアは、他者の視線にもまた敏感だった。そしてその違和感は、すぐに確かなものとして目に映った。
市場の方を見ると、男が一人、何気ない様子で姿を隠したのだ。すぐさま万里眼で行方を追った。男が屋台の陰を回りながら、こちらに顔を向け続けているのが見て取れた。
(尾けられてる――)
すぐに悟った。だが顔には出さず、のんびりと市場へ戻り、アリスハートと一緒に商品を物色して回った。そうしながら街へ向かったジークを万里眼で探し、位置を確かめる。
「ねえ、アリスハート。お願いがあるの」
「……へ？　どしたの？」
「私の方だけ見て、お話しして」
「え……うん、良いけど……」
「誰かに尾けられてるみたいなの」
「うええっ!?」
「あ、駄目よ、他の方を見ちゃ。相手に、私が気づいたことを気づかれちゃう」
「……ど、どうするのぉ？」
アリスハートが思わずひそひそ声になる。

「ジーク様にお伝えして欲しいの。もしかすると尾けられてるかもしれないって」
わざと曖昧に言ってアリスハートを安心させつつ、
「私はこの通りを行って、その先の左手の路地にいるわ。ジーク様の今いる場所は……」
合流地点と、ジークの位置を詳しく教え、にっこり笑って言った。
「伝言、お願いね、アリスハート」
「う、うん……」
アリスハートは了解しつつ、落ち着き払ったノヴィアをまじまじと見つめた。
この時点でノヴィアは既に、尾行者の存在をはっきり確認している。
二人の男だった。一人は水夫の格好をし、もう一人は行商の出で立ちである。
最初に見つけたのは行商の方だ。さらに仲間はいないかと見たところ、水夫姿のくせに船の動きには目も向けないという、いかにも不審な男を発見したわけだった。
二人とも上手くノヴィアを真ん中にして、挟み込めるよう動いている。どうやら隙を見てノヴィアを捕らえる気らしい。そしてそう悟りつつもノヴィアは慌てもしない。
それは危機感が麻痺しているのとは違った。しいていえば直感だった。
この程度の相手なら、どうとでもなる――
そんな不敵な思いさえあった。そのくせ頭はしんと冴えきって油断のかけらもない。

「なんか……ノヴィアったら……だんだん狼男に似てきたわねぇ」
「ジーク様だったら、もっと早く気づいてるわ」
ノヴィアは微笑し、言った。
「じゃあ、ここでいったん別れましょう。後で会いましょうね、アリスハート」
あっさりとしたその声を合図に、アリスハートも、精一杯の演技で返した。
「は……はーい。また後でねぇ、ノヴィアぁ」
そして、ジークのいる場所へと全速力ですっ飛んでいった。

「ズルカの聖堂が陥ちた」
巡礼者の姿をした男が、言った。
「ドラクロワ本人が先頭に立ったらしい。一帯はとんでもない騒ぎになってる」
諜報院の男だった。聖王直属の密偵として働き、ジークに情報をもたらす存在である。
ジークは表情を変えず、無言のまま、男から書状を受け取った。
書状の内容は、聖王からの命令としてズルカの地に赴くよう指示している。
「……地図を確認する。明日には動く」
ジークは言った。地形を見ることで軍勢がどう動くかだいたい分かる。相手の目的を読

みながら、最もドラクロワがいる可能性がある場所を目指すつもりだった。
　本来ならそれで話は終わりである。だが男は続けて言った。
「ドラクロワは、最初からズルカを攻めるつもりだったんだ。あそこは聖具の産地だからな。聖印を刻み入れた武器を、ドラクロワは民衆にばらまいたらしい」
　それが何を意味するかを悟って、ジークの表情が、かすかに険しくなった。
　聖具とは武器自体に力がこめられたものをいう。通常の武器とは比べものにならぬ鋭さや堅固さを誇るとともに、握るだけで勝手に動き、戦ってくれるものもある。
　いずれにせよ、高位の騎士に与えられる品だ。それを民衆にばらまくということは、兵士も一般民衆も区別なくドラクロワのもとで戦うことを意味した。
「蟻戦か……」
　というのがジークの判断だった。蟻戦とは人海戦術のことである。訓練された兵による戦いではなく、動ける者なら誰でも戦わせ、ひたすら人数で相手を圧倒する戦法だ。
　むろん女子供も戦い、そして犠牲になる。ジークが最も忌み嫌い、かつてドラクロワも決して行おうとしなかった戦い方――それを、ついにドラクロワが決行したのだ。
「情報によれば、適性さえある者ならば誰にでも聖具を渡しているらしい」
　男の言葉に、ジークの全身が、じわりと怒りの気配をにじませた。

勝手に動くような武器を握り続けるには、それなりの適性が必要である。だが本当に必要なのは聖具を支配する精神の強さだ。聖具は使い手の心を反映する。腕力ではなく、心が武器を振るうのだ。心を強く保たねば、聖具によってとめどなく戦いへと駆り立てられ、必要のない戦いを望むようになる。子供などが聖具を握ればひとたまりもない。人の心など綺麗に消し飛び、殺戮の権化になるに決まっていた。
「……この目で確かめよう」
ぼそりと返した。これから向かう場所がどれほど悲惨な状況か、容易に想像がつく。だが目をそらす気はない。たとえそれが、かつての親友の所業であろうとも――
「ああ……。それと、奪われた聖具の数は、百とも二百とも言われている。その大まかな内訳だが、聖槍が圧倒的に多い。それから聖銀製の剣も幾つか――」
男がなおも言い募る。ジークは、そこで初めて異常を感じた。
そもそもズルカの聖具が民衆の手に渡ったなどという情報は、全て書状に記されている。その内訳など、いちいち口頭で説明されるいわれがなかった。
「必要ない。自分で確認する」
相手を遮りつつ、ジークは鋭く相手の様子を見た。
「ああ、待ってくれ。ドラクロワがこれから攻めることが予想される砦だが……」

これも書状で確認すればいいことだ。念入りな情報交換とは違う。無駄な会話だった。
「何を考えている？」
はっきりと不審をあらわにしてジークが訊いた。男はやや慌てたように肩をすくめ、
「いやいや……あんたの意見を聞かせて欲しくてな……」
嘘だ。聖王直属たる諜報院が、聖王を差し置いてジークの意見など求めるはずがない。
あからさまな時間稼ぎ――その直感が、瞬時に回答を呼んだ。
この場にジークをとどめようとするならば、狙いは幾つかしかない。
そのうち最も可能性の高いものを、ジークはずけりと口にした。
「ノヴィアをどうするつもりだ」
途端に、男の顔に動揺が走った。
彼方から、アリスハートの金の輝きがすっ飛んで来たのは、そのときであった。

ノヴィアは、相手に意図を悟られないよう気をつけながら、ゆっくりと路地を歩いた。街を散策するふりをして人混みを離れ、閑静な路地へと入ってゆく。水夫姿の男が後方から迫り、行商姿の男が通りを迂回して前方へ回り込む姿が見えた。人気のない場所へ行くノヴィアの様子から、好機と判断したらしい。はっきりと捕獲の意志が見て取れる。

ノヴィアは路地を曲がると、そこで足を速めた。

あらかじめ見当をつけておいた横道へ、すっと入る。完全な一本道である。左右をノヴィアの背丈の倍ほどの高さの壁が続いていた。何歩か進んで立ち止まり、周囲を見た。

水夫の男が路地を曲がって来て、ノヴィアがいないことに気づき、はたと立ち止まった。

前方の行商の方は、まだ異変に気づいていない。

水夫の男は素早く走り、横道に気づくと歩調をゆるめた。そして、ゆっくりと横道に入る。慌ててノヴィアを目で追おうとはしない。考えごとでもしているように、うつむき加減に歩く。事前に気づいていなければとても尾行者とは思えない見事な仕草だった。

水夫の男はそのまま何歩か進むと、初めてちらりと顔を上げた。

「何かご用ですか」

ノヴィアが言った。道の真ん中で、きっと背筋を伸ばし、詰問するような顔で、しっかり水夫と目を合わせている。

果たして、水夫は硬直した。驚きとともに、まだ言い訳がつくというような思惑の光が目の奥でよぎる。両手を広げ、さも驚いたように肩をすくめて、

「――なんのことだい」

とでも言おうとしたのだろうが、ノヴィアの方は、遥かに問答無用だった。

「矢が見えます」
その視覚にやどるもう一つの力――そこにそれがあるという幻を見ることで具現する、幻視の力を発揮させたのである。火や水、人や獣など、不定形で複雑なものは現せないが、今この場で必要なものは、それこそ一瞬で出現させることが出来る。
ノヴィアの眼前に、一本の金の矢が現れるや――凄まじい速度で迅った。
「おい……」
水夫がなおも何かを言いかけるのを、疾風のごとき矢の音が完全にかき消した。
かわす余裕など到底ない。水夫は慌てて両腕で体の前面を庇ったが、それさえ間に合ってはいなかった。水夫の胸を射抜くかに見えた矢は、ぎりぎりで軌道を変えた。
矢は、水夫の眼前で弧を描き、右手の壁に突き刺さった。矢風が顔に吹きつけるほどの至近距離だ。それだけではない。がらがらと何かが崩れた。水夫は愕然となって壁を見た。
矢を受けた煉瓦造りの壁が、鉄槌でも食らったかのように倒壊したのだ。
この瞬間、水夫の驚きは恐怖にまで達した。ノヴィアからすれば計算ずくの作戦である。壁が老朽化している部分を見て取り、正確に矢を打ち込んだのだ。水夫からすれば、とんでもない威力の矢である。一矢食らえば命はない。水夫は完全にそう思い込んだ。
「動けば当てます」

きっぱりとノヴィアは言った。

水夫は聞かなかった。素早く腰帯に差した短剣をすっぱ抜いたのである。その動作が何を意図しているか、あまりに明白だったので、ノヴィアは思わず微笑んでしまった。

「後ろの方も、大人しくして下さい」

水夫がぎょっとなった。同じように動揺する気配が、ノヴィアの背後で起こった。

水夫が短剣を抜いたのは、単にノヴィアの注意を引きつけるためだ。

その隙に行商の男が背後から襲いかかる。そういう算段を、ノヴィアは水夫の一挙手一投足からやすやすと読み取った。戦いの興奮で舞い上がっては到底、分からないことだ。

ノヴィアは万里眼と幻視の力を発揮させるだけでなく、相手の動作をつぶさに見ていた。

だから、水夫がいきなり短剣を投げつけてきたときも、一瞬前にそれが予想出来た。

ノヴィアは、避けもしない。小さな顔のすぐそばを、乱暴に投げられた刃が通りすぎた。

攻撃でさえない。逃げるための威嚇である。それが水夫の様子から事前に察せられていた。

「待ちなさい」

言葉とともに、ノヴィアは第二矢を放った。

矢は弧を描いて、水夫の衣服の脇を貫き、壁に刺さった。ノヴィアが目をそらしても消えないほど、しっかり幻視された矢だ。服だけ壁に縫い止め、水夫の体には傷一つない。

恐るべき矢の正確さに度肝を抜かれた水夫は、ついに指一本動かせなくなった。
そのときにはノヴィアは背後を振り返り、つかみかかってくる行商に向かって、
「沢山の矢が見えます」
何の警告も無しに、いきなり何十本という数の矢を具現している。
行商が息をのんだ。驚いて叫ぶ間もなく、ざあっと音を立てて矢の群が奔った。
金色の雨が、垂直に降ってきたようなものだ。行商の首筋を、腕の間を、脇の下を、腹のそばを、足下を、次々に矢がかすめていった。
全ての矢が通り抜けた後、行商も、恐怖の余り身動き一つ出来なくなっている。
容赦の無さを見せつけねばならない。そして素早くことを収めるのだ――
それがノヴィアの考えだった。圧倒的な一撃で、相手の心を挫く。無用な血を流さず、相手を無傷で捕らえるためである。相手の目的や仲間の数をつかみ、彼らの背後にいるであろう主人の名を口にさせたかった。
予想されるのはドラクロワだが、ノヴィアはこのとき別の名を思い浮かべている。
（レオニス――）
ドラクロワの同盟者として、ジークを狙い続ける、聖地シャイオンの若き君主。
不自由な足を持つ代わり、あらゆる知識を吸収し、ノヴィアにとって弟のような存在で

ありながら、ジークの敵に回った少年。その策謀は大陸に災厄をもたらし、その刺客のせいでノヴィアの大切な友人は、ひどい傷を負って死んだ。
もし尾行者たちがレオニスの手の者なら、彼らをジークに引き合わせた上で、ノヴィアから頼んで解放してもらうつもりだった。理由はただ一つ。これ以上ジークを狙うなら、ノヴィアがレオニスの相手になる——そういう伝言を届けさせるために。それがレオニスに対する制止となることを願って。
「わざと外すのも大変なんです。今度動いたら、当たるかもしれませんよ」
ノヴィアは言った。半分は脅し、半分は本音だった。
二人の男は、もはや完全に観念し、呆けたような顔でいる。
ふと——ノヴィアは足を止め、辺りを見回した。ほとんど本能的な動作だった。
まさかと思いつつも僅かな可能性を追ったのである。そしてそれは見事に的中した。
三人目がいたのだ。今度は巡礼者姿の男だった。曲がり角の陰からこちらの様子を伺い、素早く壁を乗り越えた。壁の向こうは館の庭である。壁沿いに背の高い木が植えられており、男はその館の敷地を移動し、近づいてくる。
先ほどノヴィアの矢が崩した壁の傍らに来ると、そっと短剣を抜いた。
崩れた壁から飛び出し、ノヴィアに襲いかかる気らしい。

そして、その、短剣を握る男の手を、真上から何かが押さえつけた。
男からすれば、いきなり誰かに手をつかまれたようなものだ。
正体は、金に輝く矢である。それが遥か高みの頭上から真っ逆さまに飛来し、男の服の袖を貫き、そのまま地面に縫い止めたのだった。
「な、な……っ⁉」
男が驚きの声を上げたときには、地面にひざまずいた状態で動くこともできなくなっていた。そして、その男の前に、逆にノヴィアが、壊れた壁の隙間から姿を現した。
「ちょうど良かったです。あなたが、あの二人を縛って下さい。縄は、あちらに立っている、商人の格好をした人の荷袋の中に入っていますから。よろしくお願いします」
淀みなく言ってのけるノヴィアに、男は愕然となって声もない。
ふいに──男の目線が、一瞬、ノヴィアの背後を向いた。男の仲間たちが性懲りもなく動いたらしい。だが変だった。男は路地の方ではなく、壁のこちら側の敷地へと視線を向けたのだ。先ほど相手をした水夫や行商が、そちらにいるはずがない。
咄嗟の疑問／そして回答／今度はノヴィアが愕然となった。
四人目がいる──！
先ほど見回したときには姿がなかった。ノヴィアの万里眼の聖性を察知し、素早く身を

潜めたに違いない。視覚の力を読む——この敵は強い。たまらない直感と同時に、全力で戦う覚悟を決めている。男の目線の先へと体ごと振り返り、
「——矢が見えます！」
相手の姿を確かめる前に、矢を具現させていた。それほどの危機感があった。
いきなり現れた新たな矢に、三人目の男は、自分が襲われると勘違いしたらしい。
「か、彼女を止めてくれ！　ジーク！」
恥も外聞もかなぐり捨て、そう叫んでいた。
「やめてやれ、ノヴィア」
四人目が、壊れた壁の向こう——路地から、無造作に姿を現した。
なんと、振り返ったノヴィアの、さらに斜め後ろからの声である。
「え……っ!?」
そこにいるとノヴィアが判断した場所に、目的の四人目はいなかった。
代わりに、まん丸に見開かれたアリスハートの目と、ノヴィアの目が、見つめ合った。
ノヴィアはさらに振り返ろうとして思い切りつんのめり、ジークが手を差し出すが届かず、
「ひゃあっ!?」
一声上げて、見事に転倒してしまった。

「ノ……ノヴィアぁ……」
アリスハートは呆気に取られて、かける言葉も見つからないでいる。
「う……うう……」
ノヴィアは地面に平べったくなったまま顔を上げ、
「な……なんで、いきなりそんなところから出てくるんですかぁ！」
真面目に抗議した。
ノヴィアが振り向こうとした時点で、四人目――すなわちジークは、アリスハートを置き去りにして素早く壁を乗り越え、移動していたのだ。まさに一瞬の早業である。
なんのためか。ノヴィアの死角に入り続けるためである。だがそもそも、なんのためにそんなことをしたかと問われれば、答えようがない。
「な、なんでそのままそこにいないんですっ！　わ、私を試したんですかぁ……っ！」
ジークは、ちょっと困ったように、差し出したままの手をノヴィアに向けた。
「すまん。つい」
「つ……ついって何ですかぁ!!」
ノヴィアが恨みがましい顔で、その手を取って立ち上がる。ジークは淡々と言った。
「驚かせるつもりはなかった」

「お、驚くに決まってるじゃないですかっ！　いったい何を考えてるんですかぁ！」
怒るとも泣くともつかぬ様子で真っ赤になって声を張り上げるノヴィアに、
「だ……大丈夫ぅ……ノヴィアぁ」
いったい何に心配してよいやら、すっかり分からなくなったアリスハートだった。
「もうっ、ちゃんと説明して下さいっ！」
ノヴィアが情けない顔で土埃を払う。三人の男たちはいまだに凍りついたままだった。

2

「一筋縄ではいかないとは思っていたが、さすがにジークの従士だ。感服した」
巡礼者の男が言った。その後ろで水夫と行商が、直立不動の姿勢で立っている。
聖堂の応接室にいた。男たちと差し向かいにジークとノヴィアが座り、
「ノヴィアったら、すっかり凄くなっちゃうし、狼男も黙って見てろなんて言うしさ。ほんと昔のノヴィアが懐かしいわよぉ」
アリスハートは、のほほんとノヴィアの肩に座っている。
聖堂は、あの路地からすぐ近くだった。それもノヴィアの意図のうちである。尾行者を捕らえるなら聖堂の近くがいい。すぐ尋問出来るし聖法庁の助けも借りやすい。だが――

「諜報院……の方々だったんですか」
　これにはノヴィアも面食らった。予想外もいいところである。
「クルツだ、よろしく」
　巡礼者の男が、日焼けした精悍な顔をほころばせる。歳が半分も違う少女に完敗したというのに、あっさりとした笑顔だ。相手の力を素直に認められねば密偵などやってられない。内心ではノヴィアの力をいかにして封じるか、幾通りも方法を考えているのだろう。
　そういう油断の無さが感じられた。そしてその男──クルツが手振りすると、
「セスです」
「ダンです」
　水夫と行商が、きびきびと名乗った。クルツが頭で、二人はその部下とのことだ。
　ジークは、クルツから話を聞いているらしく、何もかも承知しているように無言でいる。
　だがノヴィアにしてみれば、この段に至っても、訳が分からないままだ。
「あの……なぜ、私を──？」
　ノヴィアが訊いた。それこそ肝心な点だった。するとクルツはさらりとこう答えた。
「悪く思わないでくれ。あんたを拘束出来るか試せと、聖王様からの命令でな」
　その突拍子もない返答に、ノヴィアとアリスハートが同時に目を丸くする。

「聖王様が？」
「なんでぇ？」
「それというのも……」
そこでふとクルツが、ちらりとジークを見やった。話すべきかどうか目で訊いたのだ。
ジークが小さくうなずいて了解を示すと、クルツは肩をすくめてノヴィアに目を戻した。
「聖地シャイオンの領主のことで……な」
ざわっとノヴィアの胸の奥で嫌な予感が起こった。だが顔には出さず、
「レオニスが……何か？」
「ネルヴァ河で俺たちが手に入れた密書の一つに、ジークの従士には手出しをするなという命令が書かれていた。内容は、ジークを罠にかけろという刺客への指令だ。にもかかわらず、あんたの安全を守れという。これは、ちょいとおかしいと思わないか？」
クルツの観察するような眼差しを、ノヴィアは黙って見つめ返している。
「んん……？　それってつまり……」
アリスハートが首をひねる一方、この時点でノヴィアはそれが間違いなくレオニスからの命令であることを察している。だがあえて、訊いた。
「それは……本当にレオニスからの書状だったのですか？」

「実を言えば、可能性が高いというだけで、確証はつかめていない。もしかすると聖地シャイオン以外からの命令書だったかもしれない。だが可能性があるってだけで十分なんだ。俺みたいな職業の男が、そういう矛盾した書状をどう判断するかっていうと……だ」
「この私が、ジーク様を狙う刺客の、仲間である……と」
ノヴィアは、まるで他人事のように、淡々と答えた。アリスハートがぎょっとなる。
「ちょ、ちょっと……そんな……」
「その通りだ。聖王様も、同じ考え方をされている」
「んなわけないじゃん！　めちゃくちゃだよ！　ちょっと狼男っ、何か言ってよ！」
だがジークは無言。まるでこの会話自体から身を引いているような姿勢だった。
「ちょっとぉ……ノヴィアは、あんたの従士なんだよぉ？」
情けない顔になるアリスハートに、クルツが代わりに言った。
「そういう事態は、過去、何度もあった。ジークが従士に命を狙われる事態は……な」
「はい」
と静かに応じたのはノヴィアである。
「ノヴィアぁ……」
アリスハートがしょんぼりとノヴィアを見る。

「それで、私にどうしろと？」
「いや、あんたに命令できるのはジークや〈銀の乙女〉だ。俺じゃない。ただ、あんたを捕らえられれば、ジークの監督不足を名目に、あんたをジークから引き離せたんだがな」
「諜報院が手に入れた書状が、レオニスのものであるという確証は無いんですね？」
「ああ……そして、あんたが聖地シャイオンと内通した刺客でないという確証も無い」
「聖王様が恐れているのは、私がジーク様を狙うことだけですか……？」
クルツは驚いたように眉根を広げた。
「なぜそんな風に思うんだ？」
「聖地シャイオンは、まだ聖法庁と敵対していません。むしろ聖王様は、敵対してしまうことを、恐れているのではないですか？」
「ふむ……さすが〈見守る者〉だ。よく見ているな」
「え……どういうこと……？」
「逆の考え方も出来るということだ。ジークを狙う者が、彼女の命を楯に、聖地シャイオンに協力を強制している可能性さ。ノヴィア・エルダーシャの命を守りたければ、ジークを殺せ、とな。ただ……なぜ聖地シャイオンの領主が、彼女の命を守りたがるかは……」
そこでまたクルツは、ジークを見た。今度はジークは同意を示さず、ただクルツを一瞥

したたけである。クルツは肩をすくめ、
「……謎だがな」
と言った。
「いずれにせよ、一番手っ取り早い解決方法は……」
「私が、ジーク様とともに旅をしなければ良いのですね」
「そうだ。もっと言えば、あんたの居場所を我々が常に把握していられることだがね」
「はい」
ノヴィアは逆らわずに応じている。アリスハートは呆然となって言い募り、
「でも……じゃあノヴィアが狼男と旅をしたいって言ったら……？」
「聖王様が〈銀の乙女〉に要請して、彼女の紋章を剝奪することもあり得る。そうなれば彼女は、全ての力を放棄せねばならなくなる。ジークを狙う力も失い……」
ノヴィアは、ただ黙って聞いている。冷静な顔を何とか保っているが、宝杖を握りしめる手が、力をこめるあまり血の気を失って真っ白だった。
アリスハートが、ついに爆発した。
「ノヴィアから何もかも奪うってのっ!?　ひどいよっ！」
「悪いが、俺たちにとってはジークが暗殺されることを防ぐのが最優先だ。今のドラクロ

ワに対抗できる人材は、聖法庁でも、そう多くない」
「そ、そうかもしんないけどぉ！　ノヴィアの気持ちはどうなるのさぁっ！」
「ジーク様は……」
ふとノヴィアが口を開いた。答えを聞く怖さを、精一杯の勇気で耐えて、訊いた。
「どうお考えなのですか？」
ジークは、静かにノヴィアを見つめた。
「レオニスは戦うことを選んだのだろう。俺やドラクロワ……そして聖法庁とも」
いつもと変わらぬ、淡々とした口調だった。その口調のまま、ジークは命じた。
「お前も、進むべき道を選べ——ノヴィア」
「え……選ぶって、どういうことよ。何を選べってのよぉ」
アリスハートは悲しくなった。このままではノヴィアは旅を諦めるか、力を棄てるかの二者択一である。ノヴィアのこれまでの旅の成果としては、あまりに残酷だった。
だがこのときノヴィアは悲しみに暮れる前に、
「進むべき道……」
ぽつりと呟いていた。それが新たな——第三の選択を、にわかに思い起こさせた。
だがすぐにはその選択を口にすることが出来ず、目を伏せ、言った。

「……一日だけ、考えさせて頂けませんか」
ジークも諜報院の男たちも、反対はしなかった。

ノヴィアは海を見ていた。
万里眼を使わず、ただ己の目を、千変万化する青い輝きに向けている。
全てが終わり、そして全てが始まる場所——それが海だとジークは言った。
ノヴィアの友は、誰もが、誰かの海になるのだと、そう言って死んでいった。
ジークは、ノヴィアにとって始まりの海であり、決して終わりの海ではないと——
「ノヴィアぁ……」
もう一人の大切な友達は、ノヴィアの肩で心配そうな声を上げている。
なんと贅沢だろう。こんなにも多くの支えを自分は持っている。そうノヴィアは思った。
波の音に耳をすませると、いつでも囁くような問いが聞こえてくる。
(お前は、どこへ向かうんだ——?)
それは、空と海原の境目にある、一番の透き通った青さから響いてくる問いだ。
向かわなければならない場所は、今や明確にノヴィアの中で見えていた。だが怖かった。
何が怖いのか分からない。きっと傷つけ合うことになる——そんな予感さえあった。

それでも、行かなければならないのだと思った。
いつか荒野に暮らす民からも言われたではないか。大地が与える役割に従えと。
それは自分の意志で、運命に身を委ねるということだ。かつて盲目の身で、がむしゃらにジークの後を追ったのと同じことを、今、しなければならないのだ。
「私……決めた」
波の音がひときわ強く耳を打った。潮騒が自分の体にやどり、胸中に満ちる意志とともに自分をどこか遠くへ運ぼうとしているようだった。
運ばれて行く先には、自分がよく知っている相手がいる。それがよく分かった。
「私、決めたわ……レオニス」
もう一人の自分の名を、そうしてノヴィアは口にしていた。

ノヴィアは一晩、自分の気持ちが変わらないかどうか、じっと自分自身の様子を見た。
明くる朝、目覚めて自分に訊いた。本当にそれで良いのかと。答えは昨夜と同じだった。
聖堂に行き、ジークのために朝食を用意した。これが最後とは思わなかった。いつも通り、見てくれは悪いが、味と香りは抜群の食事が、食堂のテーブルに並べられた。
ジークが食堂にやって来ると、アリスハートが、ノヴィアの首筋をそっと撫でた。

「狼男が来たよぉ……ノヴィアぁ」
ノヴィアは、くるりとジークを振り返り、にっこり笑って言った。
「おはようございます、ジーク様」
「ああ」
「私、決めました」
ジークは小さくうなずき、席に着いた。
「行くか……」
「はい」
「道は遠い。戦場を横断することになる」
「はい」
「レオニスが、お前の味方とは限らない」
「それでも、彼と会うことが、私の進むべき道です」
ジークはまた一つうなずき、まだら色のシチューを口に入れた。
しばらく味わえないであろうものを、ゆっくりと記憶に残すような食べ方だった。
ノヴィアの決意を、諜報院のクルツたちは、すんなり受け入れた。

あるいは事前にジークが話を通していたのかもしれない。すなわちノヴィアがジークと別れ、聖地シャイオンに行き、レオニスと直接対面するということを。
ノヴィアとジークと別行動になれば、諜報院の当初の目的は達せられる。再びノヴィアがジークと合流するのは、レオニスが、聖法庁と和解したとき以外にない。
それを、ノヴィア自身が行おうというのだ。レオニスと会い、その本意を質す。そして聖地シャイオンが、聖法庁と敵対しないよう、働きかける。
れっきとした〈銀の乙女〉の聖道女とはいえ、果たして一介の少女に過ぎないノヴィアに、一国の領主を説得し、戦乱から和解へと導くなどということが出来るのか――
諜報院のクルツたちの誰もが懐疑的でありつつ、もしかすると――と期待の色を見せるのは、ひとえにジークが確信をもってノヴィアを送り出すことを決めたからであろう。
その確信に共感したのか、
「我々、三人が同行する。よろしいか？」
クルツは、丁寧な口調になって訊いた。むろんノヴィアの疑惑を晴らすには諜報院の同行が不可欠である。ノヴィアが二つ返事で承知すると、クルツは慇懃に頭を垂れたものだ。
ノヴィアがジークに決意を告げた翌日――〈銀の乙女〉の正式な許可が下りた。ノヴィアの判断、動向、立場を、〈銀の乙女〉が承認したのだ。この瞬間、ノヴィアは疑惑の対

象でありながら、同時に、戦乱を未然に防ぐ大役を、その一身に、背負うこととなった。
ジークが属する聖法庁および、〈銀の乙女〉を背景とし、ノヴィア個人の力量全てをもって、聖地シャイオンに和解の道を説かねばならない。それが出来なかったときのことなど、もはや誰にも予想できない。聖地シャイオンでひそかに殺されても不思議はないのだ。
「それでも行くのよねぇ。もー、自分で決めたら、ぜーったいそうするんだもん」
アリスハートは呆れるような笑うような態度でいる。
「ごめんね、アリスハート……。危険なときは、あなただけでも逃げて欲しいの」
「んなこと言ってぇ。ノヴィアも、ぜったい大丈夫って思うから、行くんでしょぉ」
「うん。そう信じてる」
「だったら、あたしも一緒に信じる」
底抜けの明るさで言ってのけるアリスハートに、
「ありがとう……アリスハート」
ノヴィアは深く感謝を込めて、微笑した。
さらにその翌朝——ノヴィアは、アリスハートとともに、クルツら三人の諜報院の男たちを連れ、旅上に立った。馬車を駆るのはセスとダンだ。クルツが待つ客席に乗り込む前に、ノヴィアはジークと真っ直ぐ向き合った。

口にすべきなのは、別れの言葉だろうか。それとも再会を約す言葉だろうか。どちらも咄嗟に出て来ず、ただ急に色々な思いが膨らんで、ひたとジークを見つめるノヴィアに、
「俺は、ドラクロワの兵団に先行するよう動く。敵の一部が聖地シャイオンと呼応する可能性が高い。俺とお前で、その二つの動きを各個撃破、もしくは阻止する。良いな」
そうジークは言った。まるで進撃の合図である。馬車で待つ諜報院の男たちが唖然となるほど、直截にノヴィアを戦力とみなす言葉だった。ノヴィアも驚きに駆られたが、
「は……はいっ！」
元気良く答えた途端、かっと胸が熱くなった。ジークはこれを別離と思っていない。ジークとノヴィアの連携による軍略なのだ。遠く離れても、同じ目的のもとに戦う――
たとえ、別々の道を行くとしても。
思わず涙が込み上げてきた。それをこらえ、凜と言った。
「行って参ります、ジーク様」
ジークは、ただ無言でうなずいた。
ノヴィアは客席に乗り込み、ドアを閉じた。アリスハートがちょっぴり寂しげに言った。
「じゃぁねぇ、狼男ぉ……ノヴィアがいなくても、ちゃんと御飯、自分で作るのよぉ」
そして、客席のクルツが身を乗り出し、

「武運あらんことを。ジーク・ヴァールハイト」
「互いに、な」
短いジークのいらえとともに馬車が走り出し、ジークを置いてノヴィアを運び始めた。
「……狼男、まだ、こっち見てるぅ」
アリスハートが馬車の窓から顔を出して言う。ノヴィアもそれを感じていた。ジークの視線を——これまでとは完全に逆だった。いつまでもジークの眼差しが、ノヴィアを運ぶ馬車に向けられていた。やがて、その眼差しも届かなくなり——
ノヴィアは、旅に出た。

3

「我が領国で、商売上の偽りがあったとは、許せるものではないな」
王座の上で、少年が言った。
青紫色に澄んだ瞳、美しく伸びた鼻筋、白い磁器を思わせる滑らかな肌。
茶色がかった金髪には、細く銀髪の輝きが混じり、その顔の両脇を飾るのは、白刃のごとき銀髪だ。少年の金銀の髪こそ、対立する二つの民族が結ばれた証拠だった。冷厳とした声口調は、まだ十代の半ばとは思えぬほど落ち着き払っている。両足が不自由で、どこ

へ行くにも車椅子が必要だが、それさえ少年の威厳を損ないはしない。
「そなたが被った損失は、十分に補償されたであろうな？」
少年が訊いた。思わず誰もが姿勢を正したくなるような凜冽たる声音である。
すると広間で平伏していた商人の男が顔を上げ、
「はい、レオニス・ジェルミナル公閣下。聖地シャイオンの主にして正義の守護者よ、あなた様のお力により、無事、騙し取られた分の馬が補償されましてございます」
舌の冴えも鮮やかにそう言った。
事情はこうだ。この商人が、聖地シャイオンに来た。商品は馬である。調教師のもとで調教された馬を買い、各地に運んで売るのが主な仕事だ。いわゆる馬目利きであり、良馬を求めて大陸中を旅していた。
だが初めて訪れたこの聖地で、強欲な別の商人にうまい話を持ちかけられ、大半を安く買い叩かれたばかりか、金さえもらえず残りの馬を全て騙し取られてしまったという。
困り果てた商人は、この地の王が、そうした詐欺や強奪の損害を補償してくれると聞き、溺れる者が藁をもつかむ思いで、レオニスに窮状を訴えたのであった。
事実——レオニスが王となって治世をするようになってからというもの聖地シャイオンではこうした犯罪が増えに増えた。これは国が荒れたのではなく、その逆である。

国が豊かになり、そこら中から商人が集まってくるようになったため、自然と詐欺師や強盗のたぐいまでやって来るようになってしまったのだ。
レオニスの治世が優れているからこそ直面した問題だった。これにレオニスは度重なる厳罰と、損害への補償をもって対処していた。
「そなたの大事な商品を奪った者どもは、我が優秀なる兵によって、ことごとく捕らえられるであろう。いずれ、その者たちの首は広場に並べられるゆえ、どうかこの聖地が盗人のはびこる危険な土地であるなどと思わないで欲しい」
「もちろんでございます。一介の商人に過ぎぬ者に、それほどお気を配って下さることを恐悦至極に存じます。まことにこの国の民は優れた王をいただいて幸せでございます」
商人は流れるような弁舌を弄しつつ、改めてレオニスを見上げた。
これほど奇妙な王座は、どこの国にもない――それが、この商人の正直な感想だった。
王座の装飾がどうというのではない。むろん広間全体の気品と美感をたたえた造りは、なるほど国の豊かさを無言で物語っている。それは居並ぶ廷臣たちの瀟洒な衣服や、書記が手にしたペン飾りの豪華さに至るまで同じであり、しかも彼らのような貴族だけが豊かなのではない。領民全体が、今やこの国に集積される富と豊穣の恩恵に預かっていた。
だが問題は、人物と雰囲気だった。

第一に、このレオニスという王が放つ圧迫感は何なのか。
少年の王というのは、それほど珍しいものではない。跡継ぎが育ちきらぬ前に領主が亡くなることは、戦乱の激しい国ではよくあることだった。
だがここまで若くして王者の尊厳を身につけられる者は滅多にいない。見聞きしたことは一切忘れぬ明晰な頭脳を持ち、その判断は常に一点の曇りもないとの噂だが、それだけではない。まるで戦場で武功をなしてきたかのような厳然たる迫力さえあるのだ。
知力に加えて、武力の気配さえ持っているとは尋常ではない。
こんな話がある。レオニスは最近、城の貴人数名が間者となって領外へ情報を流していることに気づいたという。その対応が、また凄まじかった。
何食わぬ顔で間者たちを今いる広間に呼びつけ、廷臣たちのいる前で動かぬ証拠を並べ上げると、レオニス自ら筆頭者の首を刎ね、残りは断頭台送りにしたというのだ。
ろくに歩けぬのに、どうやって相手の首をと思うが、レオニスが所持するのはジェルミナル家に代々伝わる宝剣である。その剣は主人の意志に従って自在に宙を舞うのだ。
つまりレオニスは王座に座ったまま、剣がひとりでに間者の首を刎ねるのを眺めていたことになる。なんとも恐ろしい光景であり、その苛烈な処置に廷臣たちは恐れおののいたが、それでもレオニスの正当さを疑う者は皆無だった。

それだけでも十分に旅の風聞に値するが、しかしレオニス本人だけでは王座の奇妙さを説明するには足りない。レオニスの周囲にいる二人の人物が、また異様なのだ。

一人は、黒い法衣の青年である。レオニスの傍らに影のように付き添い、一言として喋らない。あまりに気配が薄く、ともすると姿は見えているのに存在すら忘れそうになる。

トール・ヴュラード――商人たちの間では「死の影」とも「影法師」とも渾名される、レオニスの側近である。レオニスに敵対する者に気配もなく忍び寄り、苦痛さえ与えず死に至らしめるという。またレオニスを狙う者が城に忍び込めば、たちどころにそれと悟って逆に返り討ちにしてしまう。まさに猟犬にして番犬たる、青年であった。

これまで一度だけ、謁見するとみせかけてレオニスを殺害せんとする者が出たという。例の間者の仲間が、自分も殺されると思い、一矢報いようと無謀な試みに走ったのだ。

ところがその暗殺者は、王座へ続く階段さえ踏めぬまま、最後の抵抗を終えた。一瞬にして背後に回ったトールに斬り伏せられたのである。いったいいつトールが王座のそばを離れたのか、暗殺者はおろか、廷臣たちでさえ分からなかったという。

そんな人物が王座のそばに立っているのだ。商人が平伏してレオニスから目をそらした途端、いつの間にかトールが影のように背後に立っていても気づけるかどうか――

そういう怖さに加えて、またもう一人、同じように怖い存在が、いた。

王座の下方――王からやや離れた、広間の隅。
普通は、楽士や道化師などが、王に娯楽を与えるため配置される場所である。
そこに、若い娘が一人、ぽつねんと椅子に座っているのだ。
腰まで届く白い髪に、幼女のようにあどけない碧の目。トールに劣らぬ無表情さで広間を眺め、なんと靴は履いておらず、裸足のまま、ぶらぶらと足を揺らしている。
それだけでも甚しく場違いである。その上、膝に乗せるものが異常きわまりなかった。
なんと綺麗に磨かれた人間の頭蓋骨を、娘は大事そうに抱えているのだ。
その彼女こそ、レオニスが招いた彫刻家であり、城や街で見かける優れた彫像のほとんどをたった一人で手がけたことは、領民なら、誰でも知る有名事であった。
中でも城の大広間に飾られた女神像は、レオニスから直々に制作を依頼されたものだという。優美さと慈愛をたたえた像は、女神というより聖母と呼ぶにふさわしく、領民ばかりか旅の者さえ、この聖地の象徴と認める傑作であった。
商人もその像を見ており、少なからず感銘を受けている。そして実際にその制作者である娘を目にして、噂通りの風体であることに、逆に納得してしまったものだ。
彼女が造る像は、決して美しいだけではない。むしろ商人同士の間では「地獄の彫刻家」と渾名されており、その理由は、街の北にある広場に行けば分かる。

そこに鎮座する物体を目の当たりにして、恐怖に息をのまぬ者はいない。

「レオニスの右手」と呼ばれる、黒曜石で造られた断頭台である。

罪人の首を刎ねる合図としてレオニスが右手を挙げるところからそう呼ばれる代物で、最高級の石材で組み立てられているばかりか、柱や台のいたるところに恐るべき彫刻が施されているのだ。悲嘆と苦悶にのたうちまわる老若男女がどろどろに溶け合って凍りついたような異形の彫刻——その全てが、麗しい聖母像と同じ作者によるものである。

商人もそれを見たときは、思わず自分が立てた計画を躊躇しそうになったものだ。

「どうした？　レティーシャが気になるか？」

レオニスが訊いた。商人は、自分がその地獄の彫刻家ことレティーシャ・ベルゼブベスの姿を注視していたことに気づき、慌てて平伏した。

「は……この方が、広間に飾られたあの偉大な女神像をお造りになったとか……」

かすかにレオニスの頬に皮肉の笑みが浮かんだ。あの女神像がいかなる経緯で制作されたかを思い、自嘲の念を抱いたのだ。それに、傍らのトールだけが気づいていた。

「彼女の像は、大いに人の心を打つ。そなた、街の広場にある正義の像は見たか？」

商人は一瞬、レオニスが、断頭台のことを正義の像と呼んだことに、戦慄を覚えた。

「は……はい。実に勇壮で……」

美辞麗句を重ねながら顔を上げようとし——商人はそこで、絶句した。
レオニスの柔らかな笑みが、見る者をぞくりと戦慄させる凄愴の微笑へと一変していた。
「正義の像だけではない。我が国は、犯罪に遭った者への補償と同じく、罪人の処置も万全だ。この城の牢は、そこらの国の牢とはひと味違う。そなたも試しに入ってみるか？」
「い……いえ、滅相も御座いません……」
商人は慌てて目線を下げた。じわりと嫌な汗が浮かぶ。聖地シャイオンの牢獄は、魔女の住処として国の内外で有名だった。阿鼻叫喚の地獄絵図が壁一面に彫り込まれており、夜な夜な、苦しみ悶える亡者の声が、どこからともなく響くという。そればかりか、その牢には魔女が住んでいて、囚人の魂を少しずつ食い尽くすことをレオニスから許されているのだと、牢に入れられた経験のある者が口を揃えて告げるのだ。
「ふぅん……あの男の人、ずるいんだ、兄様。レオニス様に嘘ついたんだ、兄様。ふー」
ぽそっとレティーシャが頭蓋骨に呟きかけ、商人の背に悪寒を走らせた。
そのレティーシャこそ、いまだに地下牢で寝泊まりし、囚人たちを恐怖のどん底に叩き込んでいる魔女の正体であることまでは、商人は知らない。
「ほう、レティーシャ。嘘とはなんだ？　今そこにいる商人が、何か偽っていると？」
商人は、ぬるぬるとした脂汗が全身に噴き出すのを覚えた。恐怖に駆られて顔を上げ、

「聖地シャイオンの王よ、いったい何のことで御座いますか――」
その声が、喉に詰まった。影法師ことトールが、いつの間にか、王座への階段を降り、商人からやや離れた場所にいた。無表情な目が、見るともなく商人に向けられている。
レティーシャが、きょろっと碧の目を商人に向け、頭蓋骨の陰で、薄く笑った。他の廷臣たちは粛々とした表情を崩さない。商人を吐き気がするほどの圧迫が襲った。
「さて……そなたに補償すべきは、十二頭の馬であったな？」
「は……いや……それが……」
商人は、どもりどもり、言った。
「な、なぜか、じゅ……十三頭の馬を、ちょ、頂戴いたしまして……ご、ご返上を……」
「ほう、そうか。誤って一頭多く、渡してしまったというのだな？」
「は、はい……」
「それは良かった。そなたが正直者であって、実に喜ばしい」
レオニスは笑みを消し、ひどく真面目な顔で言った。商人はふと、レオニスの言外の意図を悟って、ぞっとなった。本当は一頭多いことなど、わざわざ告げるつもりはなかったのだ。そのまま黙って頂戴するつもりだった。だが、もし、告げなかったら――
「最近は、城の補償を目当てに、偽りを弄する者が多くてな。もしそなたが正直に告げな

かったら、正義の像に後を任せなければならなかった。本当に喜ばしいぞ」
「わ……わざと……」
「うん？」
レオニスはにこりと笑んだ。商人は絶句した。わざと一頭多くし、それを申告しなければ殺したというのか。いったい、何という王か。商人は、心底から今この広間にいることを後悔した。だが、全てが遅かった。気づけばトールがまた数歩、商人に近づいている。
「さて……そなたの正直さを疑いたくはないが、今一度、訊こう。そなたが騙されて奪われた馬というのは、いったい、何頭であったのか？」
「そ……それは……」
「馬は農耕であれ軍事であれ、重要な産物だ。その生産と売買は、全て把握している」
「う……ぐ……」
「補償するときでさえ、誤って一頭多くしてしまうほどだ。そなたが申請した書類にも誤りがあるかもしれん。今一度、正しい事実を、その口で告げてくれぬか？」
「い……一頭も……」
「うん？」
「一頭も……ございません」

「ほう……。では十二頭の馬を奪われたというのは、全て誤りであったと？」
「は……は、は、はい……」
「愚か者が！」
凜冽たる声音がレオニスの口から迸った。商人は、心臓が止まるかと思うほどの衝撃とともに平伏した。その様子を――トールは淡々と眺めている。この全てがレオニスの芝居であり、そして慈悲であることを知っているのだ。
「無いものを、あると誤り、王に申し立てた罪は重い……が、最後の最後で、己の誤りに気づいたことは、評価しよう。牢へつれてゆき、禁固二か月の処罰を与えよ」
商人は目に見えて脱力した。断頭台送りではなく、牢へ入れられるのだ。命は助かったが、行く先は魔女の住処である。どちらが良いのか、判断さえ出来ぬ茫然自失の体で、商人は、兵の手によって、ずるずると引きずられて行き、広間から姿を消した。
トールはそれを見届け、すっと王座の傍らへ戻った。レオニスがちらりと目を上げ、
「やれやれ……案外、素直に吐いてくれたな」
妙に、ほっとしたような微笑を浮かべたものだ。
「レオニス様の威厳の賜物でしょう」
「よしてくれ。ただの演技さ。これでも自分が子供だと言うことは分かってるんだ」

レオニスに、男を断頭台の餌食にさせる気はない。しばらく牢に放り込むだけである。
そのために、わざわざ自白に追い込ませるための芝居を打ってみせたのだ。
ここひと月ほどの間、罪人の裁きでは断頭台は全く使用されていない。
レオニスが、城の内情を外部に――ドラクロワに漏らしていた間者を、自分の手で始末したという噂は事実である。が、それは治世というより軍事的な必要事だ。その殺害を、レオニスは、もう娯楽とは見ていない。むしろ、苦痛に耐えての決行だった。
「また悪夢に出てくる首が増えなくて……良かった」
トールにしか聞こえない小さな声で、レオニスは呟いた。
容赦の無さを見せつけねばならない。そして素早くことを収めるのだ。
それが、罪人を殺さず、かつ容赦のない裁きを行う上でのレオニスの態度だった。
レオニスが死罪を濫発したのは、ごく短期間のことだ。しかしそれがいつでも再開される可能性があると思わせることで、この聖地で大なり小なり罪を犯すことの愚かさを知らしめねばならない。被害者には補償を、加害者には罰を。その天秤の維持が肝要だった。
補償も、罰も、やりすぎれば治世を損なう元になる。
「これで午後の裁きと審議は終わりだな？」
「はい、レオニス様」

「ようやく博士たちとの会議に入れるな。……みな、下がって良いぞ」
博士たちとは、レオニスが呼び寄せた聖印の研究者たちである。そのレオニスの言に従い、廷臣たちが、無事に死罪を出すことなく裁きが終わった安堵とともに、退室してゆく。
「湖まで頼むよ、トール。博士たちが広間に集まるまでに、彼女を呼びに行かないと」
彼女——トールが海から連れ帰った新参者にして、今や博士たちの注目の的となった存在のことである。聖地の象徴である湖に住みついたそれを、呼びに行くのだ。
「はい、レオニス様」
トールがそっとレオニスの体を抱き上げ、付き人たちが用意した車椅子に乗せる。
「お前も来るか、レティーシャ」
レオニスが声をかけたとき、レティーシャは既に、ぺたぺた裸足の足を鳴らして歩き去るところだった。一応、立ち止まって、ちらりとレオニスを見やる。が——レオニスと目が合うと、急にうつむき、そのまま広間を出て行ってしまった。いつも通りの無礼さだが、どこか、逃げるような感じでもあった。
レオニスも、今さら怒りもしない。猫が気まぐれにいなくなるようなものだった。

4

「あの商人……本気で僕をたぶらかせると思っていたんだろうな」
湖へ付き人を連れ、進む道すがら、レオニスは呆れたように呟いた。聖地の経済を把握することなど、レオニスにとって遊びの部類に入る。商人とは情報の桁が違うのだ。そんな相手に詐欺を仕掛けるなど、まさしく愚者の行いだった。
「もし死罪を言い渡したなら、私が斬る気でおりました」
トールが言う。それがレオニスに死罪の重みをこれ以上増やさせない方法だった。
「間者は口を封じなければならないけど、ただの盗人なら生かして王への恐怖を語らせた方が、治世には良いさ。放免した後は、せいぜい僕のことを語りぐさにしてもらおう」
レオニスは笑って、優しく車椅子を押すトールを、仰ぐように振り返る。その子供っぽい仕草が、逆に心の余裕を感じさせた。変わった――トールは思う。まだ、しばしば悪夢に魘されるとはいえ、かつての憤懣も闇雲な怒りも、今は穏やかな凪の様相を見せている。
「もし不正をすれば、湖から王の霊が現れて懲罰を行うという伝説でもでっち上げるか」
湖畔の景色を眺めながらレオニスが言う。
「王が生きている限り、必要のない伝説でしょう」
「……僕だって不死じゃない。次の王のことを、今から考えておくのもいいさ」
レオニスは静かに言った。自分が亡き後のことなど、到底、まだ十代の少年が考えるべ

きことではない。そうトールは言いたかったが、同時に、レオニスの内心も察していた。
今、レオニスがいなくなれば、確実に、聖地シャイオンは混乱の極みに陥る。
それほど、統治の全てが、この若き君主の裁量に委ねられているのだ。
「独裁ほど脆いものはない。それが聖地シャイオンの弱点だ。どうすればその弱点を克服できるか……僕自身が考えねばならないのが、なんとも皮肉なものさ」
「御意……。ですが、そのような言葉を耳にすれば不安になる廷臣もいるでしょう」
「少しは不安にさせてやらないと、教育に悪いよ」
そんな会話をするうち、湖のほとりに着いた。今のレオニスの心のように平らかな水面が、澄んだ鏡のように、周囲の景色を映している。ふと、その水面が揺らぎ——
波紋の源を目で追うと、喪に服してでもいるかのような黒衣の女が、そこにいた。
幻のように水面に佇み、空を見上げている。ふとレオニスたちを、振り返った。瞳も髪も、鮮やかな紅色。その美貌に対し、表情は幼女のようにあどけない。レオニスとトールに交互に微笑みかけながら歩み寄るが、その足下は、むろん、ただの水だ。
女のほっそりとした両脚の膝の辺りに、淡い輝きがあるのが黒衣越しにかすかに見える。
体重を消失させる聖印が力を発揮し、女の体を水上に浮かばせているのだ。
「やあ、ロザリア。気分はどうだい？　何か欲しいものはある？」

女は水面から地面へと足を移しつつ、小さく首を傾げている。欲しいもの——という質問の意味が分からないのだ。その赤い髪が柔らかく翻る一方、その体のあちこちから、かすかに、きしきしと軋るような音が響いていた。

シーラ・ロザリア——この湖に住みついた氷の女を、レオニスは、そう名づけた。十字架のシーラ、といった意味だ。女の胸に埋め込まれた十字型の紋章からつけた名である。十字型の紋章を核として、女の存在が作られているのだ。

氷の魔獣の堕気と、十字型の紋章にやどる聖性が、融合して人の形をとった——竜精。未熟ながらも人格を持ち、僅かながら、紋章の持ち主だった女の記憶を有しているらしい。

「外典イザーク書の秘儀の力を破らない限り……ドラクロワの命には届かない。ロザリア、君は、秘儀の要だ。君こそが、ドラクロワを破る力を秘めているはずだ」

レオニスが熱心に話しかけるが、ロザリアは、ただあどけない微笑のままでいる。

「ドラクロワは、僕に君を研究させる気だ。そしてその成果を奪う。それがドラクロワの狙いなら、僕は、全力で君の力を目覚めさせよう。そしてドラクロワを倒す力とする」

「ジー、ク……は？」

ロザリアが、細い声で、歌うように訊く。

「ジークに会いたいのかい？」

「ジー……ク。誰……。思い……出せ、ない……。ジー、ク……」
ジークという名だけが、切々と口をついて出ることに、ロザリア自身が不思議がるようだった。あどけない微笑みが翳り、悲しそうに足下を見つめる。
「おそらく、ジークもまた、秘儀の内だ」
レオニスが言うと、ロザリアは、子供のように寂しさをあらわにした顔を上げた。
「ドラクロワが外典イザーク書を。僕が君という竜精を。そしてジークが〈招く者〉の力を、それぞれ手にしている。この三者が交わるときこそ、秘儀への扉が開くときだ。いずれドラクロワがこの聖地に侵攻すれば、ジークもまた、招かれることになる……」
レオニスは、ロザリアに手を差し伸べた。
「さあ、まだ目覚めぬ竜精よ……僕とともに博士たちのもとへ来てくれ。僕らがどんな運命を選べるのか、君を通して知りたいんだ」
「運、命……。選、ぶ……」
ロザリアは、悲しそうな目で、ぼんやりとレオニスの手を見つめている。
「行こう、ロザリア。君が、この世に生まれた理由を、一緒に見つけよう」
ロザリアは小さくうなずくと、レオニスの手を握った。ロザリアの血の通わぬ冷たい手——だがそれは、氷で出来ているとは思えぬほど柔らかだった。

「かつて僕は、湖から怪物が現れ、世界を滅ぼしてくれることを望んでいた——」
ロザリアとともに城へ戻る途中、レオニスは、独り言のように声を零した。
「今、それと同じ力を迎え入れた僕を、愚かだと思うか……トール」
トールは車椅子を押しながら、傍らを歩むロザリアを見やった。それから、そっとレオニスの耳元に顔を近づけ、言った。
「私は、己の愚かさを知る王にこそ、仕えたいと思います」
「お前を……また派遣しなければいけないかもしれない。ドラクロワの動きをつかむために。お前しか頼れる者がいないんだ……。でも今まで以上に、危険、かもしれない……」
「私は一度、死にました。こうして再び働ける幸福以外、何も求めてはおりません。どうか、ご命令を。レオニス様の望むような働きを、お見せします」
「死んだら……駄目だよ、トール」
「分かっております」
「ねえ、トール。もし僕が……王でなくなっても、そばにいてくれるかい……？」
「レオニス様がレオニス様であるということだけが、私の忠誠の理由です。王座は飾りに過ぎません。あなたの進む道に、私も従いましょう」

トールの答えは淀みない。レオニスは目を閉じ、身を深々と車椅子に預けた。
「僕は……決めたんだ、トール」
「はい」
「この聖地の未来の、あるべき姿を。そのための僕自身の……進むべき道を。そうする以外に、この国が生き残る道はない。そう思っても……なかなか勇気が持てなかった」
「はい」
レオニスの左手が、肩越しに、トールの右手に触れた。かつて焼けつく幻痛に襲われ続けた少年の手は、トールの大きく広い手に比べ、意外なほど小さかった。
「今……やっと心が決まった。ありがとう……トール」
レオニスの手が離れた。トールはただ粛々と、その小さな身を車椅子で運んでいった。

5

レオニスが博士たちとロザリオについて議論を交わしている間、トールは一人、城の庭の一角で、修練に励むことにした。といっても、そう激しいものではない。自分を鍛えるというより、その力の使い方を試行錯誤するようなものだ。
秋めく木立の間に立ち、舞い落ちる枯れ葉を眺める。すっと右手を翻し、聖性と堕気を

瞬時に混ぜ合わせるや、何もない手に、細い、漆黒の鉄鞭が出現した。
その剃刀のごとき刃が、跳ねた。たちまち、ぞっとするような鋭い刃風が、トールの周囲で乱れ交う。トールを中心として、次々に宙を舞う枯れ葉が寸断された。
鞭が届く範囲であれば、背後を舞う枯れ葉でさえ、そちらも見ずに斬ることが出来た。
凄まじい刃の乱舞にもかかわらず、トール自身は、むしろゆったりと動いて見える。
表情は静謐とし、気迫や殺気といったものは、まるでない。それでいて刃は鋭さを増しに増してゆく。このトールの技量を、達人の域と評する武人もいる。
多くの人材がレオニスのもとに集まる中、当然、武に通じた人材も多数いた。そしてこれまた当然ながら、そうした者たちは揃って、レオニスの側近であるトールに敵愾心を燃やした。トールに代わって、自分こそ主君の側近たらんとしたのである。
そしてまた当然のなりゆきとして、幾たびも御前試合が行われた。レオニスや廷臣たち、城勤めの貴族たちの前で、トールは、腕自慢の武人たちと戦わせられたのだ。
殺し合いではないが出世のかかった勝負である。訓練用の木剣を使うとはいえ下手をすれば大怪我を負わせることになる。そして誰もがトールを殺す気で挑んでくる。
たまらない状況だが、トールはレオニスの命じる通り、粛々と試合に臨んだ。
レオニスが武人たちを統率するには、理を説く以上に、力を示さねばならないことが分

かっていた。歩けぬレオニスに代わって、無法すれすれの腕自慢たちに、自分たち以上の力を持った者がいることを教えねばならない。それがトールの使命であった。

そしてまた——レオニスのひそかな感情も、察している。

レオニスにとって、トールは最強の剣士であり、友である。そのトールよりも強いと放言する者に、レオニス自身が、かちんとくるのだ。多数の武人を招き入れることが軍事の必然とはいえ、その点だけは、レオニスの私情が、しっかり入っている。

そんな次第で、トールは既に、何十人という武人をレオニスの前で見事に叩きのめしていた。中にはトール以上に技に達者な者もいたが、敵ではなかった。

ドラクロワの放つ、あの漆黒の稲妻に比べれば、なにほどのこともない。ジークの圧倒的な烈気に呑まれることを思えば、この程度の殺気など涼風のようなものだ——

そう思うと、どんなに屈強な相手だろうと、物足りなく感じた。力任せに攻められれば柔らかにいなし、技を弄されれば一瞬の機を見て打ち倒す。俊敏さや臨機応変さを自慢にする者ほど、正面から挑まれれば脆い。暴虐に攻める相手ほど、実は痛みに弱い。そういうことが向かい合った瞬間に分かる。ああ、勝てる、と思う。そして実際、勝つ。

それだけの勝利を重ねても、トールが心に描くのは、ドラクロワとジークの二人だけだ。

正面から来い——そうジークが口にしたときの、膝に力が入らなくなるような烈気。

死ぬがいい――優しくドラクロワが告げたときの、目をつぶりたくなるような恐怖。
勝ちたい。何としても、彼らに匹敵したい。
そう思いながら刃を振るううち、ふと、トールは小さな気配を察した。反射的に刃の軌道をそらしつつ、手を翻して鋼を消す。幻のように一瞬で鉄鞭を消し去ることが出来た。
寸断された木の葉に紛れるようにして、一匹の蜻蛉が、淡い色の羽を震わせ飛んでいた。
それを危うく、葉と一緒に斬るところだったのだ。枯れ葉色の花びらのようなそれが、ふわりと舞って、トールの肩口にとまった。ただの虫けらと思えば虫けら、命と思えば命――そういう存在に、思いがけず気づけた喜びが、かすかにトールの胸に湧いた。
(ああ、良かったねぇ――)
笑うようなアリスハートの声が聞こえる気がした。
蜻蛉はすぐにトールから離れて飛んでいった。しばしその羽を見つめながら、自分もレオニスと同じように、変わった――そう思わざるをえないトールだった。
いつからだろう。ジークと初めて対峙したときからか。アリスハートが、トールはトール、と言ってくれたときからか。あるいはドラクロワによって死の淵を経験したせいか。
一度は死を覚悟した。それが再び目覚め、痛みとともに生存を感じた瞬間、何もかもが変わってしまったのかもしれない。これまで多くの命を屠ってきた自分が、本心では、も

う誰も殺したくないと思っているのだ。だが、それではレオニスを守ることが出来ない。
トールは、目的もなく木立を歩き、思案にふけった。
レオニスを守るためなら、いかなる殺害の罪も背負う覚悟だった。レオニスは、殺せば殺すほど悪夢に出る亡者の数が増えるのが分かっていながら、城の内情を漏洩した間者を始末した。自分だけ逃げるわけにはいかない。そう考えるうち、ふいに父の悲しみが理解できる気がした。英雄として暴虐を誇示することを民から求められてきた父の辛さが――
そんな思案に心を任せていると、にわかに木立の向こうから唸り声が聞こえてきた。
同時に響くのは、ぶんぶん唸る蠅の羽音――
トールはそちらへ歩み寄り、城の中庭の一角に出た。
「ふんぐるぐるぐるるるああるららららるらるらろろろぉぉおおおん♪」
そういう、歌うのだか悶えるのだか分からぬ声を上げるレティーシャが、いた。
決して呪文のたぐいではない。力を発揮するときの、純粋な癖だ。その絶叫とともに、レティーシャの足下や袖口から、大量の蠅が、泥水のように湧いて大きな大理石にたかる。
〈邪妖精〉――蠅そっくりの、堕界の魔獣の一種だ。
蠅の牙が、嫌な音を立てて石を削り、美麗と醜悪の溶け合う見事な彫刻が現れるや、トールは、息をのんだ。その出来映えが優れているのは、いつものことだ。阿鼻叫喚の地獄

の亡者の群も同様である。だが亡者の群の上に立つのは紛れもないレオニスの姿だった。
それだけではない。よくよく見れば周囲に散らばる習作用の石には、どれもレオニスの顔が彫られている。何度となく試したのだろう。どんな像でも、あっという間に彫り上げるレティーシャからすれば、実に入念な習作といえた。
レオニスが自分の像を彫るよう命じたのだろうか？　トールは首を傾げた。そんな依頼をしたとは聞いていない。とするとレティーシャが勝手に作っていることになる。
いったい何のために？　トールは疑問に思いつつさらに近づいた。レティーシャは気づかない。それだけ彫刻に集中しているのだ。
「駄目、兄様。気に入らないよ、兄様。こんなんじゃ駄目。全然、駄目。駄目、駄目」
レティーシャが頭蓋骨に話しかける。意外なほどの焦りようだった。
「もうすぐ行かなきゃ、兄様。でも、終わらないよ、兄様。早くしなきゃ。早くしなきゃ、兄様。え……？　なぁに？　うん、ふぅん、そう。へー」
かかっと歯を鳴らす頭蓋骨に、レティーシャは熱心にうなずいてみせる。
「来るの？　教えてくれる人、来るのね、どうすればいいか、教えてくれる人が……」
レティーシャの声が尻すぼみに消えた。碧の目を上げ、ゆっくりとトールを振り返る。
「あ……」

ぽかんとしたレティーシャの顔こそ見物だった。
「すいません。覗くつもりは、なかったんです」
トールが丁寧に言う。レティーシャは硬直したようにトールを見つめたままだ。他人が自分の作業場に入って来たことに気づかなかったせいで、ひどく驚いているらしい。
かと思うと、むっと唇を尖らせ、その左頬をトールに向け、うつむいた。
無言の拒絶だ。その頰に、うっすら残る刀痕は、トールがつけたものだった。
トールも無言で、左手を上げた。小指と薬指をレティーシャの蝿に食いちぎられ、三本しか指が残っていない手である。
レティーシャは、それでも、うつむいていたが——かかっ、と頭蓋骨が歯を鳴らすや、
「この人ね……兄様。この人が、どうすれば良いか教えてくれるのね。うん。綺麗な像を彫りたいよ。あたしにはそれしかないよ。教えて欲しいよ。うん、教えて欲しい」
呟くように言いつつ、こちらには目を向けもしない。だが、どうやら遠回しに意見を求められているらしいことはトールにも伝わった。トールは像を見た。
哀れな亡者どもを踏みつけ、天を見上げて立つ、レオニスの像——足の弱い現実のレオニスにはない姿だが、代わりに、その凜冽とした内面を見事に彫像化している。
が——確かにこれでは何かが足らない。レオニスの精神の繊細さの象徴となるものがな

い。亡者どもが、ただレオニスの威光に脅えるだけというのも違う気がする。
「あの……一つ、意見を言わせて頂いても、よろしいでしょうか？」
「ぐぶ」
拒絶に等しい唸り声だった。それでもレティーシャは、我慢して聞く、というように、体をすくめ、耳をトールの方へ向けたものだ。
「レオニス様が、亡者たちに、何も与えていないのは、おかしいと思います」
途端に——レティーシャの碧の目が、ぱっと見開かれた。
「レオニス様ならば、ご自身が踏みつけた亡者にも、手を差し伸べるでしょう」
それこそ独裁だった。国を豊かにしつつ、それを守るために隣国や、ときには自国の民さえ犠牲にする。厳格に裁きつつ、赦免を考慮する。残酷と慈悲が一体となった王の傲慢。
それこそ、苦痛の果てにレオニスが身につけたものだ。
レティーシャが何か言い返すかと思い、トールは黙った。だがレティーシャは無言。だんだん、その小柄な体が、うずうずと左右に揺れ始めた。
どうやら、急に何かを試したくなったらしい。もういい、さっさと行って。そういう気配が露骨に伝わってくる。自分から意見を求めておいて勝手な態度だが、それが芸術家というものかもしれない——それに、作業場に勝手に入ったのは自分の方でもある。

「完成を、楽しみにしています」

慇懃に頭を下げ、レティーシャに背を向けた。

「…………………ありがと」

ぼそっとした声が、かすかに聞こえた気がしたが、聞き間違いのようにも思えたので、トールは返事をせず、その場を去った。

木立の間で、レティーシャの声と蠅の羽音が、半刻ほど響き続け——やがてやんだ。

6

「狩りに出る……？」

レオニスは、意外そうにそう口にした。

王座のある広間にいた。午前中の審議がひと段落し、廷臣たちはいない。書記たちも書類の整理のため、退室している。レオニスの傍らにはトールが佇み、そしてまた、王座の正面に、レティーシャが頭蓋骨を持って立っていた。

それればかりではない。レティーシャは、ぶかぶかと外套を着込み、荷袋を肩にかけ、足にはしっかり靴を履いている。午前中、姿が見えないと思ったら、いきなりそんな格好で、レオニスへの謁見に臨んだのである。

今すぐ聖地を去る気でいるのは明らかだった。これにはレオニスもトールも面食らった。
「なぜ今なんだ？　お前は二度も、狩りを拒否しているんだぞ？」
もともとレティーシャは、ジークを討つために招かれたレオニスの刺客である。それがいつの間にか、彫刻師として城にいついてしまい、レオニス自身、レティーシャの目的が本当にジークを討つことなのか、疑問を抱くようになっていたほどだ。
「今だものね、兄様。あたし行くものね。もう一人のレオニス様が、ちゃんと離れたものね。その人のこと気にしないで、兄様を綺麗にした人、綺麗にできるものね、兄様」
謎かけのようなレティーシャの言葉に、レオニスがしばし沈黙した。
「……それは、ノヴィアのことか。ノヴィアが、ジークから離れたというのか？　ノヴィアの安否を気にせず、ジークを襲撃できると？」
「来るものね、兄様。その人、ここに来るものね。だから、あたし行くんだよね」
「来る……？　彼女が、この聖地に来るというのか……？」
レオニスは目を見はった。トールも啞然となっている。
レティーシャは頭蓋骨を見つめたまま、早く行かせろとばかりに体を左右に揺らす。
「……レオニス様、これは、いったい、どういうことでしょうか？」
「僕が訊きたいよ。ジークの目的はドラクロワだ。彼女を、聖地に来させる理由がない」

「行こっか、兄様」
痺れをきらしたように、ぽそっとレティーシャが言った。
「待て、レティーシャ。いったい、どういうつもりなんだ」
レティーシャの目が、僅かに宙をさまよった。それから、レオニスを見上げた。その碧の目が、真っ直ぐレオニスを向く。妙なひたむきさが、その眼差しに、あった。
「綺麗な像、出来たの。見て」
「……像？」
聞き返したときには、もうレティーシャは目を伏せている。
「あたしの綺麗、見せてみろって言った。レオニス様、言った」
消え入りそうな声だった。
「ああ……そういえば……確かに、言ったが……。それとこれと何の関係が……」
そこでレオニスは、はたと状況の異常さに気づいた。レティーシャが、頭蓋骨ではなく、直接、自分に向かって言葉を発しているのだ。
「レティーシャ……？」
レティーシャは答えない。すっかり旅支度の整った格好で、じっと頭蓋骨を抱き、うつむいている。ひどく頑なで、それでいて健気なような、妙な印象をレオニスは受けた。

「……喜んで欲しいだけ」
ぼそりとした声。それを最後に、レティーシャは今度こそ本当に沈黙した。出立を許可しなければ、何時間でも、そうしてそこに黙って立ち続けていそうだった。
「それは……」
レティーシャなりの忠誠だろうか。レオニスは危うく混乱しかけた。この娘が、兄のものである頭蓋骨以外に、そんな特別な感情を抱くとは思えなかったからだ。
レオニスは、ちらりとトールを見た。その意図を察し、トールが小さくうなずく。
「よ……よし。お前に、狩りの全権を与え、出立を許可しよう」
レオニスは言った。レティーシャの目が、嬉しげに見開かれたが――
「ただし、トールが同行する」
途端――レティーシャは、再び、レオニスを見た。
唇を尖らせ、ものすごい不満が、その視線にみなぎっていた。
レオニスもトールも、思わず呆気に取られるほどの、むくれようである。
「トールの仕事は、ドラクロワの動きを探ることだ。狩りはお前に任せる。また途中まで、お前の動きを、トールに報告させるが、良いだろ？　それくらい我慢しろ、レティーシャ。そうしてくれないと、僕が困るんだ」

口調がだんだんと砕けてくる。まるで同い年の相手に話しかけるようだ。妙な親しみが、いつの前にか生まれていた。そのことにレオニス自身が気づき、苦笑しかけた。
「レティーシャ、無理はするな。単独でジークを倒せないと思ったら、すぐに退け」
レティーシャの表情が、目に見えて、きょとんとなった。
「確かにジークが持つ力を僕が手に入れれば、状況は大きく有利になる。だがジークとドラクロワをぶつけ合う手もある。ジークを牽制し、その戦力を削ぎ……本当にお前が言う通り、ノヴィアとジークが別れ別れになるかどうか確かめるだけでも、お前の狩りの意味は十分にある。とにかく……お前という人材を、僕に失わせるな、レティーシャ。お前とジークが相討ちになっても、僕は喜ばないぞ」
王らしいといえば王らしい、出立する者への励ましの言葉である。しかし込められた親しみは、傍らのトールがちょっと驚くほど、本物だった。
レティーシャは、じっとレオニスを見つめている。
「お前を信用してないわけじゃない。トールを同行させるのは、お前の働きぶりと安全を、すぐに知るためだ。良いな？」
レティーシャは、頭蓋骨を抱きしめ、目を伏せ、こくんとうなずいた。
「では……トール。出立の用意をしてくれ」

「はい、レオニス様」
「二人とも、無事に戻ってくることを願ってる」
「必ずや……御意のままに」
トールは、うやうやしく頭を垂れた。顔を上げ、レティーシャに、言った。
「よろしくお願いします、レティーシャ」
「ぶ」
不満をのみこみ、何とか承知するレティーシャだった。

7

トールとレティーシャを送り出したその日、レオニスは付き人たちに言って、城の庭へ己の身を運ばせた。レティーシャが彫ったという像を見るためである。
木立の間を進み、やがて、枯れ葉の舞い落ちる中、それが現れた。
レオニスは息をのんだ。付き人たちも同様である。ただ像の出来映えに驚いただけではない。それが表現しているものを、どう受け取ればいいか分からぬ、強い困惑があった。
「なんというものを……」
レオニスの口から、そんな言葉が零れた。

石は黒曜石だった。断頭台に用いたのと同じ石材であり、白亜の聖母像と対照をなす、漆黒の像だ。それも、幾多の亡者の上を歩む、レオニス自身の像である。

亡者たちは哀れに手を伸ばし、あるいは頭を抱え、悲憤にのたうっている。その上を歩むレオニスは、亡者に目もくれず、高みへ顔を向けている。だが、それだけではなかった。レオニスの像が持つのは、聖地シャイオンの紋章にも用いられている、白水仙の花束だ。その花を、レオニスの像は、無造作に、亡者たちに投げ与えていた。花を受け取ることができた亡者は、明らかに恍惚とした表情を浮かべているのだ。

「己ばかり高きを目指し、踏みつけた亡者に……なお、花を手向けるか。憐れみながら踏みにじり、奪いながら与える。何という傲慢、何という暴虐。まさしく……独裁だ」

「レオニス様……これは、いかがいたしましょう……」

付き人たちが、恐る恐る訊く。うっかり褒め称えるには、あまりに不遜な像だった。

「城に運び入れ、謁見の間への通路の入り口に飾ってくれ。そうすれば、通路の先にどんな王がいるか、城を訪れる者に、事前に知らせることが出来るだろう」

レオニスの中で、像に対する感嘆の念が、自嘲の皮肉とあいまって、やがて清々とした表情を浮かばせた。じっと、静かに、そこに立ち現れた己の姿を見つめ、

「見事だ……レティーシャ」

ぽつりと、呟いた。

「この像が、僕の進むべき道を、さらに明らかにした。今度は僕が見せる番だ。ジークとドラクロワに、生と死の向こう側にあるものを……王の傲慢さとともに、見せてやろう」

第二章　道行きの朝

1

真っ二つに切断されたような鮮やかな半月の、冷たい光の下、青ざめたマントを肩から垂らし、艶やかに座るドラクロワが、いた。破壊を極めた聖堂であった。至るところに血痕が残る礼拝堂の、倒壊した石像の上で、微笑みを浮かべ、一冊の書物を眺めている。
月明かりを頼りに書物を読んでいるのではない。頁自体が、薄く輝きを帯び、ゆっくりと、ひとりでに開かれてゆくのだ。ドラクロワの力の本源——外典イザーク書であった。
「竜精が育つ……。かの聖地に集積される聖性を、存分にその身に食らっているか……シーラ……。お前が育つほどに……外典もまた、閉じていた頁を開いてゆくぞ……」
優しく、歌うような口調だった。書物を通して、遠く離れた場所にいる者に語りかけながら、ドラクロワの目が、丹念に開かれた頁の内容をとらえてゆく。
ふと、複数の足音が起こり、騎士の身なりをした男たちが礼拝堂に入ってきた。

「ご報告申し上げます。聖具を賜りし秘法士、七百名全員が、予定通り、七翼の神聖兵団とともに各地の関門を突破しました。先陣を切るは白翼神聖兵団、七千。かのズルカの巫女たる最初の秘法士、レギン様の統率のもと、一糸乱れず南下中」

自分が放った暴虐の兵の行方を耳にするドラクロワの口の端が、ほころんだ。おかしそうな、くすぐったそうな、ひどく優しげな笑みだ。

秘法士、七翼の神聖兵団、白翼神聖兵団——これらは、どれもドラクロワの知らぬところで、民たちが勝手に自分たちにつけた名称だった。秘法士とは、ズルカの聖堂から奪った聖具を与えられた者たちのことだ。また、軍勢の単位を「翼」と表現し、白・赤・青・黒・碧・紫・金と、それぞれ違う色をつけて区別していた。中でも、かのズルカの聖堂でドラクロワに祈りを捧げ、最初に聖槍を与えられた女が率いる軍勢には、純真無垢な白翼の名がつけられている。その中核を担う者たちは、全員、白無垢姿なのだという。

貴族の横暴を憎んでいたはずの民たちにしては、どうにも貴族趣味なのが、おかしい。

自分たちを特別視するための工夫なのだろうが、ドラクロワにしてみれば、実に可愛い。

生まれて初めての戦争に、興奮し、歓喜する民の姿が目に見えるようだった。

「良いだろう……槍の巫女に導かれし、白き翼を、かの聖地への先鋒とせよ」

民たちの——また、今いる騎士たちの心情を汲んだ言葉使いで、ドラクロワが返す。

「はっ……。レギン殿と白き翼に、聖地シャイオンへの侵攻を通達いたします」
騎士の一人が復唱し、伝令の役を務めるべく、きびすを返して礼拝堂を去る。
「赤き翼、青き翼は、それぞれ定められし地にて、陣を敷き、聖法庁の軍勢を迎え撃て。その間、残り四つの翼は、それぞれの経路を辿れ。目指すは豊穣の地――存分に貪れ」
命じながら、ドラクロワの目は輝く書物に向けられている。
まるで戦争などとは縁遠い、人徳に満ちた聖道士のごとき姿に、騎士たちが崇拝の念をこめて一礼し、次々に伝令のため去ってゆく。やがて、ドラクロワは書物を閉じた。書物から輝きが消え、立ち上がりながら、残った数名の騎士に向かって言った。
「七つの翼が起こす風とともに進軍する。この堂を焼き払い、全ての軍図を始末せよ」
手分けして火を放つ騎士たちを置いて、ドラクロワは聖堂を出た。
石の階段を降りたところに広場があり、そこに、見渡す限りの兵が並んでいた。
全員が、黒地に銀糸で翼の紋章をあしらった肩掛けを付けた、八つ目の翼たる兵団。
特にドラクロワに忠誠を誓う者を兵が自分たちで選別した、銀翼親衛旅団――千名。
ドラクロワが死ねと告げれば、全員迷わず、その場で命を絶つ。そういう者たちの崇敬に満ちた熱い眼差しを、静かにその身に受けながら、ドラクロワは言った。
「夜の闇とともに移動する。他の兵翼が聖法庁と戦う間、お前たちは沈黙の旅団として神

出鬼没を身上とせよ。目に見えぬ牙となり、敵を背後から屠ることのみ考えよ」
兵たちは声を上げない。沈黙が暴虐の気配に満ちていた。八つの兵団を合わせると総数は十五万に及ぶ。その全ての命が屍山血河に変わるさまを、ドラクロワはありありと思い浮かべることが出来た。そのさまを心に抱きながら馬に乗り、兵とともに移動を開始した。
「来い……聖法庁、最強の軍団よ。死を求める者全てを葬りに……来るがいい」
ドラクロワの呟きを、背後で聖堂を焼き焦がす炎が、天へと運ぶようだった。

2

街に入った途端、酸鼻の空気が立ちこめていた。
ジークの眉間に険しい皺が寄った。見渡す限りの屍だった。街路に、窓辺に、破壊された建物の瓦礫の上に、死者が投げ出され、放置されている。騎士姿の死体が多かったが、それ以上に、平民姿の老若男女が死んでいた。街を守る騎士団に対し、何倍もの暴徒が、数に任せて襲いかかったのだ。蟻がたかるがごとき人海戦術——蟻戦の名残である。
騎士姿の死体は、見るも無惨な状態だ。恨みに任せて死体を切り裂く者がいたのだろう。
ただ人間が死んでいるばかりではない。街が死んでいた。これほど大量の死体を放置すれば、耐え難い異臭とともに堕気が集積し、疫病が流行り、土地は枯れる。あからさまに

戦いの素人が、戦後のことを何も考えずに暴虐の限りを尽くしたのが見て取れる。

ジークの目に、怒りの光がやどった。街路を歩むと、広場から喧噪が聞こえてきた。ジークはそちらへ真っ直ぐ足を運び——そして見た。

「あっはははは、楽しい。すっごく楽しい」

十三、四歳ほどの少女が、聖印を刻まれた槍を手に、瀕死の騎士を追い立てていた。

「歩け、そら歩け」

人の好さそうな中年の男が、笑みに顔を歪ませ、同じように聖槍の柄で、騎士を叩く。聖印を刻まれた武器を手にした者は十名ほど。他に、手に武器を持った民兵が数百名、広場に集まり、むごたらしい娯楽に興じていた。

どっと騎士が倒れた。その腹が裂かれ、腸が、長く歩んだ跡に垂れている。

「あーもう。あとちょっとだったのにぃ」

槍を持つ少女が悔しそうに言う。民衆がどっと笑う。中年の男が騎士を叩き、

「わしの勝ちだ。そらそら、もう少し」

別の騎士が、男の槍に追い立てられ、数歩進んで非業の呻きを零し、絶命した。同じく裂かれた腹から腸が伸び、その一端が、別の者の槍によって、地面に串刺しにされている。己の腸を引きずり出しながら歩かせられたのだ。しかも、どの騎士がより遠くまで歩け

るか競争させたらしい。何人もの騎士が倒れ、彼らの腸が、幾重にも石畳に伸びていた。
「もう生きてるのいないの？　終わっちゃった。つまんない」
「また次の街に行けばいい。お偉いさんは、ごまんといるさ」
少女と男のやり取りの間にも、快活な笑い声が民衆の間から響いてくる。掠奪した飲食物を石畳にぶちまけ、死体を踏みにじり、凄まじいまでの狂宴を繰り広げていた。
その、広場の中央へと、ジークは無言で歩んだ。
ジークの姿を認めた者たちが、その巨大な銀のシャベルに、揃って、ぽかんとなる。
「お……。なんだ、あんた？」
槍を持つ男が振り返る。その眼前で、猛然と銀のシャベルが振り下ろされた。
どん！　一帯を震撼させ、シャベルの歯が石畳に突き刺さった。そして沈黙に響く声。
「黒印騎士団──ジーク・ヴァールハイト」
相手が騎士身分であることに、男の、少女の、民衆の、目の色が変わった。
「なぜ、この騒ぎに加わった」
「なぜって……こうなったら楽しむか、楽しまされるかだろ。楽しまなきゃ損さ」
「楽しいか」
「楽しいよ！」

と答えたのは、槍をもてあそぶ少女だ。若々しい目に、ぎらぎらした光を溜めている。
そこかしこから、無邪気ともいえる賛意の声が飛び交った。
「で……あんた、わしらを楽しませに来てくれたってのかい？　それとも一緒に……」
「散れ。武器を捨てて、去る者を、追いはしない」
ジークを見る無数の眼差しに、異様な熱気がこもった。誰もが舌なめずりせんばかりでいる。目の前の哀れな犠牲者を、なぶり殺しにしようとする気配が立ちこめた。
「そうそう。名乗られたんだから、あんたを死なせる前に、わしたちも名乗っとかんと」
男が、槍を掲げ、言った。
「えー、ドラクロワ様のお導きに従う、七翼の一つ、赤翼神聖兵団——」
その声を、わいわいと賑わう声が遮った。
「騎士だ騎士だ」
「なあ、おいらにやらせてよ。おいらまだ五人しか死なせてないんだ」
仲の良さそうな四人の少年たちで、全員が聖印を刻まれた槍を持っていた。手もシャツも血で汚れ、あどけない目に、無邪気な殺意があった。
ジークは、彼らの姿に、憤怒で全身の血が沸騰する感覚を味わった。この幼き者たちと戦えるか、ジーク——少年たちの背後で、そうドラクロワが言っている気がした。

「ジーク・ヴァールハイトが解き放つ！」
烈声が上がった。眩い雷花がジークの左腕に閃き、男が、少女が、少年たちが、民兵が、一斉にどよめく。雷花がシャベルを包んで溶かし、無数の銀の雫と化しめる。
銀の雫が飛散し、中から現れた銀剣の柄を、ジークの右手が、しっかと握りしめた。
「蠍座の陣！」
ジークの言下――銀の雫が、異形の姿となって円陣を組んだ。目も鼻もないトカゲのごとき顔、鋸の歯、体は銀の鱗に覆われ、分厚い双剣を両手に握る――十六体の凄魔たち。
突如として招き出された魔兵に、民兵たちが声を上げた。
「こいつだ！　ドラクロワ様がおっしゃった、聖法庁の悪魔だ！」
「悪魔をつれた男だ！　俺たちが殺すんだ！　殺せ、殺せ！」
凄魔たちにも怯まず、民が殺気をあらわにする。たちまち凄魔たちが殺気に反応した。
円陣が展かれ、分厚い刃が、暴風雨となって民を襲った。凄魔の獣のごとき咆吼とともに、武器を持つ民の腕が、首が、宙を舞った。
「秘法士様っ！」
民が、たまらず聖槍を持つ者たちに助けを求める。男と少女が率先して凄魔に向かった。
勝手に動く槍が、凄魔の剣を受け、弾き、あまつさえ切り返す。

「ははっ！　楽しい楽しい！」
少女が笑う。すると凄魔の姿に呆然となっていた四人の少年たちが我に返り、先を競って戦場に飛び込んだ。それを見て取ったジークは、凄魔に円陣を開かせ、彼らを迎え入れた。年端もいかぬ少年たちが、殺戮の槍を手に、ジークを取り囲んだ。
「なぜだ……ドラクロワ……」
悲愴の表情が、いっときジークのおもてに、ありありと浮かんだ。
子供が戦場に売られることを止める――それがかつて剣奴だったジークの悲願だ。そのジークの思いをドラクロワが知らぬはずがない。知っていて――ジークがこの惨状を目にすることが分かっていて、民を動乱に巻き込んだ。子供たちの心に武器を握らせた。
一瞬のジークの悲痛／そして少年たちはそんなジークの思いなど知らず槍を振るう。
四つの穂先全てが、ジークの身をかすめることさえ叶わず宙を薙いだ。
直立していたジークが、瞬時に、地を滑るように身を低め、踏み込んだのだ。
少年たちの胸よりも下の位置に、ジークの燃えるような赤髪があった。
その剣光の閃きは、少年たちにとって、眼前で放たれた矢に等しかった。とても目で追える速度ではない。正確無比にして、全くの容赦を捨てた一撃に襲われ、少年たちは次々に、いったい何がどうなったのか分からぬまま、激しい痛みに、地に尻を落とした。

握りしめていたはずの聖槍が、四振りとも、がらん、と音を立てて放り出された。
慌てて、落ちた槍にすがろうとした少年たちが、一斉に呻き声を上げた。
「い、痛っ……痛い……!」
痛みは手にあった。ただ一点――それ以外、どこも傷ついてはいない。
四人全員の、左手の小指が、第二関節のすぐ上から斬り落とされていたのである。
小指を失えば、槍の使用に重大な支障をきたす。痛みに耐えて槍を握れるほど少年たちに戦士の気概があるわけではない。ジークが歩み寄ると、四人が脅えて一か所に固まった。
槍が手から離れた途端、聖印の力が心から消え、戦乱に惑う子供に戻っていた。
「か……母ちゃん、母ちゃん……」
少年の一人が、恐怖に唇を震わせながら、ぽろぽろ涙を零す。自分たちの指を斬ったジークの剣から、怖くて目が離せず、今度こそただ呆然とするしか、なすすべとてなかった。
「お前たちの母は、どこにいる……?」
少年が戸惑うように、親を捜す視線を周囲に向ける。そのとき――
海鳴りのごとき声が一帯に轟き渡った。街の裏手にいた別の集団が、騒ぎを聞きつけて雪崩れ込んできたのだ。優に今までの数倍はいる。ジークの左腕に猛然と雷花が閃いた。
「母ちゃんが、あの中にいるかも……」

少年の一人が、新たに現れた集団を見て、言った。
その声を、ジークは確かに聞いた。だが、そのまま高く左手を振りかざし、
「非業の魂よ！　土刻星の連なりの下、剛魔ダゴンとなりて我が敵の前に立て！」
その手を、石畳に叩きつけた。
容赦もなく、慈悲もなく——頭上で渦を巻く堕気が集まり、地中から迸る青い稲妻とともに怨みに満ちた死者の魂が、醜い鉄塊のごとき剛魔となって、続々と周囲に現れる。
凄魔が作る円陣の、何倍もの巨大な円陣が剛魔によって築かれ、四方へ驀進を開始した。
魔兵の咆吼に、民が恐怖に列を乱し、少年たちが言葉にならぬ泣き声を上げる。
ジークはその悲痛を聞いた。どれほどの力を自分が持とうとも、その泣き声を止めるすべがなかった。ただ敵を——暴虐に酔う民を止めるため、さらなる力で圧倒する。心を挫き、武器を捨てさせ、潰走させる。それ以外に、何の手段も方法も持たない——それが自分なのだ。だから理想を求めたのだ。争いをなくすというドラクロワの理想を——
「武器を持つ者は、皆殺しにしろ！　一切の慈悲を捨て、貪れ！」
ジークが叫んだ。魔兵たちは既にその意思を無言のうちに感じ、行動に移している。民に聞かせるための声だった。恐れをなして逃げてくれることを願って。
だが民の抵抗は異常を極めた。まるで自分の命など無いものであるかのように魔兵にた

かる。そして致命傷を負って倒れるそばから、ドラクロワの名を称え、絶息する。
ドラクロワが不死身であると信じ、自分たちも戦いに参加することで不死にしてもらえる——死んでも甦らせてもらえると狂信する者たちの異常な戦いぶりだった。
獣と呼ぶことさえはばかられる自暴自棄の戦いに、誰もが酔っていた。
「馬鹿者どもっ!!」
ついにジークが叫んだ。戦いの場で、かつてそのような無意味な罵倒を口にしたことのないジークである。それが、耐えきれずに声を放ったのだ。まさしく無念だった。
そのジークの足に、小指を斬られた少年の一人がしがみつき、泣きじゃくった。
「やめて、母ちゃんがいる！　母ちゃんを殺さないで！　やめて、やめて！」
同じとき、ジークの斜め後方から、凄まじい刃風がきた。
ジークは銀剣を跳ね上げ、首を目掛けてなぎ払われる槍を、一瞬の早業で弾いた。
かっと火花が散る。拍子に、しがみついていた少年が投げ出されて石畳に顔を打つ。
「ドラクロワ様のためにっ！　わしが悪魔の男を殺す！」
聖槍を持ったあの男だった。立て続けに突き込まれる穂先をかわしざま、ジークは頭上に剣を振りかぶり、左手を柄に添え、握りしめた。
左腕の堕気が剣身につたわって発露し、青く炎のごとく燃え盛った。

——おおっ!!
無念の思いを声に込め、剣を振り下ろした。
聖槍が素早く反応し、刃を受け止めた。耳を聾する音とともに、男の腕が、ひしゃげた。
剣撃の凄まじさに槍は耐えられても、男の腕の方が耐えられなかったのだ。
男が金切り声を上げる。そこへジークの第二撃が来た。
槍は、あくまで男の身を守るべく動いた。へし折られた腕が、槍に引っ張られる。
男の痛みとは無関係に、槍が剣を受け止めた。男の両腕がさらに脆く砕け、雑巾のようにねじれ合った。あまりの痛みに男は声もなく、脂汗を流して顔を左右に打ち振るう。そのまま槍を放すかと思ったが——男の顔に浮かんだのは、なんと恍惚とした表情だった。
「おお……痛みが消えてゆく……」
槍に込められた聖性が、男の心に染みこみ、痛みを消したのだ。しかしそれは傷を癒すのとは根本的に違う。ただ戦乱の恍惚に、痛みを忘れているのと同じだった。
「ははは！　はははは！　偉大なるドラクロワ様に、栄光あれ！」
両腕が無惨にねじれ合った状態で、男が突進してきた。
ジークは動かない。狂った笑いを上げて走る男に、三体の凄魔が踊りかかるのを、ただ黙って見ていた。男の腕は、もはや槍の動きについていかなかった。三体の凄魔の、六つ

の刃を受け止めきれず、あっという間に五体を寸断され、石畳にばらまかれた。
他にも聖槍を持つ者はいたが、みな魔兵の群に呑み込まれてゆくばかりだった。
「あ……悪魔……。この悪魔っ!!」
少年の一人が勇を奮って泣き叫ぶ。ジークが振り返ると、ひっと悲鳴を零した。
「そうだ。俺は、お前たちを殺しに来た、悪魔だ」
ゆっくりと言い聞かせるように、ジークは告げた。恐怖に凍りつく少年たちに、
「お前たちは、特別に生かしておく。俺のことを、仲間に伝えろ。たった一人の軍団に、ここにいる全員が皆殺しになったと。この俺には、慈悲も情けもないと。俺は、お前たちの、父を、母を、兄弟姉妹を、子供を、全て殺すと」
静かに、そう言った。
「ド……ドラクロワ様が……」
別の少年が、震えながら、声を振り絞る。
「ドラクロワ様が……お前なんか……殺してくれる……」
「俺が、ドラクロワを殺す」
少年たちの目に、透明な涙が膨らみ、絶望に満ちた頬を、こぼれ落ちた。
ジークは、その絶望が全ての民に伝わることを切に願った。これほどの動乱を収拾する

には、それしか、すべはない。
「いいな。今言ったことを、全て、仲間に伝えろ」
少年たちの哀れなすすり泣きの声が、返答の代わりとなった。
ジークは彼らから目を離し、戦場を見た。広場に入って来たときに見かけた、槍を持った少女の姿を捜すが、見つからない。逃げたか、あるいは魔兵に食われたか――
ふいに、ジークは少年たちと同じように、膝を屈し、泣き叫びたい衝動に駆られた。
その衝動を、歯を食いしばって胸の奥に押し込め――左腕に、雷花を迸らせた。
今なお激烈な抵抗を見せる民を、さらなる圧倒的な力で、粉砕するために。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
烈声とともに、左手を石畳に叩きつけながら――
ノヴィアが、この戦場を見ずに済んで良かったと、心のどこかで思っていた。
そして、まさに同じとき――そんな思いを粉々に打ち砕く事態がノヴィアに襲いかかっていることを、ジークが知るよしもなかった。

3

ジークと別れてから、四日目の昼過ぎであった。

この間、ノヴィアたちは馬車で移動している。
セスとダンが交代で馬を駆り、クルツがノヴィアとアリスハートとともに客席にいた。
クルツの立場はノヴィアを監視することだが、そうした素振りはほとんど見せなかった。
むしろノヴィアの働きに、聖地シャイオンと聖法庁の和解がかかっているとあって、訊かれれば何でも答えたし、聖法庁がつかんでいる情報を詳しく教えてくれた。
どうやらレオニスとドラクロワの同盟は確実らしい。当初はレオニスの独断だったが、今では聖地シャイオンの多くの廷臣たちや貴族が、そのことを承知しているようだ。
だが一方でレオニスは、表面的には聖法庁とも友好的であろうとしている。ドラクロワと聖法庁という二つの勢力の狭間で、着々と力を蓄えているのは明らかだ。
話を聞くうち、ノヴィアはいつしか、レオニスがジークと敵対したことを必然と感じるようになっていった。それはレオニスに対する怒りや悲しさを超えた——共感だった。
きっと、自分がジークを追いかけたのと同じなのだ。そうノヴィアは思う。レオニスは、ジークとドラクロワという二人の男を追いかけたかったのだ。ノヴィアとは違うかたちで。
憧れよりも強く、悔しさや敵愾心を抱きながら。二人の男に匹敵し、勝ちたかったのだ。
そのレオニスの気持ち自体を責めることは出来ない。それでは自分がジークの従士となろうとした気持ちまでをも、否定することにつながってしまう。

ただ、レオニスの暗い側面を、どうにかしたかった。その類い希なる頭脳を、暗躍や陰謀に使うのではなく、もっと純粋に、聖地を治めることに振り向けて欲しい。そしてそれこそ、ジークやドラクロワに匹敵するための最短の道であることを伝えたかった。
　まさしく――トールがレオニスに対して抱いたのと同じ思いを、ノヴィアは抱き、アリスハートやクルツに話した。それがレオニスを和解に導く道であることを。
「そうねえ。そうすればトールも、きっと安心するわよねぇ」
　アリスハートの興味は、もっぱらレオニスよりもトールに傾いていた。あの日陰者の青年が、元気にやっているか、気になるのだ。
「トールったら、ああ見えて優しいっていうか、優柔不断だから、レオニスが無茶なこと言っても、きっと黙って従っちゃうのよねぇ」
　実に鋭い指摘だが、ノヴィアは、そうと断定するほどトールの内面を知らない。
「レオニスも、逆らえなくしちゃうのよ。でもそれは、トールさんに甘えてるだけだってことを、レオニスに教えてあげなくちゃ。あまり無理を言うと、そのうちトールさんも、黙って出て行っちゃうかもしれないわ……」
「そうなったらレオニス、落ち込むだろうねぇ」
「そうね……」

ノヴィアもアリスハートも、実際にそういう事態が起こったことを知らない。

「お二人の話を聞いてると、どうもあの聖地の君主の印象が、変わってきますな」

ここ数日ですっかり敬語口調になったクルツが言う。聖法庁にとってのレオニスは、あくまで恐るべき策略の才を持つ危険な存在だ。その人間的な内面を考慮することはない。

「さすが、同じ血を分けた……」

姉弟だけはある、という言葉を、クルツは慌ててのみこんだ。

「血を分けたって？　どういうこと」

「ああ……いや。その……レオニス・ジェルミナルと、トール・ヴュラードが、従兄弟同士ということを、思い出しただけです」

「そうなのよねぇ。仲が良いのは、良いことなんだけどねぇ」

「たとえ従兄弟でも、無理なものは無理って言わないと……」

ノヴィアとアリスハートは、話をそらされたことに気づかない。クルツは密かに安堵した。

レオニスとノヴィアの血縁関係は、ジークから固く口止めされた秘事だった。

クルツは、それを他ならぬジークから告げられたのだ。

そして、レオニス自身が血縁のことを知っているかどうか不明なまま、ノヴィアに血縁について教えるべきではないとするのがジークの考えだった。もしドラクロワがノヴィア

の命を楯に、レオニスに協力を強要していたとしても血縁が理由とは限らないのである。
それより問題はノヴィアが棄てられた経緯にある。本来ならばノヴィアの方が聖地の君主となっていたかもしれないのだ。それが女子であったため、男子のレオニスの方が残された。レオニスにとってもノヴィアにとっても、闇に葬られるべき秘事である。
万が一、和解工作の最中に、血縁が理由でノヴィアが聖地の後継者争いにでも巻き込まれれば、元も子もない。そうなれば二人の意志にかかわらず、悲劇しか残されない。
そういう次第で、クルツは聖地に着き次第、その件について、ある人物と話し合う予定だった。相手は、先ほどから話題に上るトール・ヴュラードその人である。トールこそ、レオニスとノヴィアの血縁を知り、ジークと沈黙を約した人物であった。
そんなジークたちの思惑を知らぬまま、ノヴィアが聖地を目指していた、その日――
異変は突然、起こった。
最初にその異変に襲われたのは、御者席にいた、セスとダンである。
「門が閉じているな……」
セスが言った。行く手に、関門があった。それがぴったり閉じているのだ。左右は急峻の林である。馬車で迂回する道もなく、徒歩で行くにも無理がある。
仕方なく馬車を止め、セスが、門番と交渉するため御者席から降りた。

こんな真っ昼間に関門が閉ざされる理由は、戦乱以外にない。各地で起こる民の動乱に脅えた領主が、門を閉ざしたのだろう。

「おーい、門を開けてくれ！　商売にならないんだ、頼む！」

セスが声を上げるが、反応はない。仕方なく門番がいるはずの、門の脇の小屋へ行く。

「やれやれ、面倒だな。ごねるようなら聖法庁の交易証を見せてやれ」

クルツが窓から顔を出して言う。彼らは現在、聖法庁から正式に許可を得た、行商ということになっている。交易証を持った者の商売を妨げれば、領主の方が、聖法庁から咎めを受けることになる。

「分かりました」

御者席に残ったダンが、振り返って答える。

「こんなところに門を作るなんてねぇ……閉じちゃったら、みんな通れないじゃない」

アリスハートが窓の縁に座り、呆れたように言う。クルツが肩をすくめた。

「戦のときは、ここで敵を食い止めるんだ。仕方ない」

「敵を……食い止める」

ノヴィアも何気なく窓から顔を出し、門番のいる小屋の方へ目を向けた。

いつもの癖で、万里眼の力を発揮し、小屋の中を見た。途端――

「逃げて!!」
悲鳴のような声を上げながら、馬車から飛び出していた。
「え――」
セスがノヴィアを振り向きつつ、小屋から後ずさった。
刹那、小屋の扉が弾かれたように開かれ、セスの背丈を優に超える大男が飛びだし、槍を振るっていた。斧のように分厚い刃の槍だった。聖印を刻まれた槍の穂先が輝き、とてつもない鋭利さと硬さで、セスの首を刎ねた。即死だった。
「あ……」
ノヴィアは、首を失ったセスの体が、どっと仰向けに倒れるのを呆然と見た。刎ねられた首が宙を舞い、馬車のすぐ傍らを転がる。
「セス！」
ダンが叫ぶ。アリスハートとクルツが馬車から出てきて、声を上げた。
「ノヴィアあっ！」
「早く馬車に戻れ！」
大男が、ゆっくりとノヴィアに目を向ける。奇妙に、ぼんやりとした表情だった。
ノヴィアは男を見ていない。無惨に死んだセスの体を、悲しみの目で見つめていた。

「なぜ……。なぜ殺したの」
きっと眉根をしかめ、大男を睨みつける。大男は困ったように頬を掻いた。
そこへ、声が飛んだ。
「あんたが、ノヴィア・エルダーシャかい？」
頭上からだった。ノヴィアが、はっと顔を上げる。
高い門扉の上で、少年が槍を握り、立っていた。ひょいと宙に足を踏み出し、そのまま落下したかと思うと、途中で槍を門に突き刺し、速度を殺して、地に立った。
「なぜ私の名を……」
ノヴィアが問う。少年はにっと意地悪そうに唇を吊り上げ、大男と並びながら、
「間違いなさそうだぜ」
ノヴィアのさらに背後へと声をかけた。すると林から細身の青年が姿を現し、道に降りてきて馬車の後方に立った。やはりその手に、聖印を刻まれた槍を握っている。そして、ノヴィアたちをつまらなさそうに眺めて、こう言った。
「やれやれ、ようやく来ましたか。もう、死体を埋める手間はかからずに済みますね」
「埋める……」
そこで初めて、ノヴィアは自分の足下の異常に気づいた。赤黒い土だった。てっきりそ

ういう色の地面かと思っていたが、違う。これは血の色——度重なる流血の跡だ。
クルツもそれに気づいたらしい。愕然となって、突然現れた三人を見た。
「まさか、貴様ら……この門を通ろうとする者を、皆殺しに……」
「いっぱい……埋めた。林に、埋めた。ノヴィアが来るまで……みんな埋めた」
ぼそぼそと大男が言う。まるで子供のような喋り方だった。
「な……何なのぉ、この人たちぃ……」
アリスハートがノヴィアの胸元にしがみつく。少年が、にたりと嗤った。
「門番を殺してよ、お前を待ってたんだよ。ドラクロワ様の命令でな。俺たちが選ばれたんだ。お前、強いんだろ？　へえ、どんなヤツかと思ったけど、けっこう可愛いのな」
「私が……目的なのですか？」
「さっきから、そう言ってんだろうがよ」
少年が顔をしかめ、ぺっと唾を吐く。年に似合わぬ悪相で、目が異様に据わっていた。
ノヴィアの表情が厳しいものになった。ほぼ同い年であろう少年に、ひどく悪辣なものを感じていた。冷ややかな目で、重ねて訊いた。
「なぜ、私を狙うのです？」
「お前を殺してよ、復讐させるんだとよ」

「どういうこと？」
「知るかよ。てめえで考えろ」
どこまでも乱暴な口ぶりの少年に代わって、青年が声を挟んだ。
「聖地シャイオンの領主に、復讐心を抱かせるための生け贄なんだそうですよ、あなた」
クルツが、はっとなって青年を凝視する。
「なに――？　ドラクロワが、レオニスに？　どういうことだ？」
「さあ……。ドラクロワ様の深謀を計るなど畏れ多い。我々はただ、ドラクロワ様のご命令通り、そこの少女の首を斬り落とし、聖地シャイオンの領主のもとに届けるだけ」
「なぜ、ここに我々が来ることが分かった」
「ここだけじゃありませんよ。幾つもの街道の関門に秘法士が遣わされ、あなた方を待っていたんです。聖王の騎士が一人旅をしているのは分かっていたので、その従士が向かう先がどこであれ、捕まえて殺せるようにね。我々は当たりクジを引いたわけです」
「くっちゃべってないで、さっさと殺っちまえよ」
少年が苛立ったように声を上げる。
「みんな戦争やってんのに俺たちだけ、こんなところで隠れんぼだ。くそったれ」
「なぜ……あなたは、戦うのですか？」

「あ？　てめえみてえに偉そうにしてる奴らを、ぶっ殺すんだよ。こっちぁ親なし家なしだ。失うもんなんて何もねぇ。そういう人間の怖さを教えてやるよ、馬鹿」
少年とは思えぬ、荒みきった嗄れ声だった。このとき少年に対する怒りの理由を、ノヴイアは、はっきりと悟った。
「私の友達も、あなたと同じ境遇でした」
「は？」
「でも、あなたより、ずっと誇り高かった」
「なに言ってんだ？　さっさと死ね、馬鹿」
「矢が、見えます」
にわかに金の矢が放たれ、凄まじい勢いで少年の膝元に向かって飛来した。
少年は、ぽかんとなっている。その槍が素早く動き、矢を弾いた。僅かに遅れれば、脚を貫かれていたはずである。槍を握る手に衝撃が残るほどの重みと速度を持った矢だった。
「なんだ⁉　どっから矢が出た⁉」
少年が、ようやく慌てた。大男も驚いたように呆然としている。青年が叫んだ。
「幻視の力だ！　事前に教えられていたはずだ！　気を付けろ！」
「くそっ、魔女っ！　ずたずたに刻んでやるっ！」

槍を構える三人が、互いに距離を取ってノヴィアたちを取り囲む。
クルツが剣を抜き、ノヴィアの前に出ながら、小声で言った。
「……馬車へ。俺が奴らを引きつけます」
「必要ありません」
ノヴィアは凛として声を上げた。クルツがぎょっとなる。同時に——
「なんだ？」
青年が眉をひそめた。槍が勝手に、あらぬ方を向こうとしたのだ。その槍の動きを青年自身が不審がり、穂先を正面へと戻した。刹那——先ほど少年の槍に弾かれた矢が、大きく弧を描き、さらに勢いを増して、青年の右手を貫いた。
「ぎゃあっ!!」
青年の右手が槍から離れた。中途半端に槍を握る左手の甲を、
「矢が、見えます」
新たな金の矢が飛来し、見事に貫いた。聖槍が転がった。それを拾い上げようとする両手は、幻視されたままの矢に串刺しにされている。
「なんだ!?　なんなんだ!?」
少年がわめいた。大男は不思議そうに、痛みに呻く青年を見ている。

「動かないで下さい。今度は、その人の心臓に、矢が当たります」
ノヴィアは言った。アリスハートが思わずひやりとするほど、冷たい声だ。
むろん、ただの脅しである。この隙に、門を開いて逃走するつもりだった。
「うるせえ、馬鹿」
少年が嗤った。ノヴィアは目を見はった。なんと大男が、のそりと青年に歩み寄った。
「ひっ……待って……」
泣き顔になる青年に向かって、大男の槍が振るわれた。槍というより斧と呼ぶべき分厚い刃が、青年の体を斜めに真っ二つにした。即死である。
アリスハートが悲鳴を上げてノヴィアの法衣の胸元に隠れ、
「仲間なのに……。なんてことを……」
呆然となるノヴィアに、少年が嘲笑を浴びせた。
「人質になんざ、なる方が悪いんだよっ、馬ァ鹿」
嘲笑とともにノヴィアに向かって少年の槍が突き込まれた。クルツが剣で払おうとするよりも速く――その穂先を、ノヴィアの、真正の怒りがこもった目が、睨みつけた。
「矢が、い、い、見えます」
高らかな金属音とともに、槍が止まった。今度は少年が瞠目する番だった。

矢の尖端と、槍の切っ先が、針の先のような一点で、ぶつかり合って止まったのだ。
しかも矢は制止しておらず、宙に浮いたまま少年の槍を押し返してくる。
槍の穂先が僅かでもずれれば、矢は真っ直ぐ少年を貫く。それが少年にも分かった。
「う……」
と呻いたきり、少年は微動だに出来なくなった。クルツもダンも、手出しをする隙を与えられず、ただ棒立ちになっている。そしてノヴィアは、先ほどの文句を繰り返した。
「動かないで下さい。動けば、その人の心臓に、矢が当たります」
少年が愕然とした表情になる。のそりと大男が少年を向いた。
「や……やめ……。違う……俺……」
怯えた声が少年の口から零れた。大男が槍を振りかぶった。瞬間、ふっと矢が消えた。
少年の槍が自由を取り戻し、振り下ろされた大男の槍を打ち払った。だが、それだけでは止まらなかった。相手の殺意を返すように、少年の槍が勝手に、大男の右脚を貫いた。
大男が悲鳴を上げ、その槍が勝手に動き、少年の左腕を斬り飛ばした。
「や……やめなさい！」
槍はなお止まらなかった。それはノヴィアの予想を遥かに超えた殺意をあらわした。
「矢が、い、い、見えます！」

金の矢が、少年と大男の間を迅った――が、双方の槍は何の反応も示さない。
「た……助けて……っ」
少年の懇願する目が、ノヴィアを見た。その両目を、大男の槍の穂先が斬り抉った。
顔面を血みどろにした少年が泣き声を上げ、右腕に握りしめた槍が、大男の喉を裂いた。
血を吐く大男の槍が、少年の両膝を断ち割った。少年の槍が、大男の腹を抉った――
少年が泣き、大男が苦悶の声を上げる。聖槍同士の無間地獄に、クルツもダンも唖然となり、アリスハートはノヴィアの胸元の奥で恐怖に震えている。
「や……やめて！　やめて！　やめて！」
たまらず二人に駆け寄ろうとするノヴィアの肩を、慌ててクルツがつかみとめた。
「よせ！　どうにもならん！」
クルツが叫んだとき少年の首が宙を舞った。大男が、全身を引き裂かれた姿で、ノヴィアを振り返った。その口が、どっと血を吐いた。目から生気が失せ、仰向けに倒れた。
「なんてことを……なんてことを……」
ノヴィアはひざまずいて泣いた。全員が同士討ちで死んだ。しかしそれを招いたのは自分だという気持ちがあった。その気持ちを正確に察したクルツが、言った。
「あなたのせいじゃない……」

アリスハートが胸元から出てきて、ノヴィアの首筋を撫で、一緒に泣いた。
「ノヴィアは悪くないよぉ……。ノヴィアは悪くないんだよぉ……」
「……行きましょう。私が門を開きます」
ダンが、門番の小屋へと行こうとする。だがノヴィアは泣きながら立ち上がると、
「ほ……葬らないと。みんな……葬って、あげないと……」
クルツとダンが驚くのをよそに、宝杖を腰に差し、刎ねられたセスの首を拾った。
「ご……ごめんなさい……わ、私が……ちゃんと、見てれば……ご、ごめんなさい……」
子供のようにしゃくり上げながら、ノヴィアは、セスの目蓋を閉じさせた。法衣が血で汚れるのも構わず、その首を胸に抱いた。
その様子を見つめるクルツとダンの顔に、いつしか貴いものを見るような真摯な表情が浮かんだ。二人とも無言で小屋に入り、備え付けのシャベルを手に出てきた。
四人の遺体を葬り、ノヴィアたちは門の向こうへと進んだ。

4

駄目だ——ついていけない。
レティーシャとともに旅に出て四日、トールは、ついに音を上げた。

街道にいた。なだらかな道を、レティーシャは、てくてくと一定の歩調で進んでゆく。
そのすぐ後ろで、トールが、一頭の馬を引いて付き従っていた。
いつでも馬に乗れるはずのトールの方が、どこか疲れたような気配を、漂わせていた。
つい先ほどまで、どこの獣道とも知れぬ山道を進み、ようやく街道に戻ったところだった。しかも街道に出るや否や、レティーシャが選んだ道は、
(逆方向だ――)
そう確信するが、トールは何も言えないでいる。
声をかけたところで、まともに聞くレティーシャではない。彼女はトールには理解不能な確信に従って進んでいた。確信――すなわち、その兄の頭蓋骨の、指示である。
かかっ――と、ふいに頭蓋骨が歯を鳴らした。トールにはいまだに、それがレティーシャの仕業なのか、それとも本当に頭蓋骨が勝手に動いているのか判断がつかない。
「うん、兄様。分かるよ兄様」
そう言ってレティーシャは、街道脇に設けられた、大きな四角い石――どこの領国内であるかを示す標石の上に、腰を下ろしてしまった。
頭蓋骨は今、大きな布の袋に包まれ、レティーシャの首からかけられている。その頭蓋骨の膨らみがちょうどレティーシャの腹の辺りにあり、上から分厚い旅用の外套を着てい

るものだから、一見して、腹の膨らんだ、若い妊婦に見える。しかもその腹を——頭蓋骨を服の上から、優しく撫でさすっているのだから、ますますそれらしかった。

兄のものだという頭蓋骨を孕んだ、妊婦の妹か——

気がおかしくなりそうな想像を頭の隅に追いやりながら、トールも馬の手綱を片手に、レティーシャのそばに佇んだ。気を緩めず、いつ何が起こっても対応できるよう、辺りに気を配る。いったい何が起こるのか——まるで予想がつかなかった。

予想不可能——それが、レティーシャの旅の流儀なのだ。

たとえば出立して間もなく、レティーシャは道をそれて耕地へ向かっている。トールが呼び止めるが聞きもしない。するとそこに、今まさに出立する農師の一行がいた。国から国へと渡って農作を手伝い、農法を教えることで謝礼をもらい、生活する集団である。

その一行が、旅姿のレティーシャを呼び止めた。妊婦に見える腹が、農師たちの同情を買ったのだ。あっという間にレティーシャは一行の馬車に乗り、聖地を出てしまった。

大変なのはトールである。まさかレティーシャが農師の一行に便乗するとは思いもよらず、そのつもりでレティーシャは徒歩を選んだのだと本気で思った。慌てて話を合わせ、農師たちとともに国を出た。

聖地の境界を越え、レティーシャは馬車を降りた。その際に農師たちから食料を分けて

もらっている。その食料を持って、レティーシャは街道をそれて森に入った。
トールは啞然となった。そのまま進めば夜になる。夜になれば森には狼が出る。聖堂や砦などの施設がある森であれば、獣も人間の力を恐れて警戒するが、その森は手つかずだった。何の計画もなく突っ切って良い森ではない。
そうトールは主張したがレティーシャは聞きもしない。てくてくと道無き道を進むうち、ふいに焦げたような臭いがした。何と一面、焼けこげた木々が倒れている場所に出た。落雷か何かで山火事になったばかりの跡らしい。火は消えていたが、これなら獣たちは焦げた臭いを警戒して近づかない。そしてレティーシャは当然のように、そこで野営した。
しかも野営した場所のすぐそばに、偶然、泉があった。さらに驚いたことに、泉のそばで、倒木が屋根を作っていた。身を横たえるのにちょうど良い場所である。
獣は出ない。水はある。屋根さえある。火を起こしても、火事があったばかりなので森の獣たちが敏感に反応することもない。むしろ火の臭いが強まることで獣は避けて通る。
この上ない快適な場所で、トールは困り果てた。野営をする用意などなかったのだ。危険な獣がいないのはありがたいが兎や鹿さえいない。農師から食料を分けてもらったのはレティーシャだけである。トールはかろうじて持ってきた干し肉で空腹をしのいだ。
翌朝、レティーシャはまだ陽が昇らぬうちから移動を開始した。

トールが泡を食うほどの、迅速な出発である。

森を進み、洞穴に出くわした。レティーシャは無言でその洞穴に入った。トールにとっては、腰を曲げねば入れぬ低さである。いったい何があるのかと思ったが、ただの洞穴である。レティーシャはその奥の闇で、じっとうずくまった。

やがて雨が来た。洞穴にいたお陰で濡れずにいられた。天候を読んで、ここに来たのか――トールはそう解釈しようとしたが、来たのは雨ばかりではなかった。

人の気配がした。五、六人の男が、洞穴の入り口に姿を現したのだ。獣の皮をかぶり、腰に剣を吊している。猟師ではない。危険な森をねぐらとする盗賊たちである。

彼らの一人が、剣を抜いた。

「おい、そこにいることは分かってるんだ。出て来な」

理由は明白だ。外にトールの馬がつながれているからである。馬一頭しかいなければ、少人数と判断できる。よき獲物と見た盗賊たちが、寄ってきたのだ。

そして――レティーシャが声を上げた。

「おるるるうがららららぇおあぁえおぁおあ♪」

レティーシャの周囲の闇から、声とともに大量の蠅が現れ、盗賊たちに襲いかかった。

盗賊たちは中腰の姿勢のせいで逃げることもままならない。

こうなると盗賊たちの方が、罠にかかったに等しい。トールが愕然とする間に、盗賊たちが蝿にたかられた。さながら黒い炎である。全員、骨さえ残らず蝿の群に食われた。
レティーシャが立ち上がって外に出たとき、雨は上がり、朝日が射していた。
目の前には、盗賊たちの荷袋が置き去りにされている。その一つをレティーシャは何の遠慮もなく開いた。中から奪った物らしい宝石の入った袋を見つけたが、興味もなさそうに放り棄てた。そしてそれよりも、さらに素晴らしいもの――森の地図を見つけた。
盗賊たちが、森を縄張りとするために作成した地図だ。
それを手に、てくてくと森を進み始めるレティーシャへ、トールは慌てて訊いた。
「あの盗賊たちが、ここにいることを、知っていたのですか？」
レティーシャは、ただ腹を――その中の頭蓋骨を撫でさすり、言った。
「兄様、知ってるものね。兄様が未来を教えてくれるものね。ふー。ね、兄様」
未来――トールはその言葉に、めまいがする思いだった。
進むべき道も、どこでどうなるかも、全て頭蓋骨の指示によるというのか。信じがたいことだが、少なくともレティーシャが何も考えていないことは確かだった。
森から出てのちも、トールは、レティーシャの異様な道行きに翻弄され続けた。
平然と逆戻りする。横道にそれる。急にその場に座りこむ。ときおり頭蓋骨が歯を鳴ら

すや、トールが内心で立てた旅程や行く先など粉々に吹き飛ぶ。
あるときなど、夕暮れの森のまっただ中で、食料もなく立ち往生することになった。朝まで空腹に耐えるしかないとトールが覚悟を決めたとき――にわかに何かが駆け込んできた。狂奔する一頭の牝鹿だ。右へ左へ飛び跳ねたかと思うと、なんとレティーシャが座っていた、すぐ目の前の木に頭からぶつかり、倒れた。
見れば牝鹿の背に、矢が刺さっている。どうやら猟師に追われていたらしい。レティーシャは、すっくと立ち上がると、肩掛けの荷袋から、大きな肉切り包丁を取り出した。
トールが驚きから覚める間もなく、刃を振り下ろした。
「おぉ腹あがぁ空ぅいたぁあ♪」
刃が鹿の首に食い込み、引き抜くと血が噴いた。がつっ、がつっ、と音を立てて、繰り返し、包丁を振り下ろす。とどめを刺すというより、ずたずたに引き裂いているだけである。血抜きもしなければ、臓腑を抜きもしない。刃がみるみる血で染まった。
鹿が痙攣して息絶え、レティーシャが微笑んだ。ちょうどそのとき、鹿を追ってきたらしい数人の猟師たちが、木々の間に現れ――揃って、ひぃっと悲鳴を上げた。
獲物を追ってきたら、血まみれの包丁を振りかざして笑う娘と出くわしたのである。
「魔女だ！　魔女が出た！」

猟師たちは一目散に逃げ出した。後には、苦労もなく得た鹿が一頭、丸々残された。
トールは何となく情けない思いで火を焚いた。気づけばレティーシャの代わりに鹿を解体して肉を焼いていた。レティーシャは、鹿の肝臓を引っ張り出して生のまま食らっていたが、トールが焼いた肉を差し出すと、鹿の血にまみれた手で串を取った。
「あの人の指みたいに美味しいね、兄様。ふー、ふー、もう兄様」
レティーシャはそう言いながら、焼かれた肉を食った。トールの左手の指を、レティーシャの蝿が食いちぎったことへの、揶揄だろうか。だが皮肉や敵意は感じられない。
トールはややあって、レティーシャなりの冗談なのだと解釈することにした。
「光栄ですよ」
返した言葉に溜息を混じらせ、予想だにせぬ獲物の相伴に与った。
残った肉に塩をまぶして旅の食料とする間、レティーシャは泉で血を洗い、木のうろに身を押し込むと、腹に頭蓋骨を抱え、すやすや眠ってしまった。トールと大して歳が変わらぬはずなのに、レオニスよりも遥かに幼く見える寝顔だった。
今——街道の標石に座るレティーシャの姿を見ながら、トールは途方に暮れていた。
もはや毎日、遭難しているのに等しかった。困り果てた状態で、偶然、何かに助けられ

ることを期待する——それでは、ただの放浪である。

レティーシャは明日のことなど何も考えていない。旅程の計算も、食料の配分も、レオニスとの連絡についても、全く考慮していない。ただ頭蓋骨の——兄の指示に従うだけだ。食料も移動手段も、全て未来から来る。それればかりか盗賊に襲われたとしても、遥か以前に襲撃に備えている。むしろレティーシャの方が、未来から襲いかかると言っていい。

レティーシャは完全に思考を放棄し、あらゆる判断を頭蓋骨に預けきっている。これほどまでに何かに依存した人間を、トールは初めて見た。もしレティーシャが頭蓋骨を失えば——その時点で彼女は死んだに等しい。トールは、旅を続けるうちに自分まで同じ状態になるのではと空恐ろしくなった。頭蓋骨なしでは進むべき道さえ定かでなくなるのだ。

頭蓋骨が本当に未来を教えるかどうかは、この際、問題ではない——

トールはそう割り切った。そうするしか、己の意志を保つすべがなかった。

何よりの懸念は、レオニスとの連絡だ。このままでは完全に情報が途絶する。

いつどの街に辿り着けるか、何のめども立たねば密書のやり取りさえ不可能である。

ただジークを追えば良いというものではない。ドラクロワの動きも探り、それをレオニスに伝えねばならないのだ。戦局の推移さえ分からず、それを調べるべき自分が遭難寸前の放浪を続けているとは、冗談ではない。

そんな懸念を抱くうち、ふと馬のいななきが聞こえた。街道の向こう側の森から、鞍をつけた馬が現れたのである。それも軍馬だ。近辺で戦闘があり、主を失った馬が流れてきたのだろう。レティーシャはその馬に近寄り、何のためらいもなく鞍によじ登った。

馬は勝手に歩いてゆく。自分が属する砦なり聖堂なりに戻るつもりなのだ。それがどこの砦で、どの国なのか、一切不明なまま、レティーシャは馬の脚に任せている。

「あたしは、この道ね、兄様。ここから南なのね、兄様。そうなのね」

レティーシャが声を上げた。馬を寄せようとしたトールが、ふと眉をひそめた。

「兄様を綺麗にした人と、もうすぐ会えるのね。あたし一人で、会うんだよね」

「一人——」

ここで二手に分かれるということか。そう思い、トールは一瞬、ほっとなった。すぐにでも近辺の街で、レオニスと連絡を取る算段をつけねばならない。

だが——それさえも頭蓋骨の指示なのだ。そのことが嫌に気に障った。

頭蓋骨はレオニスの味方なのだろうか？　どうしても、そうは思えない。むしろレオニスをふくめた全ての人間を、未来という視点から支配しようとしているのではないか。

そんな疑念が胸をよぎったとき、レティーシャが、ちらりと碧の目をトールに向けた。

「レオニス様、あたしに言った。あたしが見たことない、レオニス様の綺麗を見せてくれ

るって言った。そうだよね兄様。兄様も、それが見たいだけだよね」
それはレティーシャなりの共感を求めた言葉だろうか。ともにレオニスのもとで働いているのだという、奇妙な仲間意識のようなものを、トールはほんのかすかに感じた。
トールは馬を止めた。
「ジークと、正面から戦う気ですか?」
何となくそんなことを訊いた。レティーシャの兄を綺麗にした人とはジークのことだ。
「兄様が教えてくれるんだよね、兄様ね」
腹の頭蓋骨をさすりながらレティーシャは言う。その間にも馬は離れてゆく。
トールはふと、ジークとレティーシャの戦いを見てみたい気になった。
最強の軍団であるジークと、未来から襲いかかるレティーシャの戦いを——
だがトールの今の使命は、そうすべきかどうか、レオニスと相談することにある。
レティーシャが、自分の行き先を——この街道の先の南部でジークとぶつかるということを告げてくれたのが、妙にありがたかった。いざというときにトールが素早くジークの動静を探れるよう、レティーシャなりに気遣ってくれたのかもしれない。
かつて何度も抹殺を決意した相手なのに——あるいは、そうだからこそか、トールは、レティーシャの健闘と生存を祈り、その小柄な姿が馬に運ばれてゆくのを見届けた。

レティーシャは手綱さえ握らぬまま、馬の歩みに任せた。
やがて馬は街道を折れ、河縁の砦へと向かっていった。それほど大きい砦ではなく、橋を守護するためのものだ。橋は今、河に架かったままになっている。それどころか砦の門も開けっ放しだった。人の気配はない。入ってすぐ鎧姿の騎士が倒れているのが見えた。
騎士には首がなかった。砦の奥から、むっと血の臭いが漂ってくる。
馬がいななき、警戒するように足を止めた。
レティーシャは、もぞもぞと鞍から降り、何の用心もせず砦の奥へ向かった。
廊下を進むと、そこは地獄絵図だった。騎士たちが体中を切断されて血まみれに倒れている。中には馬の死体もあった。生存者はいない。レティーシャは平然と死体の山を踏んづけ、厨房の方へ足を運んだ。地下の食料庫へ向かう途中で、ぴたりと立ち止まった。
間もなく、食料庫から凄まじい姿をした者が現れた。
右手に聖印を刻まれた槍を握り、空いた手でパンを食らいながら階段を登ってくる。頭から指先まで血でずぶ濡れで、こけた頬に凄惨な笑みを浮かべていた。
一人の少女――ジークが戦った、あの暴徒の一員だった少女である。
嬉々として騎士をなぶり殺していた少女が、ジークに恐れをなして逃げてのち、空腹に

耐えかね、一人で砦を襲った――が、レティーシャはそんなことは知らない。少女が階段を登り、はたと立ち止まるのを、ぼうっと焦点の定まらぬ目で見ていた。
少女の表情が険しくなった。
「なに、あんた。邪魔だよ。どかないと殺すよ」
少女のものとは思えぬ、低く掠れた声で、言った。
そしてさらに異常な――人間のものとも思えぬ唸り声が、朗々と響き渡った。
「ふんぐぐぐるるらええええがががおおん♪」
少女が――というより、その槍が危機に反応してなぎ払われた。だが現れたのは、濁流のごとき蝿の群である。レティーシャを狙った穂先は、蝿の群におしやられて宙を薙いだ。
あっという間に少女の全身に、蝿がたかった。
少女が甲高い悲鳴を上げた。その開かれた口に、黒炎のごとき蝿の群が侵入した。
内外から貪り食われ、少女の身体は、数秒と経たずに、完全に消滅した。
がらん。音を立てて槍が転がった。レティーシャは、そっと槍を持ち上げ、左右に振った。凄まじい刃風を立て、穂先が空を切る。手になじませるように何度か続けて振るう。
「ふー。兄様の言う通りね。武器が手に入ったね。兄様を綺麗にした人を、これで綺麗にするのね。ふー。楽しみね。綺麗に、綺麗に、綺麗に、兄様みたいに綺麗に、ね」

そう繰り返すレティーシャの目は、何も見ていない。たった今、自分より幼い命を奪ったことなど歯牙にもかけない。心に抱くのは、ただ一つ——兄の存在だ。

首だけになった兄を、レティーシャは、その手で掘り返したのだ。兄の首を欲しがる者たちが、そうするよりも前に。土の底から、兄を取り返した。

肉が腐って虫が湧いて嫌な臭いのする兄の首は、それでも美しかった。この世で一番、美しかった。兄の魂は、まだちゃんとそこにいて、レティーシャに微笑んでくれた。

ジーク・ヴァールハイト——

兄をそんな綺麗な姿にした男を、同じように美しくするのだ。

蠅の羽音の乱舞の中、レティーシャは嬉々として槍を振るった。

「大丈夫だよ兄様。こんな槍、心を奪われたりしないよ。あたしの心は兄様とレオニス様のものだよ。ふー。教えて兄様。あたしに教えて。どうすればいいか未来を教えて」

5

暴虐の群が進んでいた。

兵団と呼ぶには、あまりに無茶苦茶だった。闇雲に戦い、奪い、滅ぼす。味方がどれだけ死のうが気にもしない。まさに蝗か蟻かという侵攻である。

それでも統率力と士気は、どんな軍よりも高い。動乱に参加した街や村の長が、それぞれの集団を率い、各個で相談し合いながら戦っているのだ。
そしてその全てを、秘法士と呼ばれる存在が司り、部隊長の役目を果たしている。
トールはそうした構造を、すぐに読み取った。
レティーシャと別れてのち、トールの行動は機敏を極めた。レオニスと連絡を取りつつ、ドラクロワの放った動乱の様子を探り、そして即座に兵団の一員として潜入を果たした。
潜入自体は楽だった。動乱に参加したい者は、誰でも自由に参加できた。だがそれだけでは肝心の情報は得られない。兵隊蟻のように戦力の一部として消費されるだけである。
そのため、トールは非常の手段に出た。
まず、秘法士の中から、特に粗暴で一人よがりな男に目をつけた。自由に命令を聞く者たちを配下に仕立て、無関係の街や村を掠奪して回る――暴徒たちからも嫌われているような男だった。そして兵団が宿営する間に、その男が数人の配下をつれて近隣の村へ掠奪しに行くのを、ひそかに追いかけ、彼らが村へ着く前に、急襲したのである。
山道を馬で行く男たちの行く手に先回りし、にわかに攻めた。黒い鉄鞭を振るって先頭の者の首を刎ね、その首が地に落ちる前に、三人斬った。久々の暗殺であり戦闘だった。
みな、正式な戦闘訓練など受けたことのない素人の集団である。

トールは彼らを慈悲無く、討った。別に相手が粗暴だからそうしたのではない。単独で行動する分、いなくなっても誰も気に留めないことから、目を付けたのである。
またたく間に配下の者たち全員を斬り殪し、一人残った秘法士の男に、やや手こずった。
勝手に動く聖槍は、確かに、どんな素人にも達人のごとき技を与えた。
だが握り手自身が槍の動きについてゆけねば、その真価は発揮されない。
トールは、男に攻め返されるふりをしつつ、巧妙に山道から後退し、苔むした岩地へと足場を移した。男は突然の急襲に完全に頭に血が昇っている。トールが退くや、すぐさま追いかけ、槍を突き込んできた。それをかわしざま、トールは舞うように鞭を振るった。
身の毛もよだつ刃風が、嵐のごとく男を襲う。槍がその全てを受け弾く――が、拍子に男が足を滑らせ、転倒した。槍の動きに足の方がついていかなかったのだ。
男が何か言う前に、トールは男の首を刎ねた。
命乞いをされれば、手が鈍るのが分かっていた。
無事に聖槍を手に入れ、男たちの遺体を隠す間、たまらない気重さに襲われた。
(どこも戦いばっかり――)
アリスハートの悲しい声が、心の中で聞こえていた。
これは必要なことなのだと言い訳する気も起こらなかった。自分という人間が他に方法

を持っていないのだ。そのことを痛感しつつ、トールは槍を手に、兵団のもとへ戻った。

その兵団は、自分たちのことを白翼神聖兵団と名乗っていた。

秘法士同士の集まりがあり、そこでトールは、一人の女が全軍の頂点に立っていることを知った。ズルカの聖堂で、ドラクロワから最初に聖槍を授けられたという女である。

名をレギン。ドラクロワのもとで戦って死ねば、勝利の果てに不死を授けられる——そういう信仰の、中核を担う女である。戦略の才能など皆無の女だが、ドラクロワへの絶対的な信仰に従って全軍を率いる、女王蟻のような存在だった。

その女の存在を知ることが出来たのは、トールにとって重要な収穫だった。

さらに秘法士同士の会話から、二つの恐るべき情報を得た。

一つは、この白翼の兵団が真っ直ぐ聖地シャイオンを目指しているということだ。一般兵として参加しているだけでは、「どこかの豊かな国を滅ぼす」という程度の情報しか伝わってこない。トールはすぐさまこの情報をレオニスに流し、策を願った。

また一つは、秘法士たちの一部が、ドラクロワの命令で誰かを追っているらしいということだった。この「誰か」を知ったとき、トールは危うく声を上げそうになった。

(ノヴィア様が狙われている——)

いったいなぜか。トールは秘法士たちの会話から、すぐさまドラクロワの意図を読んだ。かつてトールを殺し、レオニスに復讐心を植え付けようとしたのと同じである。ただレオニスの心を揺さぶるのが目的なのだ。それにしても――なぜノヴィアは、ジークと離ればなれになったのか。

どうやらノヴィアは既に何人もの秘法士たちを撃退しているらしかった。そのため逆に、我こそはと「ノヴィア・エルダーシャ狩り」に参加したがる者が大勢いるという。

今すぐにも兵団を離れてノヴィアと――アリスハートを助けに行かねばならない。

だが一方で、このまま、この兵団を聖地に雪崩れ込ませるわけにもいかない。

何とかしなければ――

トールはただ、じっと焦りを押し殺し、レオニスの策を待った。

6

トールが、ノヴィアの危機を知ったのと同じ頃――

ジークもまた、襲撃の報告を受け取っていた。ノヴィアとともにいるクルツが、諜報院を通して知らせてきたのである。目的はレオニスに復讐心を抱かせるためらしい――

その報を読むや、ジークは苦しいまでの怒りを感じた。

ドラクロワが、レオニスとノヴィアの血縁を知っているかどうかは定かではない。知ればより確実にノヴィアを殺害させようとするかもしれない。そう思うとめまいすら覚えた。そこまで手段を選ばないのか。暴虐の限りを尽くし、いったい何を求めているのか。

「なぜだ……。ドラクロワ……」

握りしめた左拳から、血が一筋、こぼれ落ちた。怒りとともに身中の堕気が膨れあがるのを感じた。これまでノヴィアという聖性の固まりのような少女とともにいることで抑えられていた堕気が、何度かの戦闘によりジークの身を苛むほど激烈なものになっていた。

ジークは、あえて怒りを押し殺した。ノヴィアの身を案ずる気持ちも抑えねばならなかった。今はただノヴィアが生き延びて聖地にたどり着くと、信じきるしかなかった。

ジークは、諜報院からの報告書を懐に入れ、天幕を出た。

外は、広大な宿営地である。

聖法庁に属する騎士団や、聖堂の兵が陣を敷く向こうに、門をぴったり閉ざした城が見える。神聖兵団と名乗る暴徒によって奪われ、今やその牙城と化した城だった。確認できただけでも数十名の秘法士に加え、増殖器を用いて魔獣を放っているという。

とてもで鎮圧できる状態ではない。城壁のそこら中に、青い翼を描いた旗が翻るその城を眺めながら、ジークは、ひときわ大きな天幕へと入っていった。

中は喧噪の坩堝だった。
「状況は混沌としている。敵か味方か判明させるだけでも大仕事だ。迂闊に動けん」
「今、悠長に構えている場合ではない。他の暴徒がここを目指す前に片付けるべきだ」
「あの城にいた兵の惨敗を見とらんのか。聖槍に魔獣、ただの暴徒ではない」
騎士団長たち、聖堂の長たち、近隣の領主たちが、攻める攻めないの堂々巡りの議論を続けているのだ。聖王その人でも来なければ、協調など望めそうにない状態だった。
その喧噪を遠間から眺めるジークに、ふと聖堂の騎士が歩み寄り、耳打ちした。
「朝からこの調子です、聖王の騎士よ。総攻撃をかける算段など、とてもつきません。といって、このまま城を取り巻いているだけでは、いつ新手の兵団が来て、城の内外から挟み撃ちにされるか……。あなたのご意見は？」
「このままでは近隣の聖堂が、ドラクロワに呼応しかねない。そうなれば、この陣営は瓦解する。即、総攻撃だ」
「聖都も、そう判断しています。みなも分かっているのでしょう。ただ……ドラクロワがあの城にいるかもしれないと、二の足を踏んでばかりです。かつて聖法軍の枢要にまで至った男の軍略を、恐れているのですよ」
「ここにドラクロワはいない」

ジークは言った。ドラクロワは最大限の効果を狙って動乱の火を放つ。ここで籠城して動きを鈍らせるような真似はしないはずだ。その最終的な目標は聖都だが、ドラクロワがそこに向かうのは終わりのときである。まだ防げる――それが聖王の、またジークの判断だった。聖法庁とドラクロワの全面戦争はまだ未然に収束できる段階にあるのだ。

そのためにも、今いる地を、動乱の牙城とさせるわけにはいかない。

一方、ジークは聖地シャイオンに懸念を抱いていた。ノヴィアを狙われるということは、レオニスが同盟を破綻させたか？　あるいは、それさえも陽動か？

諜報院の報告では、暴徒の一派が聖地シャイオンに向かっているという。何のためか。聖地の兵力と合流するのか。それとも聖地を滅ぼす気か。あるいは――あの聖地に、ドラクロワが求める秘儀があるのかもしれない。その可能性は極めて高い。ドラクロワがレオニスと同盟を結んだのも、秘儀が目的であるかもしれないのだ。

ジークは、小さくかぶりを振って、それらの予断を頭から追い払った。

聖地シャイオンのことはノヴィアに任せたのだ。いずれノヴィアから報告が来る。そう信じるしか、今はすべがなかった。

ジークは、わめき合う者たちを置いて、天幕を出た。騎士がその後についてくる。

「増殖器の数と位置は？」

「城の東門の左右に二つ、南の城門に二つ、城の地下道中央に一つです」
「俺がそれらを潰す。後はお前たちに任せる」
騎士は咄嗟に返答できなかった。啞然としてジークを見つめ、やがて深く頭を垂れた。
「どうか我らを、勝利に導いて下さい……ジーク・ヴァールハイト」
ジークはうなずき、一人、城へと向かった。単騎による、先駆けであった。

——ずん！

大地が鳴った。城壁の上で歓呼を上げていた暴徒たちが、一斉に声を失った。眼前に、異形の兵団がいた。醜い鉄塊のごとき剛魔の群が、右腕に巨大な砲身を生やした砲魔の群が、十六体の凄魔が、剣を手に歩むジークの背後で、続々と足を揃えて近づいてくる。
「せ……聖法庁の悪魔だ!!」
「東の門だ！　増殖器を使え!!」
声が飛び交い——にわかに轟音が起こった。砲魔が一斉に砲撃を開始し、門扉が内側へと吹き飛んだのだ。魔獣たちが次々に招き出され、秘法士らとともに迎え撃とうとする。
ジークにもはや慈悲とてない。目前の敵を次々に斬り、城に入って新たな魔兵を招いた。
城内は、たちまち血と悲鳴が混沌と渦巻く、阿鼻叫喚の地獄と化した。

ノヴィアの万里眼がない分、より強大な力で眼前の敵を制圧し、確実を期さねばならない。ジークは剣を振るいながら、いっとき過去と未来を同時に思った。自分よりも遥かに若いノヴィア——未来そのもののような少女。もしドラクロワと自分とシーラの理想が達成されていたら、ノヴィアはそれを受け継ぎ、この大陸の発展に参加してくれただろうか。
そんな儚い思いが胸をよぎるのは、気弱になっているせいかもしれない。守るべき民を、逆に暴徒として倒さねばならない絶望的な戦いのせいで——そんなことを思うのだろう。
ジークは東の増殖器二つを破壊すると、素早く魔兵を南へと転進させた。街路を埋め尽くす暴徒の群を、あらん限りの無慈悲さでなぎ倒しながら、城の広場へ出た。
そこに、信じがたい光景があった。
幾つも木材が組まれ、縛り首にされた者たちが、そこら中にぶらさがっている。
逃げ遅れた城の貴族から、仲間同士の私刑の結果らしい民の姿までである。
そしてその中に、四人の少年の姿があるのを目の当たりにし——
ジークは、声もなく、動くことも出来ず、ただ息を呑んで立ちつくした。
左手の小指を切り落とされた少年たち。最初の暴徒たちとの戦いで見逃した彼らが、今、吊し首にされて、ジークが手を伸ばせば届くところに、いた。
「お……」

ジークの口から、嗄れた呻き声が零れた。そのまま膝をつきそうになり、必死に耐えた。その顔に慟哭の表情が浮かびかけ——押し殺した。

事態はおそらくこうだ。彼らはジークの言葉を守っただけなのだ。四人の少年たちは仲間のもとに帰り、ジークの恐ろしさを訴えた。そして仲間たちは、恐怖を伝染させる少年たちを、危険な分子として始末し、見せしめとして吊し首にした。

予想してしかるべき事態だった。少年たちが仲間に殺されることくらい、事前に分かっているべきだった。なのに、暴徒たちを少しでも動揺させるために、彼らを使った——

自分が、殺したのだ。

この四人の少年を、自分が殺したのだ。

心がそう叫んだ刹那、凄まじいまでの堕気が渦を巻き、ジークの身中に流れ込んだ。

魔兵たちが、一斉に、怒りの咆吼を放った。

許してくれ——心はそう叫んでいた。

だがジークの口から放たれたのは、言葉にならぬ、吶喊の声であった。その声とともに、怨みに満ちた魔兵たちが、皆殺しの悪鬼となって攻勢をかけていった。

暴徒の群は、各所で壮烈な抵抗を見せた。

死んでいった者たちに敗北の表情はなかった。むしろ至福(しふく)があった。ドラクロワのために死んだのだ。あるのは約束された不死の栄光と、永遠(えいえん)の楽土である。そういう信仰(しんこう)に満ちた者たちほど、ジークの怒りを沸騰(ふっとう)させた。逃げる者は皆無といっていい。全員が揃って、暴虐(ぼうぎゃく)と恍惚(こうこつ)のままに魔兵にたかっていった。女もいたし子供(こども)もいた。無惨(むざん)だった。
南の増殖器(ジェネレーター)一つを破壊(はかい)し、地下道への道を見つけた。地下道から各所に魔獣(バロール)を送り出していた増殖器(ジェネレーター)を巡(めぐ)って、話にもならぬ乱戦(らんせん)が起こった。いたのは老人ばかりだった。
どうやら戦場暮(ぐ)らしに慣(な)れた老兵たちらしい。定まった主君も持たず、戦いばかり求めて世を渡(わた)る、ならず者の末路のような者たちだったが、どの顔もいやになるほど誇(ほこ)らしげだった。人生の最後に、ドラクロワという、かつてない叛逆児(はんぎゃくじ)のもとで聖法庁(せいほうちょう)に大打撃を与(あた)えることが出来たのだ。嬉(うれ)しくて嬉しくて仕方がないといった顔だった。
　そしてそんな彼らを、ジークと凄魔(ギルト)が一人残らず、斬(き)り殪(たお)した。
　最後の増殖器(ジェネレーター)を破壊し、凄魔(ギルト)たちを地下道の各所に放ち、情勢を調べさせた。
　それからジークは独(ひと)り、地下道の壁(かべ)に、左手をついて身をもたせた。
　おびただしい出血のせいで、手から壁へ、幾筋(いくすじ)も血が流れてゆく。いまだ烈気が身を巡り、精神(せいしん)は昂揚(こうよう)している。そのお陰(かげ)で、泣きむせぶというような真似(まね)はせずに済(す)んだ。
　ただ、じっと歯を食いしばり——

（もう、やめてくれ——頼む……）
この無惨な蟻戦をドラクロワがやめてくれるよう懇願する気持ちを、必死に押し殺した。
懇願して聞く相手ではない。自分が絶望したところで何にもならない。この城の戦いが、出来る限り誇張されて伝わり、残りの暴徒の戦意を挫くことを祈るしかないのだ——
そんな悲痛を抱えながら、地下道の出口へと向かった、そのときである。
ジークは、地上へと続く階段の上に、誰かが立っているのを見た。
一人の娘だった。
暗がりに、長い白髪が青白く見えた。いやにあどけない顔に、無表情な碧の目。
その膨らんだ腹は、どう見ても妊婦である。
そんな娘が、聖印を刻まれた槍を手に、階段に立ってジークを見下ろしていたのだ。
ジークは思わず剣を下げ、言った。自分の烈気が、急速に静まるのが分かった。
「殺しはしない。降伏してくれ。頼む……」
ジーク自身、信じられないほど、気弱な言葉が零れた。
娘が、そっと唇を開いた。
「うぐるろろららるるぐるぐるぐる死んじゃえるぐあがぁ——————っ!!」
その口から、かつてジークが聞いたこともないような獣じみた唸り声が、朗々と迸った。

7

（そろそろか――）

トールは、他の秘法士たちとともに、蟻の群のごとき兵団を率いながら思った。

聖槍を手に入れてから六日後のことだった。

白翼神聖兵団と名乗る一派は、当初の七千から倍に近い数にまで膨れあがり、街道を西進していた。目指すは聖地シャイオンである。途中には険しい山もなく、大河もない。難所といえるものはなく、ただひたすら平地を進めば良い。士気は高く、先頭で馬に乗って悠然と歌う、槍の巫女ことレギンの声に合わせて、朗らかな合唱が響く。

さあ参いろかな
今は救くる道であるぞやな

劫掠の果てに戦死を遂げることが、救済だと歌っているようなものだった。そのような集団を防ぐべき街道の砦の兵たちは、暴徒の数に驚愕して、完全に閉じこもってしまった。

平地にあって、これだけの大群をとどめるには、さらに多数の兵を要する。そしてそれ

するこの大群には一兵として向かわせていない。聖地を見殺しにするつもりなのだ。

だけの軍勢が現れる兆候は皆無だった。聖法庁も、各所の動乱に四苦八苦し、聖地へ侵攻

もはや頼れるのはレオニスの策だけだった。

やがて——その策の全貌が現れるのを、トールは見た。

なだらかな丘の上に、先頭集団が来た途端だった。

先頭を行く者たちが、はっと息を吞んで立ち止まった。後に続く者たちが足を止め、い

ったい何があるのかと横へ横へと広がり、揃って丘の上で呆然となった。

今まで進んできたのは、荒れ地ではないものの、草藪も乏しい赤土の土地である。

それが、丘を越えた途端、輝かしい緑に潤う光景に変貌したのだ。

一面、緑野である。土は肥え、整備された水耕地が広がっている。道も整備されており、

いつでも国の一つや二つ、出来そうだった。

「ここが……聖地シャイオン？」

「馬鹿な。まだ四日はかかるはず……」

「城も街もない。ただの耕地だけだ……」

先頭の秘法士たちが困惑するのが、トールには手に取るように分かった。

ぞろぞろと先頭集団が丘を下りてゆく。近づけば近づくほどに豊かな土地であるのが分

かる。暴徒の中には、耕地が枯れて絶望し、動乱に加わった者達も多い。その彼らにしてみれば、ここがまさしく楽園に見えることだろう。
やがて、耕地のそばに小さな集落があるのを先頭集団が見つけた。掠奪の対象を見つけて足を速める彼らの前にいたのは、農師の集団であった。しかも、今まさに馬車に乗って出て行こうとしている。その一人が、暴徒の先頭に向かって声をかけた。
「お前さんがたかね、ここに住むというのは？」
「は――？」
聖槍で脅そうと思っていた先頭の秘法士が、素っ頓狂な声で聞き返した。
「わしらは、もう行く。後は、お前さん方に任せるとしよう。良い街を作っておくれ」
「待て。いったい何を言っている。お前たちは何者だ」
「わしらは聖地シャイオンのレオニス様から命じられ、ここらを開拓していた農師だ。ここに住まう者たちが来るというので、新しい土地を拓きに行くのさ。この土地は、今から、あんた方のものだ。自由にするがいいさ。何か困ったことがあれば聖地シャイオンに行って、レオニス様に頼むといい。民を、王のように豊かにしてくれる御方だ」
そう言って農師たちは続々と出発していった。誰もそれを止めない。それよりも、今、言われたことに、誰もが仰天していた。

「こ、この土地が、我々のものだと？」
「民を、王のように豊かにしてくれるとは……本当だろうか」
たちまち動揺が広まった。次々に武器を置き、地面に手を当て、草に触り、
「素晴らしい土地だ。この丘の向こうは、あんな痩せた土なのに」
「ここがドラクロワ様の仰った、楽土なのか……」
そこへ、にわかにトールが声を上げた。
「そうだ、ここが楽土だ！　この土地が我々のものになるのだ！　ここに来るために、我々は戦ってきたのだ！」
秘法士たちが、ぎょっとなった。その一瞬で、暴徒の大半が、民へ戻った。戦果で土地を失った者、痩せた土地に絶望して動乱に加わった者などが、一斉にトールに反応した。
トールは馬を降り、地面に槍を突き刺すと、さらに叫んだ。
「ドラクロワ様の盟友である、聖地シャイオンのレオニス様が、我々のために用意して下さった土地だ！　ここに我々の街を作ろう！　民を王のように豊かにするために！」
歓声が上がった。暴虐の限りを尽くして進んできた者達が、子供のように無邪気に喜び始めた。もともと彼らに明確な大義があったわけではない。生活に絶望していたところへ、目の前にドラクロワが現れ、武器を与えられ、道を示されたから、それに従った者たちが

ほとんどなのである。そこへ豊穣の地が与えられたのだ。これが戦いの終点と言われれば、喜んで受け入れる。それがこの集団の特徴でもあった。
兵をもって暴徒を止めず、豊穣をもって迎える。それがレオニスの策だった。
この一帯は、もともと疲弊した国の民を迎え、聖地シャイオンの領土を拡大するために開拓していた土地である。それを、「固い城壁」ならぬ「柔らかい壁」とし、暴徒の侵攻を防ぐことに用いたのだった。
「武器を持て！　立ち止まる者には、この私が死を与える！」
にわかに鋭い声が響いた。みなが声の主を振り返った。
「ドラクロワ様が仰った楽土は、こんなものではない！　堕落する者には死を！」
槍の巫女こと――レギンであった。白無垢に身を包み、白馬に乗り、ドラクロワから最初に聖槍を与えられたという栄誉のままに、兵団を率いてきた女。秘法士たちの集まりにも、ろくに顔を出さぬまま、ドラクロワへの信仰を歌っていたその女を、トールは初めて間近に見た。意外なほど若く、神がかったような危うい表情に満ちている。
「これは邪宗の罠である！　堕落してはならない！」
「豊かさが……堕落ですか」
トールが静かに言った。女がぎらりとした目を向けた。

「そなた、秘法士でありながら、私に口答えするか。ドラクロワ様に祈りを捧げ、最初の槍を与えられた私に逆らうことは、ドラクロワ様に逆らうことと同じ。この崇高な戦いを妨げるものは、いかなるものであろうと、この槍をもって滅ぼすのみ」

女が槍を振りかざす。刃に刻まれた聖印が輝き、みなが恐れおののいた。

「崇高に死ぬ前に、豊かさで堕落しておくのも、悪くないと思いますよ、私は」

あっさりとトールは言う。その左手を、地に刺した槍に軽く触れさせる。

女の目が、冷ややかな光を帯びた。その槍が、強い聖性を帯びる。さすがに槍の巫女の異名は伊達ではないらしい。聖性の強さだけなら自分よりも上だろうとトールは思った。

「死ね、邪宗の徒め。死んで己の愚鈍を償え」

女がトールに向かって馬を寄せた。その右手の槍が馬上から鋭く振るわれる一瞬前に、トールは、女へ槍を投げ放っていた。

まさか貴い聖槍を投げるとは――そういう非難と怒りの表情を浮かべながら、女が槍を振るった。きーん。鮮やかな音を立てて、投げられた槍の柄が真っ二つに切れた。

女の振るう槍の鋭さに、民が動揺の声を上げた。

そして同時に、トールは右手に鉄鞭を現し、その刃が目にも止まらぬ迅さで、女の右腕を切断していた。腕を振りきった隙だらけの状態である。腕でも首でも好きなところを斬

ることが出来た。あえて腕だけにしたのは、相手が女だから情けをかけたのだろうか——と、トール自身が疑問に思った。
女の槍が地面に落ちた。切断された右手首が、柄をつかんだままだ。
「うぁっ……!」
女は低く呻いただけで、叫びはしない。みるみるその白無垢の衣裳が赤く染まるが、歯を食いしばって痛みに耐え、怒りの目をトールに向けた。
「なぜ、私を殺さぬ……」
「命があるって、良いでしょう?」
かつて死を覚悟したトールの、真情のこもった問いかけだった。
女は憤怒に声もない。何人か、女に忠誠を誓っているらしい秘法士たちが、戸惑うように女の周囲に寄ってきた。女を守ろうとしつつもトールを恐れているといった感じである。
「私の槍を拾え……」
女が、きりきりと歯を軋らせながら言った。秘法士の一人が慌てて拾った槍を、女がつかんだ。切断された右手首を見つめ、それからまたトールを見た。
「必ず殺す。ドラクロワ様の栄誉に誓って殺す。堕落した貴様ら全てを……」
そう言い捨て、槍を脇に抱えて馬首を返した。

腕を失ったとは思えぬ激しさで馬を走らせる。残りの秘法士たちが慌てて後を追った。恐らく事の次第をドラクロワに報告しに行くのだろう。トールは、困ったような顔で彼らを見送った。策を完遂するには、あの女も秘法士もみな斬って棄てるのが当然なのだろうが、どうしてもそうすることが出来なかった。
出来ればもう誰も殺したくない——そんなわけにいかないことが分かっていながら、繰り返し、そう思った。自分が強くなったのか弱くなったのか、さっぱり分からない。
トールはそんな思考を頭から追い出し、馬に乗った。
「何も心配はない！　聖地シャイオンのレオニス様が守り、豊かにして下さる！」
民の動揺を鎮めるために叫びながら、トールは馬を走らせた。もう一つの使命を果たすために——ノヴィアとアリスハートを守るため、トールは駆けた。

8

城門は開かれ、もはや暴徒の抵抗はなく、城は陥落した。
「聖王の騎士よ！　いずこに！　聖王の騎士よ！」
出陣前にジークと会話をした、あの聖法庁の騎士が、戦場跡を馬で駆け巡っている。
ふと——その騎士の前に、地下道から、姿を現す者がいた。

「おお……ジークどの……！」
騎士が笑顔になるが、すぐに驚きの色を浮かべた。
「何という……。今すぐ、助けを……」
「心配ない。装備を損なっただけだ」
ジークは言った。左腕の赤籠手が無惨に砕け、血が噴き出している。黒革の鎧の胸元が斬られ、腕や脚に無数の疵痕があった。その頬にも火傷のような傷がある。
「……生存者ですか？」
ジークはうなずいた。銀のシャベルを握る右手が、さらに一人の娘を抱いていた。娘は完全に意識を失っている。その腹の膨らみは、どう見ても妊婦だった。
ジークの血まみれの左手が、聖槍を持っているのを見て、
「彼女も、暴徒の……秘法士とやらの一員ですか？」
「それを確かめる。悪いが、陣地に戻らせてもらう」
「はい。どうぞお休み下さい。あなたがいなければ我々にはなすすべもなかった」
なすすべもなかったのは、自分も同じだ——皆殺しにするしか鎮圧の手段がなかった。
そう思いつつも口には出さず、ジークは娘を抱いて、自分に与えられた天幕に戻った。
毛布に娘を横たえ、槍とシャベルを置いた。砕けた赤籠手を外すと、左腕に刻まれた聖

印から血がしたたった。あらかじめ用意しておいた薬湯を直接、左腕にかけて血を洗い、堕気を静める。そうしながら、どっと安堵感に襲われた。

——危なかった。

ジークは娘を見やった。この娘が、自分を待ち伏せていた光景を思い出すと、それだけで、ぞっと死が迫る感覚が甦ってくる。〈招く者〉の力を手にして以来、危機や苦闘は何度となく味わってきたが、死が迫ったときの痺れるような感覚は滅多にない。

それを、この娘が、もたらしたのだ。どこかでレオニスなりドラクロワなりが刺客を自分に差し向けることは予想していたが、これほどの使い手とは——

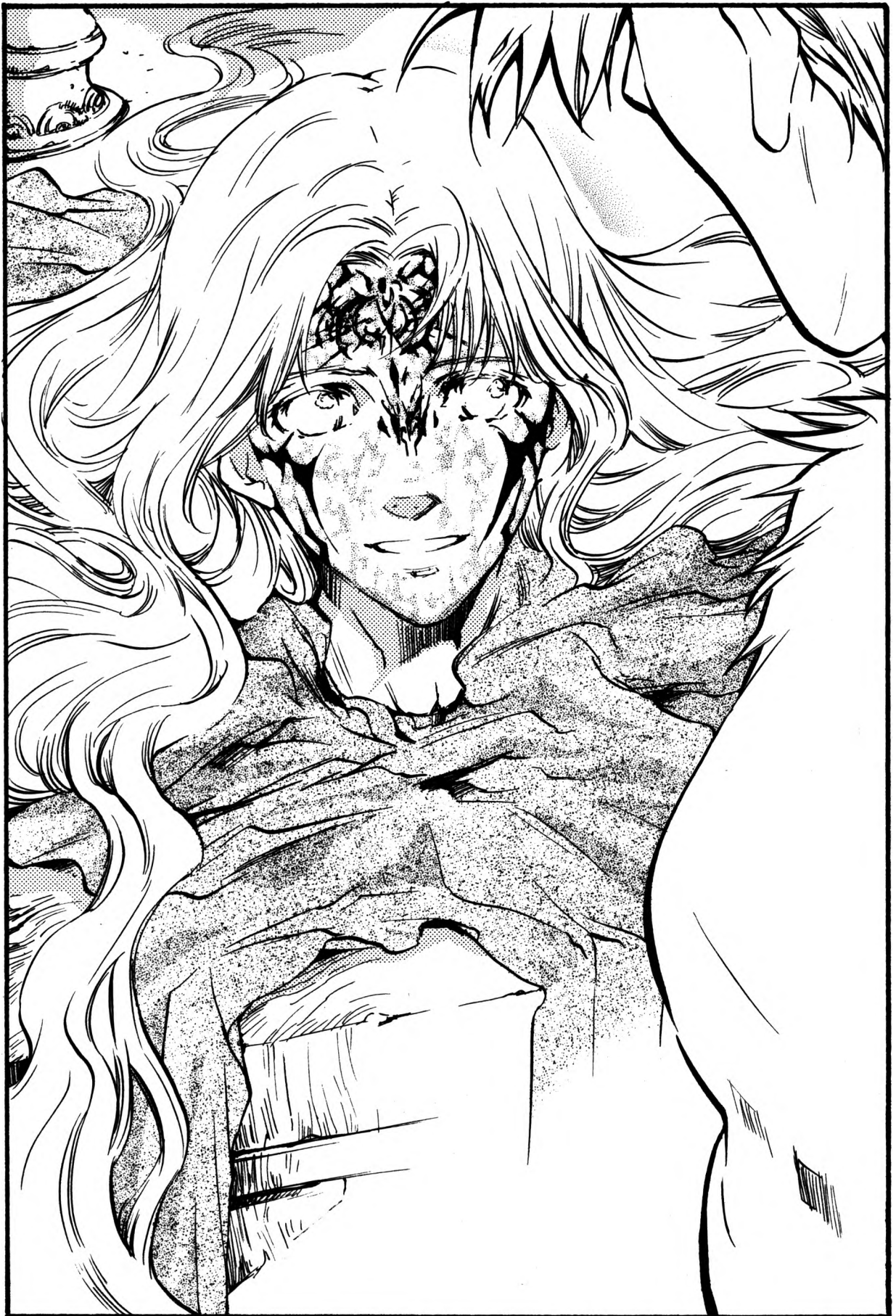
間違いなく、これまでの中で、最強の刺客であるといえた。

ジークは左腕全体に粗雑ながら布を巻き付け、止血した。

娘に歩み寄り、その外套をはだける。妊婦ではないことが、それで明らかになった。何か丸いものを袋に入れて首から吊っているのだ。ジークはその布をほどき——

中から現れた頭蓋骨に、眉をひそめた。咄嗟にそれがこの娘の力の源泉かと思ったが、違う。頭蓋骨を傍らに置いて、ジークは娘の体に触れるか触れないかのところで掌を動かしてゆき、その力の源泉を探った。すぐに分かった。外套を右腕だけ脱がし、娘の体を静かにうつぶせにさせた。襟元から肩口へと衣服をずらすと、それが明らかになった。

娘の背――首の下から肩胛骨にかけて、何らかの聖印が刻まれていたのだ。間違いなく堕界に関するものだろう。力を発揮したせいで、淡く血がにじんでいる。
ドラクロワかレオニス――どちらかが放った刺客だ。決してただの暴徒ではない。
そう確信しつつ、娘の衣服を戻して、仰向けに寝かせたとき。
突然、ジークの傍らで、気配が生じた。
（やっぱり、あなたは苦しんでいる）
気配とともに、声なき声が、ジークの脳裏に響いた。
（こうして再会したあなたは、私の予言通りの姿をしていますよ、ジーク）
ジークはその声を知っていた。久方ぶりに聞く声――二度と聞くはずがない声だった。
「馬鹿な……」
傍らに置いたはずの頭蓋骨を振り返る。そこに、頭蓋骨はなかった。
代わりに、首があった。長い白髪。整った顔立ちの男。その碧の目が、いたずらっぽくジークを見上げている。無惨な顔だった。顔中に赤く火傷でも負ったかのように見える。
全て聖印だった。顔面に――その口内に至るまで、聖印を刻まれているのだ。
本物の首のはずがない。ジークの死者の声を聞く力を通して、亡霊の姿が現れていた。
（お久しぶりですね、ジーク）

男が、にっこりと笑う。
「顔無し、ディキウス……」
微笑む亡霊のことを、ジークはそう呼んだ。
かつて――ノヴィアと出会う前に従士とした四人の、最後の一人の名であった。

第三章　聖双生児

1

レオニスは言った。
「この聖地とドラクロワは同盟関係にあった。それは父ロムルスの代からの秘事である」
王座の間に凜冽として響くその声が、居並ぶ廷臣たちや貴族たちの驚愕を呼んだ。
「それは——まことでございますか……」
廷臣の一人が思わず聞き返す。まことも何もなかった。一国の領主が、城勤めの者を全員呼び集めた上での告知である。完全な事実であることは誰もが分かっていた。だがそれでも、全員が、思わず聞き返した廷臣と同じ気持ちだった。
「それが真実だ」
レオニスは繰り返した。その堂々とした落ち着きぶりが、みなの動揺を抑える。
「かつてドラクロワにも理があった。この聖地は、彼に和平という何ものにも代え難い恩

義があった。だが今や、彼の者は、暴徒の煽動者に過ぎぬ。そのような男の心を見抜けず、同盟を父から受け継いでしまったことは、過ちであった」

それは半ば、嘘だった。レオニスの父は、ドラクロワと共謀した際、既にその暴虐を悟っていた。そしてまたレオニスも、それを知っていて同盟を批准したのだ。しかし反面、ドラクロワがここまで大陸に動乱をもたらすと予想出来なかったのも事実だった。

「ドラクロワは、いずれこの聖地をも、その毒牙にかけるつもりである」

ふとレオニスは胸の内で動悸を感じた。恐れではない。昂揚だった。

いよいよなのだ――これこそドラクロワとジークを超えるという、野心の結実なのだ。

そのための方策を整え、一世一代の策を放つ――

「聖地シャイオンの王として過ちを認め、聖法庁および各国に事情を告げる。その旨の書状を各地に送る。そして我が身を、裁きにかける。それが、こたびの決意である」

「レオニス様が……裁きにかけられる……」

廷臣たちが一様にざわめくが、レオニスは堂々とうなずいている。

「忠実なる臣下たちよ。そなたらの国を思う気持ちこそ、我が決意の源である。聖地シャイオンは、ドラクロワという危機を経て、さらに一層の発展を見るであろう。我が言葉、我が心は、全てそのためのものと知るがいい」

レオニスの断固とした言に、みな揃って恭順の意を示す。これから自分を聖法庁に裁かせようとする王を前にして、疑問一つ示さない。完全にレオニスを信じ切っていた。
「ドラクロワは聖地を戦場にするつもりである。また聖法庁は、今は動乱を鎮める力を出し惜しみ、多くの地の戦局を放棄する方針である。援軍が期待できぬ戦乱こそ、我が身に下されし裁きとなろう。どうか、この若輩の王とともに聖地を守ってくれまいか」
次々に廷臣たちが頭を垂れる。貴族たちが胸に手を当てる。みなが、聖地が戦場になると聞いても顔色一つ変えない。つい十数年前まで、戦乱のまっただ中にあった土地である。平和を獲得した今もなお、守らねば奪われることを身に染みて知る者たちであった。
どの顔にも、緊張がふつふつとみなぎっている。レオニス一人に万事を任せきって平和を享受していた者たちが、ただならぬ危機に接し、気概を取り戻したように見えた。
「必ずや聖地は守られるであろう。そのときこそ我が身の裁きが明らかとなる。臣下たちよ、我が身とこの王座の行く末こそ、聖地の未来であると知るがいい」
レオニスは、自分がひそかに決意したことが少しずつ公然となることに昂揚を覚えた。
トールがその勇気をくれた。ドラクロワやジークの鼻を明かし、自分にしか出来ないことを彼らに見せつけてやるのだという強い思いがあった。
そして、この土地を守るのだという思いが、全ての決意を後押ししていた。

（ノヴィア――）

己の決意と算段とを告げ知らせながら、レオニスはノヴィアの存在をふいに意識した。

直感といえるものがあった。来るよ、とレティーシャは言った。まさか、と思う。今は来てはいけない。聖地が騒乱の渦中に叩き込まれる、この最も危険な時期に――

そういう気持ちがある一方、もしノヴィアが来たら、と思う。そのときは甘んじてノヴィアの非難を受けよう。自分の罪を告白しよう。そしてその上で、この聖地を守ろう。ノヴィアのために。ノヴィアの故郷を守るために。この命を捧げよう。

その思いを胸に秘め――

レオニスは、王としての最後の決意を、みなの前で明らかにしていった。

2

ジークのすぐ目の前に――手を伸ばせば届く距離に、亡霊がいた。

（ありがとうございます、ジーク――）

首だけの亡霊が、言った。

（あなたに斬られることで自分の魂をこの世にとどめることが出来ました。自分が死ぬと分かり、〈招く者〉の力をお借りしたのです。再びお会い出来たことを嬉しく思います）

「俺に斬られることで……」

(はい)

亡霊が笑う。真っ白い歯が零れた。陽が暮れて天幕の中が暗くなるにつれ、その姿が明瞭になるようだった。白髪に碧の目。顔面に聖印を刻まれた無惨な首。ジークだからそのように見えていた。普通の人間には、ただの頭蓋骨にしか見えないだろう。

顔無しディキウス。そういう名の、かつてジークの従士を務めた男であった。

「お前が、この娘の手引きをしたのか」

(はい。レティーシャ・ベルゼブベス――私の妹です)

「お前の妹……」

ジークは、傍らで意識を失って横たわる娘を、見やった。

その脳裏に、つい先刻、味わったばかりの戦闘の光景が、甦っていた。

降伏してくれ――

そう声をかけるジークに対し、娘が、奇っ怪な叫びを発するや、凄まじいまでの羽音が通路に響き渡っていた。黒い小さな何かが、娘の影から濁流のごとく噴出したのである。

堕界の魔獣――! 強烈な堕気が迫ることで、かろうじてそう察した。そのときには、

もう全身を蝿に似た小さな魔獣にたかられている。視界などこの時点で完全にない。
ジークの体に満ちる堕気が、防壁となって魔獣を食い止める――が、それも数瞬だった。
無数の蝿の牙が、ジークの体を包む堕気を食い破り、その肉体に齧りついたのである。
もはや炎に呑み込まれたのと同じ状態だった。蝿は、目や鼻や口や耳にも入ってこようとする。特にその左腕に狙いが集中した。あっという間に赤籠手が食い破られ、〈招く者〉の聖印を刻まれた左腕に齧りつかれた。
目も見えず耳も聞こえない状態で、足を滑らせかけ、ぞっとなった。
ここで転べば抵抗も出来ず貪り食われるだけである。咄嗟に踏みとどまり、剣を振るった。無我夢中の剣は、しかし、すぐさま弾き返された。聖槍に弾かれたのだと手応えで分かった。蝿の濁流の中、一瞬だけ聖槍の刃が閃き――真っ直ぐ突き込まれた。
その槍をかわせたのは戦士としての本能の賜物である。剣を弾かれた時点で、反撃されることをジークの全身が判断したのだ。目が見えず、階段という足場の悪さにもかかわらず、ぎりぎりで体をひねった。それ自体、奇跡に近い。
槍がジークの鎧の胸元を斬り抉った。心臓を貫かれなかったことが不思議なほどの近接である。そしてジークの左腕に、眩いばかりの雷花が迸った。
言葉にならぬ烈声とともに、左手を振り下ろした。狙いがあったわけではない。

一か八か、相手の堕気が最も集中する部分を、捉えようとしたのである。
そしてその純粋に偶然の業が、かろうじて功を奏した。
ジークの左手は、娘の足下──その影に叩きつけられたのだった。
にわかに青白い稲妻が吹き荒れ、娘の全身を貫いた。
「きゃぁ────────ぁぁ──っ!!」
娘の絶叫が上がった。蝿の羽音の騒擾がひときわ強まり、そしてやんだ。
宙に舞い散る雷花の名残とともに、蝿の群がどろりとした液体となって消えてゆく。
娘はなおも槍を握りしめ、振りかざすが──ふっと目を回し、ぐらりと倒れた。
その小柄な体を、階段に膝をついたジークの右腕が、受け止める。
「うぐ、うぐ、うぐ……」
──危なかった。
娘と出くわしてから、僅か数秒の、決死の攻防だった。
娘が倒れてのち、ジークも膝をついたまま、しばらく疲労で動けなかった。
完全に意表を突かれた。まさかこれほどの使い手が、今の今まで身を潜めて自分を狙っていたとは思いもしなかった。それほど完全に気配を断ち、待ち伏せされていたのだ。
魔兵を招く余裕もなく、剣さえ届かなかった。もし咄嗟の反撃が功を奏さねば、たちま

ちのうちに全身を食われて死んでいた。いったい何という刺客か――

というのが、そのときのジークの思いである。

それが半ば正しく半ば間違っていたことを、ジークはディキウスを前にして、知った。

娘は息を潜めていたのではない。ただ、待っていたのだ。ジークの動きを探ることも、魔兵から身を守ることも、戦乱に巻き込まれないよう努力することも、一切せず。

ジークが来ると分かっている場所で、ただ、待っていた。ジークが体力的にも精神的にも疲れ切り、弱体化した瞬間に――娘はただ、そこにいただけなのだ。

それはまさしく、予想すら出来ない、未来からの襲撃であった。

「なぜ、俺を狙った」

ジークは、娘からディキウスの首へと目を戻し、訊いた。

(レティーシャが、あなたの力を奪えるならば、それが一番、良かった)

あっさりとディキウスは言った。

(だがやはり、あなたとその力は、分かちがたく結びついている。あなたが力を失った未来など、どこにも見つけることが出来なかった)

未来、という言葉に、ジークは、かすかな嫌悪の表情を浮かべた。

ディキウスは、それを見逃さなかった。にこっと笑って言った。
(やはり、いまだにあなたは、私を嫌っていらっしゃる)
「お前の力を……だ」
ぼそっとした口調で訂正した。
「レオニスの刺客か……」
(はい。その通りですが、ドラクロワが私を送って寄越したとは考えないのですか?)
「ドラクロワが、お前の存在を許すはずがない」
するとディキウスは、ふくんだような微笑を浮かべた。
(かつて、ドラクロワが聖法庁にいた頃——彼が率いる十万の兵団を、私が滅ぼしたから……ですか? それは誤解だと、何度となく申し上げたはずです、ジーク。私はただ予言しただけ。実際に策を弄したのは弟王の一派です)
「お前の力は、破滅しか導かない」
(たまたま破滅を予言するだけです。私は、かつて弟王に言いました。ドラクロワを滅ぼそうとすれば逆に、あなたが滅ぶと。それは的中しました。結局、弟王はドラクロワに秘儀を奪われ、命を奪われ、その勢力全てを、あなたという最強の軍団に滅ぼされてしまった。ドラクロワなど相手にせず、野心など抱かなければ、弟王は滅ばなかった。誰しも、

悪い予言が的中すれば、予言者のせいにしたがるもの。お陰で私は弟王派から憎まれ、そのせいで聖王に助けを求め、あなたの従士となるしか、生きる道がなかった)
「ならば、なぜ、俺を罠にかけた」
(罠というのは、先ほど、レティーシャを使って、あなたの力を奪おうとしたことですか？　それとも、かつて私が、あなたの従士であったときのことですか？)
「お前が、俺の従士として働いていたときのことだ」
ジークにとって、目の前の亡霊こそ、最悪の過去そのものであった。
かつてドラクロワの兵団を壊滅させるすべを教えた予言者――弟王に仕え、聖王に仕え、ジークに仕え、至るところで破滅を予言した男。
顔無しディキウス――またの名を、告死者ディキウス。
「お前は、ドラクロワを牢から出す手段があると、俺に言った」
(でも、あなたは信じなかった)
「お前は俺に、聖法庁の秘儀を盗ませようとした」
(外典イザーク書こそ、ドラクロワを解放する鍵であると申したのです、ジーク。そしてそれは、事実だった。今の大陸の状況をご覧になれば分かるはず)
「黙れ。お前は自分が秘儀を手に入れるために俺を利用しようとしただけだ。そして俺が

動かぬと分かり、今度は俺の力を奪おうとした。その予言の力で、俺を惑わした」
（その通りです、ジーク）
　にこっとディキウスの亡霊が笑う。
（外典イザーク書と、〈招く者〉の力……どちらも手に入れたかった。しかしどちらも、私が持てる力ではなかった。それが、はっきりと分かったときは、とても辛かった。このままでは、私はただ、自分の魂が刈られるのを待つだけ……それが怖かった）
「魂が刈られる……？」
（そう。私は、自分の魂が、世界の背後に存在するものに刈られることに怯えていたのですよ。それは動かせぬ未来……聖印とともに生きる全ての者に定められた運命。特に私は、このように自分の魂の奥深くにまで聖印を刻み込まれており、逃げようがないのです）
　そう告げるディキウスの顔に、じわりと血がにじんだ。顔面に刻まれた聖印が血を流し、涙のように頬をしたたった。
（あなたの〈招く者〉の力が奪えぬならば、その力に招かれるしか、なかった）
「俺の力に招かれる……？」
（私は、あなたの力によって、現世にとどめられているのです。あなたに斬られ、あなたの力の一部となることを選んだがゆえに。そうして、人の魂を刈る存在から逃げ隠れ……

じっと待ったのです。私の――全ての人間の、現世の未来が、変わるときを）
「未来が、変わる……？」
（あなたと私が、ここで再会する前から、既に未来は変わり始めている。魂を刈る存在から、人が解放される未来への、か細くも確かな流れが、生まれたのです）
「魂を刈る存在など、ただの神話だ。お前は死を恐れ、現世にしがみついているだけだ」
（力を持つ者は、ときとして、その力の真実を知らない。今のあなたが、そうだ）
「俺の力の真実を、お前が知っているというのか」
（あなたは、既に存在しないはずの死者の魂を招く――それは本来ありえなかった未来を招くということでもあるのです。過去を現世に招くことによって未来を変貌させる……。私の魂が、ここでこうして会話をしていること自体、あなたが未来を変貌させる力を持つ証しなのです――ジーク・ヴァールハイト）
「黙れ。死者の声はこれまで何度も聞いてきた。中には俺を騙そうとする死者もいる。お前は俺を利用し、支配しようとしているだけだ。死を恐れていつまでもこの世にいようとする死者ほど、俺を神のように称えて縋り寄ろうとする」
（神ではない。人が神の域に手を伸ばすための力です）
「お前がそうして死にきれぬなら、俺がこの手で、再び葬るだけだ……ディキウス」

ジークが膝を浮かしかけたとき、ふいに傍らでレティーシャが身じろぎした。
「兄様……？」
ぱちりと目を開き、バネ仕掛けのように身を起こした。ディキウスの首を——頭蓋骨を見つけるや、さっと手を伸ばし、ジークに奪われまいとするように胸に抱いた。
そうして、真っ向から、ジークを見た。無表情な目に、とろりと憎悪の光を溜め——
「むぎぎぎぎ」
ざわざわと蠅の羽音がどこからともなく響き出し、今にも唸り声を上げるかに見えた。
ジークも相手をひたと見据え、その左腕に、かすかに雷花が閃く。
（やめなさい、レティーシャ）
ディキウスの制止で、ぴたりと堕気の発揮が止まった。
凄まじいまでの堕気を、自由に制御出来るのだ。それだけでレティーシャがジークに優るとも劣らぬ堕法の使い手であることが明らかだった。
「兄様……？　なんで？　なんで止めるの兄様……」
幼女のように悲しみをあらわにするレティーシャに、ディキウスが優しく言う。
（心配いらないよ、レティーシャ。お前のお陰で、新しい未来が、流れ始めた）
レティーシャの胸に抱かれるディキウスの首が、ふと笑みを消し、ジークを見た。

（未来への扉を開く――最初の鍵が、来ました……）

「最初の鍵……？」

（聖地シャイオンこそ、今まさに変貌の渦中――あなたとドラクロワ、それぞれが持つ秘儀の、大いなる媒介となって働くでしょう）

ディキウスが微笑んだ。その直後――

せわしげな足音とともに、聖法庁の騎士が天幕に飛び込んできたのであった。

「聖王の騎士よ！　聖王様から、聖地シャイオンについての急報です！　既に全騎士団への通達が命ぜられております！」

「全軍通達？　聖地シャイオンに動きがあったか」

「はい。この動乱の最中に、何とも驚くべき事態で……どう受け止めて良いか――」

「何があった」

騎士は大きく息をつき、言った。

「レオニス・ジェルミナルが、ドラクロワとの同盟を、聖法庁に対して公開しました」

3

激しい雨が降っていた。

宿場町の建物の間を、一台の馬車が、泥を跳ね散らし、猛然と駆け抜けてゆく。
「ノヴィア・エルダーシャだ！　首を獲れ！」
「馬車を止めさせろ！　矢を射れ！」
疾走する馬車に向かって、宿場町のそこかしこから武器を持った人間が現れる。中には聖槍を振りかざし、建物の屋根から、走る馬車に飛び乗ろうとする者までいた。
その槍が、馬車の客席の屋根に突き刺さった瞬間――
「や、矢が、見えます！」
客席から凛とした声が上がった。にわかに金の矢が閃き、馬車の屋根にしがみつく男の肩を射抜く。男が悲鳴を上げて馬車から落ちた。
アリスハートがノヴィアの胸元で怯えた声を零す。
「み、み、みんなが追いかけて来るぅ……」
「くそっ！　急げ！　出口を塞がれるぞ！」
クルツが馬車に飛び乗ろうとする者を剣で斬りながら、御者台のダンに向かって叫ぶ。
ダンの返答はない。激しく叩きつける雨の中、必死に馬を走らせている。
ふいに左右の建物から、手斧を掲げた一団が現れた。馬車の進行に合わせて、次々に斧を叩き込んでくる。客席のドアが切り裂かれ、柱が砕け、屋根が風雨に剥がれた。

その雨に頰を打たれながら、ノヴィアは屹然と周囲を見回し、矢を見た。
「次の曲がり角を左に折れて下さい！　真っ直ぐ行くと捕まります！」
御者台に指示を出しながら、同時に、幾つも金の矢を放った。
手斧をかざす者たちの腕を、足を、次々に射抜き、倒した。さらに縄を投げようとする者、丸太を運んで馬車の進行を妨げようとする者の手足に、片っ端から矢を放つ。
宿場町全体が、ノヴィアを捕獲しようと狙ってくる。ドラクロワが放った暴徒に占拠されたのではない。呼応したのだ。小さな宿場町でさえ、今や動乱への参加を表明し、ドラクロワの命令とあれば何でもやってのける者達で溢れかえっていた。
ドラクロワの命令を告げるのは、秘法士たちである。聖槍を手にした老若男女が、人々を煽動し、自ら槍を振るって暴虐の限りを尽くす。
この宿場町に着くまでに三度、ノヴィアたちは襲撃を受けていた。街道で、森で、そして今のように町で、次から次へと追っ手が迫った。しかも派遣された追っ手ではなく、当地に住んでいる者達がドラクロワの命令を受け取って、自主的に手柄を立てようとノヴィアを狙うのだから、いったい誰が襲ってくるのかも分からない。
馬車はずたずたにされながらも、ようやく町を出た。後方からは馬に乗った者たちが追いすがってくる。速度で勝てるわけがない。すぐに追いつかれ、取り囲まれるのは明らか

だった。ノヴィアは辺りを見回すや、すぐさま判断し、叫んだ。
「次の分かれ道を左に進んで下さい！　何があっても、真っ直ぐ走って！」
馬車は危うく転倒するほどの勢いで、言われた通りの道を進んだ。
そして――目前に、水かさが増し、激流と化した川が現れた。
馬車は迷わずその川に向かって走り込む。そしてノヴィアが力を振り絞り、
「橋が……見えます！」
荒れ狂う川の上に、たちまち幻視の橋を具現させた。馬車の車輪が、橋に乗った。あと数瞬でも遅ければ川に突っ込んでいた。
突如として現れた橋に、躊躇していた追っ手たちが殺到した。そして馬車が対岸に着いた途端、ノヴィアはぴたりとその目を閉じ、幻視の力の発揮をやめた。
橋が消え、追っ手たちは驚愕の声を上げる間もなく、馬ともども濁流に呑まれた。
「……逃げ切った」
クルツが深々と息をつく。
馬車はしばらく進んだところで、ふいに速度を緩め、やがて止まった。
林道のど真ん中である。いつまた追っ手が来るか知れなかった。
「ダン……？　どうした？」

クルツが客席から降り、御者台に回って絶句した。
ノヴィアとアリスハートも、雨に濡れながらそれを見た。
ダンの胸に、腹に、何本もの矢が突き刺さっている。そればかりか槍で突かれた傷、剣で切られた傷まであった。その状態で、ここまで馬車を走らせてくれたのだ。
「そんな……」
ノヴィアは慌てて御者台に登った。ダンが瀕死の顔を向け、微笑んだ。
「ご無事で……良かった……」
襲撃に気をとられ、仲間の負傷を見ていなかった——そのことにノヴィアは打ちのめされた。わなわなと震える手でダンの頬に触れた。もはや死人のように冷たい頬だった。
「よくやった、ダン。よくやった」
クルツが言った。ダンは目を閉じ、かすかにノヴィアの手に触れ、
「どうか、かの聖地と、聖法庁の和解を、実現し……。セスを葬って下さって……ありがとう……。その、お心……嬉しい……」
そして息絶えた。
ノヴィアもアリスハートも、悄然として雨に打たれるばかりで、にわかに動くことも出来ずにいた。その二人に、クルツがきびきびと告げた。

「馬車を棄てましょう。馬をほどきます。乗馬はお得意か」
「私……。いえ……あまり……」
「では私が馬を駆る。お乗り下さい。二頭つれてゆくゆえ、交代で乗り継ぐ」
「彼が……私……彼が傷を負ったことさえ、気づかず……」
「それでいいのです。それが我らの役目です」
「私……」
「しっかりして下さい。彼の死を、無駄にしないで欲しい」
ノヴィアは口をつぐんだ。悲嘆を堪えてうなずき、馬をほどくのを手伝った。
アリスハートは悲しい顔で、死んだダンの頰をいつまでも撫でていた。
「せめて、彼を葬らせて下さい」
「駄目です。いつ追っ手が来るか知れません」
「ジーク様ならば、彼を放って先へは進みません」
「あなたはジークではない」
クルツの言葉に、ノヴィアは胸を突かれる思いを味わった。アリスハートがはっとなるが、やはり悲しい顔で何も言えずにいた。
「ジークのように力があるわけではない。それは、私も同じだ」

ノヴィアは何も言い返せず、ただ涙が溢れて雨と一緒に頬を流れた。力がなければ、自分のために死んだ者さえ葬れなかった。
「葬ってやりたいという、あなたの気持ちだけで、あいつは満足しているはずです」
クルツの言葉をせめてもの慰めに、ノヴィアは悄然とその場を去った。
雨に打たれっぱなしの体に、馬上の風はひどく辛い。クルツの体に回した手さえ、感覚がなくなるほど冷えてくる。雨が上がり、峠を越え、ようやく行く手に町が見えた。
「あそこに聖堂がある。助けを求めたいところだが……敵の姿は見えますか？」
「いえ……はっきりとは」
敵といっても当地の住民そのもののなのである。例の聖槍を持った者がいないかと万里眼の力を発揮するが、見つからない。
「敵の狙いはあなただ。私が行って、様子を見よう」
町の外れで、ノヴィアはアリスハートとともに馬を降りた。
馬を一頭残し、クルツが一人、町へ入ってゆく。その様子を、ノヴィアは必死に見守った。どこかに敵がいれば、すぐさま矢を放つ気でいた。
クルツは真っ直ぐ、町の小さな聖堂に行き、巡礼札を示して巡礼者であることを告げている。ノヴィアは聖堂とその周辺を隈なく見た。クルツを捕らえようとする動きはない。

だがそれでも見るのをやめない。追っ手がかかった旅の苛烈さが、たやすく安堵することをノヴィアに許さなかった。寒さと空腹に耐え、見落としはないか、探り続ける。
やがてクルツが聖堂の中に迎え入れられた。宿を用意してもらう手はずをつけているらしい。その様子をじっと見るうち、疲労で視界が霞んできた。まばたきして、いったん力の発揮をやめようとした、そのときである。
聖堂の入り口付近で、何かを見た気がした。それが何であるか、どこにあるか、咄嗟に分からなかった。分かったときには、弾かれたように動いている。
「な、なに!?　どうしたのっ!?」
町の方を不安そうに見ていたアリスハートが、慌ててノヴィアの首筋にしがみつく。
ノヴィアは馬に乗っていた。不得意ながらも馬腹を蹴って、馬を駆る。
すぐさま町の入り口を越え、聖堂の前まで来た。
「クルツさん!!」
ノヴィアの呼び声に、すぐさま聖堂からクルツが飛び出してきた。
「どうした！」
「槍です！　早く馬にっ！」
それだけですぐにクルツは理解した。聖印を刻まれた槍がどこかにあったのだ。クルツ

が素早く、ノヴィアを背後から抱くかたちで馬に飛び乗る。
そのとき既に周囲から人が集まってきていた。だが誰も武器は手にしていない。
「どうされた？　宿を求めておられたのではないのかな？」
聖堂の司祭が来て、穏やかに声をかけてくる。同じく現れた聖堂の者たちも武器はない。
クルツが何か言う間もなく、ノヴィアが声を放った。
「無駄です。あなたたちがどこに武器を隠しているか、分かっています」
司祭は目を丸くした。だがノヴィアの屹然とした表情が緩まぬのを見て、笑った。
「さすがは〈見守る者〉――こうもたやすく見抜かれるか。まあ良い、この場におびき出す手間が省けた。ここにいるのは槍を授けられた者ばかりだ。逃がしはせん」
「何のために私を狙うのです。私を殺すと脅し、レオニスを操るつもりですか」
「脅すのではなく、実際に殺すのだ。なんのためかなど知らぬ」
それが、これまでの襲撃者に共通した態度だった。理由など知らない――ただ命じられたから、手柄を求めて殺すだけ。だが、その後が、違った。
「それに、かの聖地は、ドラクロワ様との同盟を、勝手に公にしおった。ドラクロワ様の御心を損なったのだ。肉親の一人や二人、殺して当然だ」
司祭のその言葉は、ノヴィアたちを驚愕させた。

「聖地シャイオンが、ドラクロワとの同盟を公開したのか!?」
そう叫んだのはクルツである。襲撃から逃れるばかりで、聖法庁の情報を全く手に入れられずにいたのだ。そしてまた——ノヴィアも驚きに打たれていた。同盟についてではない。その後の言葉に、である。
「肉親……？」
ノヴィアの口から呆然とした声が零れる。クルツが、はっと息をのんだ。
アリスハートが、ぽかんとなって言った。
「えっ、それって……ノヴィアのこと……？」
「違います！　誤解です！」
ノヴィアが叫んだ。クルツが啞然となるほどの、断固として否定するような声音だ。
「違うか違わぬかは、我らの知ったことではない。お前の首を獲れば、ドラクロワ様より永遠の命を授けられるのだ！」
司祭はそう叫びざま、雨でぬかるんだ地面の中に手を突っ込んだ。
何かを握りしめたかと思うと、泥の中から、聖槍を引き抜いたではないか。
他の者たちも次々に、泥の中に埋めてあった槍を引き抜いてゆく。
すぐさまクルツが馬を走らせ、

「矢が、見えます！」

ノヴィアは、頭上を見上げ、力を振り絞って矢を具現した。

雨がやんだ空に、小さな金の矢の群が出現し、にわかに降り注いだ。一人一人狙っていられる状況ではない。何十何百という矢を、一斉に、無差別に降らせた。

お陰で、どの槍も勝手に動いて握り手を守ろうとし、ノヴィアたちを押しつつもうとする動きに、遅滞が生じた。走ってノヴィアを追いかけようとするのに、頭上から降り注ぐ矢を払うことを槍が優先してしまうのである。

槍は必ずしも握り手の意識に合わせて動くわけではない。握り手が槍を支配せねば、途端に齟齬をきたす。それが聖槍の弱点であることを、ノヴィアはとっくに見抜いている。

槍を自分の意志に従わせようと、無理やり押さえつけ、動きを鈍らせる者から順に、狙い澄ましてその腕や脚を、矢で射抜いた。

馬に乗って追いかけてくる者に対しては、人ではなく馬を狙った。先頭の馬が、肩口に矢を受けて転倒し、他の馬の進路を妨げる。

疲労で視界が霞み、やがて真っ暗になって何も見えなくなるまでノヴィアは矢を見続けた。やがて、飛び交う怒号が遠ざかり、ノヴィアたち一行は濡れた衣服を乾かす間もなく、町を去った。追撃をかわし、聖地シャイオンを目指して、ただ先へ進んだ。

巡礼者のための小屋にいた。
街道から外れたその小屋を、完全に陽が没する前に見つけられたのは幸運以外のなにものでもない。既に小屋に着いたとき、ノヴィアは盲目の状態に近かった。力を使いすぎた疲労で視界が霞み、目を開くことさえ苦痛だった。
クルツが火を焚き、ようやく暖をとることが出来た。乾し肉や固パンなどを湯で溶かしたものをクルツが用意してくれた。栄養をとるためだけの非常食だが、ほっと人心地がついた。緊張が緩み、たちまち眠気が襲う。アリスハートなどは、とっくにノヴィアの胸元でうたた寝をしていた。
「今、湯浴みの用意をしている。体を温めてから、眠るといい。疲れたままでは追っ手がかかっても逃げられない。万が一、敵が来ないか、俺が見張っていよう」
自身も疲労の極みにあるだろうに、クルツはそういってくれた。そのクルツに深く感謝しながら、ノヴィアはしいて眠気を堪え、訊いた。
「レオニスがドラクロワとの同盟を公にしたというのは……どういうことでしょう?」
「分からない……。ただ、戦局がさらに混沌とすることは間違いない。あの聖地がドラクロワと組んで、聖法庁に対し戦いを挑むか……。あるいは聖地とドラクロワと聖法庁の三

つどもえの戦いになるのか……」
「どちらにせよ、レオニスは……戦うことを選んだのですね」
「そうかもしれん……」
「遅かったのでしょうか……私は」
ノヴィアは霞む目をしばたたかせながら、ぽつりと言った。
「まだそうとは限らない。あの聖地はまだ表立って兵を動かしていないし、聖法庁に対しても宣戦布告したわけではない。ただ、ドラクロワとの同盟を明かしただけだ。もしかすると、聖法庁とドラクロワを和解させようとしている可能性もある」
その可能性は、ひどくはかなくノヴィアには思えた。だが敢えて、うなずいた。クルツが励ましてくれているのが分かった。それだけノヴィアの働きに期待しているのだ。
ノヴィアがレオニスに和平の道を説くことが出来れば――豊穣の富を誇る土地が、その国力を発揮して戦いを激化させることを防ぐことが出来るのだ。
「ありがとうございます……。少しでも弱気になった私が、間違っていました」
「……無理もない。これほど、どの土地でも命を狙われればな。関門ばかりか聖堂まで敵に寝返るのが当然とあっては、俺でさえ、聖法庁が滅んだ気にさえなる」
「なぜ、私の命を……そうまで狙うのでしょう」

「それは……」
「あなたは……何か、知っているのですか、クルツ」
霞んだままの目で暖炉の炎を見つめながら、ノヴィアは言った。どこか言葉だけが勝手に口をついて出ているような、妙に現実感の伴わない感覚があった。心が体から遠く離れて行くような――何もかもが夢幻の中に紛れ込んでしまうような感覚。
その感覚をどこかで味わったことがあるのを、ノヴィアはふと思い出していた。
「俺が知っていることは、既に、あなたも知っている……ノヴィア・エルダーシャ」
クルツは言った。静かに、慰めるような優しい口調だった。
「私が……知っている……？　どういうことですか？」
「俺にも分からない。ただ、ジークは……あなたは既に全てを知っていると言っていた。知っていて、自ら、心の奥に真実を封じ込めているのだと……。あえて忘却され、闇に葬られた真実を、他者が暴いてはならないと……」
「私が……心に封じ込めた……」
ふいにノヴィアは自分の手足が震えていることに気づいた。夢幻に落ち込む感覚――たまらない恐れと寂しさ。それはいつ、どこでだったか。
「もし、あなたが惑うときがあれば、ある言葉を伝えるよう、ジークから言われている」

「ある言葉……？」
「全てを疑え――と」
ノヴィアは息をのんだ。先ほどからしきりに思い出す不思議な感覚のわけが、急に胸に迫る。そして霞む目の奥で、霧に閉ざされた、どこかの城塞都市の光景が、甦った。
忘却の甘い香り。そう。忘れさせてくれる。寂しさ。自分が誰であるか。名もないまま。棄てられた――血が染みついた書状。それを読む自分――
「私……っ」
思わず宙を手探りし、その場から逃げ出すように腰を浮かしかけた。
激しい動悸がした。苦しさのあまり胸に手を当て――そこにいる存在に触れていた。
「……ん？　どしたの、ノヴィアぁ……？」
アリスハートの声が、途端にノヴィアの心を落ち着かせた。その小さな存在の温もりが、失われそうになった現実感を取り戻させてくれる。
「な……なんでもないの。急に……自分が、誰だか、分からなくなったみたいに……」
「……ふぇ？　ノヴィアはノヴィアだよ？」
「そうね……。そうよね……」
「ノヴィアぁ……大丈夫？」

「大丈夫。ありがとう……アリスハート。あなたがいてくれて……本当に嬉しい」
「どしたの急にぃ」
「少し……寂しい気持ちを、思い出しただけ」
「ふぅん……」
ノヴィアは微笑み、そして目を閉じたまま、気配を探ってクルツを振り返った。
「もし……私の中に、葬られた真実があるなら、それを抱いて、歩みます。いつか暴かれるなら……自分の手で、その真実を受け止められるように。今は、レオニスに会うことだけを考えます。レオニスに会って、和平を選んでもらえるよう、この身を尽くします」
静かにノヴィアは言った。自分自身、何かと向き合おうとするようでもあり、恐ろしくて目を背けているようでもあった。いずれにせよ、全てが自分の中にあるのだ。ならば、このまま真っ直ぐ進むだけだった。それ以外に、もはや道はなかった。
「必ずや、あなたを無事、聖地に送り届けよう。たとえ、この命に替えても。それは、聖王様の命令ではなく、俺自身の気持ちだ。誰もが戦火を戦火で迎えるしかない今、あなたが果たそうとしている働きには、それだけの価値がある」
クルツは言った。それが掛け値のない真実であることを、ノヴィアは間もなく知った。

巡礼者のための小屋で無事に一夜を明かし、ノヴィアたちは街道に出た。
度重なる襲撃のため、大きく進路がずれてしまっていた。それを修正するためにも街道を進む必要があった。人目につきやすい危険はあったが、たとえ安全を図って迂回したところで、どこに敵がいるとも知れない。真っ直ぐ進むことが良策だった。
丸二日、何の襲撃も受けず、進むことが出来た。用心して宿場町にはクルツしか入らなかった。町で食料を手に入れ、巡礼者のための小屋や、山際の祠で夜露をしのいだ。
疲労した馬を、宿場町で替えた。街道を進み、森の道へ入った。その森を越えれば、聖地シャイオンの領土に差し掛かるというところにまで、ようやく迫ったとき。
異変は起こった。
いきなり馬が痙攣し、泡を吹き始めたのである。クルツとノヴィアが慌てて下馬し、何ごとかと調べようとする間にも、口から吐く泡に、血が混じり始めた。
「毒か……」
クルツの言葉とともに、馬は膝を屈して倒れ、息絶えた。
「まずい……逃げるぞ！」
クルツとノヴィアがともに急いでその場を離れる。道を外れ、森の中へ入った。
「な、なに、どうしたのっ⁉」

アリスハートが慌ててノヴィアの肩にしがみつく。クルツが答えて言った。
「毒を飲ませた馬を渡された。罠だ」
宿場町で馬を替えたとき、既に敵に見つかっていたのだ。すぐに襲って来なかったのは、これまで何度となく撃退してきたノヴィアの力を警戒してのことだろう。
だから遅効性の毒を飲ませた馬を渡し、道程の途上で、移動手段を失うよう仕向けた。
後は、馬が死ぬ頃合いを見計らって、大勢で追いかければいい。結果的に包囲するのと同じ状態になる。そしてノヴィアの万里眼が、早速、聖槍をかざす者たちを筆頭にして迫る集団を捉えた。一つや二つではない。街道から森へと、蟻の群のごとく追ってくる。
「道の向こうから、槍を持った人たちが来ます！　東からも……！　こっちです！」
ノヴィアが道を指示し、下藪の密生する森を走り抜ける。
間もなく遠くで敵が呼び合う声が聞こえた。おそらく死んだ馬が発見されたのだ。近辺にノヴィアたちがいることが明らかになれば、隠れて追うまでもない。
大勢の者が横一列になって前進する——山狩りだった。
「聖地のそばに、これほどドラクロワの勢力が浸透しているとは——」
走りながらクルツが呻くように言う。ノヴィアは一瞬、ドラクロワが聖地を支配しているのではという恐ろしい思いに駆られた。その思いを振り払い、必死に走った。

森を西へと進み、一番手薄なところから包囲を突破しようとする。何度となくノヴィアが敵の動きを見て取り、身を伏せ、素早く走り、追っ手をかわした。
だが――やがて人の壁に突き当たった。ずらりと武器を手にした者たちが並んで立っているさまをノヴィアの万里眼がとらえた。迂回しようとすれば、森を移動する別の集団とぶつかることになる。獲物が追い込まれるのを待っているその集団を、藪から覗き見て、
「奇襲しかない――」
クルツが剣を抜いた。包囲を逃れることがかなわないなら、一角を崩して突破するしかなかった。だがその瞬間、一帯の敵が一挙にこちらへ向かってくることになる。
「馬を奪う」
聖槍を持った男が一人、馬に乗っていた。他の者は徒歩である。他にも馬に乗った者が来る前に、ノヴィアたちから逆に襲撃を仕掛け、馬を奪って逃げる――
ノヴィアとクルツは、素早く襲撃の算段を練った。一か八かの選択とは言え、今はまだノヴィアたちの方が、先に相手の存在に気づいた分、有利だった。しかしそれも時間が経てば危うい。隠れていれば不利になる。決めたならば即座に動かねばならない。
「よろしいか」
ノヴィアは遅滞なくうなずいた。アリスハートが、ごくっと緊張で喉を鳴らす。

そろそろと草をかき分け、馬上の男の方へ移動する。十五歩ほどの距離が限界だった。それ以上近づけば、たちまち気づかれる。さらにクルツが横へ移動し、やがてノヴィアを振り返って、短くうなずいてみせた。
「矢が……見えます」
低い呟きとともに、幻視の矢が、真上へと放たれた。枝や葉を避け、全く音を立てず、ただ鋭く空を切り、頭上の高みに至るや、下方へとにわかに迅った。
馬上の男の槍が、ふいに反応し、動いた。
「なんだ!?」
男が叫ぶと同時に、槍が勝手に、頭上から迫り来る矢を弾いた。
他の者たちが一斉に振り返る。その瞬間、クルツが藪から飛びだし、
「うおおおお!!」
凄まじい怒号とともに馬上の男に迫った。男が慌てて槍をクルツに向け——その穂先が違う方を向こうとした。槍の動きが理解できず、引き戻そうとする男の肩を、矢が貫いた。
ぎゃっと喚いて身をよじる男に、クルツがつかみかかった。馬上から引きずり下ろし、槍を振るおうとする腕を踏みつけ、胸に剣を突き込んだ。
そのときにはノヴィアも走り寄り、クルツに迫る者たちの手足を次々に射抜いている。

「早く馬に！」
クルツが馬の手綱をつかんで叫ぶ。ノヴィアが慌てて馬に乗った。そのとき――
「いたぞっ！」
別の一団が現れ、どこからともなく射られた矢が、クルツの背に突き刺さった。
「クルツ！」
ノヴィアが叫ぶ。そこへ、なんと新たに馬に乗る男が、槍をふりかざし、迫った。
「行けっ！」
クルツは一切、逡巡しなかった。手綱をノヴィアに向かって放り、馬の後ろ足の付け根を、掌で強く叩いた。馬がノヴィアを乗せて駆け出した。
ノヴィアがクルツを呼ぶ声が、悲鳴のように森に響く。クルツは先ほど倒した男の手から聖槍をもぎ取ると、それをかざして猛然と叫んだ。
「行けぇーっ！　ノヴィア・エルダーシャ！　生きてその使命を果たせっ！」
叫びながら、新たに現れた馬へ、向かっていった。
槍と槍がぶつかり合う熾烈な音が爆ぜ、森にこだました。
ノヴィアは必死に手綱を握って馬にしがみつき、泣きながら、その音を聞いた。
クルツは大声で叫びながら槍を振るい続けた。馬に乗った相手を倒し、次々に敵を斬る

クルツに、間もなく他の槍を持った者たちが殺到した。クルツは前後左右から槍に襲われ、ずたずたになりながらもさらに何人か斬り倒してのち、首を刎ねられた。
かろうじてノヴィアが振り返ったとき、大勢の者がクルツの遺体に向かって、惨たらしく槍や剣を振るうさまが見えていた。
ノヴィアは嗚咽をこらえ、悲痛に震える手を握りしめ、前を見た。
聖地シャイオンに向かって、ただひたすら、進んでいった。

4

街道を徒歩で行くジークの後を、一人の娘が、とぼとぼと追いかけていた。
レティーシャである。最初に出くわしたときと同じだった。旅用の外套を腹に頭蓋骨を抱き、まるで若い妊婦のようだ。両手に聖槍を握り、次の戦場へ赴くジークを無言で追い続けていた。ジークが立ち止まれば、自分も止まる。進めば、同じように進む。
「どこまでついて来る気だ」
ジークが振り返って訊いても答えない。ただ、虚ろな目に、奇妙な悲しさをたたえてジークを見つめるだけである。代わりに、
（聖地シャイオンこそ渦中――なぜ、かの地に行かないのです？）

ジークのすぐ足下で、ディキウスの亡霊が声をかける。
この亡霊は、何も頭蓋骨にだけ出現するわけではなかった。レティーシャの力が及ぶ範囲であれば、どこにでも自由に現われることが出来た。
ジークはディキウスを無視し、レティーシャに背を向けて歩を進めた。
しばらく行くと、道の真ん中にディキウスがいて、またぞろ声をかけてくる。
(聖王の命令ですか？　あなたの今の従士が、聖地で危機に瀕しているとしたら？　それでも聖地へは行かないのですか？)
その言葉に、ジークの眉が僅かにしかめられる。だが何も言わず、ディキウスの顔面へと足を運んだ。踏みつける一瞬前に、ディキウスの顔は消えている。
レオニスが、ドラクロワとの同盟を公開して既に数日が経過していた。
その報は各国に衝撃をもたらしたが、すぐにそれは困惑に変わった。レオニスの意図が誰も分からないのである。ただ同盟を公開しただけで、ドラクロワと共闘して聖法庁を倒すというのでもない。ドラクロワとの同盟を破棄して聖法庁に帰順するでもない。
考えられるのはレオニスが独自の勢力としてドラクロワと聖法庁に対し、三つどもえの戦いを挑むことだが、聖地シャイオンは防備を固めるだけで打って出る気配はないという。
対応を迫られたのは聖法庁である。秘儀を盗んで逃亡を続けるドラクロワと同盟したと

いう時点で、聖法庁にとってレオニスは逆賊であり罪人だった。そのレオニスを放置していては、他国の忠誠を保つこともままならない。

よって、この動乱広がる今の時期に、わざわざ軍を聖地シャイオンに派遣せねばならなくなった。レオニスの真意を質すとともに、いざとなれば捕らえる必要があるからである。

この状況だけ見れば、レオニスはドラクロワを助けているようにも見える。

一方で、ジークは、ドラクロワの手勢がノヴィアを狙っているとの報告を受けている。目的はレオニスに復讐心を抱かせることだという。政治的には、まるで意味不明である。

ドラクロワが聖法庁から盗み出した秘儀が、どう関わっているかも分からない。

全てがつながっているのか、それとも無関係の出来事が幾つも起こっているのか――それすら判明していない。そういう状況で、ジークが聖地シャイオンへ行けるわけがない。

聖王はあくまで、各地の動乱の背後にいるドラクロワ追討をジークに命じている。

もし聖地の動きに何か意味があるなら――ノヴィアが、それを報告してくるはずだ。

それが、今のジークに出来る判断の限界だった。

（レオニスの意図は、ご自分の命と引き替えに聖法庁を動かし、あなたを呼応させることにあるのではないですか、ジーク・ヴァールハイト？）

ディキウスは繰り返し現れ、囁いてくる。

(過去や現在からは分からないことも、未来から見れば全てが分かる――私なら、あなたに道を示してあげられます。どうか、お聞き下さい。これまで何度、渦中に達せず、ドラクロワを取り逃がしてきたのですか？　今度もそうするのですか？)

ジークはあくまでその言葉を聞き流している。

やがて街道を折れ、山道を少し進んだところにある砦へと向かった。

砦の騎士たちはジークの姿をみとめるや、すぐに門を開いて迎え入れた。

レティーシャは、離れたところで、じっと門が閉じるのを見つめている。

「ねえ、なんで、兄様？　あたしには、あの人を殺せないよ兄様。あたしの蠅だけじゃ無理だよ兄様。一緒にあの人を綺麗にするんじゃなかったの兄様。どうすればいいの」

かかっ――と頭蓋骨が歯を鳴らす音が、レティーシャの腹の上で響く。

「……兄様の知らない未来なんて、あたし、やだよ」

レティーシャの碧の目に、ふっくらと涙が浮かび、こぼれ落ちた。

「あたし一人じゃ歩けないよ兄様。未来が分からないなんて怖いよ兄様。あたしだけじゃ、きっと間違えるよ。何も正しいことなんか出来ないよ。未来を教えてよ兄様」

頭蓋骨が歯を鳴らす。レティーシャは幼女のように泣いた。

「あの人を今、殺したら……兄様、消えてしまうのね。そうなのね、兄様。あの人に会い

たかったのね。兄様を綺麗にしたあの人のことが、あたしより大事なのね。あたしはそれでも良いよ。兄様がいなくなるより、ずっと良いよ。うん。分かるよ兄様。でもね……あたし、ずっと……あの人を綺麗にしたかったよ。レオニス様も……そうだよ」

レティーシャは、ようやく泣くのをやめ、悲しげにジークの去った砦を見上げた。

「レオニス様……きっと、がっかりするよ……。そう思うと、とっても悲しいよ。どうしてだろ……。ねえ、兄様……」

砦の門が開き、騎士団が縦隊をなして出てきた。一陣となって戦地に向かう騎士たちの間に、一台の馬車があった。その客席に、ジークが乗っている。

ジークの目が、ちらりと窓外を向いた。

ぽつねんと道に立つレティーシャと、ジークの目が、僅かの間、視線を交わし——

すぐに、お互いが見えなくなった。

ジークはしいてディキウスの存在を頭から追いやった。ディキウスは人を惑わすことにかけては、恐るべき力を持った存在である。正しい予言なのか偽りであるのか、見抜くすべはない。一度でも信じれば、もはやディキウスの言葉から逃れることは出来なくなる。

まさか亡霊となって生き延びるとは——

自分の未来を知るからこその選択であろう。平然と命を棄て、しかもジークを利用し、己を殺させた。それも何かのために命を犠牲にするのでもなく、ただ自分だけのために。
ジークにとって、これほど虫酸の走る相手はいない。
やがて分かれ道に差し掛かり、ジークを乗せた馬車は、騎士たちとは違う道を進んだ。
ジーク一人が、遊撃の軍となって動くためである。
街道から森へ入り、巡礼路を辿って山を越えた。夕暮れになって、馬車は巡礼者のための小屋の前に到着した。そこでジークは、真に単独となった。
馬車はもと来た道を戻り、ジークは一人、小屋に入った。
途端――
ジークの眉間に、怒りと不快の皺が寄った。
小屋の中に、レティーシャが、いた。部屋の隅で膝を抱え、聖槍を脇に置き、どこで手に入れたのか、ぼくぼくとパンを食いつつ、入ってきたジークに虚ろな目を向けている。
いったいどうやって、ここに来ると分かったのか――
そもそもなぜ、砦を先に出た自分より早く、ここに辿り着けたのか――
危うく口をついて出そうになる質問を呑み込み、ジークはレティーシャを無視して小屋に入った。荷を下ろし、黙々と宿泊の用意をする。レティーシャに敵意がないことは分か

っていた。敵意があれば、小屋に入った瞬間に襲撃されている。

ディキウスが話しかけてくるかと思ったが、現れる気配はない。

ジークは火を焚き、湯を沸かした。部屋の隅で人形のように座ったままのレティーシャには声も掛けず、黙々と食事をし、軍図を広げて自分の行動の算段をつける。

始終、レティーシャのどこに焦点を当てているのか分からぬ目が、ぼんやりとジークを見ていた。それでも、ジークは小屋に入ったときに目を合わせて以来、相手を見もしない。それどころか荷物を置きっぱなしにして湯浴みさえしている。徹底しての無視であった。

夜が降りて、ふいにレティーシャが動きを見せた。

「ぷあ」

奇妙な鳴き声を上げたかと思うと、両手を大きく上げ、伸びをしたのである。

どうやら、ただの欠伸らしかった。そのまま目尻をこすりながら椅子を降りると、てくてく歩いて布で仕切られた寝所に行き、もぞもぞとベッドに入り込んで、寝てしまった。

レティーシャが仕切り布の向こうに消え、ようやくジークの目がそちらへ向けられた。

(哀れな娘だと思いますか?)

唐突に――ディキウスの首がテーブルの上に現れた。

広げられた軍図のすぐ向こうで、まるで置物のようにジークを見つめている。

「お前の力を頼れば、どうなるか、よく分かる」

ぼそりと――先の戦地を去って以来、初めて、ジークは声を返していた。

（私はただ……妹に幸福になって欲しかっただけなのです。不幸を取り除いてやりたかった。そのせいで選択する意志を、妹からどんどん奪ってしまった）

「何が幸福で、何が不幸か、誰かに決められれば、意志を失う」

（その通りです。しかし私は、妹に未来を教えることを、どうしても止められなかった。あなたが、剣を棄てようと志してなお、剣を握り続けているようにね。目の前に戦乱があればあなたは、それを止めようとして戦う。同じなのですよ。未来が分かるから、それを教えることで少しでも相手を苦しみから遠ざけてやりたくなる）

「そうしてお前は、多くの者を利用し、滅ぼしてきた」

（私は、ただ知りたかったのです。この力が私に備わったことの意義を。私も妹も、一族の繁栄のため、弟王が復活させた堕界の聖印の秘儀をその身に受けさせられました。その一族も既に滅び、残されたのは力ばかり。ならばその力の由縁を知りたかった。そして、その力の根源に、魂を刈る存在があることを知った――）

「どういう理由であれ、お前に利用される気はない。妹とともに去れ」

（あなたは、もし最善の望みが、最悪の結果を招くとしても、それでも希望を失わない人

だ。あの四人の少年が吊し首になっても、あなたは剣を棄てなかった)
じわりと怒りの気配がジークの総身に満ちた。
「これ以上まとわりつくなら、お前をここで完全に葬ろう」
(その前に一つだけ、聞かせて下さい。未来とは、何でしょうか?)
「興味がない。俺には必要のない考えだ」
(必要はないが、あなたに関わる考えですよ。あなたは常に未来をつかもうとしている。あるとき、ある場所にいるということ——それが未来の正体です。私なら、あなたに、きたるべきとき、行くべき場所を、教えてあげられる)
「いらん。俺は俺の意志で動く」
(今のままでは、あなたはただ、願うだけ。あなたが望む時間と場所へ到達するためには、願うだけでは足らない。あなたは知らねばならない。あなたとあなたに関わる者たちが、歯車のように互いの運命の輪を回していることを。秘儀が進むには、あなたとドラクロワだけでは、足らなかった。もう一つの歯車の名は……シーラ・リヴィエール)
ジークの怒りの目が、ディキウスを見据えた。だがディキウスの微笑みは揺らがない。
(その魂の聖性を完成させる者こそ、レオニス・ジェルミナル。そしてレオニス・ジェルミナルを導くのが……万里眼の使い手たるノヴィア・エルダーシャ——)

「何が狙いだ。そうまでして俺を操って、何になる」
(操るのではありません。あなたに希望を託したいのです)
「希望だと……？」
(私の妹も、私やあなたと同じように、その身に聖印を刻まれている。魂を刈る存在から逃れるすべは、まだ、どこにもない。あるとすれば、それはまだ到来せぬ未来にある。そしてその未来は、あなたとあなたの力の向かう先にあるのです……ジーク)
「魂を刈る存在……本当にそんな存在を信じているのか」
(ドラクロワも信じていますよ。聖王もね。不思議なことに、信じていないのはあなただけだ。死者の魂を招く、あなただけ。一つだけ、私が知る、あなたの未来を教えましょう。あなたは、さらなる苦しみを受けるでしょう。手に入れるものも僅かです。しかし、あなたは遥か高みの存在に触れ、解放する可能性を持っている)
「解放する……。何をだ」
(我々を。私やあなた自身を。死者を招く者よ……私は私の命を、あなたの意志に賭けた。未来は所詮、ある時間、ある場所に、いるということに過ぎない。意志なくしては意味がなく、選択肢そのものが減ってゆくばかり。あなたは未来に踏み込みながら、さらにその先の未来を失わずにいられる方だ。私は、あなたの意志を試したい)

「俺を利用して、妹を救いたいか」
相手を遮るような、ずけりとした口調で訊いた。ディキウスは微笑んだ。いたずらっぽい笑みだ。もし首から下があれば、肩をすくめていたかも知れない。
(私自身も、ですがね)
「ドラクロワの力を、俺が破る未来は、あるか」
(秘儀の力は、未来の範疇。破れるかどうかは秘儀が現れねば分からない。ただし秘儀の源である外典は、死者の領域にある。また、ドラクロワはいまだ外典の真価を発揮させていない。私の妹の力を破ったように、あなたの力は、外典に届く)
「ドラクロワが求める秘儀は、聖地シャイオンにあるか」
(まさしく。しかし、それはまだ現れていない。それもまた未来の範疇。それゆえ聖王はあなたに、聖地への派遣を命じることが出来ない)
「俺を、聖地へ向かわせる未来は、あるか」
(しかり)
「示せ」
(レティーシャ)
「ぅ」

奇妙な唸り声が響いた。レティーシャである。ジークに協力するのは嫌だが兄の頼みだから渋々きいてやるといった声だ。どうやら寝所でジークとディキウスの会話を聞いていたらしい。ふと羽音が響いたかと思うと、蠅に似た魔獣が一匹、宙を舞った。
軍図の上に蠅が降りた。どろりと蠅が溶け、黒い染みとなり、一筋の黒い線を走らせる。
黒い線は、ジークが向かう予定だった戦地を貫き、さらにその先を目指して行く。
そして、地図の一点で大きな黒い点を描き——ふっと消えた。
(そこに、地図にもない古い聖堂があるはず)
「聖堂……。そこに、何がある？」
(あなたの未来です。あなたが行って確かめる以外、知るすべはありません)
そう言って、ディキウスは嬉しげに笑った。

金色の翼を縫い込んだ旗が、河岸に翻っている。
金翼神聖兵団——そう名乗る暴徒の群が、河を挟んで聖法庁の軍勢と一進一退の攻防を繰り広げていた。攻防の焦点は、河にかかった石橋にあった。両陣とも橋を我がものにしようと、河船を出し、矢を浴びせ、攻めては防ぐ。
その橋の上を、疾走する一団がいた。

ジークと十六体の凄魔である。水上では魔兵は招けない。それほど大きくない石橋の上であるため招けるのは凄魔たちだけで限界だった。ジークたちはそれでも信じがたい速度で橋を進み、防柵を乗り越え、敵を斬り屠った。雨のような矢を、ものともせず突き進む。
だがあと少しで橋を渡りきるというところで、秘法士たちの迎撃を受けた。
橋の上で、五人が横一列になって聖槍を構え、迫ってきたのである。最初の列が崩されれば、すぐに次の列が来る。ジーク達の進行が鈍ったところを、無差別な矢が飛び交った。ジーク達に当たろうが味方に当たろうが、お構いなしの矢の群である。
ジークはすぐさま強引に敵を突っ切ることを決断した。あと僅かで、対岸の陸地である。そこに辿り着けば魔兵を招くことが出来るのだ。負傷を覚悟で、凄魔とともにまっしぐらに突進しようとした、そのときであった。
真っ黒い靄のようなものが押し寄せてきた。さながら暗雲そのものである。同時に、耳を聾するほどの凄まじい羽音が鳴り響いている。
真っ黒い蠅の群――レティーシャの〈邪妖精〉であった。その蠅の群が、橋を死守しようとする秘法士たちに襲いかかった。いかな聖槍でも濁流のごとき蠅を払えはしない。あっという間に最初の列が骨も残さず食われ、残りの列が驚愕して逃げ惑った。
ジークは、その混乱の中を駆け抜け、ついに対岸に立った。

雷花を迸らせる左腕を高々と掲げながら、ちらりと橋を振り返る。
そこに、蠅を全身にたからせ、聖槍を両手で握り、どんよりした目でジークを見るレティーシャが、いた。本来ならば刺客であるはずなのに、兄の頼みで仕方なくジークの助勢をしているらしい。いつか殺してやると言わんばかりの凄気を秘めた目であった。
いかなる武器も鎧も無に帰すその蠅の群の恐ろしさを、改めて目の当たりにしながら、ジークはさして助勢を感謝するでもなく、その左手を地面に叩きつけた。

巨人のごとき剛魔の一団が、暴徒の兵団を無慈悲に粉砕し、聖法庁の軍が追い打ちをかけた。その間にも、ジークは、暴徒が占拠していた対岸の砦の先へと進んでいる。
凄魔たちだけ引き連れて森に入った。戦乱の喧噪が背後に遠ざかってゆく。
古びた道を進み、やがて、目的の場所に来た。
苔むした石の建物がそびえ立っている。石壁の様式も恐ろしく古い。聖印が大陸にもたらされた初期の聖堂である。当時の風習が敷地内に色濃く残っていた。
だが軍略的には、もはや用をなさない敷地だった。ドラクロワが追う秘儀の鍵が、ここにあるのだろうかと思ったが、そんな気配はどこにもない。
ただ、建物に入り、中庭に出て、確かに誰かがつい最近までここにいたことは判明した。

ところどころ、敷地内を改修しているのである。壁を崩し、河から水を引き、大きな泉まで作っている。わざわざ土を盛って丘を作っている場所まであった。
まるで庭園でも作ろうとしたかのような様子である。
その庭園の一角で、ジークは何かの焼け跡を見た。どうやら陣幕を張っていたらしい。自分たちで火をつけ、軍図や密書などを焼失させた跡だった。ジークは灰を探った。何か燃え残りがあるかと、剣で、真っ黒い土を掘り返した。それでも、何もなかった。
振り返れば、レティーシャがいた。頭蓋骨を腹に抱えた妊婦のような姿で、聖堂の入り口に立ってこちらを見ている。
ジークは、何も見つからないことを口にしようとして、やめた。
おそらく、何かがここにあるのだ。自分が見つけられないだけで――
改めて周囲に目を向けようとしたとき、ふいに、凄魔たちが低く唸りを零した。
次の瞬間――見事なまでに気配を殺した者たちが、次々に庭園に殺到してきた。
みな暗い灰色のマントに、目立たぬよう銀の翼をあしらっている。
聖槍を持つ者、剣を握る者、全て、その武器を暗灰色に塗り、光が反射しないようにしていた。まるで暗殺者の集団である。ほとんど物音一つ立てずに石壁を越え、建物の中から現れ、気づけば百名近い人数に完全に包囲されていた。

「ドラクロワの差し金か——」
ジークが問う。誰も答えない。みなレティーシャの方を見向きもせず、全ての武器が、無言のもと、ジークと円陣を組む凄魔に向けられた。さながら刃の森だ。
銀翼親衛旅団——ドラクロワのもとで影のように働き、沈黙を旨とする影の兵団である。
その八つ目の兵団が、一部、ドラクロワの命令で、ジークを追っていたのだ。
むろんそれはジークの知るところではない。ただこうして戦地から一人離れたところを正確に狙って来たからには、しばらく前から機を窺っていたのは明白だった。
灰色の兵団が、無言のまま包囲を狭めた。
聖槍が、剣が、次々に繰り出され、沈黙に比してひどく激しい剣戟の音が響き渡る。
戦場を一つ駆け抜けたばかりとはいえ、ジークにはさしたる負傷もない。戦いの烈気が、疲労を上回っている。武器を突き出してくる者たちを立て続けに斬り伏せながら、ジークは、雷花を閃かせる左手を、地面に叩きつけた。
影のように走る迅魔の群が、紅い刃のごとき爪を閃かせて現れた——そのとき。
ジークは何かをその場に感じた。迫り来る敵に、猛り狂う魔兵たち。そして孤軍として一人立つ、自分。その力の根源となるものに、にわかにジークの意識が届いた。
大地——

敵を圧倒しながら、ジークの全身がそれを察知した。これまでずっと、ただ一つ頼りとしてきたもの。すなわち、地形だった。

やがて迅魔たちが戦いを終えて姿を消していった。

灰色の兵団は、ついに一言として発さず、それでいて狂ったように戦い、死んでいった。

どちらも狂奔ともいえる戦いぶりを見せたことが、さらにジークの意識を明瞭にした。

かつて——戦士としてジークを心の底から畏怖させた者がいた。

聖地シャイオンの蛮族の英雄——腕を斬られ、剣に胸を貫かれ、それでもその歯で、ジークの首を噛みきりにきた男である。この灰色の兵団は、その男に似ていた。魔兵に体を引き裂かれながらも、最後の力でジークに何度となく刃を浴びせかけてきたのだ。

今は死者となった彼らが横たわる地面を、鋭い目で見回し——ジークは、自分が立っている場所が、過去に蛮族の英雄と戦ったのと、全く同じ地形であることを悟った。

むろん、完全に同じではない。縮尺が違った。ジークの全身が、大地を感じ、この庭園がいったいどこを模して造られたのかを、完全に悟った。

「ここは……聖地シャイオンか」

泉は、聖地シャイオンの湖を模したものだった。建物は城と街を。城壁や耕地、細かな水溝まで、ジークの全身が記憶する聖地シャイオンの地形とうり二つだった。

ジークは泉に向かい、その水の中へと歩を進めた。水に入ったことで魔兵を招く力が急速に消え、凄魔たちが元の姿に——ジークの剣を包む銀色のシャベルとなった。
ジークはそのシャベルで泉の底を穿った。大量の泥が跳ねる。そのまま泥まみれになりながら取り憑かれたように泉の底を掘るジークを、レティーシャが無感情に見つめていた。
すぐにそれは現れた。泉の底に埋められた、誰の者とも知れぬ死者たち——
ジークは泉を出て、そこら中を狂ったように掘り返した。泉の周囲から、埋められた死者の堕気を相殺するようにして、あちこちから聖印を刻まれた石が出てきた。
建物と泉の間にある地面のそこら中に、複雑な紋様を刻まれた石や木片が現れた。
天幕を焼いたのは、見せかけだった。軍図を焼いたと見せて、本当に隠そうとしたのは、この泉とその周囲におよぶ、秘儀のための仕掛けであったのだ。
ここから離れた土地で、秘儀を成就するための、試験場がここだった。
ジークはその全てを掘り返し、暴き、白日の下にさらしていった。やがて何もかもが明らかになり、ジークはそれが確かに恐るべき未来への扉を開く鍵であることを知った。
「聖地シャイオン全土を……秘儀の生け贄にする気か……。ドラクロワ……」

5

（全てを疑え――）
その言葉が石ころのようにノヴィアの胸の底で転がり、激しく音を立てるようだった。
ノヴィアは森を走っていた。
クルツが命懸けで与えてくれた馬は、とっくに失っている。
馬は、敵の矢を腹に受けて狂奔し、勾配をめちゃくちゃな速度で駆け下り、木の根に足をとられて倒れた拍子に、右の前足を折ってしまった。ノヴィアは、悲痛ないななきを上げる馬から離れ、下藪をかき分け、敵の動きを見ながら走り続けた。
馬を失ったことを悲嘆するひまもなかった。
むしろ馬が上げる悲鳴が、敵を呼び寄せていた。
ノヴィアは逃げるために、あらゆることを試みた。敵を見つけ、遠間から矢を浴びせて混乱を呼ぶよう努めた。こちらの姿が発見されぬよう矢を放ち、複数の集団を別々の方向へ向かわせようとした。わざと遠い場所にいる者を狙って、こちらの居場所が分からないようにさせながら、一人ずつ倒そうとした。
だが敵が倒れれば、その倍以上の数がすぐにどこからともなく現れ、それがさらに別の集団を呼んだ。ノヴィアがどの辺りにいるか、矢を放てば放つほど明らかになる。しかも聖槍を持つ者は、一矢で倒せるとは限らず、下手に手こずればすぐに集団が四方から迫る。

逃げるために敵を見て矢を放ち、そのせいで包囲が狭まり、ノヴィアを恐怖と焦燥と悲嘆が襲った。子供のように泣き声を上げて座りこみたいほどの無力感と混乱に何度となく支配されそうになり、必死に耐えて進んだ。

捕まればずたずたにされて殺されるだけだ。ジークにもレオニスにも再会出来ぬまま、使命を果たすこともなく死ぬわけにはいかない。そう思うことで、気力を振り絞った。

だが限界は予想以上に早く訪れた。精神の消耗が、聖性の疲弊を導いた。

矢が鈍り、視界が霞んだ。もっと速く走らねばと焦るほど、足が言うことをきかなくなる。気力も体力も、じきに尽きるのではという恐怖が、かえってどちらも減退させる。

「く……」

ついに、すすり泣きを噛み殺しながら、木の幹に手をつき、足を止めてしまっていた。

涙をにじませ、最後の気概が失われる前に、胸元のアリスハートに囁いた。

「逃げて……アリスハート。あなただけでも聖地に行って。トールさんがきっと、あなたを助けてくれる」

アリスハートは悲しそうにノヴィアの胸元から出てきた。今から聖地に行って助けを呼んでも間に合うはずがない。それどころか本当に助けてくれるかも分からないのだ。

「ノヴィア……」

「お願い」
アリスハートを遮り、ノヴィアは切羽詰まって言った。
「お願い、逃げて。私なら大丈夫。絶対に大丈夫」
言うそばから涙が零れた。諦めたわけではなかった。この大事な友達まで襲われることを思うと恐怖のあまり気が萎えそうになる。だから少しでも自分を安心させたかったのだ。
だがそれは完全な逆効果を招いた。
「わ……分かった。あたしが飛んで、あの人たちを追っかけさせる」
「え――」
「あ……あたし、声は大きいけど、ほら、チビだから。絶対……絶対、つかまんないよ。だから、その間に、ノヴィアは逃げるの」
震える声で言うなり、ふわりと宙を舞って、アリスハートは、ノヴィアの手の届かぬ場所で、精一杯の勇気で微笑んだ。
「あ……あたしも、後から行くから。後で会おうね。聖地シャイオンの、お城でね」
ノヴィアは愕然となった。アリスハートは、アリスハートで、ずっと自分も何かの役に立とうと考えていたのだ。それが淀みないアリスハートの口調で分かった。誰よりも怖がりのくせに、ノヴィアに逃げるよう言われた途端、逆に怖さが決意に変わったのだ。

「ノヴィアはね、あたしに、あたしはあたしだって教えてくれた、大事な友達」
きっぱりとアリスハートは言った。
「あたしがいなくなっても、ノヴィアは、ノヴィアだよ」
まるで別れの言葉のように、ひどく真情のこもった声だった。
「頑張って、ノヴィア」
「やめて……！　行かないで……！」
ノヴィアの低い悲鳴が、むしろアリスハートの行動を促した。その金の羽がふいっと宙を翻り、一目散に飛んでいった。その金の輝きが遠のくのをノヴィアは呆然と見守った。
やがて――
「きゃあぁぁーっ！　助けてえぇぇ――っ!!」
アリスハートの声が、森にこだました。捕まったのではない。敵を引きつけるためだ。
ノヴィアからさらに遠ざかりながら、アリスハートは力の限り悲鳴を上げ続けた。
「う……っ」
ノヴィアの頬を、ぼろぼろ涙が零れていった。泣きながら、きびすを返した。
アリスハートが飛んでいった方へ背を向け、足を踏み出し、走った。
本当なら声を上げて泣きわめきたかった。それを堪えて、無言で走った。

聖地に行くのだ。行って助けを求めるのだ。
アリスハートを助けてくれと、レオニスなりトールなりに懇願(こんがん)するのだ。
敵が聖地に迫(せま)っていることを教える代わりに、助けてくれと。自分には一人で歩むだけの力がなかった。力がないのに、身に余(あま)る使命を背負って旅に出てしまった。
何と愚(おろ)かなのだろう。
三人もの男を死なせ、大切な友人と離(はな)れることになるとは思いもしなかった。
たまらない後悔(こうかい)に駆(か)られながら、ノヴィアは走った。
(全(すべ)てを疑(うたが)え——)
そう告げる声が、胸(むね)の奥(おく)で、しきりに響(ひび)く。
霞(かす)む視界(しかい)をはっきりさせようと何度も目をしばたたかせるうち、屹然とした光が、その目に甦ってきた。まだ、一縷(いちる)の望みがあるうちに——
たとえどれほど愚かだろうと、まだ、生きて走れるうちに——
聖地シャイオンに辿(たど)り着くために——ノヴィアは、ただひたすら、走った。
「いたぞーっ！　妖精(ファー)だ！」
「追えっ！　つかまえてノヴィア・エルダーシャの居場所(いばしょ)を吐(は)かせろっ！」

次々に追っ手が群がって叫ぶ。ノヴィアが妖精をつれていることなど、とっくに知れ渡っているのだ。だがアリスハートにとっては好都合だった。

「助けてっ！　助けてっ！　助けてっ！」

悲鳴を上げて泣きながら、力の限り速く飛んだ。悲鳴も涙も本物だった。捕まったらきっとひどいことをされる。そう思うだけで気が遠くなるほど怖かった。むしろ叫ぶことで怖さに耐えていた。叫べば叫ぶほど敵が寄ってくるのは分かっている。叫んで飛び続けることが今のアリスハートの役割であり、持てる力の全てだった。

矢や剣をかわすのはまだ、たやすかった。恐ろしいのは聖槍である。狙いもせず振るわれた槍が、勝手に動いて、宙を飛び回る小さなアリスハートの身に正確に迫ってくる。

それを必死の思いで、何度となくかわした。まだまだ遠くに行かねばならないのだ。ノヴィアのために。一人でも多くの敵を引き寄せるのだ――

なのに、次から次へと聖槍を持った者たちが現れ、アリスハートを取り囲もうとする。右へ逃げても左へ逃げても、敵がいる。それでも高く頭上へ舞って逃げ、

「へーんだっ！　ここまでおいでよっ！」

涙目のまま悪態をついてみせたのも束の間だった。

アリスハートを、木に登った男が凄い形相で睨んでいた。その手に聖槍が握られている。

槍の穂先が繰り出された。アリスハートは慌ててよけた。切っ先が頭上すれすれで空を切り——羽をかすめた。アリスハートの口から悲鳴が迸る。はたき落とされたようになり、必死に宙で体勢を立て直す。気づけば、敵が手を伸ばせば届くほどの高さにいた。
慌てて高い場所へ飛ぼうとし、そのときには別の敵が襲ってきていた。
槍ではなく、ただの剣だったのが幸いした。アリスハートはそれを懸命にかわし、
「このチビっ!」
いきり立って追い回す男たちに、
「そうだよっ、チビだよっ!　あんたたちなんかに、つかまるもんかっ!」
泣きわめきながら、宙を舞ってみせた。
そのアリスハートの行く手に、そのとき突然、槍を持つ者が現れた。
誰もいないと思っていた木陰から、何の気配もなく影のように姿を現したのである。
アリスハートはその槍に目を奪われ、槍を持つ者を見なかった。慌てて逃げようとして、
「チビじゃありませんよ」
優しい声に、はっとなった。
「アリスハートは小さいだけです。そうでしょう」
振り返ればそこに、穏やかに微笑む青年がいた。

アリスハートは信じがたい思いでその声を聞き、相手の顔を見た。うかつにも宙に浮かんだまま完全に動きを止めてしまっていた。けれども、それで良かった。
たまらない安心が、そっと差し伸べられた手とともに、アリスハートを包んだ。
「ご安心を、アリスハート。彼らの相手は、私どもがします」
温かな手が、相手の肩口にアリスハートの小さな体を引き寄せた。
アリスハートの羽が、へたりと力が抜けたように畳まれる。
青年の案外に逞しい首に、泣きじゃくりながら、思い切りしがみついた。
「トールぅ……」
かろうじて名を呼んだ後は、言葉にならず、安心と喜びとで、むせび泣いた。
トールは、アリスハートから手を離し、ゆっくりと周囲に集まる者たちを見回した。
「ここから先は、レオニス様の領地。どうぞ、お引き取り下さい」
そしてにわかに、喚声が上がった。完全武装の兵士がそこかしこから現れ、森に侵入した者たちへ、怒号を上げて攻め寄せたのだ。
「聖地シャイオンの兵だ!」
誰かが叫び、トールを包囲する者たちの間に、動揺が走った。
同時に、トールが槍を投げた。人垣が慌ててそれを避け、槍が木を貫く。

そのときには既に、トールの右手に鉄鞭が現れ、凄まじい刃鳴りを響かせている。
「早くお逃げなさい。あなた方が境界を侵したせいで、我が主は大層、お怒りです」
トールが真顔で告げ、敵に迫った。森の至るところで、乱戦が繰り広げられていた。

（全てを疑え――）
森を走るノヴィアは、にわかに血の香りを感じた。
ぞっとなって走りながら辺りを振り返り、万里眼を発揮しようとした途端――
目の奥にちくりとした痛みを感じ、慌てて力の発揮をやめた。疲労が極まれば一瞬で視界を失う。ここで盲目の状態になれば死に瀕するに等しい。
方角と距離は、既に確認してある。森を抜ければ聖地の領土である。既に境界に入っていることから、聖地シャイオンの兵と出くわす可能性もあった。その場合は兵に助けを求めよう。境界を侵犯しているのはノヴィアも同じなので捕らえられるかもしれなかったが、それならそれで大人しくして、レオニスのもとへ連れていってもらおう。
そして、名もない子供のように、手から手へと連れて行かれ――
そんな思考が急に湧いた。はたと足が止まり、慌ててまた走り始めた。
仲間は全ていなくなってしまった。頼れる者はいない。たとえ一人ででも行かねば――

アリスハートを助けることもままならない。アリスハートがいない。一人。
また足が止まった。思考が停止しそうになり、かろうじて、よろよろと歩を進めた。訳が分からなかった。自分がいったい何を考えているのか、咄嗟に見失っていた。
聖地シャイオンを意識しようとして、霧深い城塞都市の光景が、思い浮かんだ。
膨れあがる気持ちが、恐怖ではなく寂しさであることを知り、涙がにじんだ。
血の香りがした。訳も分からぬまま、ジークは知っていたのだ、と思った。レオニスは知っていたのだろうか。血で染まった書状を見ているノヴィア自身がふいに思い出された。
(このレオニスという方の、姉が……)
血縁について記された書状。
その内容を、今まさに読んでいるかのように、文面が甦ってきた。
母――フェリシテ・エルダーシャの経歴。子を産み、夫は死んだ。そしてその子も――
読みたくない。知りたくない。なぜ葬られたものをわざわざ暴くのか。
葬られたもの。
死んでしまった子供。
棄てられた子供。
「う……」

呻き声とともに、血を吐いたのかと思った。それほど鮮烈な血の香りがした。
よろめいて木の幹にもたれかかった。にわかに襲い来る寒さで、体の震えが止まらない。
涙があとからあとからこぼれ落ち、必死に嗚咽をこらえていると、そこへ——
誰かが、来た。
背後からではない。ノヴィアが進もうとしていた方角から、ふいに、それが現れた。
それは、一人の女であった。
長い、深紅の髪。白く冴えやかな面立ちに、血のように紅い両眼。喪に服すかのような黒衣を身にまとい、その美貌に少女のような無垢の微笑を帯びている。
その女の顔に、ノヴィアは見覚えがあった。幻術で見たことがあるのだ。彼女自身は、既にこの世の人ではなかった。
これも幻だろうか——ノヴィアがそう思っていると、女は微笑みながら歩み寄り、細い手を差し伸べてきた。その手がノヴィアの頬に触れ、涙を拭った。
柔らかでありながら、おそろしく冷たい手——
女の体から、きしきし軋む音がかすかに響き、ノヴィアは凝然となった。
氷で出来た人形——敵。だが奇妙なことに、感じるのは堕気ではなく聖性だった。いや、強い聖性が、完全に堕気を抑え込んでいるのだ。かつてノヴィアと戦った氷の魔獣とは、

全く別の存在であることは明らかだった。
そしてまた、相手の聖性を感じているのはノヴィアだけではなかった。
「レオ、ニス……」
女は、ノヴィアに向かって、そう口にした。
「涙……レオ……ニス」
女の手がノヴィアの頬を優しく拭う。まるで泣かないでと言っているように。
「私は……」
レオニスではない――そう言おうとして声がつまった。
女の手とは別に、目に見えない感触があった。ノヴィアの聖性に、直接、触れてくるような気配。おそらく女は、ノヴィアの聖性を感じて、ここまで来たのだ。
そしてその聖性の持ち主を、レオニスと判断した――
だがノヴィアの声を聞き、女は不思議そうに首を傾げている。
「レオ、ニス……？」
「私は……レオニスではありません……」
震える声で返したとき、ノヴィアの中で何かが砕けた。固く閉ざされていたものが暴かれ、これまでに層倍する血の香りが満ちた。心が血を流していた。涙は出なかった。ただ

呆然となった。そのとき――
「いたぞぉーっ！」
槍を持った男が木々の間から飛び出してきた。続いて数人の、剣を持った男たち。
ノヴィアは弾かれたように彼らを振り返った。盲目の状態になることを覚悟して、最後の力を振り絞って矢を放とうとするのを――女が遮った。
女が、微笑を浮かべたまま、男たちに向かって歩み寄ったのだ。
やめて――とノヴィアが叫ぶ間もなかった。
にわかに、女の肩や胸元に、複数の聖印の輝きが生じた。
「邪魔だ！」
男の怒号とともに、槍の穂先が女の胸に突き込まれた。
火花が散った。槍が弾かれたのだ。槍を持った男が、ぽかんとした顔になる。続けて残りの男たちが次々に剣を叩き込むが、ことごとく女の体がそれを弾いた。
さらに突き込まれる槍の刃を、女のほっそりとした手が受け止め、握った。
男が目を剝いて奪い返そうとするが、びくともしない。
それどころか、女が力を込めると、槍の刃が、音を立ててひしゃげた。
ばしっ、と激しい音とともに盛大な光の粒が飛び散った。槍の刃に刻まれていた聖印が、

女の手で握りつぶされ、崩壊したのだ。
愕然となる男たちを、紅い輝きが襲った。
女の紅い髪が広がり、刃のように男たちの胸を、腹を、喉を、次々に貫いたのである。
そして慄然となるノヴィアの目の前で、男たちは、からからに干涸らびた屍へ変貌した。
真っ赤な髪が、血を吸って鮮やかな輝きを帯びる。その髪が引き抜かれ、男たちの屍が呆気なく倒れた。女が、ノヴィアを振り返った。
「レオ、ニス――」
微笑みとともに、女の両膝の辺りで、聖印の輝きがともった。
ふっと女の姿が軽やかに宙を舞った。ほとんど消えたかと思うほどの素早さだった。
女はノヴィアの視線の遥か先に立ち、また一つ微笑み、そして今度こそ忽然と消えた。
ノヴィアはしばしその場に立ちつくし――そしてゆっくりと、女が消えた方へ歩んだ。
その先に何があるか、万里眼を使わずとも分かっていた。
出来ればそのまま、立ち止まっていたかった。だがここで足をとどめることは、この旅の否定を意味した。自分の意志で決めた旅の末を、自分で確かめねば意味がなかった。
ふいに森がきれ、ノヴィアを温かな陽光が照らした。
豊かな緑野とともに、巨大な鏡のように周囲の景色を映すものが、現れていた。

美しく澄み渡る、聖地シャイオンの湖――
その湖面を滑る、ひんやりとした涼しい風が、頬を撫でて旅の疲労を慰めてくれる。
湖の向こうには美しい城が見えた。その先に大きな街があった。さらにその周囲に広がる拓かれた耕地を見るまでもなく、そこが、どれほど豊かな国であるかが分かる。
何もかもが輝くような光景を前にして、ノヴィアの目に、それまでとは違う涙が溢れた。
血の香りは、もう消えていた。
涙もひとすじ零れただけで、それ以上、何も現れはしなかった。
ただ透明な心で、目の前のものを、受け入れた。
「私の……故郷」
ノヴィアの口から、その言葉が零れた。

6

「境界に侵入した賊を、兵が追い払ったようです」
「追討も捕獲も無用だ。どうせドラクロワの放った暴徒の一派だ。ろくな情報を持っていない。ただし聖印を刻まれた槍は回収せよ。あれは我が兵にとっても良い武器となる」
廷臣たちの報告を受けて、レオニスが淀みなく答える。

王座の間に、いた。居並ぶ廷臣たちに不安や動揺の色はない。ドラクロワの勢力が聖地の周辺に出現したことも、レオニスの予想の内だったからである。

ついで別の廷臣が広間に来て、報告した。

「聖法庁から、聖地への騎士団派遣の通達が、来てございます」

これにも誰一人として驚きを示さない。どの顔にも、むしろレオニスの計画通りに事が運んでゆくことへの、期待と信頼の色があった。

廷臣から書状を受け取り、レオニスはそれを一瞥して畳んだ。

「予想通りの兵力だ。明後日には到着するだろう。決して防戦するな。北西の砦の門を開いて相手を迎え入れ、抵抗の意志がないことを示せ。戦うべき相手は他にいる」

レオニスの命令を通達すべく、廷臣が退室する。そして、それと入れ替わりに入ってきた、また別の廷臣が——突然、粛々としていた広間の空気に波紋を呼んだ。

「た、大変です、レオニス様」

「どうした」

「し、城の兵から報告があり、つい先ほど、シャイオンに着いたと……。私どもでは判断出来ず……レオニス様のご判断を仰ぎたく……」

「いったいなんだ。誰が城に来た」

「ジ……ジーク・ヴァールハイトの従士が、お越しでいらっしゃいます……」
「なん……だと」
レオニスは息をのんだ。目をみはったまま、すぐには指示を出せずにいた。
居並ぶ廷臣たちが、にわかにざわめく。
「まさか……本当に……」
「この広間の控えにて、お待ち頂いております。いかがいたしましょう」
「ま……待て。時間をくれ」
レオニスらしからぬ返答であった。廷臣たちがレオニスを注視する。
「ト……トールはどこだ」
「兵を率いて、賊を追っております」
「……そうか。そうだったな」
レオニスのおもてに、どこか観念したような表情が浮かんだ。口元に、苦笑が浮かぶ。
どうせ自分はここから動けないのだ。もし再会するならば——こういう形になるほかないではないか。そんな思いがレオニスの胸をよぎり、そして静かな決心に変わった。
「謁見する。聖地を訪れた客人を、ここへ呼べ」
そう告げるレオニスの顔も口調も、いつしか王のそれに戻っている。

廷臣が頭を垂れて退室した。他の廷臣たちも今や声を潜めて事態を見守った。
やがて広間に、その人が来た。
凛と背を伸ばして開かれた扉の狭間を通り、すっと王に向かって頭を垂れた。
再び上がった少女の顔は、謁見する王に劣らず毅然としている。旅の汚れにもかかわらず、どの貴族にも増してその姿に薫るような風格を帯び、ノヴィアは広間を歩んだ。
そして規定の位置に立ち、レオニスを見上げ、言った。
「王よ……領界を侵しての突然の登城を、お許し下さい」
ひどく慇懃なノヴィアの言に、レオニスは穏やかにうなずいてみせる。
「許すべきことなど、なにもない。そなたは、何も罪を犯してはいない……ノヴィア」
ふいに厳格な王の面影が薄れ、レオニスのおもてに親愛ともいえる微笑が浮かぶ。
「お帰り……ノヴィア」
はっとノヴィアが息をのむ。廷臣たちが一様に訝しげな顔になる。
「お帰り……君の故郷に」
「レオニス……」
廷臣たちが意想外のレオニスの言葉にざわめいた。ただノヴィアとレオニスだけが静かに見つめ合い、何かを確かめるように沈黙をともにした。やがて――

「本当に……そうなのですか」
ノヴィアもまた使者としての儀礼を薄れさせ、真情をもって問うた。
レオニスは僅かに、意外そうな表情になった。ノヴィアは何もかも知ってここに来たのだと思っていたのだ。だがそうではないと察し、レオニスはまた一つ、うなずいてみせる。
「そうだ……ノヴィア。間違いない。聖地シャイオンこそ、君の生まれ故郷だ」
廷臣たちの驚きをよそに、ノヴィアは、その言葉を自分でも意外に思うほど、自然と受け入れた。発したい言葉の数々が胸の内に膨らんだが、今はそれを抑えた。
語るべきことを心にとどめ、火急の件を告げ、助けを請わねばならなかった。
敵兵が領界にいることをレオニスに知らせ、アリスハートを助けてもらうのだ。さらにその上で、聖地と聖法庁の和平を求めねばならない。
「お願いがあります……レオニス・ジェルミナル」
ノヴィアが儀礼に従い、ひざまずいたそのとき——大きな声が、朗々と広間に響き渡り、
「ノヴィアぁーっ!!」
金の輝きが、ノヴィアに向かってまっしぐらに飛び込んできた。
「アリスハート!」
弾かれたように立ち上がるノヴィアの胸元に、アリスハートがしがみつく。

「ノヴィア……良かったぁ、無事でぇ……」
べしょべしょ泣くアリスハートの小さな身を、ノヴィアも安堵と感謝の思いを込めて、そっと両掌で包み込む。
遅れてトールが広間に現れ、レオニスと廷臣たちに向かって、事情を告げた。
「ドラクロワの配下にある兵は、どうやら、ノヴィア様を狙って動いていたようです。敵は既に、領界の外へ、四散しました」
「ご苦労だった、トール」
レオニスは言って、ノヴィアに目を向けた。そして廷臣たちに聞かせるように、
「ドラクロワが彼女を狙った理由は一つ。この聖地シャイオンに仇をなすためである。ノヴィア・エルダーシャこそ、聖地の前君主ロムルスとその妻イルミナの間に生まれた、双児の一人である」
今度こそ本物の驚愕が廷臣たちを襲い、騒然となった。トールが複雑な思いでレオニスを見上げる。アリスハートは、ノヴィアの胸でぽかんとなるばかりだった。
「ま、まことでございますか、レオニス様」
「間違いない。その血縁は、既に調べがついている。過去、聖地に残る風習によって、城を離れねばならなかった者が、今こうして戻ったのだ」

廷臣たちが何かを言う前に、ノヴィアはひときわ声を上げ、言った。

「私は、血縁を告げにこの地に参ったのではありません。聖王の騎士の従士として、また〈銀の乙女〉の一員として、使命を抱き、この地の王の前に参上したのです」

　それがノヴィアの真実であり、またこの場で何より強調すべきことだった。

　ここでノヴィアが廷臣たちの動揺の種になっては意味がない。それでは何のためにジークやクルツたちが、最後までノヴィアに血縁を告げなかったのか分からなくなる。

　レオニス自ら、自分以外の王が現れたかのような言い方をしたのは、血縁による紛糾を事前に避けるためだ。全てを公開しつつ、ノヴィアの意志を質したのである。それが自然と分かった。一国の王としてのレオニスの態度に、すぐに応えねばならなかった。

「王よ、どうか聖法庁と和平をお結び下さい。私の一身は、そのためにここにあります」

「ジークの従士として、また〈銀の乙女〉の使徒として、この僕に和平を説きに来たのだな？　ノヴィア・エルダーシャ」

「はい。その通りです、王よ」

　ノヴィアは繰り返しその言葉を口にした。この聖地の王がレオニスただ一人であることを何度でも示す必要があった。自分が混乱の要因になるつもりはないことを、まるで罪人の申し開きのように訴えねばならないのだ。そしてその態度が――ノヴィアとレオニスの

双方の姿勢が、事実、廷臣たちの動揺を徐々に鎮めていった。
見事だ――トールはそう思う。二人とも、本当ならば自分たちのことについて、多くの言葉を尽くして語り、多くの思いを訴えたいだろうに。それを抑え、懸命に周囲を考慮しようとしている。誉むべきことであり、また――憐れむべきことでもあった。
「聖法庁は、数個の騎士団を既に聖地に向けて派遣している。この僕がドラクロワとの同盟を公にしたゆえだ。そのことは承知しているのか？」
「はい。承知しております」
「では、まずは旅の疲れを癒して欲しい。今は廷臣たちと相談し、純粋に聖地の防備を整えねばならないのだ。決して、これが動乱の用意ではないことを理解して欲しい」
「信じます、王よ」
「そなたの思慮、のちほど聞かせてもらう……」
「かしこまりました、王よ。御意に従いましょう」
ノヴィアは膝を折り、見事なまでの慇懃さで、頭を垂れた。
その姿を見つめるレオニスの目に、今にも涙を流すのではと思えるほど、切々とした光がやどっていた。

突然の訪問者が退出し、レオニスはしいて何ごともなかったかのように廷臣たちとの審議を続行した。廷臣たちも突然の血縁の真実を聞かされ、心穏やかならぬ様子であった。しかし、レオニスの毅然とした態度が揺るぎないのを見て、少なくとも王位の安泰と、紛糾がないことだけは確かと判断したようだった。

審議を終え、退出する廷臣たちが次々に一礼する姿も、いつも通りに落ち着いていた。

やがて、広間にはレオニスとトールだけになった。

「まさか……本当に、来るなんて」

王座に深く身を沈めるようにして、レオニスは言った。

トールはただ影のように、そのレオニスのすぐ隣に佇んでいる。

「会いたかったんだ……ノヴィアに。いつも、どんなときでも。それは事実だ……」

「はい……」

「悲しいよ……トール」

レオニスがきつく目を閉じるさまを、トールは深く憐れみをもって見つめている。

戦乱を目前にして、王が王座で泣けるわけがない。廷臣たちがいないとはいえ、付き人たちが大勢、控えの間で待機しているのである。ここで泣けば無用の不安を王がもたらすことになる。レオニスは必死に涙をこらえ、おそるおそる目を開いた。

「より良いものを、真実と思えるものを、美しいものを……与えたかった。なのに僕のせいで、ノヴィアを危険な目に合わせた。どうして僕は――……」
「レオニス様のせいではありません。ノヴィア様もそれは、ご承知です」
「僕は、ノヴィアを殺そうとしたこともあるんだ……トール」
「はい、レオニス様……」
「僕は、彼女のことが好きだったんだ」
「はい」
「とても、好きだったんだ……」
レオニスは、ついに、ひとすじとして涙を流さず、ただ眼前を――王の座す広間の、がらんとした光景を、見つめ続けた。

7

夜――
篝火の焚かれた陣の奥にある、占拠され、破壊の跡も生々しい聖堂の一室に、ドラクロワの姿があった。司祭が座る豪奢な椅子に悠然と腰掛け、本来の住人の血で染まった円卓に広がる軍図を、眺めている。

「レオニス・ジェルミナル……大した軍略の才だ」
凍りつくような冷厳とした声音の底に、どこか嬉しげな響きがあった。
円卓の周囲には、聖槍を授けられた秘法士の中でも特に兵団を率いる立場にある者たちが、ずらりと居並んでいる。錆びることを知らぬ槍であることから、血も拭っていない刃が、ランプの灯りに恐ろしげな光をきらめかせていた。
軍図には、兵力を示す四角い駒が幾つも並んでいる。
聖法庁の騎士団を示す駒が、聖地シャイオンの北西に進んでおり、ちょうどドラクロワの兵団の一つを遮るような形になっていた。それを見つめ、秘法士の一人が、言った。
「ちょうど黒翼神聖兵団と、聖法庁の騎士どもが、ぶつかりますな」
「あの聖地が私との同盟を公開したのは、絶妙の機を捉え、聖法庁の兵力を利用するためだ。派遣された騎士団は、そうとも知らず聖地へ向かっていることだろう」
ちらりとドラクロワの眼差しが動き、円卓に臨む、白衣の女を見た。
「尖兵も既に用をなさない……初手から攻めねばならぬな」
女は悔しげにうつむいている。トールに右腕を斬られた女——槍の巫女ことレギンである。女が率いていた白翼神聖兵団の大半は、豊穣の地において既に四分五裂した。愚かにも、後からきた仲間と——碧翼神聖兵団を名乗る別の兵と、豊かな土地を奪い合って戦っ

たのだ。お陰で女が率いる兵は、今や当初の十分の一にまで激減していた。
碧翼神聖兵団は多数の死傷者を出した挙げ句、手持ちの増殖器を全て用いて、白翼神聖兵団を壊滅させてしまった。このため土地に魔獣がはびこって堕気が満ち、土地に深い傷がついて、ようやく戦いが収束した。よってたかって土地を使い物にならなくして、やっと、無益極まる戦いの火が消えたのだ。
「事前に三つの兵団を食い止めるとは……恐るべきかな、レオニス・ジェルミナル」
秘法士の一人が言う。ぎりっ、と女が歯を軋らせた。
「必ずや、我が腕を斬り落とした、あの男の首……刎ねてみせましょう。あのような武器、隠し持っていると分かっておれば……」
「お前が相手にしたのは、かの地の英雄の息子だ。名をトール・ヴュラード。私と同じように、無から武器を作り出せる。倒せるか？」
ドラクロワが、どこか面白がるように注釈する。
すると女は、限りない憤怒と恥辱を秘めた声音を零した。
「今度こそ、その英雄とやらとともに、かの地の領主の首を獲ってご覧に入れます。ドラクロワ様……どうか私めに、もう一度、機会をお与え下さいませ。間もなく我が兵団も、各地の民の呼応を受け、もとの数に戻るはずでございます」

ドラクロワは優しげに微笑んでいる。
「良かろう……。白き翼を尖兵とし、集結する全ての兵団を聖地へ向かわせよ。かの地こそ、聖都への扉にして、永遠なる命への道。貪欲に滅ぼすがいい」
その命令に、女の顔が暴虐の至福に染まる。いずれの秘法士たちも同様だった。間もなく軍議を終え、めいめいが動乱への期待に満ちて退室した。
ドラクロワは一人、血の染みる部屋に佇み、天窓から覗く、青ざめた月を見つめた。
「シーラが目覚めるときは近い……。お前の命が秘儀に連なるときが……ジーク……」

8

聖地に辿り着いた、その翌朝、ノヴィアは、レオニスの執務室に招かれた。
王座の間と違いレオニスとトールしかいないそこに、ノヴィアはアリスハートとともに入った。壁はほぼ全て書棚で埋まっており、棚はおびただしい量の書類で埋め尽くされている。レオニスが持つ知識の量と範囲の膨大さを知らしめるような部屋であった。車輪付きの台が三つ置かれ、書状や書物が積まれている。いらなくなったものを棄て、必要になったものを運び入れるための台であるという。
特筆すべきは、部屋の中央にある円卓に広げられた、極彩色の地図であった。

何十色にも色分けされた針が、大陸全土の地図に、びっしり刺さっているのである。
「なに、これぇ。地図に、いっぱい目印をつけてるぅ」
アリスハートが円卓に乗り、無邪気に声を上げる。
レオニスは自分で車椅子の車輪を回し、円卓のそばに来て微笑んだ。
「大陸各地の経済や兵力についての報告をもとに、僕が作ったのさ」
「赤とか青とか緑とか……よく何色がなんなのか覚えられるわねぇ」
「同じ色の針でも、巻いてある糸の色で、刺した日付が分かるんだ」
「数が多すぎて、何がなんだか分かんないよぉ、あたし」
アリスハートが言い、レオニスがくすくす笑う。
その様子を、トールは静かに、離れたところで見つめている。まるで普通の少年のように笑うレオニスの姿に、喜びと悲しみとを同時に抱くようだった。
ノヴィアは、そっとその円卓に手をつき、色鮮やかな針の群を眺めた。なぜレオニスが自分をこの部屋に呼んだか――その地図が全てを語っていた。
「この地図を使って……災いをもたらしたのですね」
ノヴィアは言った。アリスハートが笑みを失い、どこかしょんぼりしたようになる。
「ナデッタの民の故郷を奪い……ルカの都市を滅ぼし……ネルヴァ河のあらゆる街に、災

厄をもたらしたのですね……レオニス」
「全てが僕の策謀であるとは言えないけど……その通りだよ、ノヴィア。父がドラクロワと盟約を結んで以来、ずっとこの地図が、僕の戦場だった」
「小さな針が刺した場所にも、大勢の人が住んでいることを知っているのですか……」
「それを知ったのは、ジークを狙うようになってからだ」
ノヴィアはゆっくりとレオニスを振り返った。レオニスは穏やかな顔でいる。
「あなたは……自分が、何をしたか、分かっているのですか」
「大勢の者の生活を奪い、命を奪った。大勢の領主がそうしているように。ジーク・ヴァールハイトが、そうしているように。ドラクロワが、そう……」
「あなたが何をしたか、分かっているのですか！」
悲痛な叫びがノヴィアの口から迸った。レオニスは沈黙した。
切なげに羽を震わせるアリスハートの傍らに、すっとトールが音もなく近寄る。アリスハートが顔を上げると、そこにトールの大きくて温かい掌があった。アリスハートはその掌に乗り、トールとともに、ノヴィアとレオニスから離れた位置に来た。
「故郷を失った人の悲しみを……あなたは知っているのですか。大事な人を失う悲しみを……あなたは知っているのですか。この針に刺された人の苦しみを……あなたによって苦

しみをもたらされたことさえ知ることの出来ない人の気持ちを、知っているのですか」
「君が今、教えてくれている……ノヴィア。僕の行ったことの意味を」
「なら……お願いです、レオニス。どうか、あなたが、この聖地を豊かにしようと努めたように、他の国々のことを考えて下さい。一国だけの豊穣にとどまらず、多くの人々の苦しみを知って下さい。これ以上、戦乱を広げるようなことをしないで……お願い……」
必死に涙をこらえて懇願するノヴィアを、レオニスはじっと目を細めて見つめている。
「僕は……君を、殺す決意さえしたんだ……ノヴィア」
「レオニス……」
「そのせいで、トールを失いそうになった。死と滅びが、僕の心を支配していた。憎かったんだ……何もかもが。ジークもドラクロワも、自分さえもが憎かった。僕はね、ノヴィア……自分の国の領民さえ、大勢、殺してしまった。本当に大勢の死者が、僕の手で生まれた。彼らは今も、夢に出てきて、僕が何をしたか教えてくれる……今の君のように」
「レオニス……私が憎いのなら、私をどうとでもして下さい。あなたの憎しみを私が受けます。だから、お願いです……どうか、和平の道を選んで下さい。あなたの力は、決して戦乱を起こすばかりではないことを、民に示して下さい」
「トールにも、同じことを言われたよ」

くすっとレオニスは笑う。その笑みの裏に、想像を絶する苦悶があったことをノヴィアは直感した。己自身から生じる憎しみや怒りに悶え続けてきた者の、心の疵痕を感じた。
「君を、これ以上、苦しめたくないんだ、ノヴィア。それだけは、本当なんだ」
「では……」
「でも、今は無理だ。ドラクロワは、ここに攻めてくる。各地でドラクロワに呼応した者達の全てが、この聖地を目指して進軍しているんだ。ここを滅ぼすために」
「そんな……。なぜ……」
「湖に住む、氷の女さ。シーラ・リヴィエールの聖性から生まれた、竜精だ」
「シーラ……。やはり、彼女は……」
「君は既に彼女を見たんだね。僕はロザリアと呼んでいる。彼女が秘儀の要だ。そして聖地の全てを生け贄にして、ドラクロワは秘儀を成就しようとしている。そのためにドラクロワは彼女をこの聖地に送り、トールを殺そうとした。僕に復讐心を抱かせ、秘儀を育ててドラクロワを殺そうとするために。ドラクロワは、誰かが誰かを憎む気持ちさえ、利用する。君を殺して、僕を憎悪で狂わせようとしたようにね……ノヴィア」
「あなたは……ドラクロワと戦うというのですか。なぜ、ドラクロワがここを攻めるということを、聖法庁に伝えないのですか」

「ロザリアは、聖法庁最大の禁忌たる秘儀の産物だ。聖法庁は、僕がここでドラクロワとともに滅ぶことを望むだろうね。あるいは僕を断罪して殺し、聖地を聖法庁の直轄地として支配して、ドラクロワを倒すための戦場にするだろう。どちらにせよ聖地は荒廃する。だから、ドラクロワとの同盟を公開したんだ。聖法庁の兵を招くために」

「では聖法庁の兵士を楯に？　やめて下さいレオニス。お願いです……」

「この聖地を守ることが出来たら、そのときこそ君の言う通りにしたい、ノヴィア。君が求めるように、この地を豊穣の広がる苗にしよう。決して滅びの苗ではなく。だが今は無理だ。このままでは聖地は、ドラクロワと聖法庁、双方によって滅ぶ」

「レオニス……」

「ここは君の故郷だ、ノヴィア。僕に……守らせて欲しい。その上で、過ちを償う」

「過ち……」

「君の手で、僕を裁いてくれるなら、僕は……」

「やめて下さい！　私に、あなたを裁けなどと……どうして……！」

「君の故郷に、滅びを招いたのは僕なんだ、ノヴィア」

「やめて！　あなたは……ただ、自分の足で歩む代わり……力を求め……。あなたを止められなかった者こそ……裁かれるべきです。この私も……その一人です、レオニス……。

私はあなたを裁きに来たのではありません。私は……」
「一つだけ……僕からも、お願いがあるんだ。聞いてくれるかな、ノヴィア」
「なんですか。なんでも言って下さい、レオニス」
「この地を、去って欲しい」
　悲しみのあまり言葉を失うノヴィアに、レオニスは静かに、言った。
「ここは戦場になる……。頼む、ノヴィア。ここでの戦いが終わったときこそ、君の願いをかなえたい。だから今は……ここを去って欲しい。ここにいては、いけない」

　ノヴィアは返答出来ぬまま、聖堂の礼拝堂で祈る許しを請うた。そこで祈るために。自分の思いを見つめ直すために。レオニスにどう応えれば良いか、答えを欲して。
　レオニスはそれを許した。そしてノヴィアを無事、戦乱の届かぬ地に送り出すための馬車と兵の手配をすると――レオニスもまた、一人、執務室にこもった。
　ノヴィアが礼拝堂で祈る間、アリスハートはトールとともに湖畔にいた。
　特に何をするでもない。物静かに歩むトールの肩に座って、
「あんたの肩って、座り心地良いのよねぇ」
「そうですか？」

「あんまり揺れないし」
「武人のたしなみですから……体を揺らさず歩むのは。ジークもそうでしょう？」
「うーん……狼男は、安心して座ってらんないのよねぇ。急に動くし」
などと、何気ない会話に花を咲かせるアリスハートだった。
だがやはり、内心ではノヴィアへの不安を抱いている。自分自身の意気地のなさも。それが、話をするうちに、つい、ぽろっと口に出た。
「あたしさぁ……やっぱ、何にも出来なくってさ。ノヴィアのこと助けたくっても、トールが来てくれなかったら、絶対に危なかったし。ほんと、何の役にも立ってないの」
「そんなことはないですよ？」
「だって……あたし、小さいし。あたしね、ある女の子の魂から生まれたの。その子は、ずっと空を見てて。自由に飛んで行きたくて。でもずっと閉じこめられてて。だから、あたしが生まれたの。その子の代わりに、あたしが飛ぶために。だから空があたしの故郷みたいなもんなの。でもさ……その子は、あたしみたいになりたかったかもしんないけどさ、あたしだって、ときどき、やっぱり、普通の女の子だったらなって思うとき、あるんだ」
「そうなんですか？」
「うん。今だってさ、トールと並んで歩けたらなーって……」

「私は、小さいアリスハートが好きですよ」
「へ――？」
「駄目ですか？」
「え……。えと……うーん。えへへ……。駄目じゃないよ」
「それは良かった」
「えへ」
「アリスハートは、アリスハートですよ」
「そだね。トールはトールだものね。あたしはあたし。他にないよね」
「そうです」
「そだね」
そうして二人がともに城へ戻ったときも、レオニスとノヴィアは――ともに聖地の因縁を受け継ぐ二人は、それぞれ別れて一人、己を閉ざすように、こもったきりだった。
礼拝堂にひざまずき、ノヴィアはただ一心に祈った。何かを願うのではなく、出来る限り心を無にし、自分の本心や、今選ぶべき道が、自然と心に浮かぶのを待った。
だが無にしようとすればするほど、心はざわめいた。

この聖地が故郷だということ。レオニスのもたらした数々の災厄。失われた命。自分が棄てられたこと。母のこと。力のこと。自分がこれまで何を学んだか。今何を求めるか。
多くの想念が渦を巻き、それら一つ一つに、自分がどう結論を下すかを待った。
和平のためにここに来たのに、激しい戦乱が、とどめようのない近さで迫っている。
全てが遅かったのだろうか。自分をここに辿り着かせるために死んだ男たちは、無益だったのだろうか。そうではない——ここで自分が何を選択するかなのだ。何が最善か、自分で見つけねばならないのだ。
ノヴィアは一人だった。だが孤独ではなかった。目を閉じて祈るうちにも、苦楽をともにした者たちの顔が次々に思い浮かぶ。
だからだろうか。いつしか心のざわめきが、口々に何かを告げているように思えた。
そうして全ての声が、同じことを言っているのだと、はっきり確信したとき——
ノヴィアは目蓋を開き、ゆっくりと立ち上がっていた。
「私……決めた」
おそらく自分自身に向かって、ノヴィアは言った。
そして、もう一人の自分に——レオニスに、同じことを言うために、礼拝堂を出た。

招かれぬままノヴィアは城へ入り、執務室への入室を請うた。
付き人が取り次ぎ、すぐに返事が来た。
あの極彩色の地図と向かい合うレオニスの小さな戦場を、ノヴィアは再び訪れた。
「やあ……ノヴィア。決心が、ついたようだね」
レオニスは言った。ノヴィアの心の変化を、敏感に察しているようだった。
またノヴィアも、レオニスの今の心を、自然と察することが出来た。
「ええ、レオニス。私……決めました」
「良かった。もうしばらくしたら、迎えを寄越そうと思っていたんだ」
「もう、時間がないんですね」
「ああ。聖法庁が派遣した騎士団が明朝にも到着する。敵の兵団も、聖地の領界に侵攻し始めるだろう。君を無事に送り出せるのは、今夜が最後だ」
「その必要はありません」
「ノヴィア……ここは戦場になるんだ。君の望む和平は、今はどうしても無理なんだ」
レオニスの口調がかき口説くようになる。ノヴィアはうなずいてみせた。
「分かっています、レオニス。その戦場が、いずれ、もとの豊穣の地になるすべを、あなたが必死に考えていることも」

「なら……」
「私も戦います」
レオニスは、まじまじとノヴィアを見た。
「人が……沢山、死ぬんだ」
「はい」
「多くの犠牲を払わなければ、聖地を守ることは出来ない」
「ならば私は、この眼差しの届く限り、戦いの場を見守りましょう。そして出来る限り犠牲が出ぬよう、力を尽くしましょう。あなたとともに戦いを乗り越えることが、和平へつながると信じて」
「ノヴィア……」
レオニスは、しばし声を失った。やがてレオニスもまた何かを己に問うように、顔を伏せた。結論はすぐに出た。まるで生まれたときから決まっていたかのようだった。
レオニスは顔を上げ、ノヴィアに向かって、そっと手を差し伸べた。
「ありがとう……姉さん」
ノヴィアは、その手をとった。互いの手が優しく握り合う。離れていた者達が、真の再会を祝うように。そうして全ての因縁を越えた言葉が、ノヴィアの口から告げられた。

「ともに、私たちの故郷を守りましょう……レオニス」

第四章　聖魔飛翔

1

士気を高める必要はなかった。
ドラクロワの放った暴虐の兵団が、聖地シャイオンに迫っていることは既に全領民に知らされている。逃げ出す者は僅かだった。各地に動乱が起こっていることから、逃げるあてのない者がほとんどだったのである。彼らは聖地に残り、命運を託すことを決めた。
暴徒の群の恐ろしさは誰もが耳にしていた。商人同士の噂から始まり、レオニスが意図的に情報を流したものもあった。噂や情報の全てが、領民および騎士や武人に、戦いの決意をうながした。やらねばやられる——まさしく必死の守戦が課せられていたのである。
暴徒の群が聖地に至る直前——
聖法庁が派遣した騎士団が、到来した。レオニスを捕らえようと、北西から聖地シャイオンの領界へと電光石火で侵攻してきた者たちである。

彼らを出迎えたのは、なんと空っぽの砦だった。ご丁寧に門を開き、跳ね橋を下ろし、僅かに数名の物見の者たちとレオニスの廷臣を除いて、一兵もいない。
「貴き聖法庁の騎士たちよ、我が主は、あなたがたと戦う剣を持たない」
廷臣がレオニスの命令通りに、無抵抗を告げる。
騎士団は困惑し、罠かと危ぶみつつも、ただちにその砦を占拠した。というより、聖地シャイオンの兵に代わって、その砦の主人となったといっていい。
「我が主が、ここを訪れ、あなたがたに申し開きを致す。しばしご滞留あれ」
そう言って廷臣たちは城へ去っていってしまった。砦には潤沢な糧食まであった。井戸水に毒を仕込んでいるというのでもない。まさに無血開城による降伏である。
だが砦を占拠して一昼夜経っても、レオニスは現れない。騎士団が使者を送り、どういうつもりか質しに城へ向かった。
使者はすぐにレオニスからの書状を手に、砦に戻ってきた。全員の顔が蒼白だった。
書状の内容は、こうだ。
「ドラクロワの兵団が聖地を滅ぼしに来る。聖地は全力を挙げてこれを迎え撃つ方針である。ついては、聖法庁からの援軍であるあなた方にも、最大限の援助をしたい」
騎士団長は、その書状を一読し、言葉にならぬ呻き声を上げた。

彼らの任務は、聖地シャイオンとドラクロワの関係を明らかにするため、領主であるレオニスの身柄を確保することである。そのために聖地と一戦交えることも辞さぬ覚悟だった。それを「援軍」と一方的に決めつけられ、楯にされたのだ。

彼ら騎士団にとって致命的だったのは、ドラクロワの兵団が迫っているという情報がなかったことだ。これは彼らの落ち度ではなく、レオニスの策だった。

レオニスは四方に間者を送り、情報の伝達を阻んだのである。派遣される騎士団に、情報が届くのを、数日遅らせるだけで良かった。

これは、今は亡きレオニスの父ロムルスが、過去に用いた策の応用だった。聖地を守るため、聖法庁の軍を無血開城して迎え入れる。度重なる戦乱を経験してきた聖地において、常套手段ともいえる智慧であった。

彼ら聖法庁の騎士団は、すぐさま砦を放棄しようとした。このままでは激戦の最前線にされてしまう。だが全ては遅かった。

その夜――

街道から、森から、丘を越え、続々と篝火の群が集まり始めたのである。

砦から見える限りの地帯を、びっしり埋め尽くすほどの数の暴徒が現れたのだ。

ドラクロワの七翼の兵団の一つ――黒翼神聖兵団を名乗る暴徒たちである。

黒い翼をあしらった旗が、篝火とともに砦の兵に戦いの覚悟をうながした。

もはや逃げ場はなかった。生き延びるには、暴徒の一員となるか、暴徒と戦うか、二つに一つである。騎士団は、レオニスの意図通りになったことを知りつつも、後者を選んだ。

聖王の勅命で動く騎士団にとって当然の選択であり、これもレオニスの読み通りだった。

かくして——

夜明けとともに、暴徒の群が砦に殺到した。

聖地を守るためのレオニスの死力を尽くした戦いが、そうして始まった。

「敵の戦術を確かめるのが先だ。聖法庁の騎士団には、その役を担ってもらう」

レオニスは言った。眼前には無数の針に貫かれた極彩色の地図がある。またもう一つ、別の円卓に、精密な聖地の地図があった。それにも既に無数の針が突き立っている。

執務室ではなく、審議のための広間に、いた。廷臣たちや騎士たちがずらりと居並び、レオニスの地図を——戦図を注視し、レオニスの声に耳を傾けている。

「敵は全員で攻めているか、それとも幾つかの集団に分かれているか教えて欲しい」

戦いのための指揮所であるそこに、ノヴィアもいた。レオニスの傍らに立ち、遠く、あらぬ方へ目を向け、レオニスの問いに答える。

「全員ではなく、順番に来ています、レオニス。次に攻める人たちが、一列に並んで順番を待っているのです。そうして次々に、砦を攻めています」
万里眼の力をもって戦場の様子を見て取り、ノヴィアは告げた。
「蝗波戦術だ。民はおのずから学ぶ」
レオニスは言った。ただひたすら四方から集まり、人海戦術で押しまくる蟻戦に比べ、より高度な集団戦闘であった。蝗のように、直進方向に向かって、何波にも分けて兵を放つのである。最初の波が収まるとともに、次の波が、その次の波が襲ってくる。
そうすることで人海戦術の最大の欠点――同士討ちを防ぐのが最大の目的だった。これまでは矢を放つにしても無思慮に行われ、前方の敵味方を問わず殺戮していたのだ。何度も戦闘を経験するたびに、より合理的な攻め方を、暴徒が自然と学習した証拠である。
「敵は横一列に並んでいるのかい？　何人くらいで？」
「横一列です。二百人ほどが一度に攻めています」
「単純な横列戦術だ。まだ複雑な戦術は学んでいない。敵の陣地はどの辺りかな？」
「砦の西側……ここに宿営地を設けています」
「よし、騎士団に通達。棚の三の一の書状を、西の一の五の部隊に渡せ」
レオニスの命令に従い、伝令役の一人が、素早く壁に駆け寄る。壁を埋め尽くす棚には、

ありとあらゆる状況を想定した、大量の指令書が用意されている。
「三の一の書状を、西の一の五へ」
伝令役が、レオニスの告げる番号を復唱して正確さを期し、駆けてゆく。
かと思うと、控えの前にいた伝令役が一人、補充される。こうして常に十名近い伝令役がレオニスのそばにいることになるのだった。
「よし、六の二の書状を、西の二の部隊に渡せ」
「はっ、六の二を、西の二へ」
「十八の一の書状を、西の三の民たちへ。緒戦が有利であることを街中に広めろ」
「はっ、十八の一を、西の三へ」
「レオニス、待機していた列の一つが順番を守らず北へ回り始めました。進路は……」
ノヴィアが指で地図を示し、敵の動きを伝える。
「功を急いたな。言うことを聞かない部隊はどこにでもいるものさ。五の書状を西の一の三へ。取り囲んで叩き潰せ」
「はっ、五を、西の一の三へ」
次々に伝令が放たれる。戦場から遠く離れた城の一室にいながら、全てを手中に収めるかのような光景に、廷臣たちも騎士たちも身震いせんばかりに奮いたっている。

ノヴィアが戦場の様子を見て取り、レオニスが何百通りもの指令を次々に取捨選別し、迷わず発令する。さながら二人で一人の王であった。
もはや誰も、ノヴィアの血縁が聖地に紛糾をもたらすなどとは思わない。それどころか、ノヴィアとレオニスの二人が揃って初めて、聖地の王座が完成されたような感慨があった。
聖地シャイオンの双王――
ともに力を尽くして協力し合うノヴィアとレオニスの姿から、いつしかそんな呼称が生まれ、この日のうちに聖地に広まった。それは聖地の歴史の輝かしい結実であり、勝利への絶大な信頼をこめた呼び名であった。

戦いの初日は、聖地の圧倒的な優勢のうちに日没を迎えた。
夜の帳が降り――聖地シャイオンの城の一角で、ひそかに出陣する者たちがいた。
選りすぐりの武人たち十数名。全員が、敵から奪った聖槍を持ち、馬にまたがっている。
そこにトールもいた。傍らで、アリスハートが不安をこらえた明るい顔を見せている。
「トールのことだから心配してないけどさ。でもさ。死んじゃ駄目だよぉ、トール」
口調は明るいが、言葉も態度も心配の固まりになるアリスハートだった。
「心得ています、アリスハート。すぐに戻ります」

トールは微笑み、馬腹を蹴った。夜に紛れて、少数の騎馬が動き出す。
狙いは敵の増殖器だった。この戦いの帰趨を決するといっていい、敵の切り札である。
その切り札の位置と数をノヴィアが見抜き次第、すぐさま動けるよう待機するのがトールたちの役目だった。緒戦が終わりを告げるまでじっと待ち続け、そして今、確信をもって動き出す彼らを、アリスハートが全員の帰還を祈って見送るのだった。
何千何万という兵力に匹敵する増殖器の最大の欠点は、ひとたび使用すると移動させるのに恐ろしく手間がかかることにあった。木のように根を張ってしまうのである。その原理がジークの力と同じく、大地を力の源としているせいだ。
増殖器の根を切り、移動させる者たちは、今やそれを専門とする部隊となっている。下手に根を切ろうとすれば逆に魔獣に襲われる。それを抑えての作業に時間がかかるのだ。
そのため緒戦に間に合わなかった増殖器の運搬部隊は、夜を徹して聖地に向かっていた。
一方、黒翼神聖兵団を名乗る暴徒たちは、聖地の西に陣地を築き、初日の苦戦に怒りと憎悪を溜めている。みなが増殖器の到来を待ち望み、聖地を滅ぼす欲望に煩悶していた。
そこへ——にわかに聖槍を持つ一団が来て、
「増殖器は来ない！　全て聖法庁の兵の襲撃に遭い、破壊された！」
大声で告げたものだ。

暴徒を指揮していた秘法士たちは文字通り飛び上がって驚き、地団駄を踏んだ。怒りの余り、切り札が失われたことを全軍の前で公開する愚かさに気づいていない。
「こうなれば明日、全員であの砦を襲うしかない。我々の怒りを見せてやるのだ」
トールたちはそう叫んで、暴徒を煽った。そのトールたちの槍も衣服も返り血で汚れていることに誰も注目しない。暴徒たち全員が似たような姿だったからである。聖槍を持っているというだけで、完全に味方だと信じて疑わなかった。
ノヴィアがもたらしてくれた情報をもとに、増殖器の運搬部隊を皆殺しにしたトールたちは、各所で暴徒を煽った。怒りで士気は高まるが、代わりに統率が失われた。明日は蝗波戦術を駆使する余裕もなくなり、ただの蟻戦に戻るに違いない。聖槍を持って暴徒を指揮する役にある者さえ、その気になっているのだ。
本当に、戦を知らないんだな――
トールはつくづく思う。普通の軍ならば、切り札を失ったなどという情報を漏洩した者をまず斬首する。そして厳しい統率をもって、闇雲な怒りを抑えつつ、士気を保つ。
そのような戦いの機微は、この集団には全く無い。
トールたちの任務は、少数で敵の切り札を奪うという危険極まりないものだったが、暴徒たちを前にすると、そんな気持ちも薄れてくる。

死んじゃ駄目だよぉ――

アリスハートの言葉を、暴徒の全員に叩きつけてやりたかった。

女子供もいる暴徒の群が、明日からまた死屍累々の惨状へひた走る様が目に見えるようだ。その想像に、トール自身が危うく戦意を喪失しかけた。

剣を棄てたいと念願しながら剣を握り続けるジークの哀れさが、ふいに胸を打った。

悲痛に支配される前に、トールは仲間とともに暴徒から離れ、闇に紛れて城へ戻った。

戻ると約束した相手がそこにいることが、トールを、心底から安らがせていた。

聖地シャイオンの防備は、湖を中心として四方に広がる「羽」に喩えられた。

堅固な城壁や砦が、北西・北東・南西・南東へと膨らみをもって広がり、地図にすると、まるで蝶が羽を広げたように見えるからだ。

これは聖地シャイオンが平地にあるせいだった。険峻な地形であれば四方全てを守る必要はない。平坦な土地はたやすく攻囲を受ける。そのための広範囲に亘る城壁であった。

レオニスは大勢の優れた建築者たちを招き、最高の城壁や砦を設計させていた。地形を最大限に利用し、聖地を守りやすく攻めにくい難所と化しめたのである。

守りやすく攻めにくいとは、味方は移動しやすく敵は移動しにくい、見張りやすく見抜

かれにくい、落としやすく登りにくい、塞ぎやすく開きにくい、修復しやすく壊しにくい
——その他、多くの要点に応えたものでなければならない。
そうした知恵の結晶のような四つの「羽」こそ、聖地の鎧であり、また逆に矛であった。
北西の「羽」に、黒い翼の兵団が到来し、緒戦の火ぶたが切って落とされた三日後——
南西に、白い翼の兵団が押し寄せてきた。
「行け！　ドラクロワ様を侮りし愚物たる聖地の領主を、八つ裂きにせよ！」
右腕をトールに斬られ、復讐に燃えたぎる女——槍の巫女ことレギンが、各地の暴徒を引き入れ、兵団を再生して現れたのであった。
また同日、南東に、別の兵団が現れた。
碧翼神聖兵団——レオニスの策により、豊穣の地を奪い合っていた者たちである。本来なら、とっくに聖地を攻めていたはずの兵団だった。全ての増殖器を同士討ちのために使用し、土地を枯らし尽くして、やっと移動したのだ。
三つの兵団を相手に攻防を繰り広げる聖地に、さらに数日後——
北東に、四つ目の兵団が侵攻してきた。
紫翼神聖兵団——聖法庁を攪乱しながら聖地を目指してきた、ほぼ無傷の兵団である。
ここに至って、聖地は完全に包囲された。さながら四つの蟻の群が、四方から蝶の羽に

食らいつき、貪ろうとしているようであった。
「――この場所で敵が増殖器を使いました。敵が、壁を乗り越えてきます」
ノヴィアが地図の一点を指さして言う。ただちにレオニスの指令が飛んだ。
「書棚の一の三、南の二の部隊へ！」
「はっ、一の三、南の二へ」
「城壁のここと、ここに、敵が集まってきます。両方に増殖器が運ばれてきました」
「書棚の五の二および五の三を、北の二と三の両部隊へ」
「五の二と三を、北の二へ」
「五の二と三を、北の三へ」
そこへ別の伝令の者が来て、
「敵に移動あり！」
「味方に損害あり！」
などと叫びつつ、壁にかけられた別の地図に、あらかじめ指示された記号を書き込んでゆく。ノヴィアの万里眼でも追いつかぬほど敵の数が膨れあがったため、一部の情報を伝令に任せるしかなかった。

指揮所にいた廷臣たちも騎士たちも、みな各方面部隊の指揮を執るため出払い、あるいは報告をしに駆け戻りと、息つく暇もない。
「……よく守っている」
それでもなおレオニスは、焦慮や苛立ちとは無縁だった。最小限の兵力で、次々に最大限の防衛を指示してゆく。それが出来るのも、何度となく建て直させた、芸術品のような防備の賜物である。
聖地シャイオンの特徴は、平地であることと、幾重にも水路や河が伸びていることにある。そして城壁のほとんどが、この水路と一体となっていた。
城壁の前に水路があって攻めにくくしていると同時に、たいていは、それよりも幅の広い水路が、城壁の陰に隠れていた。苦労して城壁を乗り越えた途端、目の前には流れる水があるのだ。ほとんどの敵にはそれが見えず、次々に壁を越えては水の中に落ち、そこへ矢を射られ、槍で刺されて死んでゆく。城壁の外にいる敵は、仲間が次々に壁を越えているのに一向に門が開かぬことを疑問に思いつつも、どんどん罠にかかってゆく。
一方、城壁の下から穴を掘り進めて侵入しようとする敵もいたが、その全てが水路をぶち抜き、流れ込んだ水で溺死するという結果に終わった。
四方に膨らんだ城壁の形そのものも、罠だった。暴徒たちが雪崩れ込むうちに、自然と、

膨らんだ「羽」の間に集まってきてしまうのである。そうなると一つの敵に対して二つの「羽」が守ることになる。複数の砦から打って出る聖地シャイオンの兵によって、多くの敵の先鋭が挟み撃ちになって撃滅された。

暴徒たちがこれまで経験したことのない堅牢さでもって守戦を果たす聖地であったが、それでもなお攻撃はやまず、日に日に聖地に打撃をもたらすようになっていった。

危機は、北から訪れた。

ノヴィアが森の中を歩んで聖地へと入ったことからも明らかなように、城壁は必ずしも聖地の全土を覆っているわけではないのだ。特に湖に面する北の森は、その地形を防備としていた。森の中を、舟を引きずって進めるわけがない。森を越えて来た敵は、巨大な湖の前で立ち往生するかに見えた。

だが蟻戦の恐ろしさが、そこで発揮された。何千という人間の手で、次々に森の木を伐り倒し始めたのである。そして木で筏を作り、湖を渡って城へ直進する気だった。

それを防ぐために聖地の兵が何度となく打って出た。トールも、兵たちとともに筏を作ろうとする暴徒たちを斬って回った。しかし数が多すぎた。いつしか直立する木よりも、そこに群れ集う暴徒たちの方が数が多くなった。

暴徒たちは森の中に――その頃には丸刈りとなった切り株だらけの平地に、簡易な陣地を作ると、そこを拠点として聖地へ侵攻する用意を整え始めた。
その報告を受けたレオニスは、すぐさま、ある策をもって敵を防ぐことを決意した。
「棚の二十の一を、北の一、二、三の部隊に渡せ」
「はっ、二十の一を、北の一へ」
「二十の一を、北の二へ」
「二十の一を、北の三へ」
伝令役たちがすぐさま書状を持って走る。全て、撤退を告げる書状であった。
「黒の鍵の一を開き、中の書状を、城の八へ渡せ」
レオニスは言って、伝令役に鍵を渡した。黒く塗られた鍵である。その鍵を持って、伝令役が部屋の一隅に置かれた小さな鉄製の棚に向かう。そして錠を開くと、そこに収められていた数通の書状の一つを手にとった。その書状も黒い封に入れられている。
「黒の書状の一を、城の八へ」
伝令が走る。城の八とは、レオニスが招いた者たちを職業別に分けた呼称だった。一は建築士、二は農師などである。そして城の八は、博士たち――聖印の研究者を意味した。
ノヴィアはその黒い書状に、恐るべき予感を覚えた。

「レオニス……いったい、何を……」
レオニスは厳しい顔を地図に向けたまま、告げた。
「聖地の伝説を、再び呼び起こす」
その意味を、ノヴィアはすぐに思い知った。
黒い書状はすぐさま城で待機していた博士たちのもとに届けられた。
そして少数の兵に守られ、博士たちは迅速に湖に向かったことがレオニスに報告された。

筏の群が次々に湖面へ運ばれていった。
暴徒たちが喚声を上げて筏を漕ぐ。中には、増殖器を乗せた筏まであった。湖上には先ほどまで軍船が居並び、暴徒たちに矢を射かけていたが、それらも既に撤退している。
遠く対岸に見える美しい城を前にして猛り狂う暴徒たちは、やがて、異様なものがそこにいることに気づいた。
湖面に、女がいた。
血のように紅い髪と目をした、ロザリアである。
少女のような微笑みを浮かべ、空気のように水面を歩む美貌の女に、暴徒たちが呆気に取られる。そしてそのロザリアのすぐ足下で、にわかに輝きが起こった。

鏡のように澄んだ湖が、それ自体、光を放ったのだ。そしてその輝きとともに――暴徒たちにとっての、また聖地にとっての悲劇が、姿を現した。
湖面が大きく盛り上がるや、爆発したような水しぶきを上げ、恐るべき怪物が、かっと顎を開き、天地を引き裂くがごとき咆吼を上げたのである。
竜骸――竜精と対をなす、堕気を無限に吸収する怪物であった。
どろどろに溶けたトカゲのごとき顔に、幾つもの眼球が一挙に開いた。巨大な鋸歯を剝き、筏を叩き壊し、恐慌する暴徒たちを食らう。
かつてレオニスが呼び起こしたものより、二回りほど小さい。せいぜい城壁の上に頭が届く程度である。だが、その一頭だけではなかった。
「レオ、ニス――」
ロザリアが、笑った。
その足下から、なんと次の竜骸が現れ、暴徒の方へと向かってゆく。
さらに三つ目、四つ目の竜骸が、次々に湖面から姿を現す。
湖面を歩むロザリアに率いられるようにして、いつしか十体近い竜骸が進みゆく。
対岸で陣地を敷く暴徒たちは、揃って恐怖の絶叫を上げている。その恐怖に誘われるように、竜骸たちが歪んだ足を引きずって対岸に渡り、暴徒たちを食らって回った。

その様子を、湖畔の一角に居並ぶ博士たちが、遠眼鏡で見守っている。
「そろそろですな」
博士たちの一人が、ぼそりと言った。
刹那――爆音が轟いた。対岸で、夕焼けの輝きにも似た劫火が吹き荒ぶ。
竜骸が、人を食らって堕気を蓄積し、ぶくりぶくりと膨らむや、にわかに炸裂したのだ。
「思ったより堕気が強そうですな」
「湖の聖性で抑えていた分の反動でしょう」
「臨界に達する速度は計算通りですな」
博士たちの呟くような言葉とともに、竜骸が次々に内側から吹き飛んだ。
空が爆煙で曇り、対岸は夜が訪れたような暗さである。そしてその暗さの中、かっと閃光が走り、凄まじい地鳴りとともに、何もかもを灰燼に帰す爆発が起こるのだった。

「なんということを……。レオニス……」
劫火が北の森を、人を、耕地を焼きつくす恐るべき光景に、ノヴィアは恐怖よりも悲しみを感じた。これでは敵もろとも聖地が滅ぶ。怪物が炸裂した場所には堕気が荒れ狂い、一瞬にして土地が枯れ果てる。レオニスにそれが分かっていないはずがない。

「竜骸は所詮、秘儀の最初の鍵に過ぎない。ここからだ……。秘儀の真の姿は、死と腐敗の果てに現れる。僕が秘儀を使うさまを、どこかで見ているな……ドラクロワ……」
レオニスの烈々たる独白に、ノヴィアは胸騒ぎを覚えた。まさかレオニスは、敵に勝てぬと分かれば、その手で、聖地を滅ぼす覚悟なのではないか。敵もろとも、自分ごと、何もかもを劫火に呑ませる気では――
「黒の鍵の二を開け。中の書状を、城の八へ」
レオニスが言って、黒塗りの鍵を伝令役に手渡す。伝令が二つ目の鍵を開き、黒い書状を持って出て行くさまに、ノヴィアは思わず声を上げた。
「やめて、レオニス！　聖地を荒野にする気ですか！」
「ノヴィア……」
レオニスが振り返る。その眼差しにこめられた悲しみに、ノヴィアは口をつぐんだ。
「すまない……。でも、どうか信じて欲しい。聖地を滅ぼしはしない。たとえどれほど土地が傷つこうとも……秘儀の力の、さらに先にあるものを、必ず、君に見せる」
いったいレオニスが何を言っているのか、まだこのときのノヴィアには到底、理解がつかなかった。だがレオニスの悲しみは本物だった。まるで自分の体の一部を失うかのように――一部の土地を犠牲にして、聖地を守ろうとしていた。

そうする間にも立て続けに報告が訪れ、ノヴィアに、それ以上レオニスの心を確かめる余裕さえ与えなかった。
そうして——東側で、それが現れるのを、ノヴィアは見た。
巨大な植物のように根を張った竜骸が、敵の陣地のど真ん中でいきなり出現したのだ。かつてノヴィアが見たものより遥かに小さい。だが数が違った。湖から現れたものと同じように、次々に林立し、まるで怪物が群れ集って死の宴を楽しむかのようだ。
その全ての竜骸が、立て続けに炸裂した。堕気が吹き荒れ、緑野は一瞬で焦土と化した。
聖地の北部から東部にかけて死の大地が広がった。真っ黒な灰と煙が立ちこめ、全身に火傷を負った者たちが呻き声を上げてさまよう。その地獄絵図を目の当たりにして悲痛に震えるノヴィアに、やがて、さらなる悲劇が訪れた。

「南の正門に……敵が、捕虜を並べております」
伝令役の報告に、さっとレオニスの顔色が怒りで青ざめた。
「矢は」
「届きませぬ」
伝令役が、ちらりとノヴィアを見る。その視線の意味がノヴィアには咄嗟に分からない。

レオニスはしばし沈黙した。そして、ノヴィアを振り返り、苦痛に耐えるように、言った。
「頼む……ノヴィア。正門に行って欲しい。おそらく君の力が……必要だ」

城から馬車でノヴィアは正門へと運ばれていった。兵士たちだけでなく、領民が総出で戦いに参加していた。武器を運ぶ者、負傷者を運ぶ者、食料を配る者などが、そこら中をきびきびと走り回っている。馬車の中で、ノヴィアは疲労の回復に努めた。終日、力を駆使し続けているのだ。しっかりと目を閉じ、宝杖を額に当て、聖性を回復させる。

正門を訪れたノヴィアを、騎士たちが、いやに粛然とした顔で出迎えた。
「さ、こちらへ……」
促されるままに階段を登って城壁の上へと向かう。そこに、なんとトールがいた。その傍らにはアリスハートがいて、泣き腫らした目をノヴィアに向けた。
「ノ、ノヴィアぁ……あ、あれ……あんなの、ひどいよ、ひどいよぉ……」
しくしく泣きながら胸にしがみつくアリスハートを、優しく撫でつつ、トールを見る。
「いったい、何があったのですか……。私に、何をしろと……」
「あれを、ご覧下さい……ノヴィア様。そしてどうか、彼らをお救い下さい」
ノヴィアは、城壁の外へ目を向けた。楯の間にあるのぞき窓からではなく、万里眼の力

を使ってそれを見た。途端に、血の気が引いた。
聖地の兵が何人か、敵に捕らえられ、城門から離れた場所に、さらし者にされていた。
それだけではない。横一列に並ばせられ、ありとあらゆる苦痛を施されている。斬られ、焼かれ、抉られ、そして叫ばされる。
「た、頼む、門を開けてくれ！」
「門を開けて！　ぎゃぁっ！　ぎゃぁぁぁーっ！」
耳を塞ぎたくなるような悲鳴とともに、門を開けてくれという味方の叫びがひっきりなしに響き渡る。そう叫ぶよう敵に強制されているのだ。捕虜の悲鳴と、拷問を食わせる暴徒たちの残虐な笑い声が、ノヴィアの心をかきむしった。
「なんということを……」
ノヴィアは心底から震え上がった。このまま走って逃げ去りたいほどの悲嘆があった。
その傍らにトールが来て言った。
「あのような真似をすれば、我々が門を開くと本気で思っているかは分かりません。彼らにとっては、こちらを苦しめさえすれば良いのでしょう」
ここで開門すれば敵が殺到する。まかり間違って門を開こうとする者がいないよう、捕虜の肉親や類縁、友人のたぐいは、とっくにこの正門から離れさせられている。

そして代わりに、この場にノヴィアが呼ばれた。その意味を悟り、ノヴィアは愕然と凍りついた。にわかにトールの顔を見ることが出来なかった。おそらく自分を注視しているであろう、聖地の兵たちにも目を向けることが出来ない。

嫌だ――！

その叫びを、トールの穏やかな声が、封じ込めた。

「どうか彼らを、お救い下さい。何人かは矢で仕留めました。しかし、そのせいで敵が後退し、矢が届かなくなったのです」

「わ、私……」

「このままでは、こちらから打って出ようとする者を、止められなくなります」

敵の意図通りに開くばかりではない――怒りのあまり門を開いて敵に向かって突進しようとする者もいるのだ。もはや兵の怒りは頂点にまで達そうとしていた。

ノヴィアは目を閉じた。逃げ場はなかった。自ら、聖地にとどまって戦うことを決めたのだ。どのような悲劇も見守る覚悟で。それが今、恐るべきかたちで試されていた。

静かに目蓋を開いた。

「矢が……見えます」

流れる涙とともに、はっきりと命を絶つ意志をもった矢が、幾つも幻視された。

矢が放たれた。
捕虜たちの悲鳴が、ぷつんと絶えた。まさに一瞬だった。彼らが、その心臓へ正確無比なる矢を放った者に対し、感謝して死んでいったかどうかは、永遠の謎となった。
敵がわっと驚いて退いた。
捕虜に拷問を加えていた者たちの手足を、怒りと悲しみの矢が、次々に貫いていった。

指揮所に戻ったノヴィアを、レオニスが、悲しそうに出迎えた。
「すまない……。ありがとう……ノヴィア。本当に……」
ノヴィアは子供のようにしゃくり上げながら、レオニスに歩み寄った。そしてそのままくずおれるように膝をつき、レオニスに抱きついた。レオニスは少し驚いたような顔をしたが、すぐに悲しみをこめてノヴィアの背に両手を回した。
ノヴィアは言葉にならぬ声で泣き叫んだ。敵の命を奪ったのではない。はっきりとした意志をもって、味方の命を奪ったのだ。助けてくれと叫ぶ者たちの命を。より多くの命を救うために。人質への拷問などに決して屈しはしないと、敵に知らしめるために。
「や……約束……して下さい……レオニス……。こ、この戦いの向こうには……へ、平和が、あるのだと……。い、いかなる傷を、人と、心と、土地に、負うことに、なろうとも

……豊穣が、あるのだと……。幸せが、あるのだと……」
震えながら泣くノヴィアと、必死の顔でその声を聞くレオニスの姿を、廷臣や騎士や伝令役たちが、粛然と見守っていた。
「約束する……」
レオニスはノヴィアの背を抱きしめ、決意のみなぎる顔で、言った。
「この僕の命に替えても……必ず、約束を守ってみせる。この聖地にしか実現できない平和を、もたらしてみせる。姉さん……」

ノヴィアが――聖地の双王たる者の一人が、悲痛の涙を飲んで人質たちを苦痛から解放したことは、美談となって領民の口にのぼり、その結束をうながした。
廷臣たちや騎士たちに、ノヴィアの行いを美化して語らせたのはレオニスである。ノヴィアが決して望まぬことを承知しながら、そうしたのだ。領民たちの、敵への憎しみと、王への信頼と、勝利への意志を、確固としたものとするために。
暴徒たちの大半が、今や南の正門へと殺到してきていた。竜骸によって壊滅させられた紫の翼と、碧の翼の残党を、白い翼の兵団が吸収し、大群となって蝗波戦術を繰り返す。
北西では、黒い翼の兵団が、不審な動きを見せるようになっていた。

聖法庁の騎士団と、聖地の兵を相手に、がむしゃらな蟻戦を仕掛けていたのが、徐々に陣地に後退し、何かを窺い始めたのである。

それが何であるか、レオニスは直ちに悟った。

「隣国が、ドラクロワに呼応したのだろう――」

限られた廷臣や騎士たちの前で、レオニスは言った。

「ただの暴徒の群ではない。隣国の騎士団が多数の兵をつれて来る。増殖器もあるだろう。こちらが疲労するのを待ち、今が機と見て、動いたんだ。北西の暴徒は、その援軍を待っているに違いない」

そしてその言葉を、危険を冒して城壁の外で情報を集めていた斥候たちが、裏付けた。

隣国の兵が街道を南下し、大挙して聖地へ向かっている――

指揮所に勤める者たち全員が、緊迫した。その報告が間違っても領民に洩れぬよう細心の注意を払いつつ、レオニスは情報を知る限られた者たちに、檄を飛ばした。

「ここが正念場だ。死力を尽くし、聖地を守れ」

これを受け、みな、いっそうの防備に努めるべく聖地の各方面へ向かう。

一方でレオニスは、いざとなれば北西一体を竜骸の巣にする覚悟でいる。それがノヴィアにはうすうす感ぜられるのだ。北部には重要な耕地が幾つもある。それを狙って最初の

暴徒たちは北西から来ていた。そこが焦土になれば、豊穣の地の大半が失われるだろう。滅びがすぐそばに迫るような思いだった。ノヴィアは、全てを見届ける勇気が自分にあることを祈った。たとえ滅びを目前にしても、最後まで戦う気力を失わないことを。

四方から攻めてきていた暴徒たちは、今や、南北からの攻めに集中されていた。南では一進一退が繰り返され、北西では不気味な沈黙が日に日に強まってゆく。

北から、より強大な敵が来る――

そのことが、少しずつ聖地の兵たちにも察知されていった。だが士気を衰えさせるような状態にはさせない。そのために、ありとあらゆることをした。なんとレオニス自ら北西の砦へ赴き、ノヴィアとともに聖地の勝利を確信させるようなことまで行った。

またレオニスは、北西の砦を明け渡していた聖法庁の騎士団とも会っている。

ドラクロワという共通の敵がいることを強調し、武器や兵糧が不足すればただちに送り、間違っても彼らが暴徒の一員にならないよう思慮を怠らなかった。

騎士団としても、ドラクロワをここで討てれば歴史に残る名誉となる。またドラクロワの兵団と渡り合ったというだけで今の聖法庁での武勲は確実だ。無事に防戦を果たしたあかつきには、聖地は、騎士団への様々な供与を約束する。そういう利益を示し、しっかりと騎士団の戦意をも保った。

そうして厳しい戦いが一日また一日と行われた。
指揮所の書棚の指令書が不足し、次々に書き足された。ついに一度として指令が間違ったり届け損なったりしたことはなかった。混沌とする戦場にあってまさに奇跡といえた。
そして――
「隣国の騎士団が、あと一日の距離にまで近づきました」
斥候の報告が来た。
指揮所の面々は、微動だにしない。悽愴とさえいえる覚悟に満ちている。
「来たか……」
レオニスはにわかには指示を出さない。既に、防備を整え、暴徒を牽制し、長期的な戦いの計画を立て――そして密かに博士たちに秘儀の使用を準備させていた。
事前に打てる手は全て打ってある。
ただ、待つばかりであった。そのときを――聖地の存亡を賭けた戦いのときを。
「必ず、約束を守る……ノヴィア。この身に替えても、必ず……」
そう口にするレオニスの手を、ノヴィアはただ力をこめて握った。
やがて陽が没した。さらなる敵の到来を前にした重い緊張に満ちた夜であった。
敵が焚く篝火の群が、圧倒的な暴虐の気配をみなぎらせていた。

お互い、奇襲もなく、先駆けもない。膠着の夜が過ぎた。
そして夜が明け――猛り狂う暴徒たちが攻め寄せてきた。敵の援軍がまだ到来していないうちから、血気にはやった者達が戦いを始めたのだ。
黒い翼の兵団は、気づけば南側へと移動している。暴徒なりの策であろう。南側に攻撃を集中させ、防備を引きつけたところで、北西からの援軍と呼応する。
レオニスはむろん、北西の防備を怠らない。敵が一人も来ないうちから、徹底して戦いの気運を盛り上がらせている。もはや情報を隠す必要がないほどの士気の昂ぶりであった。
南側で熾烈な攻防が繰り広げられる一方、北は異常な静寂に満ちた。
やがて昼になったが、敵はまだ来ない。
じりじりと焦げ付くような時間が過ぎ、陽が午後へと傾いてゆく。
「まだ敵は来ないか」
午後へ入り、レオニスは斥候へ確認の伝令を出した。
ノヴィアの万里眼でも、北方に敵の姿は見えない。緊張と焦燥が指揮所に満ちた。いっそ大群の敵が現れた方が、まだ安心するだろう。
「まさか……街道を外れて、どこかへ迂回したか」
極彩色の地図を睨み、迂回路を読もうとする。暴徒たちが、二重に罠を仕掛けた可能性

が高かった。北西に来ると見せかけ、全く別の方角から来るのだ。
「よし、さらに斥候を出す——」
レオニスが決心しかけた、そのとき。突然(とつぜん)、伝令役が指揮所に駆け込んできて、吠(ほ)えた。
「敵は来ませんっ！」
その一言で、指揮所が静まり返った。レオニスもノヴィアも咄嗟(とっさ)に唖然(あぜん)となる。
「——なんだと？」
レオニスが声を絞(しぼ)り出すようにして聞き返す。伝令役は顔を真っ赤にして叫(さけ)んだ。
「く……来るのは、ただ一人！　ただ一人です！　そう伝えるよう、斥候の兵が、その男から命じられたとのことです！」
ノヴィアが、一歩、前に出た。
「まさか……。その方一人で……北から来る、全(すべ)ての敵を……」
伝令役の男が、大きくうなずいてみせる。ノヴィアの目に、ふつふつと涙(なみだ)が浮(う)かんだ。
「〈招く者(レギオン)〉——」
レオニスが、震(ふる)える声で、言った。
「ただ一人の——軍団(レギオン)……」

2

間に合ったか――

街道を歩みゆくジークの胸に、強くその思いが湧いていた。

最良の機会を捉えることが出来た喜びは、軍略で動く者として、やはり何ものにも代え難いものがあった。たとえ、予言によって示されたものをきっかけとしていても、それを実現させたのは、純粋にジーク自身の判断と力だ。

あと数日、聖王との連絡が遅ければ、みすみす聖地シャイオンに隣国の兵を侵攻させるところだった。また連絡が早すぎれば、敵の援軍を考慮して動くことは出来なかった。

どちらの場合も、今、ジークが歩みゆく一帯をことごとく荒廃させていただろう。レオニスが聖地を守るため、秘儀の力を行使することは予想がついていた。既に聖地の各所で、その力が使われたらしいことは報告を受けている。

聖王は、出来ればレオニスに秘儀の力を全て使わせたかっただろう。そうすることで、レオニスがどこまで秘儀を自分のものにしているか分かるからだ。そのためにジークの派遣をわざと遅らせることも、十分に、あり得た。

そうならなかったのは、聖地の隣国に動きが生じたからだ。ドラクロワが彼らを動かし

たからには、秘儀の成就が近い可能性があった。
そしてちょうどそのとき、ジークは、そこにいた。隣国の兵の侵攻を妨げることが出来る場所に。それが未来だった。そのとき、そこにいることが。
聖王の命令を受けてジークは聖地へ急行し、南下する隣国の兵と激突――昨夜のうちに潰走させていた。聖地の斥候が「あと一日」と判断した、その直後である。
かくしてジークは、南側へ移動した黒い翼の兵団とぶつかることなく、まさに無人の野を進み、聖地に到来した。そして砦の前で、門を開けるよう声を上げようとしたとき――
小柄な人影が、横合いから現れるのに気づいた。
黒い翼の兵団が陣地を敷いていた方角から、レティーシャが現れたのである。
腹に頭蓋骨を抱えた妊婦のような姿で、両手に槍を持っている。その槍のお陰で、敵兵団に見咎められずここまで来れたのだろう。ジークが聖地に急行する際に、ふいと姿を消していたのだ。兄の予言に従って先回りしていたらしい。もしかするとジークに奇襲をかける気だったのかもしれない。どんよりした目を、じとっと向けてくるレティーシャに、
「俺を、ここで殺すか」
ジークは淡々と言った。
「……むぎ」

レティーシャの眉が、きつくひそめられた。心底、悔しがっているようだった。
そのとき、ジークの前で、城門が音を立てて開かれた。
「ジーク・ヴァールハイトよ！　どうぞ我が主のもとへ、足をお運び下され！」
廷臣が歓喜の叫びでジークを迎えた。砦にいた者たちが一斉に歓待の声を上げる。
ジークは無言で城門をくぐった。その後を、うつむくレティーシャが追った。

ジークが迎え入れられたのは、王座の広間であった。火急のときを告げるこの戦時においては特別なはからいである。指揮所にいるべき者たちが、揃って王座のもとに集まることになるからだ。またジークの働きにはそれだけの価値があった。
北西の砦に集結していた部隊の大半は、南門防衛の援護に向かっていた。暴徒たちも、今や呼応すべき軍が来ないことを察して、いったん撤退しつつある。
ジークは平時も戦時もまるで変わらぬ態度で、悠然と広間に入った。
ずらりと居並ぶ廷臣たち、騎士たちが、ジークに熱い視線を注ぐ。王座にはレオニスが、その傍らにはノヴィア、やや離れた場所にトールとアリスハートが、いた。
「聖王の騎士よ、この危急存亡のときに駆けつけてくれたことを心から感謝申し上げる」
レオニスは言った。その顔は決して安堵や歓喜の色を浮かべていない。むしろ厳しく引

き締まり、ジークがどのようなことを口にするか、既に予想がついているようだった。
「俺は、お前の罪を問いにきた、レオニス」
ジークの鋭い声が、広間にいる者の耳を打った。
「ジーク様……」
ノヴィアが思わず王座の段から降りようとするのを、レオニスが身振りで止めた。
「この僕を捕らえ、聖王のもとへつれてゆく気か」
ジークは無言。レオニスは静かに告げた。
「今このとき、王座を離れるわけにはいかない。王として国を守らねばならないからである。だがこの危難を乗り越えたあかつきには、自ら聖王のもとへ参上するつもりである。
今ここにいるノヴィア・エルダーシャの和平の導きに従って」
ジークはうなずいた。レオニスが最も正しいことを口にしたというように。
「ならば――」
ジークが口を開く。その言葉を、その場にいる全員が緊張して待った。
「俺がその道を開こう」
おお――!
歓呼が湧いた。聖法庁、最強の軍団の参戦が表明されたことへの喜びの声であった。

だがジークとレオニスは、笑み一つ浮かべず、互いを見据えている。レオニスの眼差しには明らかな挑戦の意志があり、ジークは無言でそれを受け止めていた。
その二人の様子を、ノヴィアは祈るような思いで見守っている。もし二人が戦いを始めるならば、身を挺してでも止めねばならない。そういう決意があった。
歓呼が静まるとともに、ジークは言った。
「秘儀はどこにある、レオニス」
その重々しい声音に、広間がしんとなった。
「この聖地の命である湖に。ジーク・ヴァールハイト、あなたを彼女に会わせたい」

トールがレオニスの乗る車椅子を押し、その傍らをノヴィアが肩にアリスハートを乗せて歩む。ジークは無言でレオニスの隣を歩み、ぞろぞろと付き人たちが従う。
湖畔に来るや、その惨状が目を打った。湖の対岸の森は、伐採されて丸裸になった挙げ句、劫火の跡も生々しい焦土と化し、堕気が渦を巻いている。
ジークは、湖を挟んで広がる腐敗した土地を見た。荒廃を嘆く前に、疑問があった。
「なぜ対岸の堕気が、こちらに広がらない？　湖の聖性が防いでいるのか？」
「湖と、そしてここに住む者が、ともに堕気を吸収しているからです、ジーク」

丁寧な口調になってレオニスが言う。
「彼女が来ました」
レオニスの言葉とともに湖面の一角で波紋が起こり、音もなく何かが浮かんでくる。
血のように紅い髪。そしてそこに現れた者の姿に、ジークは、かっと目を見開き、
「な――」
息を呑んで、凍りついた。
「ロザリアと僕は呼んでいます。ドラクロワが、とある女性の聖性をもとに生み出し、その完成のため聖地に使わした――竜精です」
レオニスが静かに説明する。ジークはただ、シーラの姿をした氷人形が、微笑みながら湖面を歩み、近づいてくるさまから目を離せないでいる。
「レオ、ニス」
陸地に上がり、ロザリアは、ふとジークに紅い目を向けた。
「ジー、ク……？」
ジークは答えない。恐ろしく厳しい顔で、その存在を睨みすえている。ノヴィアやトールが不安に駆られた。ジークの身が凄愴ともいえる怒りを帯びていたからだ。今すぐ目の前の存在を破壊せんばかりの烈気であった。

「ジー、ク……」

そっとロザリアが手を差し伸べた。冷たく――しかし氷とは思えぬ柔らかな手が、ジークの頬を撫でる。ジークは怒りを示さず、ただ瞑目した。

「シーラは……死んだ」

ぼそりと呟き、目を閉じたまま、ロザリアから身を退ける。

「ジー、ク……？」

悲しげに呼びかけるロザリアに、ジークは目を開いて、言った。

「この聖地に、秘儀などなかった。全て、俺が闇に葬る」

それはレオニスの罪を抹消する言葉であった。聖法庁にとって禁断の秘儀がこの聖地にないとなれば、レオニスはただドラクロワと政治的に同盟したことだけを問われる。そしてそれは、同じように政治的に対処すれば良いことだった。

だがそのためには、レオニスが手にしようとした秘儀の全てを放棄せねばならない。

「良いな……レオニス」

「従います、ジーク」

レオニスは言った。この瞬間、レオニスはジークによって裁かれ、また許された。

ノヴィアとトールが少なからず安堵したとき、ロザリアがふわっと宙を舞った。

湖面に降り立ち、両手を広げて輝くような微笑みを浮かべた。
「ジー、ク……」
ここに来て、ともに湖水に沈もうと言うようであった。
ジークはじっとロザリアを見つめたまま動かない。ロザリアはやがて微笑みを消し、悲しみの顔で、ゆっくりと水の中に沈んでいった。
ロザリアの消えた湖面を見つめ続けるジークに、レオニスは静かに声をかけた。
「彼女は、この聖地の聖性に根づいている。聖地の外へ出て行こうとしないのは、おそらくドラクロワが持つ外典の力が、彼女を遠隔から束縛しているのでしょう。外典の力が、この地で成長しろと彼女に命令しているのではないかと、博士たちも僕も推測しています。彼女が解き放たれるには……あなたの招きの力が、必要かもしれない」
「外典に、俺の力を試みろと言った相手が、他にもいる」
「他にも——？」
ジークがちらりと、湖畔の木々の間に顔を向ける。
そこに、ぽつねんと立つレティーシャがいた。レオニスがそちらを見ると、そそくさという感じで木陰に隠れてしまった。
「いつの間に帰還していたのか……。いったい、なんのつもりでしょうか」

トールが口を挟む。アリスハートが首を傾げた。
「ねえ、あの人、誰ぇ？」
ノヴィアとアリスハートは、レティーシャと初対面なので、相手が何者か分からない。
「彼女は……？　レオニス？」
「聖地の偉大なる彫刻家にして、四人目の刺客さ。ジークを倒すためのね」
レオニスは正直に答え、ノヴィアとアリスハートを驚かせた。だがその包み隠さぬ態度が、かえって場の雰囲気を和ませたようであった。
「彼女と戦ったのですか、ジーク？」
トールが、初めてジークに声をかけていた。
「蝿に食われかけた」
「私もですよ」
トールが三本しかない左手の指を見せる。ジークは肩を一つすくめた。自分は無傷だと言わんばかりの態度である。それがトールを、ほんの少しだけ悔しがらせた。
「あいつの兄は未来を読む。危うく全身を食い尽くされるところだった」
「やはり……本当なのですか。彼女が告げる未来というのは……」
ジークはうなずいた。レオニスがその後を続けた。

「あなたの四番目の従士……。弟王に滅びを予言した男……だが既に死んだはずでは」
「俺の力を利用して、亡霊に成り下がっている」
「なるほど。その男が、あなたに、その力を外典に試せと言ったわけですか？」
「届くだろう、とな」
ノヴィアが一歩前に出て、興味を示した。
「ジーク様の従士だった人……ですか」
「その妹さ」
レオニスはそう注釈し、自分で車椅子の車輪を回してレティーシャのいる方を向く。
「おいで、レティーシャ。よく生きて戻ってくれた。顔を見せてくれ」
優しくレオニスが呼びかける。すると槍を握り、腹に頭蓋骨を抱えた妊婦のような姿のレティーシャが、なんと、ぽろぽろ涙を零しながら木陰から出てきて、
「ごめんなさい」
そう言った。
「レオニス様、あんなに殺したがってたのに、あたしの蝿じゃ無理だったんだよね兄様。あの人を殺しても、あたしにあの人の力、奪えないから。そしたら兄様、消えてしまうから。兄様、あたしに殺すなって。悲しいけど、あたしには無理だからって。殺したかった

のに。殺したかったのに。殺したくて、殺したくて殺したくて殺したくて……」
繰り返し殺意を表明する一方、その対象であるジークは平然としたものだ。そこへ、
「狼男も変わってるけど、あの人も変わってるわねぇ……」
アリスハートに、レティーシャと同列に扱われ、僅かに眉をひそめるジークだった。
「おいで、レティーシャ」
「う」
レティーシャがおそるおそるといった感じでレオニスに近づく。
「お前が、ジークをこの地へ呼ぶ、きっかけになってくれたんだろう。お前とお前の兄に、礼を言わせてくれ」
「兄様ね、あたしにレオニス様のために戦えって言うのね。でも、あたし失敗したから。あの人を綺麗にできなかったから。あたし――」
「お前がともに戦ってくれることを頼もしく思っている」
レオニスにそう言われて口をとざし、やがて、こくっとレティーシャはうなずいた。
遠くから、太鼓の音が響いてきた。どうやら敵が撤退する合図らしい。
夕暮れが降りる空を見上げ、ジークは言った。
「敵が動く……」

「はい。増援が来ないと分かったからには、明日から敵も決戦の覚悟で来るでしょう。そのときこそ……ドラクロワが秘儀の成就のために現れる。どうか防戦の指揮を……」
「その必要はない」
「え――」
レオニスは、このときばかりは正直に驚き、目を丸くした。ジークが来たからには軍略の指揮は全て奪われることを覚悟していたのだ。だが、ジークは言った。
「お前のような見事な指揮は、俺にも無理だ。お前が、俺を動かせ。俺は兵士だ。民を守るための戦であれば、どんな命令にも従う」
「あなたが……僕の指揮下に……」
レオニスは呆然となった。最強の軍団たる男を自由に動かせと言われたのだ。かつてない喜びと緊張がいっぺんに来た。それを和らげるように、ノヴィアがそっとレオニスの手を握った。ノヴィアは微笑み、言った。
「ここは、あなたの国です。どうか最後まで守り通して下さい……レオニス」
「ノヴィア……」
レオニスを襲った緊張が、見る間に新たな決意へ変わった。その様子をトールとレティーシャが見守っている。レオニスはその場にいる者たちを眺め渡した。

湖畔——かつて何度となく自らの足で歩もうとし、そして這いつくばって泥にまみれた場所だった。何か多くのものが報われ、そしてより多くのものを背負った瞬間だった。
「この命に替えても、聖地を守る。そのために、みなの力を、存分に使わせてもらう」
静かな声音に、凛冽たる意志を秘め、レオニスは言った。

3

まだ陽も昇らぬ暁暗に、城門が開く音が響いた。
聖地シャイオンの南の正門——今や戦闘の焦点となっている門である。
その門から人影が現れた。その人影の背後で、門が重々しい音を立てて閉ざされる。
門の開閉音を聞きつけ、暴徒の前衛が色めき立った。城内から兵が打って出てきたのかと思ったのだ。次々に陣地から暴徒が出てきて襲撃に備えるが、何の兆候もない。
しかし門がいっときとはいえ開かれたのは確かである。その事実は暴徒たちの渇望を刺激した。あの門さえ開けば、聖地シャイオンという果実を存分に貪れるのだ。
討ち入りの太鼓も鳴らぬうちから続々と列をなして突撃の準備を整え始める。見渡す限りの人の群である。ふいにそのとき闇が晴れた。朝が来たのだ。そして暴徒たちは見た。
彼らの陣地の、すぐ目の前であった。

その広々とした門前の平地に、ただ一人の男が、立って彼らを見返しているのだ。
男が右手に握った銀剣をかざした。朝陽が射して剣に閃きをやどす。その閃きが地を切った。男のすぐ足下を、真横に剣風が走り、線を描いたのである。
「この一線を越えられるのは、死者だけだ。生者はこの地を去れ」
ジークの苛烈な声が、静まり返る空気に響き渡る。描かれた線より先に踏み込む者は、命を放棄したとみなす。生きたければ消え去れ——一切の容赦を棄てた警告だった。
暴徒たちは、怒濤のような怒りと嘲笑の声を返答とした。指揮官などいないに等しい。無秩序に突撃の太鼓を連打し、吶喊の声を上げ、にわかに雪崩れた。そして蟻が獲物にたかるがごとく殺到してくる彼らに向かって、ジークは高々と雷花の閃く左腕を掲げた。
「ジーク・ヴァールハイトが招く！」
左手を地面に叩きつけるや、青白い稲妻が暴徒たちの眼前に壁となって現れた。
ジークが描いた線の通りに、左右へと稲妻の壁が吹き荒れたのである。
そして醜い鉄塊のごとき剛魔が、ジークの左右を、横一列となって続々と身を起こした。
見渡す限りの防壁が突如として生え出したかのような光景に、暴徒たちが愕然となった。
——ずん！
剛魔の列が前進するや、また新たな列が地中から続いて現れる。

——ずん！

横一列の陣が、たちまち三重四重となり、巨大な壁となって進んだ。城壁の手前に、新たな城壁が出現したようなものだ。しかもただ守るだけではない。おどろおどろしいまでの皆殺しの雄叫びを上げ、暴徒たちの前に立ち塞がったのだった。

「聖地の和平を願って、この地に葬られた英霊たちよ！　お前たちの末裔を守れ！」

ジークの烈声とともに、剛魔の群が凄まじいまでの地鳴りを上げて驀進した。

「聖法庁の悪魔だ！」

「殺せ！　八つ裂きにしろ！」

暴徒たちも今さら引き返すことは出来ない。躍起になって剛魔の群と激突した。あちこちで稲妻が爆ぜるのは、増殖器が使用された証拠だ。かくして人と魔の入り乱れる殺戮の宴が始まり、黎明がその惨劇を照らし出していった。

その頃——ジークに暴徒の注意が集中する隙に、馬を疾駆させる一団がいた。

南東の門からひそかに闇に紛れて出陣した者たち——選りすぐりの武人たちで構成された少数精鋭の突撃部隊である。トールもそこにいた。聖槍を手に、東から南へと迂回しながら馬を走らせ、暴徒たちの陣地へ横合いから迫る。

そしてその部隊に、恐るべき存在が参加していた。両手に分厚い双剣を握る、十六体の凄魔である。その足で疾走しながら、いささかも馬に後れを取らない。ジークの命令により、十六体全員が、トールの配下にある状態だった。

狙いは増殖器である。ノヴィアが見て取ったその数は——十七。

暴徒たちが、度重なる戦闘で犠牲者を出し、援軍を失ったにもかかわらず戦意を昂ぶらせている理由が、それだった。十七の増殖器があれば、数万の軍勢に等しい戦力となる。

だがその全てが城外での戦闘に使用されているわけではない。一度使用すれば移動が困難であるため、増殖器の大半は、城壁を越えるまで温存されている状態だった。

トールたちは、正確にその増殖器の運搬部隊を急襲した。物も言わず敵の陣地の横手に突入し、呆気に取られる暴徒たちをなぎ倒す。そして、あらかじめノヴィアが見て取り、レオニスが定めた進路に従い、猛進する。

さながら名手によって放たれた矢のごとく、トールたちは狙いを遂げた。使用されていない増殖器を見つけ、ずたずたに引き裂き、火をかけ、破壊した。

暴徒たちの怒りと悲嘆は凄まじく、撤退するトールたちを死に物狂いで追いかけてきた。

それをかわして南東の砦に逃げ込み、すぐさま城壁内部の通路を進行する。そして馬を替えるとともに、レオニスからの指令が届けられる。その指示に従い、トールたちは今度

は南西へ向かった。敵の隙を突いて城外に出て、再び増殖器の運搬部隊を急襲する。
その頃には、幾つもの部隊が城外に出て疾駆していた。敵の目をそらしてトールたちの動きを助け、またジークの激戦を軽減するため暴徒たちを攪乱する部隊である。
レオニスは全ての部隊を自在に操り、矢のように部隊を放ってはすぐさま引き返させ、また別の部隊を放つということを繰り返した。ノヴィアの万里眼がそれを助け、最小限の兵力で、最大限の効果を発揮することを可能とした。

一方――暴徒たちも夜のうちに兵団を各方面へ移動させ、各門を攻め立てている。
熾烈を極めたのは北西である。砦を破るために増殖器が二体、使用されたのだ。
黒い翼の兵団は、緒戦で増殖器を使用する間もなく破壊された怒りから、その使用にためらいがない。手持ちの力を全て使ってでも城門を開く決意でいた。
おびただしい数の魔獣が、暴徒たちとともに攻め寄せた。にもかかわらず、砦は陥落しなかった。門をこじ開けることも、城壁を乗り越えることも出来なかった。
魔獣に匹敵する存在が、そこにいたからだ。
「みんな死んじゃええるるるぐあらがぁ――――――っ！」
レティーシャである。ジークを討ち果たせなかった悔しさを叩きつけるかのように、迫

り来る暴徒たちを、片っ端から、濁流のごとき蠅の群の餌食にしていった。
　そればかりではない。巨人のごとき剛魔の群が、ジークの命令で、レティーシャの指揮下に入っていた。これはレオニスの指示であり、ジークは異存なくそれに従った。
　レティーシャは特に大きな剛魔の一体を選んで、その肩に自分を乗せ、戦場を見下ろしている。その様子がまた暴徒たちにとっては、悪夢じみた光景に思われるのだ。
　妊婦のごとき姿の娘が剛魔の肩に乗り、なぜか聖槍を掲げて人食い蠅の群をまき散らし、
「みんなみんなみんなみんな死んじゃえ死んじゃえ死んじゃえ死んぐるぇぁ――っ！」
　奇怪極まる叫びを上げるや、その声にけしかけられたように、剛魔の群が何の慈悲もなく暴徒を殴り殺し、虎の子の魔獣をなぎ倒す。
「これでいいのね、兄様。そうなのね。兄様、あたしを利用してたのね。レオニス様に会うために。兄様を綺麗にしたあの人に会うために。あたしは良いの。兄様に利用されるなら良いの。あたしもレオニス様に会えて嬉しいから。兄様があたしをレオニス様に会わせたかったのも分かるから。でもあの人を綺麗にしたかったよ。あの人を殺したかったよ。でもあの人の力を使って戦うなんて……うぐるるららろおが死ねがぁ――ん！」
　剛魔の肩の上でめそめそしたかと思えば、いきなり呪詛を放って暴徒たちを殺戮して回る。暴虐をほしいままにしてきた暴徒たちを遥かに上回る残酷さ、非道さである。

その悪意に満ちたレティーシャの戦いぶりに気圧された暴徒たちは、さらに砦から打って出た騎士団に押し返されていった。そして熾烈な戦いの果てに――何より大切な戦力である二体の増殖器を、ことごとく破壊されたのだった。

「どこだ……ドラクロワ。どこから来る……」
レオニスは繰り返しそう呟き、極彩色の地図を睨みつけている。隣国の兵が攻めてくると分かったとき以上の、鬼気迫る様相であった。
「この戦場をどこかで見ていることは分かっているんだ。おそらく別の兵力を隠し持っていることも。竜骸の使用で、秘儀はさらに進行しているぞ、ドラクロワ……。お前に見せてやる……死と腐敗の果てにある、秘儀の行方を……」
激しさを増す戦いを着実にこなしながらも、レオニスは今や、ひたとドラクロワの存在を見据えている。そのレオニスや、聖地で戦う者たちを、ノヴィアは惨劇の果てにある和平を思いながら、その眼差しをもって助け、見守り続けた。
ノヴィアと同じように、アリスハートは城の屋根に立ち、遠く戦場を見ていた。右も左も死に物狂いで戦う人々ばかりだった。
「死んじゃ駄目だよ……トールぅ」

そう呟く間にも、自分の視界のどこかで誰かが命を失って倒れている。そのことを思い、アリスハートもまたノヴィアと同じく、戦いの声がやむときを切望した。

敵の後退に合わせてジークは南門から城内に戻った。レオニスの指令に従ってのことである。聖地の兵が入れ替わりに出撃し、ジークに休息のときを与えた。

魔兵は、ジークが休息する間も猛り続けた。自分の力が聖地と強く呼応しているような感覚があった。この地で戦うのが三度目であるからかもしれない。あるいはこの地に仕組まれた秘儀の力が、ジークの力を強大なものにしているのだろうか。

そうした要素もあるだろう。だがそれ以上に、今の状況全てが、ジークを鼓舞していた。

このときジークは決して孤軍ではなかった。連携すべき他の軍勢がいた。守るべき砦と城があった。そして信頼できる指揮官が背後にいた。何よりジークたちの勝利を信じて祈る民の姿が、すぐそばにあった。彼らも諦めることなく厳しい戦況に耐えていた。

これまで常に放浪の孤軍として働き続けてきたジークにとって、まことに、贅沢この上ない戦いだった。戦士としての根元的な喜びがジークに力を与えた。いつかこうした戦いの果てに、剣を放棄するときが来るのではないか——休息の合間に、そんな思いが胸をよ

ぎりさえした。その儚い思いこそ、ジークの勇壮さの根底にあるものだった。

ジークと同じように戦いに昂ぶりつつ、いつか剣を棄てることへの共感を抱きながらも、決して勇鼓の念には至ることの出来ない者がいた。トールである。何度となく城内から打って出ては、敵の増殖器を狙っての突撃を繰り返す。そうするうち、ふいにトールは、ある光景に呑み込まれていた。

小高い丘の上だった。いや、本当に丘であるのかどうか分からない。見渡す限りの死体の山だった。もしかすると平地に屍山が築かれ、自分はその上に立っているのではないか。そんな途方もない思いに襲われるほどの死屍の群であった。

はっとなったときには周囲に味方は一人もいない。敵もいない。屍の群に心を奪われ、孤立したことさえ気づかなかったのだ。ひどく遠いところから戦いの怒号が伝わってくる。辺りに生者はおらず、ただトールの指揮下に置かれた凄魔が、低く修羅の唸りを上げてトールの動きを待っていた。十六体の魔兵の姿が、悪夢の中にいるような思いを強めた。

トールは救いを求めるように屍の群に目を戻した。

誰も動かない――

そう思った途端、トールは、よろよろと馬を降りていた。戦場にあって考えられぬ致命

的な行為である。だが、そんなことも気にならなかった。トールは屍の上にひざまずいた。
自分が斬り棄てた者達かもしれなかったし、そうではないかもしれない。もはや、その区別さえつかなかった。
自分が殺したのか？　そう屍に問う。むろん答えはない。頼む、答えてくれ——そう心の中で繰り返すうち、それが来た。たまらない悪寒とともに、その場にうずくまり、トールは嘔吐した。背が引きつり、胃が痙攣し、涙がにじんだ。子供のように泣き叫びたかったが、目の前に横たわる年端もゆかぬ少年の死体が、トールの涙を胸の内で凍りつかせた。
自分に泣く資格はないのだ。そう思いながら、トールは震えながら吐いた。
ふいに誰かが歩み寄る気配があった。敵だろうか——トールの頭の隅に、ちらりとそんな思いが浮かぶ。だが立ち上がって戦おうとする気も起きない。
いっそこのまま斬ってくれ。自分を彼らの一員に——この屍の山の一部にしてくれ。
「立て、トール・ヴュラード」
鋭い声音が飛んだ。声の主が誰であるか、すぐに分かった。考えてみれば当たり前だ。トールの配下にある凄魔が、全く警戒せずに相手を近づかせたのだ。誰かは明らかだった。
トールは、ジークを見上げ、何かを言おうとした。だが言葉にならず、震えながら反射的に後ずさろうとした。

その襟首をジークの血に濡れた左手が、凄まじい勢いでつかんだ。そのまま問答無用で引き起こされる。呆然となるトールの顔を、剣を握るジークの右拳が殴りつけた。
痛みが、トールを悪夢から覚ました。意識が急に明瞭になる。
「今、お前が使い物にならなくなれば、レオニスは大事な支えを失う」
ジークの言葉が、トールの胸に突き刺さった。殴られるよりも層倍の痛みがあった。
トールの両膝に力が戻った。柔らかな死体の上に、身も心も凍りつく思いで立った。
「もう沢山です。もう誰も殺したくない」
かき口説くようにトールは言った。ジークは辺りに目を向け、
「……俺もだ」
ぼそりと口にした。
トールは黙った。泣く資格はないと思ったばかりなのに、あとからあとから涙が流れた。
気づけば夕暮れが迫っていた。敵は陣地への後退を始めている。ジークがわざわざ来たのは、凄魔がトールの様子を報せたからかもしれない。
「早く戦いを終え、死者を葬らねば、土地が死ぬ」
ジークは重々しくそう口にした。聖地は、荒廃の一途を辿っていた。頭上には堕気が渦を巻き、北も南も草木が枯れ果てている。多数の増殖器が使用されたせいで、一度はジー

クの到来で危難を免れた北の耕地も、全滅していた。
豊穣を極めた聖地という果実が、ついには腐り果てたかのような光景に、トールはただ呆然となるしかすべがなかった。
「レオニス様は仰った……死と腐敗の先にあるものを、見せて下さると。きっと……レオニス様が見せて下さる……きっと……聖地を、またもとの豊穣の地に……」
か細い声でトールは言った。ジークは、それがどれほど途方もないことであるか知りつつ、何も言い返さなかった。ただトールを励ますように、小さくうなずいてみせた。

4

ジークが最前線に立ち、聖地はまた戦いの一日を乗り越えた。
「聖法庁の悪魔」ことジークの参戦によって暴徒の兵団は大いに動揺したが、
「恐れるな！　我らはドラクロワ様の御名のもと、不死を約束されし民ぞ！　総員、命を棄てて攻めかかり、聖法庁の悪魔を滅ぼせ！」
槍の巫女たるレギンの檄が、動揺を抑え、戦意を新たにさせる。
一方、レオニスもさらにいっそう聖地の兵を鼓舞していた。
「敵の増殖器は残り十体だ。僅か一日で七体を破壊できたことは快挙である。勝利の日は

近い。蒙昧なる暴徒どもに、聖地を攻めることの愚かさを、とくと教え込め」
ここに至り、戦いの焦点は幾つかの点に絞られた。
聖地にとって全ての増殖器を破壊できるかどうかが、勝敗の分かれ目だった。
また暴徒たちにとって城門をこじ開けることが勝利への道である。それには増殖器を効果的に使わなければならない。いかにして増殖器を破壊されぬまま門の付近へ運び、発動させられるか。その工夫が暴徒たちの戦術を複雑なものに発展させていった。
翌朝も、未明のうちから戦いが始められた。
聖地の南門へと殺到する敵の主力の前にジークが立ち、連携してレオニスが幾つもの部隊を放つ。この日、トールとレティーシャはそれぞれレオニスの命令で主力と直接ぶつからず、少数の部隊とともに動いている。
レティーシャの姿がないことに安堵した黒い翼の兵団は、再三に亘って全力で攻め寄せた。新たに手配された二つの増殖器とともに、全軍を犠牲にせんばかりの突撃を行ったのである。増殖器が傷つかぬよう、我が身を挺して矢を受け、砦の騎士団の突進を阻む。
増殖器を守備する者たちが全滅すると、背後に控えていた集団が前進して楯となる。
倒れた味方を踏み越え、増殖器の運搬部隊は、ついに城門の下に辿り着いた。頭上からただちに矢が、灼けた鉄が、石が浴びせられ、ばたばたと人が死んだ。その死者を持ち上

げて楯にし、仲間の屍を積み重ねて増殖器を守る土塁とする。
かくして、おびただしい人命を費やし、増殖器が発動した。累々たる死者の瘴気を吸って猛り狂う魔獣どもが、信じがたい速度で城壁を登り、越えた。
暴徒どもの歓呼は凄まじいものだった。城壁に次々に梯子をかけ、歓喜の雄叫びを上げて魔獣とともに聖地の内部へと侵攻した。
やがて北西の門が開かれた。それが聖地の滅びの始まりとなるはずだった。だが暴徒たちが大挙して押し寄せたそこに、にわかに何かが流れ込んできた。
文字通りの、怒濤であった。聖地に張り巡らされた水路の幾つかを決壊させ、大量の水を砦の門へと流し込んだのである。
城壁を魔獣が乗り越えたとの報を受けたレオニスは、すぐさま水路決壊の指令を発していた。それが侵攻する暴徒たちの足を取り——その努力を無に帰した。
増殖器の原理がジークの力と同じく大地を根源としている限り、その弱点もまた明らかである。大量の水が大地を浸し、増殖器が根を張る地面を、血と泥の沼地と化しめた。
たちまち地面とのつながりを失った魔獣の動きを鈍らせ、砦の兵に剣を、矢を、槍を突き立てられ、ついには消滅していった。切り札である増殖器が——魔獣の群が、再三に亘って阻止されたことで、暴徒たちは完全に浮き足立った。

そこへ砦の兵が大挙して攻め返し、城壁の外で屍に埋まっていた増殖器を発見するや、ずたずたに引き裂いた。魔獣が消え、やがて城門も閉ざされ、暴徒たちを絶望させた。

暴徒たちの戦意を絶望で挫くため、トールは馬を駆り、凄魔とともに走っていた。目指すは増殖器ではなく、それと同じくらい敵の戦意を保つ存在である。ドラクロワへの信仰心を刺激させ、命を棄てた戦いを全軍にもたらす女がいるという。

その情報を知ったトールは、自らその暗殺を志願した。槍の巫女を自称する女——聖地の攻囲が始まる前に、トールがその右腕を斬った相手だった。

やはり殺すべきだった。それが出来なかったせいで敵の戦意が高められ、かえって多くの死者を出すことになった。そのせめてもの償いとして、自分がそれをせねばならない。もう誰も殺したくないという思いに責め苛まれるトールにとっては悲愴の覚悟である。

その覚悟を察したジークは、頼みもしないうちに凄魔を配下につけてくれた。

「自由に使え。ただし彼らに、指揮官を失わせるような侮辱を与えるな」

ジークの言は、トールに敵と相討ちになることを厳しく禁じた。かくしてトールは凄魔を引き連れて戦乱を迂回し、半日がかりで敵の陣地の後方にまで回り込んだ。敵がひしめく戦場にあって、トールならではの隠密行為であった。

そこでトールは凄魔を幾つかの組に分け、何体かに身を潜めさせた。敵の陣地へ向かうまでに何度かそれを繰り返し、伏兵とした。
　そしてトール自身は聖槍を持ち、単身、負傷者を装って敵の陣地へと潜入した。凄魔を引き連れてそうするには無理がある。暗殺はあくまでトールの仕事だった。凄魔たちはトールを無事に生きて帰らせるための脱出を手伝ってくれる。
　敵の中に潜り込んだトールは、そこで初めて、ジークが知らぬうちに気遣いを与えてくれていたことに気づいた。ジークは、トールを凄魔たちの指揮官だと言った。
　ただの暗殺者を、指揮官などとは呼ばない。ジークはあくまでトールを戦士として扱ってくれていた。それがトールを悲愴感から救った。殺戮で傷ついた心のままに、自分の命を汚れ仕事で犠牲にしてしまうことを封じてくれたのだ。指揮官という一言が、あの屍の山の一部になってしまいたいという思いから、トールを引き剥がしたのだ。
　トールは知らない。かつてジークもまた、ドラクロワのために暗殺に走り、戦士の誇りを失って自ら命を棄てようとした過去があるということを。ただ――
（死んじゃ駄目だよぉ）
　アリスハートの声が、温かく甦っていた。ひどく久しぶりにその声を思い出した気がし

た。城を出る前に、短いながらもアリスハートと会話をしたのに。そのことを忘れるほど、自分を見失いかけていた。生きて帰る――その一念をもって、トールは機会を窺った。

南門でジークが魔兵の群とともに獅子奮迅の戦いぶりを見せて暴徒を押しとどめ、また北西の門ではレオニスの周到な用意が暴徒の意気を挫き、そしてトールが敵陣への潜入を果たしたのと同じ頃――

暴徒たちもまた一計を案じていた。一部が主力から離れ、増殖器を二つ、必死の思いで運搬していったのである。必死であるのは、そこが聖地の北東だからだ。竜骸が炸裂し、死の大地と化した場所である。いつまたあの怪物が現れるか分からず、これまで戦乱が避けられていた方面だった。だがそう思わせておいて、いざとなれば隙を突いて北東から侵攻するための準備は、だいぶ前から整っていた。

今日がその決行の日となり、十名ほどの秘法士たちを先頭に増殖器が運ばれていった。あらかじめ筏を組んでその上に増殖器を乗せ、その状態で台車を引いている。湖に到着したら、台車をそのまま水面に落とせば良かった。そのまま湖を渡り、城を背後から襲う。その算段とともに、堕気の渦巻く焦土を進んでいった。

だが堕気のあまりの強さに、血を吐いて倒れる者が出た。みな体を堕気に冒され、顔色

が青黒くなり、肌に火膨れが生じた。戦わぬうちから、ばたばたと死者が続出した。それでも足を止めず、竜骸の出現を恐れながらも進みゆき、ついに湖畔へ到着した。
豊穣だった森の痕跡などまるで無い。一面の地獄の原だった。黒焦げになった木々や獣や人の体が、見渡す限りに広がっている。そしてその向こうに、まるで醜い額縁に飾られた美しい絵のように、ぽっかりと聖地シャイオンの白亜の城がそびえているのだった。
だが、死を賭して増殖器を運んだ彼らを出迎えたのは、美しい景色だけではなかった。
湖岸から筏を投入しようとする者の足を、地面から突き出た巨人のごとき手がつかんだ。悲鳴を上げる間もなく、そのまま軽々と持ち上げられ、地面に叩きつけられて絶命した。
暴徒たちが絶望の悲鳴を上げた。焼け焦げた倒木の下から、突如として、剛魔の群が身を起こしたのである。慌てて応戦しようとする彼らを、にわかに蠅の群が襲った。
「レオニス様の言った通りね、兄様。みんなみんな綺麗に綺麗にしてあげるね、兄様」
なんと槍を持ったレティーシャが、当然のような顔をして彼らの背後にいた。折り重なって倒れた木々の陰に身を潜めていたのだ。強烈な堕気の渦巻く地にあっても、実に平然としている。堕気を己の力とする聖印をその身に帯びている者ならではの伏兵だった。
いや、それ以前に、レオニスの予想の内だったのである。
増殖器を運ぶ者たちの動きは、主力を離れた時点でノヴィアの眼差しに捉えられていた。

ふいに、稲妻が迸った。増殖器を二つとも発動させたのだ。湖面に至ることも出来ずそうするしかなかった彼らの悲憤に応えるように、魔獣の群が現れ、猛り狂った。
剛魔がすかさず魔獣どもを蹴散らし、レティーシャに道を作った。
レティーシャもまた奇怪な唸り声を上げながら蠅をまき散らして魔獣を追い払い、その聖槍を掲げ、増殖器に突き刺した。何度も何度も、何かの憂さを晴らすかのように刺す。
そうして、決死の思いで運び込まれた増殖器を二つとも破壊してしまった。
「綺麗ね、兄様。とっても綺麗ね」
レティーシャが辺りを見て言う。湖の向こうの城ではなく、醜く荒れ果てた大地のことを言っていた。増殖器が使用された場所など、どす黒い空気が溜まっている。
「でもレオニス様……もっと綺麗なもの、見せてくれるって言った。レオニス様だけの綺麗を、兄様、見たかったのね。それが見たくて、あたしを利用したのね、兄様……」
ふとその声が尻すぼみに消えた。
堕気のせいで濁った空気の向こうで、人影が音もなく動いたのだ。
レティーシャがそちらを向き、剛魔たちが低く唸りを上げて身構える。
「これほどの堕法の使い手を、手の内に隠していたか……レオニス・ジェルミナル」
冷厳とした呟きの中に、どこか楽しむような響きさえあった。

辺りに渦巻く強烈な瘴気をまるで意に介さず、ゆったりとした歩調で近づいてくる。
やがて青ざめたマントがレティーシャの目を打った。
長く艶やかな銀髪。その貴族服は、無惨な戦場にそぐわぬほど汚れ一つない。
群青の瞳に烈々たる意志をみなぎらせ、その男は、レティーシャの前に立った。
恐れというものをまるで知らぬはずのレティーシャが、思わず一歩、退いた。
それほどの、圧倒的な気配をもった男であった。
「誰……誰なの、兄様？　誰？」
レティーシャが焦ったように訊く。かかっ——その腹で頭蓋骨が歯を鳴らした。
「そう。そうなの、兄様。この人が——」
レティーシャの顔から表情が消えた。どんよりとした殺意に満ちた目を、男に向け、
「ドラクロワ」
ぼそっと、その名を口にした。
ドラクロワの頬に、優しげとさえ言える微笑が浮かんだ。
「娘よ……その命、我が秘儀に捧げるか」
穏やかな声音だった。そのたった一言で、どっと冷たい汗がレティーシャの額に浮かんだ。ぎり、と歯を噛み締める。退いた足を、思い切って前へ踏み出した。

「う……ううぐ……ぐっ、死んじゃえっるぐがぁ——っ!!」
レティーシャの足下から、袖から、袂から、蝿の群が猛然と放たれ、ドラクロワへ襲いかかった。同時に剛魔たちが地鳴りを上げて走り込み、巨大な拳を振り下ろす。
ふっとドラクロワが消えた。蝿の群が、剛魔の拳が、空をかいて地面に叩き込まれる。
「秘儀の祝福を受けよ」
声が飛んだ。それまでドラクロワがいた位置から大きく右に移動していた。
レティーシャも魔兵も、揃って幻に惑わされたのだ。刹那——耳をつんざくような音ともに、漆黒の稲妻が吹き荒れ、剛魔の一体を粉々に吹き飛ばした。
「うがぁ————っ!!」
レティーシャが狂ったように叫ぶ。蝿の羽音が凄まじい喧噪となって響き渡った。
だが一匹の蝿とてドラクロワに触れることさえかなわない。ドラクロワの左手から——その手に握られた書物から放たれる漆黒の稲妻によって、ことごとく塵と化していた。
剛魔が怒りの咆吼を上げるが、一体また一体と見る間に打ち砕かれてゆく。
「うあああがぁ————っ!!」
レティーシャが走った。聖槍を真っ直ぐ突き出し、ドラクロワ目掛けて突進する。
そのレティーシャに向かって漆黒の稲妻が幾重にも迸った。その寸前、ドラクロワとレ

ティーシャの間に、まさしく雲霞のごとき蠅の群が出現し、壁となった。蠅の群が稲妻に打たれながらも、逆にその稲妻の力を貪り食い——相殺した。
そしてレティーシャがその蠅の群を突き抜け、ドラクロワへと槍を突き込んだ。
「ほう……」
感心したように呟きを零すドラクロワの胸へ、槍の穂先が吸い込まれるように迅った。
刃がその胸を貫き、肉を裂いて、背へと突き抜ける。
レティーシャの手を、ドラクロワの温かな血が濡らした。

「うぎぎぎぎ」
歯を軋らせるレティーシャに、ドラクロワは、なおも優しく微笑んだ。
「我が身にここまで迫ったことを、誇りに思うがいい……娘よ」
稲妻が走った。
咄嗟にレティーシャの全身を蠅が覆い尽くして守り——吹き飛ばされた。
レティーシャの手が槍から離れ、その小柄な体が、宙を舞い、地を転がった。
傷はない。だが衝撃で、けほけほ咳き込み、立ち上がれないでいる。
ドラクロワは、無造作にその胸を貫く槍を引き抜き——放り棄てた。
剛魔たちがレティーシャを守るように、ドラクロワの前に立ち塞がる。

「所詮は、堕界の怨霊——外典にやどりし英霊に、勝てはせん」
その言葉とともに漆黒の稲妻が吹き荒れ、ことごとく剛魔たちを撃ち滅ぼした。
「終わりだ」
ドラクロワはレティーシャに歩み寄った。その右手が翻り、堕気と聖性が混じり合って一瞬で長剣と化す。その長剣の切っ先が、無造作にレティーシャの胸に突き込まれた。
そのときレティーシャの上着から、いきなり袋に包まれたものが飛び出した。ドラクロワの剣が、音を立てて止められた。はらりと袋がほどけ——中の頭蓋骨があらわになる。
なんと頭蓋骨が、ドラクロワの剣の切っ先を、上下の歯で噛み止めているのだ。
「貴様……」
ドラクロワの目が、ふいに大きく見開かれた。その目に映るのは頭蓋骨ではなく、その亡霊の姿だった。白髪に碧の目。聖印を刻まれた顔。剣の刃をくわえ、にっと笑う。
「告死者ディキウス……」
ドラクロワが怒りの声でその名を呼んだ。ディキウスの笑みが強まり、にわかに何かが砕け散る音が響いた。ディキウスが、その歯で、剣の切っ先を粉々に噛み砕いたのだ。
途端にドラクロワの剣が、もとの堕気と聖性に戻って霧散した。
「滅びの予言者が……。亡霊となって、この世にへばりついていたか……」

頭蓋骨は――ディキウスの首は、今や宙に浮かんで、ドラクロワに笑みを向けている。
「亡霊ごときが、我が行く手を阻むか！」
ドラクロワの左手に、それまでに層倍する激しさで稲妻が起こった。
「兄様っ！」
レティーシャが悲痛な声を上げて立ち上がり、蝿を放って頭蓋骨を守ろうとする。
「消えよ！」
ドラクロワの叫びとともに漆黒の稲妻が迸った。巨大な鉄槌が叩き込まれたように、凄まじい爆発が起こった。地面が抉れ、切り株が吹き飛んで塵と化す。
土砂が舞い上がって雨のように湖面を叩き、濛々たる煙が徐々に晴れていった。
ドラクロワの足下から湖の中へと、深い雷撃の跡が続いていた。
もはや、レティーシャの姿も、頭蓋骨も、跡形もない。
「レオニス・ジェルミナル……ジークと私の過去を、よくぞ調べ上げたものだ」
いっとき、ドラクロワの胸中を、かつて十万の兵を失ったときの悲嘆がよぎった。だがそれはドラクロワにとって踏み越えてきた試練にすぎない。今はそれ以上の試練が待っているのだ。己の身を賭して、死を克服するという試練が――
そしてドラクロワが顔を上げたとき、まさしくそこに、求めるべきものがいた。

紅い髪の女が、遠く湖面に立ち、ドラクロワを見ている。
「——シーラ」
ドラクロワが、呼んだ。
女——ロザリアは、微笑みを浮かべて、ドラクロワへと歩み寄った。
「そうだ。来るがいい。秘儀は、大いなる争乱の果てに成就する。そしてお前は——」
そのとき、ロザリアの身に、異変が起こった。
歩み寄るほどに、手や足に、亀裂が走り始めたのである。
「な——」
ドラクロワが息を呑んだ。ロザリアの手首が砕け、水面に落ちた。その肩が、膝が、たおやかな身が、ぼろぼろとドラクロワの目の前で崩れてゆく。
「シーラ！」
ドラクロワが叫んで手を伸ばす。ロザリアはなおも歩み寄り、砕けた手を差し伸べた。
「ジー、ク……」
その唇から発せられた名は、今そこにいる男のものではなかった。
ドラクロワのおもてに、僅かに、苦悶にも似た表情がよぎる。
そして——女は崩壊した。

ばらばらと氷のかけらに変じ、湖面へ落ちた。氷とともに十字型の紋章が一瞬、光をきらめかせ、ドラクロワの手の届かぬ彼方で水に沈んだ。
「そうか……。外典の到来とともに、秘儀が進行する仕掛けか……レオニス」
ドラクロワが、凄惨な笑みを浮かべる。
同時に、その足下に、にわかに光がともった。土中に埋められていた、聖印を刻まれた石が発する光であった。その光が、湖岸に沿って広がってゆき——
湖の色を、一変させた。
なんとドラクロワの眼前で、鏡のように澄んでいた湖が、真っ赤に染まり始めたのだ。
巨大な血の海が広がるかのような光景に、ドラクロワの口から笑いが迸った。
「見事だレオニス！　外典を持たずして、湖そのものを竜精と化しめたか！」
ドラクロワが湖に足を入れようとするや、青白い稲妻が湖岸に噴き出し、侵入を阻んだ。
「竜精を、支配するか。ならば、竜界への扉を開く力……根こそぎ奪わせてもらう」
湖の向こうにそびえる城を、ひたと見据え、ドラクロワは青ざめたマントを翻し、湖岸を進んだ。まるで地獄の光景を歩むようだった。一面の焦土と血の湖が広がるそこで、ドラクロワは歓喜の微笑を浮かべ、城へと向かっていった。

5

「攻めろ！　敵を討て！」
　ジークの口から烈声が放たれ、魔兵とともに聖地の兵が突進して行った。
　戦いの焦点は、完全に南門に絞られた。東も西も攻めることに失敗した敵は、総出を打ってこの聖地の表玄関たる城門に攻撃を集中させたのである。聖地も真っ向からそれに応じ、守戦から一挙に攻勢へと転じた。その先頭に立ったジークは、まさに修羅と化した。
「一矢も残すな！　剣が折れたら敵のを奪え！　止まるな！　攻めろ！」
　ジーク自ら剣を振るって叫びを上げ、魔兵と人間の兵とを、ともに突撃させる。可能ならば敵の本陣へと突き進み、攻め寄せる敵を逆に討ち滅ぼす覚悟でいた。
　敵も決死の思いで増殖器を運び、進めぬと分かればその場で発動させる。戦場のど真ん中で魔獣が溢れかえり、惨劇を巻き起こした。そのたびにジークは惨劇の場へと真っ先に躍り込み、その手で増殖器を破壊した。あと残り何体かなどと考えもしない。力の限り剣を振るって敵を切り払い、新たな魔兵を続々と招く。その姿は、敵を一人残らず殺し尽くすことしか考えていないように見えた。まさに悪魔のごとき戦いぶりである。
　そのジークの動きに合わせて、にわかに横合いから殴り込んでくる一団があった。

灰色のマントに銀の翼をあしらった者達が、無言のもと、槍を、剣を構え、ジーク目掛けて突進してきたのである。
銀翼親衛旅団——沈黙を旨として動く、八つ目の兵団であった。
今の今まで戦いの趨勢を見守り、ここが決戦と判断するや、無傷の兵力を投入したのだ。
いったい誰の判断か。すぐに分かった。ジークはその男の姿をまざまざと思い浮かべた。
（ドラクロワ——！）
心の中でその名を叫ぶジークを、聖槍を持った男たちが取り囲んだ。
ジークは止まらない。突き込まれる槍を、血にぬめる左腕の籠手で弾き、斬り込んだ。
火花が散り、血がしぶくが、戦いの烈気に満ちたジークの目にその区別はつかない。
どちらも同じように刃の先から生まれ、四方に飛んで消えてゆくようだった。

ようやくの好機が訪れていた。
敵陣に潜入してから半日近くかけ、トールは敵の指揮者のすぐそばにまで接近した。
丘の上から、白衣を頭からかぶった者達が、馬に乗って、戦場を見下ろしている。
その数は七人。全員が聖槍を持ち、その一人が、果敢に声を上げていた。
「ドラクロワ様がじきにいらっしゃる！　聖地の滅びをドラクロワ様に捧げるのだ！」

声から女だと知れた。右腕を庇うように白衣の懐に隠し、左手で聖槍を持っている。

どうやら間違いない。トールが右腕を斬った、槍の巫女だ。

トールは自分もまた白衣をまとい、彼らに向かって馬を進めた。誰もその動きに気づかない。トールは一切の気配を断ち、空気のような透明さで彼らに近づいていった。

あらゆる喜怒哀楽は、このときのトールには無縁だった。一個の影法師がそこにいた。相手の影に等しく気配を失った状態で、するすると白衣の一団に混じった。

気づけば七人が八人になっている。そのことに誰も気づかない。

「ひるむな！　死を恐れればドラクロワ様が与えて下さる不死から遠のくばかりぞ！」

己の命を一切かえりみぬことを奨励する女の言葉が、自然とトールの行動を促した。

ならば、あなたから死ぬがいい。

そんな非情の思いがトールを支配した。槍を左手で握り、女の隣に来た。

右手を手綱から離し、すっと翻した。

衣服の乱れを無意識に整えるような、何気ない動作だった。

トールの右手に、漆黒の鉄鞭が現れ——そしてすぐにまた手が翻り、消えた。

女の声が、やんだ。言葉の途中でやんだのではない。息継ぎの合間を正確に狙って斬っていた。そばにいた者たち全員が、戦場に目を向けており、何も気づかなかった。

トールが馬首を返す。僅かに遅れて、女の首が、ずるりと白衣ごと横にずれ、石ころか何かのように落ちた。切断された首から、噴水のように血が噴き出して白衣を紅く染めた。
「な、なんだ!?」
女の血を浴びた男が呆然と声を上げた。そのときトールは彼らに背を向け、完全に立ち去ろうとしていた。最後に、ちらりと、地に転がった首を確かめ――愕然となった。
「な……」
思わず手綱を引いていた。誰か知らない女の首が、そこにあった。かと思うと女の体が力を失って馬から落ちた。懐に隠されていた右手が現れ、首と同じように地に転がった。
狙うべき女でないことは、それで明らかだった。
ただ単に、全員が白衣を頭からかぶっていたせいで、狙いを誤ったのではない。
わざわざ右手を隠させ、周到に用意された、影武者だった。
考えてみれば、鉄鞭を振るったとき、女の聖槍はまるで動かなかった。もしかすると、槍を持っていただけで、何の力もない女だったのかもしれない。ただ背丈と声が似ていただけで、身代わりにされた女だったのかも――その思いとともに、トールの中の大切な何かが、音を立てて崩れた。
「全員、顔を見せよ!」

右腕を失った女——槍の巫女レギンが、顔を隠したままのトールを怒りの目で見た。
鋭い女の声とともに、白衣をまとった全員がフードを引き下げ、顔をさらした。
「なぜ顔を見せぬかっ！」
女が振るった槍の穂先が、トールのフードを引き裂いた。危うく顔面を切り裂かれると
ころだったが、トールは奇跡的に——ほとんど本能で、その刃をかわしている。
「貴様……。よくも、ここに……」
女が呻くような声を零した。トールはなおも呆然としたまま、女を見つめている。
「なぜ——」
人に死ねと命じておきながら、自分は影武者を立てて安全な場所にいるのか。そう言い
たかった。お陰で自分が何をしたのか。そのことを考えようとして、考えられなかった。
「我が腕を斬った男だ！　逃がすな！」
女の言下、槍を持った者たちが、トールを取り囲んだ。
「はっ。英雄の息子とな。私を狙い、影を斬るとは。死を持って愚かさを償え」
英雄——影。その言葉が、トールの心をかきむしった。
どちらも、ひどく嫌な言葉に思えた。
トールの三本しかない左手の指が、槍の柄を握りしめた。

その右手が翻り、鉄鞭を現す。
目の前の女を殺そうとして殺せなかった。そのせいで名も知らぬ女を殺してしまった。
これは罰だ。死をもって償わねばならない罰だ——そう思った。
「あなた方は……私が殺します」
トールは言った。悲しみに満ちた声だった。
「泣いておるわ、軟弱者が」
女の嘲弄で、トールは初めて自分が泣いていることを知った。
六振りの槍が、そのトールの命を引き裂くべく、一斉に振りかざされた。
トールの口から言葉にならぬ叫びが迸り、その槍と鞭が、同時に振るわれた。

紅く染まる湖の水面が、ふいに盛り上がった。
かと思うと、湖岸へと波が打ち寄せ——ざばっと音を立てて、何かを吐き出した。
「ぶあ」
レティーシャである。けほけほと咳き込み、ずぶ濡れになって湖面を振り返る。
傷らしい傷もない。ドラクロワの放った稲妻に襲われたかと思ったら、水中に叩き込まれたのだ。そのまま溺れ死んでも不思議ではなかったのに、何かがレティーシャを守った。

それは湖そのものであり、また湖と一体となった存在だった。
今、その存在が、湖面のすぐ上に浮かんで、レティーシャを見ていた。
「兄様……」
レティーシャが呼んだ。
頭蓋骨が、かかっと歯を鳴らした。その表面に、かすかに黒い雷花が閃く。
「兄様……そうなの。ジークって人の力、ドラクロワって人の力……両方、欲しかったの。そのために、あたしをここに来させたの、兄様」
虚ろな声でレティーシャは言った。頭蓋骨はじっとそのレティーシャを見つめている。
「いいんだよ兄様。あたし兄様と一緒にいられて嬉しかったよ。兄様とずっと一緒にいられたよ。兄様に利用されて、あたし、嬉しかったよ」
ぴしり。にわかに音を立て、頭蓋骨に亀裂が走った。
レティーシャの喉が、ひくっと震えた。その目が、ぼろぼろと涙を零した。
「行くのね……兄様。その力と一つになりたかったのね。それが未来なのね。あたしも行くよ。そこへ行くよ。兄様のいるところへ行くよ。いつか行くよ。必ず行くよ」
頭蓋骨は、どこか詫びるように、最後に一つ、歯を鳴らした。
「あたし、兄様の行くところより先の場所に……行くの？　そのために兄様……」

ぼろりと頭蓋骨が砕けた。かつてジークに斬られた男の魂が、霧散し、湖面へと吸い込まれるようにして消えてゆく。頭蓋骨が微塵となって湖面へ消えるさまを、レティーシャは呆然と泣きながら見守った。やがて最後のひとかけらが湖面に沈み、
「兄様……行っちゃった」
ぼそっと口にした。
そのまま、ぼうっと湖面を眺めていたレティーシャの影から、ふと羽音のざわめきが起こる。蠅がわらわらと影から現れ、レティーシャの体を覆っていった。
「あたしも死ぬよ……兄様」
己の身を蠅に食わせようとしたそのとき、頭蓋骨が消えた湖面に、波紋が一つ生まれた。
その波紋が広がってゆくさまをレティーシャの虚ろな目が追い――
その先で、白亜の城がそびえていた。
ふとレティーシャの目に、かすかな光がやどった。
「レオニス様……言った。あたしの知らない綺麗を……見せてくれるって」
ざわざわと蠅がざわめき、やがてレティーシャの影へと再び戻っていった。
「見せてよ……レオニス様……」
レティーシャは立ち上がった。遠く城を見つめ、一人、歩き出していた。

誰も彼もが泣いている。
そうアリスハートは思った。特に、城の屋根から戦場を見つめ、朝から出て行ったきり戻ってこないトールのことを思っていた。どこかでトールが苦しんで泣いている気がするのだ。ひどく辛い思いに責め苛まれ、そのせいで死んでも良いと思ってしまっているのではないか。そんな気がして仕方がないのだ。
かといって自分に何が出来るわけでもない。無力でちっぽけで役立たずだった。一緒に戦うことも出来なければ、並んで歩くことさえ出来ない。
そんな自分に何が出来るだろう。
そのときふと、アリスハートは、過去に同じことを誰かに言われたのを、思い出した。
トールだった。
ノヴィアが、霧の城で彷徨っているとき、破れた羽で飛んでいこうとしたとき。
いったい何がアリスハートに出来るのかと、トールに言われたのだ。
ああ、なんだ――
思わず、そう呟きたくなった。
アリスハートは立ち上がり、そっと、その羽を広げた。

「あたしも、あんたが好きだから。そばにいてあげないとね……」
ふわりと金の輝きが宙に浮かび——城を離れ、飛んで行った。
戦場のどこかで泣いているのかもしれないトールのもとへ。

6

指揮所には、レオニスとノヴィア、そして数名の伝令を除いて誰もいなかった。
みな戦いの最終局面にあたり、レオニスの指示を受けてそれぞれの役目を遂行していた。
残りの伝令に最後の指示書を与えて放つと、レオニスはノヴィアを振り返って訊いた。
「湖の様子はどうだい、ノヴィア？」
「先ほどよりも、さらに深い紅の色へ染まっていくわ、レオニス」
「間違いない。ドラクロワが竜精に触れようとしたんだ」
レオニスは自分の手で車椅子の車輪を回し、極彩色の地図に背を向け、言った。
「じきに、この戦いの決着がつく」
ノヴィアは無言でうなずいた。
このまま城外で攻勢に転じた聖地の兵が押し切れば、形勢は一挙にこちらのものとなる。
そしてジークという鬼神に等しい存在がいる限り、もはやレオニスの細かな指示さえ無用

だった。兵の力を信じて、結果を待つしかない。
だが一方で、レオニスは覚悟を決めている。最大の敵が、気配もなく迫っているのだ。それを否定して目前の勝利に心を傾けるのはたやすい。だがそうすることを、レオニスの頭脳と、また心が許さなかった。
「ノヴィア……君の手で、どうか僕を、王座の間へつれていってくれないか」
「ええ、レオニス……」
ノヴィアはレオニスの背後に回り、そっとその車椅子を押した。
指揮所を出て、無人の廊下を、二人だけで進んだ。付き人たちも廷臣たちも、みな決戦のために出払っている。またそうするよう、レオニスが指示していた。
「君には、ひどいものばかり見せてしまった……。本当は、もっと綺麗なものを見せたかったのに……結局は、こんなものしか見せられなかった」
「あなたの行いの全てを、私もともに背負います。あなたの罪も全て、私のものです」
ノヴィアは言った。
レオニスは瞑目し、
「ありがとう……。すまない……ノヴィア」
ノヴィアに捕虜の命を奪わせたときと同じ言葉を、ただ繰り返した。

王座の間へ入る前に、漆黒の像の傍らを通り過ぎた。亡者を踏みつけながら、花を手向けるレオニス自身の像だった。今の聖地はその像の通りになった。そのことをレオニスとノヴィアの双方が静かに心に受け入れ、そして王座の間へ入っていった。
王座へ続く階段の前で、車椅子を止めた。
「いったいどれほど、あの王座を憎んだだろう……」
レオニスはそう呟き、ゆっくりと両手に力を込めて身を起こした。注意深くその足で立ち、膝を震わせながら、一歩また一歩と階段を登る。その様子をノヴィアが見守り、レオニスは無事、己の足で王座に辿り着き、大きく息をついてそれに座った。
ノヴィアは車椅子を広間の隅へ運び、そして王座に座るレオニスの傍らへ歩み寄った。
「出来れば、ここで君には逃げて欲しいんだ……ノヴィア」
そっと告白するようにレオニスは言う。ノヴィアは、しかしかぶりを振った。
「最後まで見守らせて、レオニス。あなたとともに、最後までこの聖地を守るために」
ノヴィアの手が、そっとレオニスの手を握る。
互いに一度だけ力をこめて手を握り合い、そして離れた。
そしてレオニスの手は、王座の脇に置かれた宝剣へと伸ばされ、その柄を握った。
澄んだ音を立てて刃が鞘を滑り、鮮やかな輝きをあらわにする。

そうして、一方は宝剣を、一方は宝杖を手に、聖地の双王は最後の敵の到来を待った。
間もなく――入り口の向こうで、長靴の音が響いた。
その音が広間へと近づいてくる。やがてひときわ強く響くとともに、男は姿を現した。
「見事な守戦だった、レオニス・ジェルミナル」
冷厳とした声音に、圧倒的な存在感を秘め、ドラクロワは言った。
「争乱による多くの死者が、秘儀を育てる。お前の働きは、私の想像以上だった」
レオニスは、じっとドラクロワの姿を見つめ、
「彼はどこにいる、ノヴィア」
と訊いた。
「右手の、入り口から三つ目の柱のすぐ隣です、レオニス」
ノヴィアの言葉とともに――レオニスが宝剣を投げ放った。いや、ほとんど宝剣がひとりでに宙を飛び、凄まじい勢いで空を切って振り下ろされた。
高らかな剣戟の音とともに、眩いばかりの火花が、何もない空間に爆ぜた。
同時に、それまで広間の入り口に立っていたドラクロワの姿が消え――
宝剣が襲いかかった場所に、漆黒の剣を手に、微笑むドラクロワが、いた。
「聖地シャイオンの双王に、幻術が効くと思うな！」

凛冽たる声音とともに、レオニスは手を翻らせた。宝剣が宙を舞い、さらなる斬撃を浴びせかける。それを漆黒の剣で打ち弾き、ドラクロワは大きく横手へ跳んだ。そこへ、

「矢が、見えます」

ノヴィアの声とともに、幻視の矢が迅った。ドラクロワの青ざめたマントが翻り、

「ジークの従士か……」

かすかな呟きを、耳をつんざくような雷鳴がかき消した。漆黒の稲妻が金の矢を吹き飛ばし、ついで宝剣を直撃する。だが宝剣のすぐ手前で、ふいに稲妻が四散した。そればかりではない。その雷花が、そのまま宝剣の刃へと吸い込まれてゆく。

「む――」

僅かに驚きの表情を浮かべるドラクロワへ、宝剣が迫った。その刃を漆黒の剣が受け止め、初めてドラクロワの目に、はっきりとそれが見て取れた。

なんと宝剣の刃に、何かの文字や紋様が、びっしりと刻み込まれているのだ。

「あなたが僕に明かした、外典の内容だ、ドラクロワ！　聖法庁の古い貴族語に直し、最初の聖王が記したという外典の文面を再現した！　外典にやどる英霊は、最初の聖王の言葉に従うぞ！　その宝剣に刻まれた言葉に！」

レオニスが高らかに告げ、宝剣がドラクロワに執拗に迫る。ドラクロワが大きく宝剣を

撃ち弾いた途端――宝剣が漆黒の稲妻を放った。

「小賢しい……！」

ドラクロワが左手に握る外典を掲げた。その頁がひとりでに開かれ、漆黒の稲妻が吹き荒れる。二つの稲妻が真っ向からぶつかり合い、辺り一面に雷花をまき散らした。

「所詮は模倣に過ぎん！」

稲妻の奔流に、ついに宝剣が弾き飛ばされ、レオニスの手に戻った。

「く――」

レオニスが呻いたとき、その眼前を覆い尽くすほどの稲妻が押し寄せてきた。

「レオニス！」

ノヴィアの悲鳴が、雷撃にかき消された。稲妻が王座を中心に吹き荒れ、その衝撃がノヴィアを突き飛ばす。気づけば床に投げ出され、すぐ目の前を黒い雷花が渦を巻いている。

弾かれたように起き上がり、再び王座の傍らに走り寄ろうとして――ノヴィアは息をのんで、その光景を見た。

レオニスが、剣を掲げて立っていた。剣の切っ先が稲妻の奔流を防いでいる。その凄まじい圧迫にもかかわらず、レオニスの両足はしっかりとその身を支え、崩れない。

いったいどれほどの力を振り絞って立っているのか。レオニスは歯を食いしばり、言葉

にならぬ声を上げ、にわかに、その剣を横へと振り払った。
　稲妻が宙を流れて広間の壁を打ち砕く。その濛々たる粉塵の中、レオニスはなお立ち続け、ひたとドラクロワを見下ろした。
「始めは、あなたの力の模倣に過ぎなくとも……いずれその力は僕自身のものとなる」
　ドラクロワの左手で、書物が閉ざされた。雷花が辺りに音を立てて舞い散る。
「抗うな、聖地の王よ。そなたの命もまた、聖地とともに秘儀の一部となる。聖地はもはや滅びに瀕死、その王座ともども無に帰す時を待っている」
　ふいに、レオニスのおもてに、挑むような笑みが浮かんだ。
「王座を無に帰することなんて……とっくに決意してるさ」
　少年らしい口ぶりをみせるや、突然、驚くべき行為に出た。
　その宝剣を宙に放つや、大きく右腕を振るって、自分の背後にあるものを真っ二つに斬り砕いたのである。
　ドラクロワの顔から笑みが消えた。
　聖地の王座——それが両断され、音を立てて倒れるさまに、ノヴィアは声もなく、驚きのあまり目を見はったまま立ちつくした。
「何の真似だ……レオニス・ジェルミナル」

ドラクロワが、低く問う。レオニスの手に、再び宝剣が握られた。
「これこそ……あなたが、かつて求めたことだ、ドラクロワ」
「なに――?」
「あなたは王座を廃するために、王座を求めた! それがあなたの理想だ!」
レオニスの叫びは凜冽と広間に響き、目に見えぬ刃となってドラクロワの胸中に斬りかかるようだった。
「聖地シャイオンは既に、王を棄てることを決意した! 大勢の合議のもと国が営まれることを、全ての廷臣たちが承知している!」
ドラクロワは、かっと目を見開き、
「なんだと……」
呻くように、声を零した。
「聖地シャイオンは、あなたの理想を実現する、最初の地だ! あなた自身が捨て去った理想は、この僕が受け継いだ! あなたに倣い、そして僕自身が決意した!」
剣を掲げ、決然と叫ぶレオニスを、ノヴィアは凝然と見た。その声を聞き、その思いを受け取り、その姿を心に焼きつけた。王として生まれたことを呪詛のように思って育ち、苦しみに苦しみを重ね、そして幾たびの試練を経て辿り着いた、レオニスの決意を。

ドラクロワの手が静かに下がった。その身から放たれていた圧迫感が、ふいに深い感情に満ちたものへ代わっていた。それは痛切さであり、悲しみであったろうか。
「初めて――見た。自ら、王座を棄てる王を。私の理想を受け継ぐと言った者を。ジーク以外に、初めて――」
そう呟きを零しながら、ドラクロワはゆっくりとレオニスに向かって歩み寄った。
「だが聖地の王であった者よ……お前は一つ、誤っている」
ふいに、歩みゆくドラクロワの左手が、書物を掲げた。
「私は理想を捨て去ってはいない――……」
その言葉とともに、書物が開かれ、怒濤のごとき漆黒の稲妻が吹き荒れた。これまでに層倍する、広間を覆い尽くすほどの激烈な稲妻が、幾重にも迸る。
「レオニスっ!!」
ノヴィアが叫びを上げ――
「ただ理想の前に……全ての魂を解放せねばならないのだ……」
ドラクロワが王座への階段を登るとともに、全ての稲妻が王座のあった場所へと――レオニスの身へと降り注いだ。
闇そのもののような色がノヴィアの眼前を覆い尽くし、王座もレオニスもドラクロワも

見えなくさせた。レオニスのもとへ駆け寄るどころか、圧倒的な稲妻の奔流と、飛び散る雷花に追いやられ、弾き倒された。叫びは届かず、その眼差しさえ届かない。

そうして吹き荒ぶ稲妻が晴れ——

「う……」

手足に迫った火傷の痛みに耐えて立ち上がったノヴィアは、信じがたい光景を見た。

ドラクロワが、剣を手に立つレオニスの、すぐ目の前に、いた。

レオニスの宝剣が、深々とドラクロワの胸を貫き——

同じように、ドラクロワの漆黒の剣が、レオニスの胸を刺し貫いていた。

「レオ……ニス……」

呆然と、ノヴィアが名を口にしたとき——

さらに、信じがたいことが起こった。

「ふふ……」

レオニスが、声を上げて笑った。その口の端から、鮮やかな血が一筋、流れ落ちる。

「はは……僕の……勝ちだ……」

言うや、いきなり歩み寄った。レオニスが、である。

宝剣の柄から手を離し、ドラクロワに向かって歩を進めた。刃がさらにその身を抉り、

その鍔元がレオニスの胸に当たる。ドラクロワは苛烈な眼差しでそのレオニスを見据えるが、レオニスは不思議な微笑を浮かべ、ドラクロワを見上げている。
そうしてレオニスは震える両手で、ドラクロワの青ざめたマントを握りしめ、
「つかまえた」
にこりと笑って、言った。
突如――
レオニスとドラクロワの足下――斬り砕かれた王座の下で、何かが赤く光った。
石の床が盛り上がり、敷かれていた赤い絨毯が引き裂かれる。そしてその下に隠された異形の存在が、レオニスの血をすすり、脈動をあらわにしたのだった。
「竜骸――!」
ドラクロワが怒りの叫びを上げた。王座の下に、それがあったのだ。
脈動する石――巨大な動物の臓腑が石化したようなものが、咆吼を上げて身をもたげた。
「ともに、命を、捧げよう……。この、大いなる秘儀に……ドラクロワ」
レオニスの囁きとともに、真下から、それが、かっと顎を開いた。
真紅の色をした、髑髏そっくりの巨大な頭が生え、レオニスとドラクロワをともに、その顎の中に呑み込んだのである。

ノヴィアの叫びは、再三に亘って轟音に遮られた。真紅の巨大な髑髏の下から、醜く歪んだ体が現れた。いやに長い腕を生やし、赤ん坊のように広間へと這い出てくる。
髑髏の頭を持った化け物が広間に姿を現し、そのままさらに、身を起こすかに見えた。
そのとき、化け物の頭部から黒い雷花が噴き出した。
髑髏が苦悶するように震え——のけぞるや、その頭部が、いきなり弾け飛んだ。
漆黒の稲妻が、髑髏を内側から粉々に吹き飛ばしたのだ。
がらがらと音を立てて髑髏のかけらが床にばらまかれ、二人の姿が現れた。
どっとレオニスの体が投げ出される。その胸を貫く剣が半ばから折れているにもかかわらず、レオニス自身の聖性によって形をとどめている。
「レオニス！　レオニス！」
ノヴィアが悲鳴を上げて駆け寄り、血に濡れたレオニスをかき抱く。
「竜骸に……形質を与えなければ……。堕気に……形を……」
レオニスの手が震え、宙をさまよった。
その手の向こうで——ドラクロワが膝をつき、胸から宝剣を引き抜こうとしていた。
「ぬうっ」
宝剣の刃が漆黒の稲妻を帯び、ドラクロワを内から灼いた。その苦痛を怒りでねじ伏せ、

一挙に刃を引き抜く。宝剣が放り棄てられ、レオニスとノヴィアのすぐそばで跳ねた。
「僅かな一歩とはいえ……英霊たちの試練に踏み込んだことを誇るがいい……」
その左手の書物を掲げ、ドラクロワは言った。
「我が身を竜骸に食わせようとした者も初めてだ……秘儀をここまで手の内にした誉れをもって、力に身を捧げよ……レオニス・ジェルミナル」
書物が頁を開いて漆黒の稲妻が火柱のように噴き上がった。
ノヴィアはかっと目を見開き、ドラクロワに一矢報いようとしたそのとき――
「おるるらえ死んじゃぇえるがぁあ――っ!!」
唸るような呪詛とともに、蝿の激流がドラクロワの背後から雪崩れ込んだではないか。
ドラクロワは素早く横手へ跳んでそれをかわし、稲妻が四方へ吹き荒れた。その雷撃の火花が蝿を灼き、蝿が火花を食らい、両者が凄絶な食い合いを見せて宙に霧散する。
そのときにはレティーシャが蝿の群を現しながら、レオニスを守るように立っていた。
「生きていたか……」
ドラクロワは、その場にいる者たち全てを灰燼に帰すべく稲妻を放ちかけるや――突如としてその頭上で、巨大な掌が振り上げられた。
「む――!?」

ドラクロワがさらに飛び退いたそこへ、化け物の手が凄まじい勢いで叩きつけられた。
化け物が頭部を再生しながら、ゆっくりと、ドラクロワへにじり寄る。
レティーシャは、レオニスを振り返って、咎めるようなすがるような声を上げた。
「レオニス様、見せてくれるって言った。あたしに綺麗を見せてくれるって言った」
「ああ、レティーシャ……。そうだ……」
レオニスが右手をさまよわせる。その口から血が溢れ、目が失血で朦朧と光を失ってゆく。わななくレオニスの身を、ノヴィアが悲痛の思いで背後から抱きしめる。
「レオニス……喋っては駄目……」
だがレオニスは、強い力でレティーシャの左手を握ると、
「見せてやる……死と腐敗の先にあるものを……。誰もが知る……秘儀を……」
歯を食いしばり、そう告げ――微笑った。
レティーシャのおもてに、同じような笑みが浮かぶ。
「お前の力を……貸してくれ」
レオニスの言葉とともに、レティーシャの目が大きく見開かれた。
その足下からにわかに影が広がり、レオニスの影と重なるや――化け物の影がそれに引き寄せられるようにして、レオニスへと伸びていった。

化け物が、頭部を復活させ、背をのけぞらせて咆吼を上げた。
「――兄様⁉」
レティーシャが、化け物を振り仰いで叫ぶ。
そのときレオニスと化け物の影が交わり、一つとなった。影に、強烈な瘴気が渦を巻く。
化け物の体が、ぶくりと膨らみ、見る間に広間いっぱいに体を膨張させてゆく。
その腕が、膨らんだ勢いでドラクロワへ向かってなぎ払われた。
ドラクロワは、それを跳んでかわし、書物を掲げた。
「炸裂させる気か――」
そのドラクロワの背後で、化け物の腕が凄まじい音を立てて壁を破壊する。
ドラクロワの手で、書物が開かれた。稲妻が噴いて化け物を封じようとした、刹那――
化け物が紅蓮の色に満ちて、粉々に爆ぜ、辺り一面を紅の色に染め上げたのだった。

7

「討て！　とどまるな！　打ち寄せろ！」
ジークの嗄れることを知らぬ大音声とともに、魔兵が、聖地の兵が、敵の陣地へ殺到した。司令官らしい者の姿はどこにもなく、秘法士たちがめいめいに抵抗し、その全てが圧

倒的な激流に呑み込まれるようにして倒れていった。
ジークは剣を手に卒然と先駆け、敵陣で魔獣を招き出す増殖器へ斬りつけた。ついで、その獣の臓腑をこねあわせたような姿の増殖器へ魔兵が群がり、八つ裂きにした。
暴れ狂っていた魔獣どもが一斉に姿を消した。辺りに立ちこめていた堕気が霧散する。
ジークは、たった今破壊した増殖器が、最後の一つであることを確信した。
「勝った！」
ジークの口から、朗々とその言葉が放たれた。
それを聞いた暴徒たちは絶望に駆られて後ずさり、逆に聖地の兵は同じ言葉を歓喜をこめて繰り返した。
「勝ったーっ！」
「勝ったぞぉーっ！」
四方にその声が広がってゆき、暴徒たちの戦意を決定的に挫いてゆく。聖地の兵が、さらに激しく攻勢に出ると、それがきっかけとなって敵陣は総崩れとなり、暴徒たちは蜘蛛の子を散らすように四散していった。
ジークは足を止め、辺りを見渡した。
「勝った！　勝ったぁーっ!!」

聖地の兵たちが、勢い込んで勝利の雄叫びを上げ、敵を追討しにかかる。ジークはそれを止めなかった。ここで完全に追い払わねば、いつまた残党が集まるか知れないからだ。
一方、魔兵たちは次々にくずおれ、どろりとした黒い液体と化して地面に消えてゆく。崩壊する魔兵たちから、ふわりと淡い輝きが昇り、天へ還って行った。
累々たる屍の山に、吹き荒れる堕気。ジークは戦場を振り返り、聖地の死を悟った。
もはや土地は枯れるしかない。どれほど復興を願ったところで無益だ。竜骸に、あまりに多数の増殖器。土地が根底から腐敗してしまった。とどめようのない荒廃だった。
守りに守った末に、残されたのは死の大地。
その無念さを何とか顔に出さぬよう気を引き締め、ジークは城へ戻ろうとし——
異常なものを、見た。
紅蓮の炎のごときものが、城から猛然と迫ってくるのだった。

ジークが最後の増殖器に斬りかかるより、少し前の頃——
一人の修羅が、どっと地面に膝をついた。
左手に聖槍、右手に鉄鞭を握る、トールであった。
その腕を、背を、腹を、切られ、抉られた、まさに満身創痍の姿である。傷はその顔面

にもおよび、その一つが額から頬へと走り、左目を深く傷つけ、光を失わせていた。
トールは、顔を上げ、残った右目で、辺りを眺めた。
五人の秘法士が、周囲で倒れ伏していた。みな絶命している。首を失った者。両腕がない者。一人など、両足の膝から下だけが、その場に立ったままだった。
凄惨な修羅の行いの跡に——ただ一人、右腕のない女だけが、生きて立っていた。
「な……な……」
槍の巫女たる女は、呆然として声もない。わなわなと震え、後ずさろうとするのへ、
「お逃げなさい……」
トールの優しい声に、ぴたりと女は足を止めた。
「私も、もう戦う力はありません。もうこれ以上……殺し合うこともないでしょう」
がらん、と音を立てて、トールの左手から聖槍が転がり落ちた。その穂先が、ぼろぼろに刃こぼれし、聖印が崩壊寸前の明滅を繰り返している。
女の顔に、凄惨な笑みが浮かんだ。槍を握る手に力をこめ、歩み寄った。
「愚物が、よくも我が信者を斬りおって。まあ良い……貴様の首を刎ねた後で、残った聖槍を、そこらの民に授けてくれるわ。英雄の息子とやらよ、たっぷりと苦しませて——」
ひゅっ、と刃風が一つ、空を切った。

女の目が、かっと見開かれる。トールは微笑んだ。
「ああ言えば、きっと、こっちまで来てくれると、思っていました」
トールの鉄鞭が、目に見えぬ速度で振るわれたことに、女は一瞬遅れて気づいた。
今まさに、槍をトールの足に突き立てようとした刹那であった。女は、目の前の嗜虐に酔い、槍がその身を守ろうとするのを、無意識に押さえつけていたのだ。
その状態を正確に狙った、トールの一撃であった。
「し、死にたくない……ドラクロワ様……」
それが、槍の巫女たる女の発した、最後の言葉だった。女の首がずるっと斜めにずれ、驚愕と悲嘆の表情を浮かべたまま、落ちた。
遅れて、トールの傍らに、女の体が倒れた。
トールは、自分が斬り倒した者達に囲まれたまま、晴れ渡った空を仰いだ。
かつて、レオニスとともにいつも感じていた故郷の匂い、未来への思いが、どこかに無いか、探すような目だった。
切り刻まれた体のそこかしこから血が流れるのを感じた。特に腹の傷がひどい。どくっ、どくっ、と脈動とともに血が零れてゆく。それでもすぐには死は訪れなかった。トールの戦士としての本能が、いずれも急所をかわし、内臓に傷を負わずにいたからだ。

それでも、死は必然だと思った。
今すぐにも立ち去らねばならないのに、気力が湧いてこない。
間もなく、大勢の者が口々に叫びながら丘に登ってくるのが分かった。
「レギン様！　敵が攻めてきております！」
「どうぞ、みなのものを鼓舞して下され——」
武器を持った暴徒たちは、丘の上の惨状を目の当たりにし、はたと足を止めた。
トールは空を見上げるのをやめ、彼らに目を向けた。自然と頬に微笑が浮かぶ。
「あなたがたの指揮者は、私が、斬りました」
律儀に、言った。
暴徒たちは一様に慟哭の表情になり、それが次々に怒りに変わった。彼らにとって信仰の支えでもあった者がいなくなったのだ。その悲しみはトールにも分かるつもりだった。
トールは目を閉じた。詫びるようにうつむき、まるで首を差し出すようにした。
訳の分からぬ叫喚とともに暴徒たちが殺到してきた。そのとき——
「トールっ!!」
その声に、トールは残った右目を見開いた。自分に向かって誰かが刃を振りかざすのを気配で察しつつ、

「死んじゃ駄目えっ！」
声の続きが、聞こえていた。金の輝きが、遅れて目に映った。そのときには、刃が、その身に振り下ろされている。何ということだろう、とトールは思った。人知れず八つ裂きにされるならまだしも、最期にその無惨な姿を、彼女に見せてしまうとは。何という罰だろう。最期の最期で、自分にではなく、アリスハートに、恐怖と悲痛を与えるとは。
それだけは嫌だった。生きたい、と思った。願うこと自体が虚しくなって初めて、心の底からそう思った。気力を振り絞り、迫る刃を何とかかわそうとした。
だが刃はいつまで経っても、その身に迫って来なかった。
代わりに、トールの周囲で、異形の剣士が次々に立ち現れていたのである。
堕気が染みこんだ大地から、凄魔たちが双剣を手に跳び出し、暴徒たちをなぎ倒した。
総勢十六体――各所に配置したはずの全員が、トールを守るために現れていた。
侮辱するな――
まるで彼ら全員に、そう叱咤されている気がした。指揮官を失うという屈辱を味わわせる気か。どこかにいるジークの怒りさえ、彼らを通して伝わって来るようだった。
「申し訳ありません……」
トールは言った。その、無傷な側の頬を、アリスハートの小さな手が撫でた。

「やっぱり、泣いてた」
アリスハートは微笑んだ。言うことを聞かない子供を諭すような、少し困ったような、優しい笑みだった。そのアリスハートの言葉で、トールはまた自分が泣いていることに気づいた。確かに子供のようだった。傷ついて消えてしまいたくなっていた子供だった。
「申し訳ありません……」
また言った。アリスハートは、小さな手で、ぺちぺちとその頬を叩いた。
「頑張ったね、トール」
いつしかトールのおもてにも微笑が浮かんだ。そこへ、ふいに遠くから、
「勝ったぁー！」
歓呼の声が、届いてきた。
その声を聞きながら、トールは己に止血を施した。一頭の馬をつかまえ、乗った。
トールはレオニスのもとへ、アリスハートはノヴィアのもとへ、それぞれ戻るために。
アリスハートがトールの首にしがみつく。トールは馬を走らせた。凄魔たちが、その周囲を守るように走る。聖地の兵が敵の残党を追討するのを遠く眺め、城へ向かった。
「地面が死んでるぅ……」
どす黒く干涸らびた大地を見て、アリスハートが悲しい声を上げた。

そこかしこに屍が倒れ、見渡す限りの荒廃だった。守ったはずの聖地が死に瀕しているのを、トールも、ジークと同じように感じた。これもまた罰なのだろうかと思った。レオニスがその身に受ける、過酷な罰だった。

この荒廃から立ち直るすべなどあるのだろうか。待っているのは、故郷を失い、土地を棄てねばならない悲劇だけではないのか。それが、決死の思いで守った結果なのか――

無念の思いを抱き、トールは城を目指した。そのとき――

「何あれぇっ!?」

突然、トールとアリスハートの視界に、真っ赤な何かが現れていた。

咄嗟に、炎かとトールは思った。考えられることは一つ。城のど真ん中で、竜骸が炸裂したのだ。それこそ荒廃にとどめを刺す、最後の悲劇だった。

「レオニス様っ!」

たまらずトールの口から叫びが放たれた。紅蓮に染まる空へと、激しく馬を駆る。考えなど何もなかった。聖地が滅ぶなら、何としてもレオニスのそばにいなくてはならない。その思いだけがトールを支配した。

間もなく、紅蓮が迫った。そしてそれが、炎ではないことを、トールは知った。

にわかに――耳を聾さんばかりの羽音が、辺りを覆い尽くした。

「蝿――!?」

それは真っ赤な蝿の群であった。レティーシャの招く蝿よりも、ひと回り大きい。蝿の頭をしているが、その体は節くれ立った爬虫類のようで、竜骸を連想させた。

無数の、小さな竜骸――そうとしか思えぬ堕気の強さだった。だが同時に、蝿の身が放つ紅蓮の輝きに、別のものを感じていた。

「聖性……」

蝿に囲まれた途端、トールは傷の痛みが引くのを感じた。傷を疼かせる堕気が消えたのだ。いや――吸われたといっていい。

真っ赤な蝿が、大地に満ちる堕気を貪り食っているのだ。

城を中心に四方へ飛び放たれた蝿は、真っ赤な雨となって降り注ぐようになった。空気にふくまれる堕気を食らった蝿が動きを止め、屍のように地面に落ちていったのだ。

さながら紅い吹雪である。蝿が次々に地面に降り積もり、やがて、どろりとした液体になった。そしてその液体から、ひどく優しい色をした何かが現れる。

トールは蝿の群に視界を遮られながらも何とか馬を進めた。

ふいに蝿の群が途切れ、一面に、その優しい色を見た。

それは淡い緑であった。

荒れ果てた大地が、うっすらと淡い緑野に変じていた。そのさまに、トールもアリスハートも呆然となった。思わず馬を止め、二人揃って、背後を振り返っていた。
紅蓮の蝿が炎のごとく吹雪いた跡に――輝くばかりの緑が広がってゆくのだ。
そのさまをじっと見つめ、そして決して儚い希望ではないことを確かめるように、
「聖地が……甦る」
そう、トールは呟いていた。

足下の地面にそっと手を伸ばし、柔らかな萌芽に触れた。
「秘儀を、逆転させた……？」
ジークは辺りを見渡した。聖地に来る前に、とある聖堂でドラクロワが試みていた秘儀のことが思い出された。そのとき配置された秘儀の仕掛けが、聖地の地形のどの辺りに、どう働いているか、ジークの全身が覚えている。
紅蓮の蝿の群は、ちょうどその秘儀の仕掛けを逆転させるように吹雪いていったのだ。
豊穣の果実が腐って地に落ちた末に――その種子が新たに芽吹くように。
仕掛けられた秘儀を、極限まで推し進めた結果、荒廃から再生への逆転が起こったのだ。
そのように秘儀の力を拡散させることを、ドラクロワが望むはずがない。

ジークは城へ歩み寄り、その白亜の壁を仰いだ。
「滅びの先に……甦りを見せたか……レオニス」
城の壁に、脈動するものが生えていた。広間で発動した竜骸が、城の石材を己の身として成長し、その一部が外にまで広がっているのだ。レオニスがそれをどう使い、そしてまたドラクロワがどのようにそれを求めるか、すぐに分かった。
ジークは、雷花を閃かせる左手を、静かに竜骸の一部へと当てた。
ずぶり、と音を立て、ジークの左手が竜骸に呑み込まれた。

8

広間いっぱいに膨らんでいた竜骸の背や腹が爆ぜ、そこら中に炎のごとき蝿の群が飛び交っている。いまだ残る竜骸の頭が、低く唸りを上げてドラクロワを見据えていた。
竜骸から、とめどなく流れ出る蝿の群が、聖地に何をもたらしたか――
窓の外に、破壊された壁の外に、それが現れている。焦土と化した大地に広がりゆく淡い緑野の輝きが、レオニスの身を抱くノヴィアと、レティーシャの目を打った。
「これが、レオニス様の、綺麗……」
呟きながら、レティーシャはレオニスの手をぎゅっと握った。

だがレオニスの手は何の反応も返さない。レティーシャはふとレオニスを振り返った。レオニスは目を細めて、破壊された壁の向こうを見つめている。血で汚れた口元に、淡い微笑があった。ひどく嬉しげなくせに、今にも泣き出しそうな、そんな表情だった。

「レオニス様……？」

レティーシャが声をかけた。そのとき、凄まじい稲妻の音が響き渡り、竜骸の頭が、巨大な掌が、木っ端微塵に砕け散った。そのかけらもまた真っ赤な蝿になるさまに、

「死を苗床に、命が芽ずるという円環こそが、罪悪なのだ」

重く、ドラクロワが怒りの声を放った。

「秘儀はその円環を断つためのもの……。それを……逆巻く刻の流れを、新たな生命の萌芽へ導くとは……。それゆえに死がいつまでもこの世にあると、なぜ分からぬ……レオニス・ジェルミナル――」

ふとそこで、ドラクロワは、何かに気づいたように口を閉ざした。

レオニスは答えない。ただ穏やかな微笑を聖地に向け続けている。そのレオニスの体を背後から抱きしめながら、ノヴィアが、涙を流しながら屹然とドラクロワを見た。

「ジーク様ならば、全ては命があるからこそだと仰るでしょう。死を否定し、命を蔑ろにし、いったい何が生まれるのですか」

ドラクロワは、左手の書物を掲げ、
「永遠の刻だ――」
答えとともに、漆黒の雷花を閃かせた。
ノヴィアが眼前に矢を幻視し、レティーシャがレオニスの手を握ったまま低く唸る。
そこへ突然、ドラクロワのすぐそばで一陣の刃風が迅った。
「レオニス様が求めたのは豊穣――」
声が遅れて響いた。咄嗟に身をかわしたドラクロワの左腕を、刃が浅く斬った。
「む――」
外典を持つ手を斬られ、ドラクロワが僅かに呻きを零す。素早く右手に漆黒の剣を現し、さらなる刃風を、火花を散らして弾き返した。
「荒れ果てた永遠になど、レオニス様はご興味を示されなかった」
トールが鉄鞭を手に、広間に立って言った。その背後に十六体の凄魔がいる。
ふわりとアリスハートが宙を舞い、ノヴィアの肩に降り立つ。
蠅の群が全て消え、静寂が戻る広間に、ドラクロワの冷厳とした声が響いた。
「聖地の主が求めたものが現れたように、私が求めた秘儀もまた、現れている――」
その外典に雷花が咲くや、皓々と輝きを放つものがあった。

聖地シャイオンの湖である。真紅に染まっていたそれが突如として輝き、紅から黄昏を思わせる黄金色へと変じたのだった。湖全体が強い聖性を発するや、凄まじいまでの堕気がドラクロワの周囲で生じ、その青ざめたマントを翻す。

「今こそ秘儀は成就する……聖地の全てを、滅びへ招いて……」

ドラクロワが、苛烈な意志をみなぎらせて歩み寄った。レオニスを抱くノヴィアの背後——斬り砕かれた王座のその下で、今なお脈動する竜骸の苗に向かって。

そのドラクロワへ、最初に金の矢が猛然と放たれた。それが漆黒の稲妻に打ち砕かれると同時に、黒い蝿の群が濁流となってドラクロワに襲いかかっている。吹き荒れる稲妻を蝿の群が相殺した一瞬の隙を突いて、トールと凄魔が、さながら刃の森を現すがごとく、一斉にドラクロワの前に立ちはだかった。

ドラクロワの漆黒の剣が、鉄鞭を受け、双刀を弾く。

竜巻のごとく刃が襲い、ドラクロワの身を立て続けにかすめた。だがそこで稲妻が爆発的に吹き荒れた。蝿の群さえ貫いて、稲妻が凄魔たちを撃った。双刀がへし折られ、腕が、胴が、雷撃に微塵と化す。凄魔の半数が一瞬で撃ち倒され、さらに残り半数へ、漆黒の刃と稲妻とが襲いかかった。

トールもまた必死に稲妻をかわして、凄魔とともにドラクロワの行く手を阻もうとする。

だが一条の稲妻がその肩口をかすめただけで、凄まじい衝撃に横転した。全身の傷から血が零れ、息をのんで起き上がろうとするが、震えるばかりで力が入らない。
その間にも凄魔が一体また一体と消し飛んだ。ドラクロワの歩みは止まらない。
「レオニス様――！」
トールはその名を叫び、目はひたとドラクロワを見据え、力を振り絞って跳ね起きた。なぎ払われた鉄鞭を、漆黒の稲妻が撃ち砕く。咄嗟に左手に短剣を現して投げ放つが、ドラクロワは悠然とそれをかわし、剣を振るった。
危うく首を刎ねられるところを必死にのけぞってかわす。漆黒の刃が、その胸を真横に裂き、トールは、レオニスのすぐ目の前で倒れ伏した。アリスハートが悲鳴を上げ、ノヴィアが矢を、レティーシャが蠅を放つ。
だがドラクロワは、もはや彼らを見向きもしない。にわかに雷鳴が轟き、彼らの前で稲妻が壁となって爆ぜた。ドラクロワの背後で、跳びかかろうとしていた残りの凄魔たちが木っ端微塵に吹き飛ぶ。なおも漆黒の雷花を辺りに閃き、何もかもを打ち砕いてゆく。
ドラクロワは階段を登り、斬り砕かれた王座を見た。今や竜骸は王座の下からその背後の壁へと広がり、天井にまで至っている。
「王座を廃するために……王座を求めた……」

ひそかな呟(つぶや)きが零れた。遠い眼差(まなざ)しを、脈動する竜骸の苗(なえ)へ向ける。その脈拍(みゃくはく)が、聖地シャイオンの湖の輝きと呼応(こおう)していた。

そのとき、ドラクロワの外典(げてん)が、ひとりでに激(はげ)しく頁(ページ)を繰(く)った。

「ついに開かれる。秘儀の扉(とびら)が……。解放(かいほう)のときが……。全ては……秘儀の成就の果てに。シーラよ……今こそ、その魂(たましい)を……」

喜びの底に、ひどく悲しむような響(ひび)きがあった。その声に、応える者とてない。

いや、いるはずがなかった――

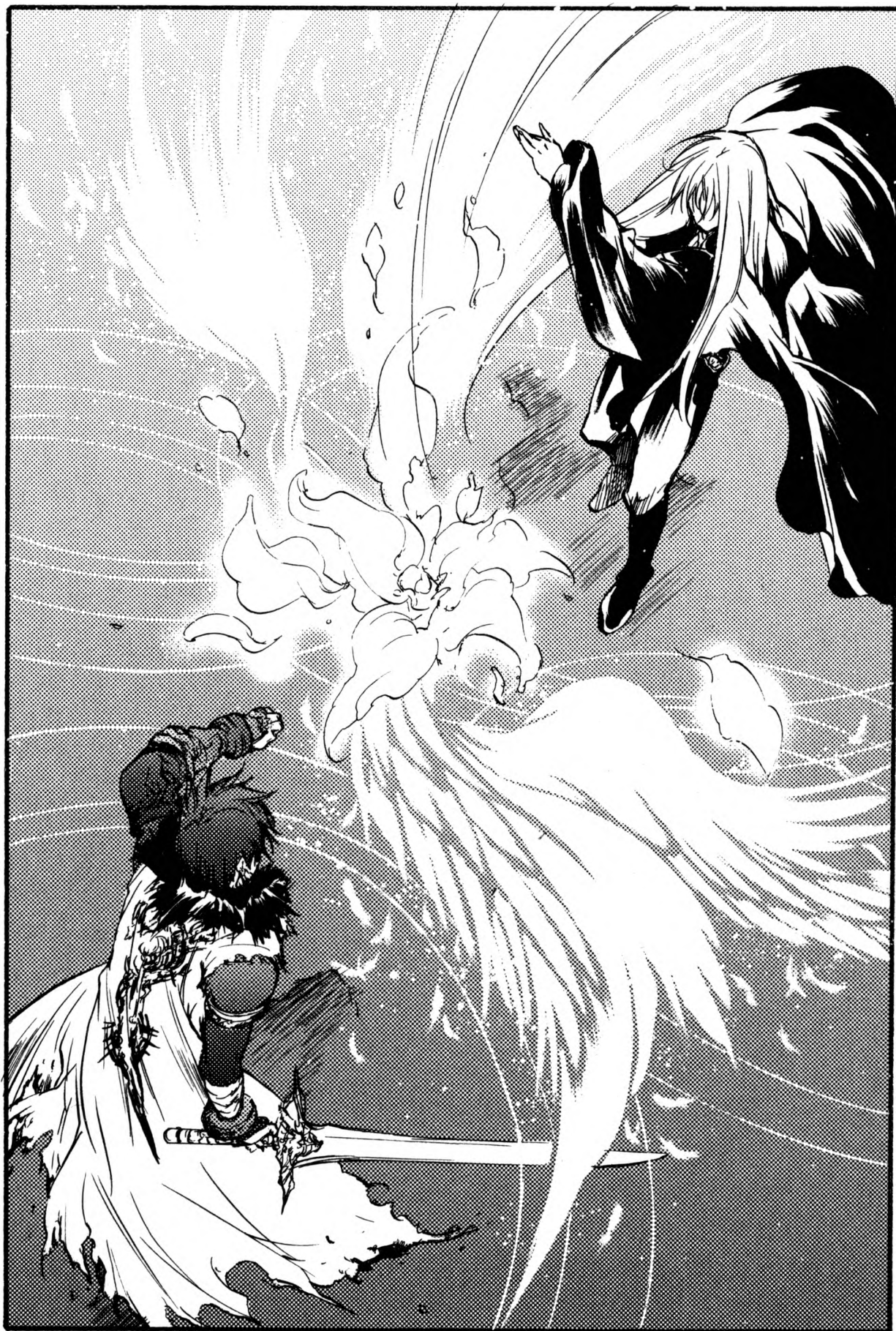
「何の解放だ、ドラクロワ」

鋭(するど)い声とともに突然、ドラクロワの目の前で竜骸が、爆ぜた。

飛び散る竜骸の断片(だんぺん)とともに、青白い雷花が吹き荒れ、

「なに――!?」

さしものドラクロワが完全に隙を突かれた。竜骸の中から、激烈な堕気に耐(た)えてジークが飛び出し、その両手で剣の柄(つか)を握(にぎ)り、猛然と振り下ろしたのだった。

かつてない強さの堕気が剣身に発露(はつろ)し、青ざめた炎(ほのお)となって燃(も)え、その刃(やいば)が、ドラクロワが咄嗟(とっさ)に振り上げた漆黒の剣を、真っ二つに断り砕いていた。

「ジーク!!」

ドラクロワが憤怒の声で叫ぶ。
その声には応えず、ジークは左手を剣から離して高く掲げ、
「ジーク・ヴァールハイトが招く!!」
青く雷花が爆ぜるその掌を、ドラクロワの外典へと叩きつけていた。
かっと眩い輝きが生じ、外典が支配しようとしていた力が、にわかに反転し、四方へ流れ出した。その輝きに照らされて、竜骸の表面がひび割れ、ことごとく砕け散る。
そして聖地の湖が――ひときわ強く、輝いた。
「行くな、シーラ!!」
ドラクロワの叫びが、凄絶にせめぎ合う青と黒の稲妻に、かき消された。

聖地シャイオンの湖は、その輝きを、黄金色から青ざめた光へと変じさせた。
眩いばかりの光にかかわらず、湖面は時が止まったかのように静まっている。
その湖面に、ふいに、青白い稲妻が爆ぜ――幾つもの波紋が生じた。
波紋は四つ。稲妻が消え、その波紋の一つ一つの中心から、白い何かが姿を現した。澄んだ水から白水仙の花弁が咲くように、音もなくそれが水面に伸び、ぱっ――と展かれる。
それは、翼であった。

湖面に、四つの翼が咲いていた。
まるで白い花が、巨きな鳥へと姿を変えたかのように——その竜精は湖面に立って悠然と四翼を広げたのだった。
たおやかな首にかけられた十字型の紋章を揺らし、黒い瞳を天に向けた。
翼が翻った。
ふわりと、その身が舞い上がる。
遠い過去からやどり続ける聖性を——数多の死者の思いが渦巻く堕気を。
聖地に満ちていた聖性を——戦いで広がっていた堕気を。
等しくその身にやどした聖魔の竜精は、かくして、空へと飛翔した。
その姿が、輝きが消えた湖の鏡のような水面に映り——どこへともなく飛び去った。

9

「秘儀は去った……彼女の魂とともに」
ドラクロワが言った。苛烈な意志をたたえた目が、ジークを見据えた。
「外典の最後の頁が開かれた。全ては、これからだ……ジーク。大いなる動乱のときが、真に始まるのだ……」

ひどく遠くから聞こえてくるような声だった。
ジークは、さっと剣をなぎ払った。刃が、ドラクロワの幻影を通り過ぎ、空を切る。
秘儀の成就が遠のいたと見るや、何のためらいもなく幻術を用いて退いたのだ。
「お前を……俺が、止める。ドラクロワ……」
既に城外へ脱出したであろう男に向かって、ジークは、誓うように告げた。
ドラクロワの幻影が、かすかな微笑を浮かべ——そして消えた。

ノヴィアは、剣を手に立つジークを見上げ、それから、聖地へ目を戻した。
破壊された壁を額縁とするように、美しい緑野が広がっている。
それを見つめるノヴィアの目に、涙が溢れかけたとき——
ふと、その傍らで、人の気配が起こった。
「君に……これをあげたかった。君が誇りをもって、ここで生まれたと口にすることが出来る、故郷を……」
ノヴィアは、はっと目を見開き——そこで、なぜか動くことも出来なくなった。指一本動かせず、ただ、誰かが自分のすぐそばで、こう口にするのを聞いた。
「不完全とはいえ、竜骸と竜精が、これほど接近していたせいだ。竜界が僅かに形づくら

れ、僕の存在を、いっときだけ、ここにとどめてくれているんだ……」
　はっきり声は聞こえる。気配も感じる。視界の隅に、相手の顔があるのが分かった。
「君は、どこまでも遠くを見て、旅を続ければいい……。ジークやアリスハートとともに、多くのものを、その眼差しで見守ることが、君の使命なんだ。僕には、それが出来なかった。結局、生まれてから一度も、この国を出ることがなかった。でも、その代わり、僕はずっと、この国で君を待ち続けるよ。僕の命が、尽きた後も……」
　相手も同じく、聖地を見ているのが分かった。ノヴィアは相手を見ようとするのをやめ、聖地に心を向けた。レオニスが、命を賭して、最後まで守り通した聖地を。
「君には、遠くへ……行って欲しい。僕が見たものをよりも、さらに遠くを見て欲しい。君が帰ってくるべき場所は、いつでも、ここにあるのだから……ノヴィア」
　ノヴィアは、そっとうなずいた。そこで初めて、自分が、ふいに動けるようになったことに気づいた。
　うなずいた拍子に、涙が溢れた。
　傍らを振り返っても、そこには誰もいない。
　ただ、魂の名残が薫るようにかすかに感じられ——そしてそれも消えていった。
　ノヴィアは、レオニスの亡骸を、強く強く抱きしめた。

「あなたが遺した、この国こそ……私の故郷です。ありがとう……レオニス」
そのノヴィアとレオニスに向かって、トールが、尽きぬ忠誠を誓って膝をつく。
トールの隣では、アリスハートが、レオニスの微笑むような死に顔を見つめている。
レティーシャは、ただいつまでもレオニスの手を握っていた。
ジークは彼らを見つめ——そして、ノヴィアと同じように、聖地へ目を向けた。
聖地の緑野からは、薫るような風が届いてきている。

Epilogue 遥かな道

戦いののち、レオニスの死と、その王座の廃止が、ともに領民に伝えられた。
領民は訃報を嘆き悲しみ、また、その死後にまで届くレオニスの思慮を称えた。
レオニスが遺した政策が発表され、ジークが戦後の後見人となって聖地シャイオンの合議制を、聖法庁に認めさせた。
聖地シャイオンと聖法庁――両者の和解が、〈銀の乙女〉を仲介してなされた。その和解の場に、ノヴィアの姿が、あった。聖法庁は、聖地の復興を支援することを約束した。
疲弊した聖地は、急速に、大陸における政治や軍略の焦点ではなくなった。
その復興には長い年月がかかるだろうと思われた。多くの者が、聖地シャイオンの荒廃を予想した。だが、その予想は外れた。いや――荒廃は既にレオニスの予想のうちであり、それを回避する方策が、事前に用意されていたというべきだった。
戦前にレオニスが整備した経済体制は、各地の商人たちにとって、なくてはならないものになっていたのだ。戦いが終わるや否や、聖地シャイオンに多くの人が集まった。

民を王のように豊かにしてくれる場所――
それが聖地だった。多くの者が、聖地を己の新たな故郷とすることを望んだ。
聖地は、政治や軍略から解き放たれ、貿易の要として、その大輪の花を咲かせた。

「兄様、行っちゃった」
湖畔に、レティーシャの姿があった。
「レオニス様も、行っちゃった」
湖に向けていた目を、背後に揃えられた山のような石材に向ける。
「レオニス様が見せてくれたもの、あたし、彫るよ。みんなが見られるように。ね、兄様。ね、レオニス様」

「戦いの全てを彫像にして、祈念碑とするよう、廷臣たちが頼んだのです」
レティーシャが嬉々として蠅をまき散らして像を造る様子に目を向け、トールは言った。
「あの人が、レオニスの像を……」
今さらになってレティーシャが彫刻家であることを知るノヴィアだった。
亡者を踏みつけつつ花を手向けるレオニスの像は、その墓碑となり、今は逆に、多くの

民の手によって、花を手向けられている。
それは、聖地最後の王の像として、城の広間に飾られた聖母像と対をなして称えられた。
またもう一つ——裁きの断頭台は街の広場で、今なお、聖地で罪を犯すことの愚かさを示している。
王の像、聖母像、断頭台——それら全てを見たジークは、
「まさに国だな」
と評した。政治も、土地の豊穣も、裁きも、その全てが国だった。
王座が廃されたことにより、廷臣たちも貴族たちも民も、それを背負うこととなった。
かつて、レオニスが、たった一人で背負っていたものを。
「レオニス様が示された国の行方を、この残った方の目で、見届けようと思います」
そうトールは隻眼となった右目を指して言った。戦いの傷で光を失った左目は、かつてレオニスとともに過ごした日々を、見ているのだろう。
「あたしのことも、ちゃんと右の目で見てよね。すぐにまた来るからね、トール」
アリスハートはそんな風に、トールとの別れを惜しみ、再会を約した。
「心からお待ちしていますよ、アリスハート」
トールは微笑み、その目を、ジークに向けた。

「……行きますか」

「ああ」

ジークの懐には、聖都へ戻るよう告げる、聖王からの書状があった。

聖地攻略の背後で、ドラクロワが別の兵を動かしている可能性もあるのだ。今もどこかで、次の戦乱の用意を整えているのだろう。

あくまでジークの旅の目的はドラクロワである。一つの土地に長くはとどまれない。

その旨を、いつまでもジークに滞在してもらおうとする聖地の廷臣たちや騎士たちへ、厳しく伝えてあった。それでも王を失った不安からか、二言目には、どうか聖地にいてくれと滞在を勧められる。

今こうしてジークが城の者を避け、ひそかに去ろうとするのも、そのせいだった。

「どうか勝利の暁には、この地へ足をお運び下さい。聖地は、決して和平のために戦って下さった方々のことを忘れず、あなた方の勝利を祈り続けるでしょう」

トールの丁寧な励ましの言葉に、ジークはただ、無言でうなずいてみせた。

それからトールは、ノヴィアを見つめ、

「ノヴィア様……あなたの帰りを、いつまでもお待ちしております。この地で眠る、レオニス様とともに……」

柔らかな微笑みとともに、そう言った。
「はい……。ここが私の故郷であるということが、旅の間も、私の誇りとなり、私を支えてくれます。ありがとう……トール。どうかレオニスの遺したものを見守って下さい」
「承知しております」
トールは、深々と頭を垂れた。もう一人の王へ、忠誠を誓うように。
ノヴィアは緑野へ眼差しを向け、心の中で、聖地に、いっときの別れを告げた。

かくして――
レティーシャが戦いの光景を石に刻み、トールが過去と未来を見つめる中――
ジークとノヴィア、そしてアリスハートは、聖都へと旅立って行った。
街道に出るとき、ノヴィアは一度だけ聖地を振り返っている。その頃にはもうトールの姿は見えず、ただ鮮やかな緑野に、鏡のように澄んだ湖を抱く聖地が見えるばかりだった。
もう一人の自分が生きた、故郷。この先どこへ行こうとも、その土地はいつでもそこにあって、自分がどこから来たかをノヴィアに教えてくれるだろう。
いつか、そこに帰ってくることを心の中で誓いながら――ノヴィアは道へ顔を戻した。
新たな景色を、さらにその先にある戦いを、どこまでも見守り続けるために。

ノヴィアは、アリスハートとともに、ジークの傍らを歩んだ。
その眼差しの向こうに、遠く、まだ見ぬ道が、続いていた。

カオス　レギオン　聖戦魔軍篇へ――

Legend of CHAOS LEGION continued to final episode.

後書き

初めましての方も、とうとう最終巻ですの方も、こんにちは、冲方です。
皆様の応援により、ついにシリーズ最終巻の刊行と相成りました。
最初の長編『聖戦魔軍篇』が出版されたのが、二千三年の正月。それから今作品まで、ちょうどぴったし、二年間の歩みであったことになります。なんとなく、もう五年くらいこの作品を書いていた気もしつつ、それでも蓋を開ければ二年で完結。
長く遠く、そのくせあっという間に過ぎ去った月日の、なんと実り多かったことか——本当に、読者の皆様のお陰です。
皆様への大感謝とともに、当作品をもってシリーズの幕を引かせて頂きたく思います。
さて。そもそもの始まりは、富士見とカプコンのタイアップ企画。
小説とゲームの新しい関係を築くため、それぞれが独立した動きを見せながら、いざというときには連携して作品世界を広げるという、実にやり甲斐のある仕事でした。

始まりのときを思い返すと、なんとも切々と込み上げてくるものがあります。
そんなわけで準備はいいですか？　そろそろ、いつものテンションに戻りますよ？
最終巻の後書きだからといって真面目なことばかり書くとは限りませんよー？
というか、むしろ最後だし、目一杯ぶっちゃけますよウブカタは。
さーて、そんなわけで行ってみましょう。名づけて、
「やってしまったよアルカーナ大陸・懺悔録七百日オブ・ウブカタ」――！

その一。二千X年・春――僕らは出会ってしまったシバッチユイユイ氏。
『カオス　レギオン』担当者にして、この二年間のウブカタの所業のせいで最大の犠牲を払わされた人物ことシバッチユイユイ氏。
彼が担当してくれねばウブカタは一生、短編が書けなかったかもしれません。
なにせ当時のウブカタときたら、「五十枚が百二十枚」になったり、「二百五十枚が二千八百枚」になったり、「五十枚が千八百枚」になったりする、超ファジー機能を搭載した極悪新人として悪名を馳せておりました。
その悪名ときたらひどいもので、「軌道計算が出来ない惑星型ロケット」、「分量を間違えたTNT火薬」、「暴走機関車」、「ハルマゲドン野郎」、「警察を呼びたくなる作家」、「狼

籍新人」、「地雷」……などなど、もう色んなことを言われ続けたわけですヨ。
そ・れ・が、ドラゴンマガジン誌上で『カオス　レギオン』の第一話が掲載されたときの枚数は、なんとぴったし四十枚（——十一・五枚）であったのです。
これには大勢の人にびっくりされました。中には、わざわざ電話をかけてくる人までいました。すごいよ雑誌一冊の中に収まるんだ君の書いたものが——と。
今思い返しても、そんなにびっくりしなくたって良いじゃないかと言いたくなります。
要するに、それほど画期的なことだったのです。
それも全て、担当者となったシバッチ氏の存在があったから。
彼が、最初の打ち合わせで言ったことを、今でも、はっきりと覚えています。
「僕、四十枚以上読むと、眠くなるんです」
——お前、本当に編集者か!?
そう叫びたくなりました。これはつまり、これまで大勢の編集者が、
——枚数守れないで、本当に作家か!?
と僕に対して叫びたくなったのと、ちょうど逆の効果があったと言えるでしょう。
かくして「枚数規定無視の極悪新人vs超マイペース新人編集者」の戦闘開始です。
この二人のケミストリーたるや、混ぜてはいけないものが攪拌されて生命の起源を辿る

ような、もう異様なノリの連続。昼の三時に打ち合わせを始めたと思ったら、終わるのが翌朝の午前五時などというのは、むしろ日常に分類されるくらいの熱戦の日々。
会話というより戦闘状態と呼ぶに相応しい打ち合わせを重ねた末に、第一話『エルダーシャの娘』が完成稿に辿り着くまでに書き直した回数——なんと、十三回。
単純計算で、四十枚を十三回書き直すと五百二十枚です。文庫ほぼ二冊分の分量を、
「なんか違うんじゃねー?」「まだちょっとズレてる気がしねー?」
などと言い合い、ほいほいと書いては捨て、書いては捨てていったわけです。
しかも馬鹿なことに、二人とも夢中だったせいで、書き直した量に気づいたのは連載が終わった後でした。それまでに千枚くらいは没にしたでしょう。その過程で、
「妖精が! 妖精が!」
とシバッチ氏が夢でうなされ、かくしてアリスハートが登場したり。
「シャベルだよシャベル! シャベルしかないよ!」
とウブカタが叫び、かくしてジークの得物がゲームでは登場しないシャベルになったり。
そんな無我夢中の連載を経て、長編書き下ろしに突入。書き直すこと三回。二人とも、もはやバカです。気づけば長編だけで八百枚くらい没にしてました。
なんという贅沢な書き方でしょう。こんな贅沢な経験、きっともう二度とないなぁ。

その二。二千X年――ついに本領発揮のウブカタ機関車。
そんなわけで無事に短編集と長編を刊行！　さらに、読者の応援のお陰で続投が決定！
外伝三話＋第二期連載も決まり、いよいよ盛り上がるウブカタとシバッチ氏。
しかし――そこにはシバッチ氏さえ予期していなかった罠が。
そう。ウブカタ機関車のハートがめくるめく燃焼、脳内艦長が全速前進を無差別に発令。
封印されていたファジー機能が再び目覚め、なんと外伝に中編を加えるだけだったはずの『カオス　レギオン01』を、二百五十頁の予定を大幅に越えた「三百五十頁」にて刊行。
「なにすんだよぉおおお――――――っ!!」
泣き叫ぶシバッチ氏に、土下座し拝み倒すウブカタ。
「すいませんマジすいませんせん02ではちゃんと枚数守りますほんと絶対約束誓います」
・そして刊行された『カオス　レギオン02』。
新たに登場した人物、二万人＋五名。
決して超えてはいけないとされる魔の領域こと「四百頁」を怒濤の行進でブッチギリ、
第一巻より分厚いですヨ長編が刊行。
「うわああああああああぁぁ――――――――ん!!」

マジ泣きするシバッチ氏に、地面に額をこすりつけんばかりに平身低頭のウブカタ。
「すんません許して下さいマジ本当もうやりません絶対守りますから嘘つかないアル」
そして刊行された『カオス　レギオン03』。
新たに登場した人物、三名。もはや魔界と呼ぶにふさわしい「四百五十頁」を忘却の甘い香りでホップステップ長が刊行。
「うっふぁはあああああああああぁぁぁ――――――ん!!」
怒りと涙のあまり菩薩のような微笑で空を仰ぐシバッチ氏。土下座虫と化すウブカタ。
「すみません04は短編集ですし切ない顔で見ないでごめんなさいもうしません絶対」
そして刊行された『カオス　レギオン04』。
第二期連載を一冊にまとめた短編集――
だったはずの何か違うものが刊行。その領域は海原のごとき「四百六十頁」超。
「ふ……………………………………………………ふふふふふ」
長い長い沈黙と微笑みときらきら澄んだ眼差しのシバッチ氏の前で、ひたすら土下座切腹を繰り返し、遠い世界に行ってしまった担当さんを呼び戻そうと必死のウブカタ。
「分かっていたさ……分かっていたとも……ふふふふふ……ふふふ……」
切ない微笑で、突然、ウブカタを振り向くシバッチ氏。

「もはや止めはしないさ。次が最終巻だ。存分に書きたまえ。君の気が済むように」
全てを受け入れたかのようなシバッチ氏の言葉に、
「お……？　お、おおお、おっしゃぁ――――!!」
土下座はどうした、にわかに奮い立つウブカタなのでありました。
だがしかし――そこには、ウブカタも予想しない罠が。

その三。二千四年――結局どこまでもマイペースでしたシバッチ氏。
かくして最終巻を迎えたウブカタのもとに、あるとき突然、こんなメールが。
『会社辞めます。シバッチユイユイ』
「っ――ぷわぁっ!?」
驚愕で鼻水とかなんか色んな液体が飛び出すウブカタ。慌ててシバッチ氏と連絡を取り、
「ぼっぼぼ僕のせいですか？　僕ですか？　僕なんですか？　僕ぅ――――っ!?」
狼狽し叫ぶウブカタに、怪訝そうなシバッチ氏。
「いや、なんとなく」
「……………………は？」
「そろそろかなーと思いまして。レギオンも最終巻だし。新しい旅立ちですよ」

「そ……そろそろって、あなた最終巻はどうするんですかそんなここまでやって来て」
「ここまでやって来たからですよ」
「……」
「ここが始まりの海です。これからが勝負ですよ。そうでしょう？」
「お……」
「最終巻、本気で書いて下さいよ。自分をゼロに戻さなきゃ。お互い、また、なーんにも無いところから始めましょう。レギオンの最後の原稿、期待してますよ」
「ほ……本気で書くに決まってるじゃないかぁーっ!!　よ……読めよぉっ!!」
「読みますよぉー」
「原稿、送るからなぁーっ!!　本になる前に送るからなぁーっ!!」
「すっげぇ楽しみにしてまーす」
「ど……どこ行くんだよぉーっ!!」
「さぁー？　きっと自由な場所ですよー」
「ぼ、僕にも行ける場所ですかぁーっ!?」
「なに言ってんですかー？　あんたが、もともといた場所ですよぉー！」
それを最後に去ってしまったシバッチ氏。

これからが勝負——その言葉がいつまでもウブカタの中で響き続けていたのでした。

その四。二千四年・暮れ——かくして旅の終わりと始まりに辿り着き。

新担当は、なんとファンタジア文庫の編集長ことミスターK。

飲みの席で、頭にサングラス・白い半袖のYシャツ（たまにアロハ）、今は冬ですという突っ込みもまるで届かぬ新人類編集長——酔いが進むなり、びしっと指を突き出し、

「ウブちゃんって呼んじゃうよぉおおおー!?（語尾高し）」

と軽やかに命名。シバッチ氏と通じるものがあるなぁと思いつつ、編集長のもとで気を引き締め、05を執筆。自分を新しくしなきゃ駄目だ、もっと先に行かなきゃ駄目だ、そう思いながら、終わりと始まりへの道を、ただひたすらジークたちとともに歩みました。

書きに書き——最後の一行に辿り着いた瞬間、奇妙な感覚が訪れたのを覚えています。

なんか変だな、と思うのだけど、咄嗟になにが変なのか分からない。

ふと、頁数を確認し、きょとんとなりました。気持ちの上では、とっくに五百頁を超えてるんじゃないかと思っていたのが——

もしかして三百五十頁くらい？　え？　なんで？　編集長からは「五百頁まで何とかします」なんてことまで言ってもらってたのに？　手加減した覚えなんてなくて、目一杯や

りたいことつっこんで、書きたいこと全部書きまくって、それなのに——
本当に不思議です。編集長からオッケーが出ても、奇妙な感覚が消えないまま。
それからしばらくして、何かが終わったんだな、という気持ちが起（お）きました。
そうして、何かが始まったんだな、と——

『カオス　レギオン』を通して出会えた全ての人に感謝します。
書き進めるたびに多くの課題が与えられたことに感謝します。
ここまで僕を支えてくれた人に感謝します。
物語の業（わざ）を僕（ぼく）に託（たく）してくれた登場人物たち全てに感謝します。
そして、ジークやノヴィアやアリスハートたちを愛してくれた読者の皆様に——
心より感謝申し上げます。
ここからが、始まりです。

冲方 丁拝　二千四年十二月

転ばずに
歩いた歩いた♂
あたしは飛んだよ。
マニス・エルダージオ(?)
と
ノヴィア・ハート(?)
ジーク.ノヴィア.
登場人物だけならず
作り手側も 歩き続けた感
が 残ります。沖方氏とは
これから 別方向に歩くの
ですが . レギオン 終って
しまっても . 道ゆく先で
待ち合わせして 歩いたり
しますので. また
お会いしましょう。
Sato.y

カオス レギオン 05

聖魔飛翔篇

平成16年12月25日　初版発行

著者——冲方（うぶかた）　丁（とう）

発行者——小川　洋

発行所——富士見書房
〒102 8144
東京都千代田区富士見1 12 14
電話　営業　03(3238)8531
　　　編集　03(3238)8585
振替　00170-5 86044

印刷所——旭印刷
製本所——本間製本
落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります
2004 Fujimishobo, Printed in Japan
ISBN4-8291-1677-3 C0193